Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 神々の動詞,英雄の動詞 : 北欧神話データベースの分析 |
| Author(s) | 堀井, 祐介 |
| Citation | 大阪大学, 1998, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.11501/3151065 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 神々の動詞，英雄の動詞
## －北欧神話データベースの分析－

大阪大学 大学院 言語文化研究科

博士論文

堀井　祐介

1998 年 3 月

© 1998
堀井　祐介

# 目次


第1章　序　1

1.1　目的 . . . . . 1

1.2　神話資料について . . . . . 2

1.3　先行研究 . . . . . 4

1.4　北欧神話とは . . . . . 6

1.5　なぜ動詞に注目するのか . . . . . 6

1.6　本論文の構成について . . . . . 8

第2章　資料分析について　9

2.1　分析対象 . . . . . 9

2.2　分析手順 . . . . . 18

第3章　作品（群）別分析　29

3.1　データベース上の各フィールドごとの傾向 . . . . . 29

3.2　「エッダ詩集」 . . . . . 56

3.3　「ギュルヴィの惑わし」 . . . . . 56

3.4　「ユングリンガ・サガ」 . . . . . 64

3.5　作品（群）別分析まとめ . . . . . 64

第4章　個別分析の方法　65

4.1　データ抽出 . . . . . 65

4.2　分析基準 . . . . . 66

4.3　個別のデータ分析における表記，記号について . . . . . 66

第5章　神々を主語とする動詞の個別分析　68

第6章　英雄を主語とする動詞の個別分析　116

第 7 章　その他，作品において重要な役割を果たす存在（巨人，怪物など）を主語とする動詞の分析 165

第 8 章　韻文作品における韻律の影響について 177

第 9 章　結論 179

参考文献 183

資料 192

# 第1章　序

## 1.1　目的

この研究の目的は，現在残されている神話的題材を扱った文献資料を分析対象として，北欧地域の古代ゲルマン人（古代北欧人）がキリスト教を受け入れる以前に持っていた彼ら独自の世界観をどのように描き出していたのかを調べることである．神話の形で語られるたびに，その世界観は聞き手の中に再現される．そのため実際に語られた神話を分析すれば，古代北欧人の世界観，神々に対する表現上の特徴などを明らかにすることが出来ると思われる．しかし，残念ながら北欧地域にキリスト教が入ってからすでに一千年にもなろうとする今日では，直接神話を聞くことは不可能であるため，その語られていたであろう神話を書き記した文献資料を分析し読み解くことは，現代においては古代北欧人の世界観を理解する最善の方法であると思われる．

北欧地域において神話的題材を扱った文献資料はいくつかあげられるが，本論文では異教時代の北欧を旅行した第三者の視点で書かれたものや，伝聞したものを翻訳したものではなく，古代北欧人自身が自らの言葉（古西ノルド語）で書き記した文献資料を分析対象とする．なぜなら，彼ら自身の言葉で書き記したものには，彼らの言葉を通しての神話への意識が直接的に表れているのではないかと考えられ，従ってそれを分析することで神話の核となる要素が見出せるのではないかと思われるからである．

対象とする文献資料は古西ノルド語で書かれている北欧神話分析の第一次資料とされる「エッダ詩集」，中世北欧を代表する文人であるスノッリ・ストゥルルソン (Snorri Sturluson, 1179-1241) の書いた「ギュルヴィの惑わし」(Gylfaginning)，「ユングリンガ・サガ」(Ynglingasaga) である．これらは顕著に神話的要素を含んでおり，他にこれらに匹敵するほどまとまった北欧神話文献資料は見当たらない．

E. O. G. Turville-Petre(1964)，Anders Bæksted(1984) などを始めとする北欧神話の先行研究においてもこれら三つの文献資料は重要なものとして位置付けられ，神話世界の特徴を述べる出発点として利用されている．しかし，それらの研究では神話全体を見ることに重点が置かれているため，文献資料は神話の特徴を物語る一部分が引用されているに過ぎず，それぞれの資料に見られるモチーフ（その資料がどのような内容を扱っているのか）について考察が加えられているだけである．また個別の語のレベルでは主に古ノルド語に特徴的な heiti, kenning と呼ばれる名詞の言い換え表現に注目し，その意味や語源を分析している．従って本論文においては以上のような先行研究では見落とされていた点を補うため神話研究と

文献資料分析とを結びつけ，これまでの神話研究の成果を用いて神話学的視点から文献資料を分析し，その文献資料分析の成果を神話研究の手掛かりとすることを目指すことにする．

具体的には新しい試みとして文献資料にでてくる動詞に注目し，コンピュータを用いて網羅的に動詞のデータベースを作成し，神々や英雄がどのような動詞を用いて描かれているのかをテキストに忠実に分析し，動詞から古代北欧ゲルマン人の神話への意識を探り，これまでの研究とは異なる視点から神話の世界を調べてみることにする．新しい試みであるので厳密な意味での先行研究はないが，文献資料をコンピュータデータ化するプロジェクトは北欧各国で行われている．

## 1.2 神話資料について

今回分析対象とする三作品（群）が本論文の目的である北欧神話世界の解明にとって有効であることは，古代から中世にかけてのほかの資料と３つの作品を比べることによっても明らかになる．古代から中世にかけてのキリスト教以前の古い宗教の名残を示す資料としては，大きくは地名とその他の作品（文学作品，年代記など）に分けられる．地名の研究からも神話的な特徴は見いだすことが出来るが，地名学はそれ自体で大きな研究分野であり，また今回の動詞表現の分析からは大きく離れているので扱わないこととする．

次にくるのがその他の作品であるが，これらも大きく分けて当時の北欧の言語（古西ノルド語）によるものとラテン語によるものとに分けられる．ラテン語によるものとしては，『ハンブルグ大司教管区の事績』(Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum) [注1]および『デンマーク人の事績』(Gesta Danorum)[注2]があげられる．両者ともに中世北欧における異教信仰及びその名残についていくつかの重要な記述を含んでいるが，「古代北欧の人々が自らの言語で神々や英雄をどのように描き出しているのかを分析する」という本論文の主旨からは外れるので対象とはしなかった．

古西ノルド語の作品としては，ルーン文字 (rún) によるもの，「エッダ詩集」，スカルド詩，法典，聖人伝，サガ（王のサガ[注3]，同時代のサガ[注4]，アイスランド人のサガ[注5]，騎士のサガ[注6]，古代のサガ[注7]など)，スノッリ・ストゥルルソンの作品があげられる．

ルーン文字とは古代ゲルマン人が用いていたアルファベットで，おもに石などに固い物に刻むために直

注1 ハンブルグ・ブレーメン大司教管区内の歴史について 1170 年頃にブレーメンのアダムが書いた．900 年代から 1072 年頃までの北欧史の主要資料．

注2 サクソ・グラマティクス (Saxo Grammatics) が大司教アブサロンの求めにより 1200 年頃まとめたデンマークについての歴史書．

注3 Konunga sögur 9 世紀から 13 世紀までのノルウェー王についてのサガ．

注4 samtíðarsögur アイスランドを扱ったサガ．さらに司教のサガ (biskupa sögur) とストゥルルンガサガ (Sturlungasaga) に分類される．

注5 Íslendinga sögur 初期にアイスランドに移民した人たちについて扱ったサガ．

注6 riddara sögur 主に北欧以外の地域でのはるか古代の騎士について扱ったサガ．

注7 fornaldarsögur Norðurlanda アイスランドへの移民が始まる前，ハラルド美髪王以前の古代を扱ったサガ．主にノルウェーでの出来事を描いている．英雄のサガとしても知られる．

線が主体となっている文字である．歴史的に見てほかの作品よりもかなり古くから存在していたが，王侯への賛辞，呼びかけや名前が多く，全体として北欧神話世界に関わる内容が少ない．

次の「エッダ詩集」とは，一つの作品集ではなく，類似の形式，内容を持つ韻文作品に対する総称である．言語的にはゲルマン語の一つである古西ノルド語で書かれており，年代的には紀元10世紀から11世紀を中心に書き記されたものが現在残されている．そのモチーフはすでに民族大移動のころ（紀元2，3世紀頃）から存在していたものと考えられている．作品はその扱っている内容から大きく神話詩と英雄詩とに分けられる．韻律としてはmálaháttr，fornyrðislag，lióðaháttrで書かれており，Hildeblandslied，Beowulf，Heliandなどの中世ゲルマン韻文作品と類似の韻律である．すべての作品が神々または伝説上の英雄を扱っており，特に神話詩は北欧神話の世界を描き出す第一の資料とされる．

スカルド詩はおもにノルウェーの宮廷において王やその他の諸侯を称えるためにつくられたものであり，直接神話的題材を取り扱ってはいない．法典は現代の法律とは異なり日常生活での細かな規定を記したものであり，神々自体よりも現実の人間の行動を描いている．聖人伝は聖なる存在を描いてはいるがキリスト教の聖人であり，北欧神話の研究対象とはならない．

サガは上にあげたようにいくつかに下位分類されるが，それぞれにおいて引用として神話的な題材が使われていることがあっても，一つのまとまったものとしてではなく，二次的資料として扱われるものである．

最後にスノッリの作品があげられるが，彼は1179(1178)年にアイスランドの才知に長けた豪族ストゥルラ・ソールザルソン(Sturla Þórðarson, 1115-1183)の息子として生まれた．その後当時アイスランドにおける文化の中心であったオッディ(Oddi)において賢者セイムンドゥル(Sæmundr inn fróði, 1056-1133)の孫であるヨーン(Jón Loptsson, 1124-97)の養子として育てられた．成人してからは有力な豪族としてアイスランドで勢力を延ばした．彼は2度ノルウェー，スウェーデンに出向くが，ノルウェーの国内での争いに巻き込まれ，アイスランド国内でも闘争に明け暮れ，その立場は不安定なものになっていく．そしてついに1241年レイキャホルト(Reykjaholt)の自宅で暗殺された．これらの政治的側面に加えて，彼は古ノルド文学において3つの重要な作品『エッダ』(Edda)，『ヘイムスクリングラ』(Heimskringla)，『聖オーラヴの物語』(Ólafs saga hins helga)を残している．このうち最後の作品はキリスト教の聖人の物語であり，北欧神話分析の対象とはならない．

今回分析対象に加える「ギュルヴィの惑わし」，「ユングリンガ・サガ」は共にスノッリの作品であり，前者は『エッダ』の後者は『ヘイムスクリングラ』の一部である．『エッダ』は1220年頃に書かれたとされる古西ノルド語による韻文作品作成の手引き書である．写本の一つに「この本はエッダと呼ばれる」とあるため『エッダ』の名がつけられているが，タイトルのエッダ(edda)という語については，何を意

味しているのかはいろいろと説があり正確にはわかっていない[注8]．当時アイスランドでは古い詩芸（韻文作品をつくる際のさまざまな知識）が衰えており，これを憂慮したスノッリが古西ノルド語での詩芸を保存するためにこの本をまとめた．『エッダ』は4部構成で「序」(Prologue)，「ギュルヴィの惑わし」(Gylfaginning)，「詩語法」(Skáldskaparmál)，「韻律一覧」(Háttatal) からなる．「序」において，スノッリは彼の学識と古代の神話を結びつけ，キリスト教の物語から始まり，アジアから古代の神々が北欧へ移動してきた話が続き，古代の神々を人間の王，英雄または魔法使いとみなすというユーヘメリズム的考えが見られる．「詩語法」では，古西ノルド語によく見られる言い換え表現 (heiti, kenning) について，つまり太陽や月などが人間，神々の世界でそれぞれどの様に呼ばれるのかについて述べられている．「韻律一覧」では100を越える例をあげて韻律について説明している．今回分析対象とする「ギュルヴィの惑わし」は「序」の流れを受けてスウェーデンの王ギュルヴィ (Gylfi) がアースガルド (Ásgarðr) に赴き，アース（áss, æsir アジアの人々）についての神話的物語を問答形式で尋ねるものである．その際にスノッリは「エッダ詩集」からモチーフとなる韻文を引用しそれを散文形式で語りなおしたりもしている．

「ユングリンガ・サガ」は『ヘイムスクリングラ』の冒頭に出てくるサガで，1230年頃に書かれたとされる．『ヘイムスクリングラ』は古代から1177年までのノルウェー王たちが描かれている．その冒頭の「ユングリンガ・サガ」ではスウェーデンのユングリング王家の祖先について北欧神話の主要な神々と同じ名前で述べられている．それらの祖先は神話伝説上の存在である．「エッダ詩集」と同様に神話的題材をまとめて描いている点でこの「ギュルヴィの惑わし」，「ユングリンガ・サガ」も本論文での分析資料としては非常に重要である．

## 1.3 先行研究

北欧神話全体についての先行研究としてはE. O. G. Turville-Petre(1964)，Anders Bæksted(1984)，H. R. Ellis Davidson(1964)，Anne Holtsmark(1970)，ジョルジュ・デュメジル (1980) などがあげられる．それぞれの研究において独自の視点が見られるが，第1.1節でも述べたように神話物語のモチーフや物語全体の流れ，名詞表現を中心に分析が行われている．文献資料に関してはほぼ同じものを用いており，なかでも古西ノルド語による資料としては「エッダ詩集」，スノッリ・ストゥルルソンの『エッダ』，「ユングリンガ・サガ」を中心としている．この他に文献資料自身に対する先行研究としては，個々の作品を扱ったもの Sigurður Nordal(1952)，Anne Holtsmark(1949) や，文学史 Einar Ól. Sveinsson(1962)，Finnur Jónsson(1907) などがある．またコンピュータを用いて文献資料を扱うプロジェクトは，アイスランドにおいてサガを，ノルウェーのベルゲンにおいてスカルド詩をコンピュータテキスト化するものな

注8 Harris, p.74

どがあるが，具体的な成果はまだ出ていない．

次に先にあげた先行研究のいくつかについて具体的に何を資料としているのかを見て見る．（以下著者，タイトル，資料の順に示す）．

E. O. G. Turville-Petre, *Myth and Religion of the Norse.*

- ルーン文字，地名，考古学的なもの
- 習慣，諺，迷信
- 古西ノルド語韻文（エッダ詩，スカルド詩）
- 歴史書，サガ（『植民の書』(Landnámabók), アイスランド人のサガ，古代のサガなど）
- スノッリ・ストゥルルソン（『エッダ』，『ヘイムスクリングラ』）
- サクソ・グラマティクス（『デンマーク人の事績』）
- 外国人の書いたもの（タキトゥス (Tacitus, 56 頃 - 120 頃) による『ゲルマーニア』(Germania), ブレーメンのアダムによる『ハンブルグ大司教管区の事績』，アラブの旅行作家イブン・ファドラーン (Ibn Fadlán) など）

Anders Bæksted, *Nordiske Guder og Helte.*

- 地名，ルーン文字
- スウェーデン：ブレーメンのアダム
- デンマーク：サクソ・グラマティクス
- ノルウェー，アイスランド：エッダ詩，スノッリ，古代のサガ，王のサガ，アイスランド人のサガ，スカルド詩など

Anne Holtsmark, *Norrøn mytologi.*

- 外国資料（『ゲルマーニア』，『ハンブルグ大司教管区の事績』，イブン・ファドラーンなど）
- 地名，考古学的なもの，サガ，法律，ルーン文字，エッダ詩，スカルド詩，スノッリ，サクソ・グラマティクス

以上主要な専攻研究3つについて資料を見て見たが，いずれにおいても先にも述べた通り今回分析対象とした作品（群）「エッダ詩集」，スノッリの『エッダ』，「ユングリンガ・サガ」が主要な資料として用いられている．

## 1.4　北欧神話とは

北欧神話とは，キリスト教改宗以前に，デンマーク，スウェーデン，ノルウェー，アイスランドを中心とする，現在北欧と呼ばれる地域のゲルマン民族が信じていた世界観を描いている神話である．その内容は，原初巨人の誕生，神々の一族の誕生，原初巨人の体から神々が世界を作り出すこと，年月の決定，人間の誕生などの世界創世から，ラグナロク (ragnarǫk) と呼ばれる神々世界の滅亡に至るまでの物語で，それらのあいだに幾つかの神々に関わるエピソードがちりばめられている．

北欧神話にはアース神 (áss, æsir)，ヴァン神 (vanir) と呼ばれる2種類の神々の他，神々と同様に特殊な力を持ち神々に敵対する巨人 (jǫtunn) やドヴェルグ (dvergr)（侏儒）と呼ばれるもの，予言や魔術に長けた巫女 (vǫlva)，神々のしもべとなって英雄と関わるヴァルキュリャ (valkyrja)[注9]，運命を定めるノルン (norn)，神々が庇護する英雄，優れた英雄の中からヴァルキュリャに選ばれて死者となり神々の国でラグナロクに備えるエインヘリャル (einherjar)，人間の祖先などが登場する．またこれら擬人化された存在の他に，世界の中心とされるとねりこの木ユッグドラシル (Yggdrasill) や世界を取り巻いているミズガルズ蛇 (Miðgarðsormr)，狂暴なフェンリル狼 (Fenrisúlfr) なども描かれている．

## 1.5　なぜ動詞に注目するのか

上で述べた北欧神話の先行研究において古西ノルド語文献資料は重要なものとして位置付けられ，神話世界の特徴を述べる出発点として利用されている．しかし，それらの研究では神話全体を見ることに重点が置かれているため，神話の特徴を物語る一部分が引用されているに過ぎない．具体的には，それらの研究では heiti, kenning と呼ばれる名詞の言い換え表現に注目し，その意味や語源を分析したり，それぞれの資料に見られるモチーフ（その資料がどのような内容を扱っているのか）について考察を加えている．

このようにこれまでの神話研究では文献資料それ自体に対する全体的な評価，文献資料だけからどれだけのことがわかるのかといった分析が欠けているように思われ，個々の神話的特徴を文献資料から導く際にも名詞に対する分析に偏っているように思われる．また，文献資料自体に対する研究では神話学的視点というより，主として文学的，言語学的視点からの分析である．従って本研究においては以上のような先行研究では見落とされていた点を補うため神話研究と文献資料分析とを結びつけ，これまでの神話研究の成果を用いて神話学的視点から文献資料を分析し，その文献資料分析の成果を神話研究の手掛かりとする．具体的には，文献資料に見られる動詞に注目し，古代北欧人が自らの言語で残した文献資料において神々や英雄がどのような動詞を用いて描かれているのかをテキストに忠実に分析し，これまでの研究とは異なる視点から神話の世界を調べてみる．書かれたものを読むことがあまりない時代では，古代北欧人は一語

注9「戦死者を選ぶ女」を意味する

一語を大切に聞いたのではないか，特に神話についてはある短い単語や表現だけでかなりの関連情報を連想することが出来たのではないかと思われる．実際名詞においては先に述べた heiti, kenning があり，それらは一つあるいは複数の語で神々や事物の名前などを言い換え，それに関わる他の神話を聞き手が連想することが出来るものである．これと同じように神話を信じていた古代北欧人は特定の動作，状態を示す動詞を聞いただけで，他の神話との関連を理解することが出来たのではないか，そのようなキーワードとなるような動詞があるのではないかという仮説を立て，修士論文において「エッダ詩集」の一部を分析対象としてこの仮説を検証し，いくつかのキーワードとなる動詞の存在を明らかにした．

本論文ではこの修士論文での結論をもとに，さらに分析対象を広げ，個別のデータをより詳しく分析することによりキーワードとなる動詞の存在をしっかりと論証していく．

最後に文献資料中の何を動詞として分類し分析するのかについて述べておく．

- 動詞の形
  - 不定詞形
  - 直接法現在形
  - 直接法過去形
  - 接続法現在形
  - 接続法過去形
  - 命令形
  - 現在分詞
  - 過去分詞（受動態，完了分詞）
- 文中での働き
  - 本来の述部になる動詞
    - 単独で用いられている場合
    - 助動詞と結びついて用いられている場合
      - 原形不定詞として
      - 受動態（過去分詞）として
      - 完了形（過去分詞）として
  - 不定詞の指標 (að) がつけられている動詞
    - 目的語，補語として用いられている場合
    - 形容詞的，副詞的に用いられる場合
  - 現在分詞，過去分詞が補語として用いられている場合

- 以下の3つは今回の分析対象から除く
  - 現在分詞，過去分詞が形容詞，副詞的に用いられる場合
  - 現在分詞，過去分詞が名詞になっている場合
  - 語としての起源が動詞と同じ名詞
- 動詞を分析する際の基準

  今回の分析では動詞を以下のような構造を持つものと定義する

$$\text{動詞} \quad = \quad \text{語 (ENTRY)} \quad + \quad \text{意味 (MEANING)}$$

  - 語 (ENTRY) とは作品中に出て来る形の不定詞形
  - 意味 (MEANING) とはその語を文脈に即して日本語に訳したもの（一つの語 (ENTRY) が複数の異なる種類の意味を持つ場合がある）

## 1.6　本論文の構成について

本論文では，まず第2章で分析対象とする文献資料並びにコンピュータを用いての具体的な分析手順について説明する．第3章では作品（群）別に，例えば「ギュルヴィの惑わし」，「ユングリンガ・サガ」での作者スノッリ・ストゥルルソンの動詞の用法の特徴について調べる．第4章では，個別の神々や英雄に対して用いられている動詞を分析する方法を説明し，続く第5章では神々について，第6章では英雄について，第7章ではその他特殊な能力を持つ存在について，「エッダ詩集」の一部について分析を行った修士論文で導き出された推論を出発点として，神々，英雄，その他それぞれの作品において重要な役割を果たす存在（巨人，怪物など）に特徴的な動詞表現を個別に調べる．具体的には動詞データベースから個々の神々や英雄などに固有の動詞，すなわちそれらの神々や英雄だけを主語に取る動詞を抽出し，その固有の動詞とその主語となっている神々や英雄の特徴や作品での重要な場面との関わりを調べる．その結果神々や英雄などを主語とする動詞にはその神々や英雄の特徴をより明確に表現するものや，作品における神々や英雄の役割を明確に描き出すものがあり，それらの動詞がキーワードとして北欧神話文献資料において用いられていることを明らかにしていく．第8章では，韻文作品における韻律の影響について述べ，そして第9章において各章での分析結果を踏まえて結論をまとめる．

# 第2章　資料分析について

## 2.1　分析対象

### 2.1.1　分析対象としての有効性

今回分析対象に選んだ「エッダ詩集」，スノッリ・ストゥルルソンの「ギュルヴィの惑わし」，「ユングリンガ・サガ」は顕著に神話的要素を含んでおり，他にこれらに匹敵するほどまとまった神話文献資料は見当たらない．第1.3節で述べた北欧神話の先行研究においても，先ずこれら3作品（群）からモチーフを取り出し分析を加えている．これらと同時代の他の作品にもいくつか神話的要素を含む作品は見られるが，いずれも断片的な記述であり，「エッダ詩集」などからの引用であるため今回の分析対象には加えなかった．

### 2.1.2　「エッダ詩集」

「エッダ詩集」とは特定の作者によって書かれた一つの作品の名前ではなく，古西ノルド語によって書かれた類似の形式，内容をもつ韻文作品に対して用いられる総称である．この「エッダ」という名前は，後でも述べるスノッリ・ストゥルルソンが1220年頃に書いた古西ノルド語韻文入門書『エッダ』から来ている．「エッダ詩集」の作品は主に『王の写本』Codex Regius (GKS 2365 4to) に見られるが，『王の写本』は17世紀にアイスランドの司教ブリュンヨールヴル・スヴェインソン (Brynjólfur Sveinsson) がこの写本をアイスランドで発見し，それをデンマーク王フレデリク三世 (Frederik III, 1609-70) に献上したためその名がつけられている．スヴェインソンはこの写本を12世紀にアイスランドの有名な賢者セイムンドゥルによるスノッリの『エッダ』に先行する作品であると考えたため，献上する際に'Edda Sæmundi multiscii 1643' と書いた．そのため『王の写本』はセイムンドのエッダ (Sæmundar-Edda) または古エッダと呼ばれるようになった．しかし「エッダ詩集」に見られる作品はセイムンドゥルの時代よりはるか以前から存在しており，様々な年代にわたって作られているため，『王の写本』がセイムンドゥルの作品であるとは現在では考えられていない[注1]．

「エッダ詩集」はその内容によって神話詩と英雄詩に分けられる．() 内は略号を示す．以後本文中での個々の作品名は略号を用いる．

---

注1 Kulturhistorisk Leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformationstid（以降 KLNM と略す）III, p.480, Jónas 1988, pp.25-33

**神話詩**

| | |
|---|---|
| Vǫluspá (**VSP**) | Hávamál (**HAV**) |
| Vafþrúðnismál (**VM**) | Grímnismál (**GRM**) |
| Fǫr Skírnis (**Skírnismál, SKM**) | Hárbarðslióð(**HRBL**) |
| Hymiskviða (**HYM**) | Lokasenna (**LS**) |
| Þrymskviða (**TRK**) | Alvíssmál (**ALV**) |
| Baldrs draumar (**BDR**) | Rígsþúla (**RT**) |
| Hyndlulióð(**HDL**) | Grottasǫngr (**GRT**) |

なお Frá sonom Hrauðungs konungs は**GRM** に，Frá Ægi ok goðum は**LS** に散文部分としてそれぞれ組み込むこととする．

**英雄詩**

| | |
|---|---|
| Vǫlundarkviða (**VKV**) | Helgakviða Hundingsbana I (**HH-I**) |
| Helgakviða Hiǫrvarðssonar (**HHV**) | Helgakviða Hundingsbana II (**HH-II**) |
| Grípisspá (**GRP**) | Reginsmál (**RM**) |
| Fáfnismál (**FM**) | Sigrdrífumál (**SD**) |
| Brot af Sigurðarkviðo (**BSG**) | Guðrúnarkviða I (**GK-I**) |
| Sigruðarkviða in skamma (**SKS**) | HelreiðBrynhildar (**HB**) |
| Guðrúnarkviða II (**GK-II**) | Guðrúnarkviða III (**GK-3**) |
| Oddrúnargrátr (**OD**) | Atlakviða (**AK**) |
| Atlamál (**AM**) | Guðrúnarhvǫt (**GH**) |
| Hamðismál (**HM**) | |

本論文ではこれらに加えて『王の写本』で韻文作品の間にはさまれている Frá dauða Sinfiǫtla(**SF**) やスノッリの『エッダ』,「スヴェッリル王のサガ (Sverris saga)」,「ヴォルスンガ・サガ (Vǫlsunga saga)」に見られるエッダ詩断片も分析対象とした．

「エッダ詩集」の主要な原典である『王の写本』は 45 葉からなり，神話詩 10，英雄詩 19 の計 29 のエッダ詩が見られ，古文書学によると 1200 年代の終わりにアイスランド人によって書かれたものとされる．もう一つの重要な写本 AM748 4to は 1300 年代初めに書かれたもので，6 つの神話詩と VKV が見られる．AM748 4to には『王の写本』には見られない BDR が含まれている[注2]．この他にスノッリの『エッ

[注2] KLNM III, pp.480-481

ダ』やその他の写本に見られる韻文もエッダ詩とされる．

このように幾つかの文献資料から類似の形式，内容を持つ韻文作品を集めて「エッダ詩集」と呼ぶため，個々の作品の成立年代については確定的なことは言えない．しかし，これまでに年代の特定出来るスカルド詩人[注3]，例えばブラギ・ボッダソン (Bragi Boddason) [注4]，アルノール・ソールザルソン (Arnórr Þórðarson) [注5]，エイヴィンドゥル (Eyvindr skáldspillir) [注6]などとの関連，スノッリの作品に引用されている点，古西ノルド語において語中音消失が起こった年代からの類推（言語史研究），考古学的な研究などからエッダ詩は800年頃から書き記された13世紀までのあいだ，なかでも10, 11世紀を中心につくられたと考えられる．しかし，700年頃に立てられたとされる西ノルウェーの石碑には既に語中音消失が見られることや，また韻律の多様性や自由さからもエッダ詩は原ノルド語に起源を持ち，800年頃より以前から存在していた可能性もある[注7]．

また，現在残っている文献資料にノルウェー語的な特徴がある点，スウェーデンのルーン石碑にエッダ詩的な韻律が見られる点，サクソがデンマークにエッダ詩的な韻文作品が存在していることを述べている点などから，エッダ詩が北欧全域で作られていたことは確かである[注8]．

エッダ詩にも見られる古西ノルド語韻文作品の特徴として heiti, kenning といった名詞の言い換え表現（同義語）がたくさん用いられていることがあげられる．

例：　valdýr（戦場の獣，狼，Vsp 55）
　　lǫgfákr（海の馬，船，Hym 27）
　　háfjall skarar（髪の高い山，頭，Hym 23）
　　jarðar burr（大地の息子，ソール，TRK 1）
　　gránstóðgríðar（巨人の老女の灰色の馬の群れ，狼，HHII 25）
　　umgiǫrðallra landa（すべての土地のベルト，ミズガルズ蛇，Hym 22）

エッダ詩は，古高ドイツ語の Hildebrandslied やアングロサクソン語の Beowulf, Figth at Finnsburg, Deor などと語法や韻律の上で似ている．また Nibelungenlied とも内容的に関係がある．

エッダ詩に見られる韻律は主に次の3つである．fornyrðislag, málaháttr, lióðaháttr．頭韻は，母音の組みまたは同じ子音からなる．

---

注3 スカルド詩人 中世北欧における宮廷詩人．王侯たちの業績などを称える詩を作った．
注4 9世紀のノルウェーのスカルド詩人．
注5 11世紀のアイスランドのスカルド詩人．
注6 10世紀のノルウェーのスカルド詩人．
注7 KLNM III, p.483
注8 KLNM III, p.485

**fornyrðislag**　８行からなる．各行４音節．頭韻を踏む短い２行×４組

| | 頭韻を踏む組み合わせ |
|---|---|
| Ár var alda, | Á, a |
| þar er Ymir byggði, | Y |
| vara sandr né sær | s, s |
| né svalar unnir, | s |
| iǫrðfannz æva | i, æ |
| né upphiminn, | u |
| gap var ginnunga, | g, g |
| en gras hvergi. | g |

(Vǫluspá 3)

**málaháttr**　fornyrðislag の変形．各行少なくとも５つの音節．頭韻を踏む短い２行×４組

| | 頭韻を踏む組み合わせ |
|---|---|
| Skǫp œxto skiǫldunga, | Sk, sk |
| skyldoat feigir, | sk |
| illa réz Atla, | i, A |
| átti hann þó hyggio, | á |
| feldi stoðstóra, | st, st |
| stríddi sér harðla, | st |
| af bragði boðsendi | b, b |
| at kvæmi brátt mágar. | b |

(Atlamál 2)

| | |
|---|---|
| **lióðaháttr** | 6行からなる．頭韻を踏む（短い2行＋長い1行）×2組 |
| | 頭韻を踏む組み合わせ |
| Eldz er þǫrf | þ |
| þeims inn er kominn | þ |
| ok á kné kalinn; | k, k |
| matar ok váða | m |
| er manne þǫrf, | m |
| þeim er hefir um fiall farit. | f, f |
| (Hávamál 3) | |

最後に個々の作品について少し紹介しておく．

**■神話詩**

- Vǫluspá
  巫女が世界の創世から滅亡までを語る．
- Hávamál
  オージン (Óðinn) の格言集．
- Vafþrúðnismál
  オージンが巨人のヴァフスルーズニル (Vafþrúðnir) のもとを訪れ，そこで世界についての知識で勝負する．バルドル (Baldr) の火葬の際の知識でオージンが勝つ．
- Grímnismál
  オージンとその妻フリッグ (Frigg) がそれぞれのひいきの英雄を自慢し，その後オージンがグリームニル (Grímnir) と名乗って自分の英雄の元を訪ねる．しかし，彼はオージンの正体を知らずに縛り上げてしまう．その後，オージンと気付くが，既に遅く自分の剣の上に倒れて死んでしまう．
- Fǫr Skírnis(Skírnismál)
  フレイ (Freyr) がオージンの高御座から世界を見渡して，巨人の娘ゲルズ (Gerðr) に恋をしてしまう．そこでフレイの召使のスキールニル (Skírnir) がフレイに代わって求婚に出向く．フレイはその代償に自分の剣を失うことになる．
- Hárbarðslióð

ソール (Þórr) が遠征からの帰りに川に差しかかると，そこには渡し守がいてハールバルズ (Hárbarðr) と名乗る．彼はソールを馬鹿にして，彼を渡すことを拒む．ハールバルズは実はオージンの変装．ソールは回り道をすることになる．

- Hymiskviða

  ソールが神々の宴会で使う大きな醸造用の釜を巨人ヒュミル (Hymir) のところに借りに出向く．ソールはそこでミズガルズ蛇をつりあげようとする．結局ヒュミルを殺して釜を奪うことになる．

- Lokasenna

  神々の宴会の席にロキ (Loki) がやって来て，これまでの神々の行ないを罵る．最後には捕まえられて縛り上げられる．

- Þrymskviða

  ソールがハンマーミョッルニル (Miǫllnir) を巨人スリュム (Þrymr) に盗まれる．巨人は女神フレイヤ (Freyja) を花嫁に要求する．そこでソールが花嫁に化けて巨人の館に出向き，ハンマーを取り戻す．

- Alvíssmál

  ソールが侏儒アルヴィース (Alvíss) にいろいろと物の名前を尋ねる．最後にアルヴィースは太陽光に捕まえられて石になってしまう．

- Baldrs draumar

  バルドルの夢を解き明かすためにオージンが地下の国へ出向いて，巫女を起こして，バルドルの死の予言を聞いて帰って来る．

- Rígsþúla

  リーグ (R'ıgr) と名乗ってヘイムダッル (Heimdallr) が旅をして，立ち寄った先で奴隷，自由農民，王侯の祖先が誕生する．

- Hyndlulióð

  フレイヤが猪オッタル (Óttar) に乗って女巨人ヒュンドラ (Hyndla) のもとを訪ねる．ヒュンドラはフレイヤの愛人オッタルの家系についての知識を語る．

- Grottasǫngr

  グロッティ (Grotti) は夢の臼で，デンマーク王フロージ (Fróði) が持っていた．この臼は富と平和，死と滅亡をひくことができた．王は 2 人の女巨人フェニャ (Fenia) とメニャ (Menia) に黄金をひかせていた．彼女たちは歌いながらひいていた．王は彼女たちを休ませなかった．彼女たちは怒って，滅亡をひき，最後に臼は壊れる．

■英雄詩

- Vǫlundarkviða

  ヴォルンド (Vǫlundr) が自分を捕まえてひどい目にあわせたニーズズ (Niðuðr) 王に仕返しする.

- Helgakviða Hundingsbana I

  ヘルギ S(Helgi Sigmundssonr) の誕生. 父親殺しへの復讐（フンディング王 (Hundingr) に対する遠征). ヴァリュキュリャのシグルーン (Sigrún) との出会い. シグルーンを巡る争い. ヘルギの勝利.

- Helgakviða Hiǫrvarðssonar

  ヒョルヴァルズ (Hjǫrvarðr) がどのようにしてシグルリン (Sigrlinn) と結婚し, ヘルギ H(Helgi Hjǫrvarðssonr) が生まれたのか. ヘルギとその弟ヘジン (Heðinn) とヴァリュキュリャのスヴァーヴァ (Sváva) との関係. ヘルギの死, ヘジンによる復讐.

- Helgakviða Hundingsbana II

  ヘルギ H の誕生. 父親殺しへの復讐（フンディング王に対する遠征). ヴァリュキュリャのシグルーンとの出会い. シグルーンを巡る争い. ヘルギの勝利の第 2 部.

- Grípisspá

  シグルズ (Sigurðr) が自分の母の兄のグリーピ (Grípir) のもとを訪れ, 自分の未来について尋ねる.

- Reginsmál

  シグルズは侏儒レギン (Reginn) の養育を受け, 父の仇を討つ.

- Fáfnismál

  レギンは自分の兄で, 遺産を独り占めしているファーヴニ (Fáfnir) を殺すようにシグルズをそそのかす. シグルズは結局レギンも殺し, 莫大な宝を手に入れる.

- Sigrdrífumál

  その後, シグルズはヴァリュキュリャのシグルドリーヴァ (Sigrdrífa) と名乗るブリュンヒルド (Brynhildr) に出会う. 彼女はオージンによって眠らされていたが, シグルズがその眠りを破り, 彼女はシグルズに助言を与える.

- Brot af Sigurðarkviðo

  グンナル (Gunnarr) がホグニ (Hǫgni) をそそのかしてシグルズを殺させようとする.

- Guðrúnarkviða I

  シグルズ亡き後の嘆き悲しむグズルーン (Guðrún) を描く.

- Sigruðarkviða in skamma

シグルズを慕うブリュンヒルドが策略をめぐらし，夫グンナルをそそのかして，その弟グトホルム (Guþhormr) にシグルズを殺させる．

- HelreiðBrynhildar

  ブリュンヒルドが冥府へ向かう途中で女巨人に出会い，自らの身の上を語る．

- Guðrúnarkviða II

  グズルーンがアトリ (Atli) との結婚など自分の一生について語る．

- Guðrúnarkviða III

  グズルーンが身の潔白を証明する（浮気の疑いを晴らす）．

- Oddrúnargrátr

  アトリとブリュンヒルドの妹オッドルーン (Oddrún) とグンナルの悲恋物語．

- Atlakviða
- Atlamál

  ２つともアトリ王がギューキ王 (Gjúki) をだまして殺し，ギューキ王の娘グズルーンが復讐する．

- Guðrúnarhvǫt

  グズルーンがシグルズとスヴァンヒルド (Svanhildr) の死を嘆く．

- Hamðismál

  娘スヴァンヒルドを殺されたグズルーンが息子ハムジル (Hamðir) にその復讐をさせる．

### 2.1.3　「ギュルヴィの惑わし」(Gylfaginning)

中世アイスランドを代表する文人スノッリ・ストゥルルソンによって書かれた『エッダ』の一部．『エッダ』は 1220 年頃に書かれたとされる古西ノルド語による韻文作品作成の手引き書である．当時アイスランドでは古い詩芸（韻文作品をつくる際のさまざまな知識）が衰えており，これを憂慮したスノッリが古西ノルド語での詩芸を保存するためにこの本をまとめた．最古の写本 (Codex Upsaliensis) に'Bók þessi heitir Edda; hana hefir saman setta Snorri Sturlu sonr eptir þeim hætti sem hér er skipat.'（この本はエッダと呼ばれる．この本をスノッリ・ストゥルルソンがここに書かれているようなやり方でまとめた．）とあり，ここからこの作品がスノッリの『エッダ』と呼ばれている．

『エッダ』という名前の由来については以下のように様々な意見があるが，どれも確定的ではない[注9]．

- óðr(詩，poetry, poems) から．
- Oddi（スノッリが教育を受けた場所）から．

---

[注9] Harris, p.74

- edda（曾祖母）から.
- edere（書く，発行する）から.

『エッダ』は「序」,「ギュルヴィの惑わし」,「詩語法」,「韻律一覧」の4部からなる．その中で，今回分析対象とする「ギュルヴィの惑わし」はその文学的，神話的関心から『エッダ』のなかで今日最も広く読まれている[注10]．「ギュルヴィの惑わし」はスウェーデン王ギュルヴィ (Gylfi) が変装し，ガングレリ (Gangleri, 旅に疲れたもの）と名乗って，神々の世界アースガルズへ行く．そこでギュルヴィとハール (Hár)，ヤブンハール (Iafnhár)，スリジ (Þriði) という3人の神々との間で問答形式によって世界についての知識が明らかにされていく．スノッリはVSP, VM, GRMなどを初めとするエッダ詩を神話資料として用いて物語を進めて行くが，場合によっては現存しない資料からも引用しており，「エッダ詩集」を補う重要な神話資料である．

### 2.1.4　「ユングリンガ・サガ」(Ynglingasaga)

「ギュルヴィの惑わし」と同じくスノッリ・ストゥルルソンが1230年頃に書いた『ヘイムスクリングラ』の冒頭に出てくるサガ.『ヘイムスクリングラ』には古代から1177年までのノルウェー王たちが描かれている.「ユングリンガ・サガ」はその冒頭の作品で，スウェーデンのユングリング王家の神話伝説上の祖先について述べられている．

スノッリはノルウェーのハラルド美髪王 (Harald hárfagr, 890-930頃) 王のスカルド詩人ショーズオールヴル (Þjóðólfr inn fróði ór Hvíni) によって作られた「ユングリンガタル」(Ynglingatal) を中心にブラギ・ボッダソンの「ラグナル頌歌」(Ragnarsdrápa)，エイヴィンドゥルの「ハーレイギャタル」(Háleygjatal) などのスカルド詩をもとに「ユングリンガ・サガ」を書いた[注11]．引用されている「ユングリンガタル」,「ハーレイギャタル」の韻律はkviðuháttr,「ラグナル頌歌」の韻律はdróttkvætt である．共にスカルド詩の韻律であり，fornyrðislag に近い．kviðuháttr は奇数行3音節，偶数行4音節の8行からなり，dróttkvætt は各行6音節の8行からなる．

「ユングリンガ・サガ」には『エッダ』に見られるものと同様の形式と内容が見られる.「ユングリンガ・サガ」においては，アーシア (Asíá) の戦いの王として人間化されたオージンが，ヴァン族のニョルズ (Njǫrðr)，フレイ，フレイヤと共に描かれており，彼らがNorðrlandへ移動し，Lǫgrinn(Mälaren) に落ち着き，そこでオージン，ニョルズ，フレイ（ユングヴィフレイ）の順に王となり，ユングリング一族の先祖となったとされる[注12]．この3人の王の名前は神話の神々と同じであり，「ユングリンガタル」には登場

注10 Turville-Petre 1964, p.23
注11 KLNM XX, p.360
注12 KLNM XX, p.360

しない．「ユングリンガ・サガ」に続くサガではハラルド美髪王やその父ハルヴダン黒王 (Halfdan svarti) といった歴史上の王について述べられており，「ユングリンガ・サガ」は歴史として認められる以前の神話伝説の要素を含んだ作品である．

### 2.1.5　分析に使用する刊本

- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte I. Vǫluspá, Hávamál.* København. Ejnar Munksgaard.
- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte II. Gudedigte.* København. Ejnar Munksgaard.
- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte III. Heltedigte første del.* København. Ejnar Munksgaard.
- Holtsmark, Anne; Helgason, Jón (udg.). 1976. *Snorri Sturluson Edda. Gylfaginning og prosafortellingene av Skáldskaparmál.* København. Ejnar Munksgaard.
- Wessén, Elias (udg.). 1952. *Snorri Sturluson Ynglingasaga.* København. Ejnar Munksgaard.

以上の刊本は，現在北欧において最も信頼のおけるものであるため今回の分析に用いた．上記の刊本に加えて，未刊の *Eddadigte IV* に入るべきエッダ英雄詩 11 作品を Jón Helgason 氏と共同で編集作業をされた Jónas Kristjánsson 氏の好意によりコピーを入手し今回の分析対象に加えた．

## 2.2　分析手順

作業の手順は以下に示す通りである．

1. 刊本に基づいて文献資料をテキストデータとしてコンピュータに入力．

   テキストを MS-DOS のテキストファイルとして入力．

   テキスト各行の先頭に位置情報として作品の略記号，節番号，行番号，韻文・散文の区別，（神話詩・英雄詩の区別）をつける．

   例：VSP 3.6.VG　　GYLFG 24.45.P

   テキストに出て来る古西ノルド語に特有のアルファベットは他の記号 (\, % , $ , @, ^) と組み合わせて入力する．

   例：\d,　% a,　$ O,　@o,　^E

   分析対象とする 3 作品（群）で約 17,000 行（約 650KB）となった．

2. 言語工学の汎用機を用いて，入力したテキストデータのコンコーダンスを作成．

   入力した MS-DOS のテキストファイルを汎用機に転送し，三木氏（椙山女学園大学助教授）作成

のプログラムを用いてKWICコンコーダンス[注13]を作成.

KWICコンコーダンスをプリントアウトする.

3. コンコーダンスで動詞を調べる.

プリントアウトしたKWICコンコーダンスで辞書に基づき品詞をチェックする.

4. 3に基づき元のテキストデータ上の動詞に印をつける.

KWICコンコーダンス上で動詞とした単語について1で入力したMS-DOSテキストに$印をつける.

5. データベースソフトに読み込めるようにテキストデータを加工.

エディターソフト（ＶＺ）のマクロ機能を用いて，＊を付けた動詞，位置情報，前後の文脈をデータベースソフトに読み込めるように加工.

6. 位置情報とその動詞，その動詞の出て来るテキスト行を持つデータベース作成.

＊を付けた動詞，位置情報，前後の文脈をフィールドとする動詞データベースを作成.

7. 6のデータベースに主語，目的語，意味，時制など個々の動詞についての情報を資料に忠実に加えて全部で38のフィールドからなる動詞データベースを完成.

**動詞データベースフォーマット**

**Word** +WORD **Entry** +ENTRY **Place** +PLACE
**Combi** +COMB **Adverb** +ADVERB
**Phrase** +PHRASE
**Meaning** +MEANING **M_ Cat** +M_ CATEGORY
**Form** +FORM **Tense** +TENSE **Mood** +MOOD
**Reflex** +REF_ FORM **A/M** +AUX_ MAIN **Enclitic** +ENCLITIC **Meter** +METER
**Subject** +SUBJECT **S_ Grm** +S_ GRM
**S_ Real** +S_ REAL
**S_ Type** +S_ TYPE **S_ Cat** +S_ CATEGORY **S_ Person** +S_ PERSON **S_ Num** + S_ NUMBER
**Complement** +COMPLEMENT
**C_ Real** +C_ REAL
**C_ Type** +C_ TYPE **C_ Cat** +C_ CATEGORY
**Object** +OBJECT
**O_ Real** +O_ REAL **O_ Type** +O_ TYPE

注13 Key Word in Context コンコーダンス．分析対象としたいキーワードの文脈上の位置（前後関係）がわかるように出力したコンコーダンス.

**O_Cat** +O_CATEGORY **O_Person** +O_PERSON **O_Num** +O_NUMBER
**O_Case** +O_CASE
**Text_2** +TEXT_2
**Text_1** +TEXT_1
**Text** +TEXT
**Text1** +TEXT1
**Text2** +TEXT2

+フィールド名のところ（+WORD など）に実際のデータが入力される．

**フィールド名（画面表示）：** 説明

入力内容

**WORD(Word):** 単語（分析対象の動詞）

**ENTRY(Entry):** 見出し語（本文中では「語」と表記する）

WORD を辞書でひく場合の形

**PLACE(Place):** WORD のテキストでの出現場所

**COMB(Comb):** WORD と他の動詞との結びつき

完了，受け身，その他の助動詞などと結びついて一つの動詞句を形成（具体的に語を記入）

x　単独の場合

**ADVERB(Adverb):** 副詞

WORD と関わる副詞（様態，場所，時，否定など）を記入

x　ない場合，助動詞の場合

**PHRASE(Phrase):** WORD が文法上の目的語や，複合語などと結びついて一つの意味を作っている場合のセットフレーズ

x　単独の場合

目的語が特定の格の場合には以下の略号を用いる

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| e-n | einhvern | 対格目的語（人） | e-t | eitthvert | 対格目的語（モノ） |
| e-m | einhverjum | 与格目的語 | e-s | einhvers | 属格目的語 |

**MEANING(Meaning):** WORD の意味

文脈における意味，セットフレーズでの意味

複合動詞の場合は，複合での意味

例　ganga aptr　戻ってくる

目的語と一体で一つの意味になる場合は，それを記入する

例　kasta orðum e-n　誰かに話しをする

**M_ CATEGORY(M_ Cat):** WORD の意味のカテゴリー

1 から 30 までは寺村 (1982) での分類．該当するページ番号を付けた．

２者（動作の主体と対象）の関係　pp.87-101

1　物理的働きかけ

2　ある対象を目指しての感覚・感情の動き

3　創る行為

4　対面，あるいは対象に対する態度

5　相互動作

移動・変化　pp.102-121

6　移動－１　「出ル」動き

7　移動－２　「通ル」動き

8　移動－３　「入ル，着ク；泊マル」類

9　行ク，来ル，帰ル，戻ル

10　変化「ナル」類

働きかけと移動の複合　pp.122-124

11　「入レル」類

働きかけと変化の複合　pp.124-126

12　「変エル」類

授受　pp.126-139

13　授受（１）「与エル」類

14　授受（２）「受ケル」類

15　「命ジル」類

感情　pp.139-154

16　一時的な気の動き

17　能動的な心の動き，積極的感情の発動

18　感情の直接的表出

19　感情的品定め

存在　pp.155-161

20　出来事の発生

21　物理的存在（あるとき，あるものが，ある空間を占めて存在する）

22　所有，所属的存在

23　部分集合，または種類の存在

性状規定　pp.162-170（特に補語が形容詞の場合）

24　「何かに対する」性状

25　相対的性状

26　絶対的性状

判断措定　pp.171-172（特に補語が名詞の場合）

27　判断措定の対象になるコト

コトを含むコト　pp.173-176

（一つのまとまった叙述内容を対象とする，～であることを…する）

28　感覚作用

29　思考作用

30　発話行為

31　自発（自然現象，自動詞など）

32　使役（命令とは異なる）

33　名付けられる ('be named')

助動詞的意味

40　完了形をつくる

50　受け身をつくる

60　冗語的挿入

法の助動詞

71　義務

72　必要性

73　運命

74　命令

75　「まさに～する」

76　未来

77　推量

78　想像・非現実

79　可能

80　能力

81　許可

82　意志・願望

83　「敢えて～する」

**FORM(Form):** WORD のテキスト中での出現形

| | |
|---|---|
| inf | 不定詞形 |
| pres | 現在形 |
| pret | 過去形 |
| pres.p | 現在分詞形 |
| past.pp | 過去分詞形（受け身） |
| past.ps | 過去分詞形（完了分詞） |
| imp | 命令形 |
| conj1 | 接続法現在形 |
| conj2 | 接続法過去形 |

**TENSE(Tense):** WORD の時制

| | |
|---|---|
| pres | 現在 |
| pret | 過去 |
| f | 未来 |
| pres.p | 現在完了 |
| past.p | 過去完了 |
| x | その他（分詞，不定詞，助動詞と結びついている場合） |

**MOOD(Mood):** WORD の法

ind　直説法

conj.pres　接続法現在（主節）

1 願望

2 要求・命令

3 譲歩

4 疑いのある提案（疑問文のみ）

conj.pret　接続法過去（主節）

考えられる，可能性のある (potential)

conj.sub　接続法（従属節）

imp　命令法

x　不定詞，助動詞と結びついている場合など

**REF_ FORM(Reflex):** WORD が形態上再帰形の場合の分類

refl　再帰

rec　相互

inc　起動（新しい状態に入る，なる）

p　受け身

x　再帰形でない場合

**AUX_ MAIN(A/M):** WORD が助動詞なのか本動詞なのか

a　助動詞として機能

m　本動詞として機能

**ENCLITIC(Enclitic):** WORD の接辞

動詞と一体になっている語（-at, -ak, -tu など）

x ない場合

**METER(Meter):** 韻律

WORD が韻律の支配にある場合

m　málaháttr

f　fornyrðislag

l　lióðaháttr

k　kviðuháttr

d　dóttkvætt

x　ない場合

**SUBJECT(Subject):** 主語（意味上の主語）

複数の場合 '/' で区切って記入

節の場合 at-, hverr- と記入

**S_ REAL(S_ Real):** 主語の実体

代名詞，あだ名，明示されていないなどの場合で，実際に指しているもの（日本語で）

**S_ TYPE(S_ Type):** 主語のタイプ

文中での主語のタイプ

n　主格位置にある

o　目的格位置にある

c　明示されていないが，文脈からわかる

r　関係代名詞が主語のもの

s　疑問代名詞が主語のもの

a　主格主語をとらない場合，対格主語

d　主格主語をとらない場合，与格主語

up　非人称構文

x　特定できないもの

**S_ CATEGORY(S_ Cat):** 主語のカテゴリー

実体 (S_ Real) のカテゴリー

| | |
|---|---|
| g(m/f, a/v) | 神々（男性／女性，アース神／ヴァン神） |
| s | 超存在（巫女，魔女，世界樹など） |
| h(m/f) | 英雄（男性／女性） |
| k | 王 |
| e | エインヘリャル |
| j(m/f) | 巨人（男性／女性） |
| d(m/f) | 侏儒 |
| m(m/f) | 人間（男性／女性） |
| v | ヴァルキュリャ |
| a(l/d) | アールヴ（光／闇） |
| l(g/h/j) | 動物（神々／英雄／巨人に属する） |
| t(g/h/j) | 従者（神々／英雄／巨人に属する） |
| o(w/n, g/h/j) | その他（有意志/無意志, 神々/英雄/巨人に属する） |
| x | 上記以外 |
| y | 文法的要素（at-, hverr-などの節） |
| up | 非人称構文 |

**S_ PERSON(S_ Person):** 主語の人称（文法上）

1 ,2, 3　一，二，三人称

x　非人称・主語が特定できないもの

**S_ NUMBER(S_ Num):** 主語の数（文法上）

s, p　単数，複数

x　非人称・主語が特定できないもの

**S_ GRM(S_ Grm):** WORD が意味上の主語を主格でとらない場合

það, þar など

**COMPLEMENT(Complement):** 補語

複数の場合 '/' で区切って記入

節の場合 at-, hverr- と記入

**C_ REAL(C_ Real):** 補語の実体

代名詞，あだ名，明示されていないなどの場合で，実際に指しているもの（日本語で）

形容詞などは，その意味を記入

**C_ TYPE(C_ Type):** 補語のタイプ

n　名詞

a　形容詞

adv　副詞

x　その他（節，副詞句，前置詞句など）

**C_ CATEGORY(C_ Cat):** 補語のカテゴリー

C_ TYPE が n の場合，S_ Category に同じ

x　n 以外

**OBJECT(Object):** 目的語（Phrase における目的語，文法上の目的語）

異なる格の場合 '/' で，同じ格の場合は',' で区切って記入

節の場合 at-, hverr- と記入

意味上表に出ないもの

例：ganga af e-m dauðum（e-m を殺す）における dauðum も e-m も目的語として扱う

**O_ REAL(O_ Real):** 目的語の実体

代名詞，あだ名，明示されていないなどの場合で，実際に指しているもの（日本語で）

**O_ TYPE(O_ Type):** 目的語のタイプ

o　目的語として明示されている

c　〃　明示されていない

r　関係代名詞が目的語のもの

s　疑問詞が目的語のもの

g　文法的要素（at-, hverr- などの節）

x　目的語がない場合

**O_ CATEGORY(O_ Cat):** 目的語のカテゴリー

S_ Category に同じ

**O_ PERSON(O_ Person):** 目的語の人称

S_ Person に同じ

**O_ NUMBER(O_ Num):** 目的語の数

S_ Number に同じ

**O_ CASE(O_ Case):** 目的語の格

| | |
|---|---|
| a | 対格 |
| ag | 文法的目的語 |
| ao | 目的語の補語 |
| as | 主格主語の無い文において |
| aadv | 副詞的用法 |
| d | 与格 |
| do | 本来の与格 |
| di | 具格的与格 |
| da | 奪格的与格 |
| dl | 所格的与格 |
| g | 属格 |
| x | その他（節など） |

**TEXT_ 2(Text-2):** WORD が出現するテキスト（2行前）

**TEXT_ 1(Text-1):** WORD が出現するテキスト（1行前）

**TEXT(Text):** WORD が出現するテキスト

**TEXT1(Text+1):** WORD が出現するテキスト（1行後）

**TEXT2(Text+2):** WORD が出現するテキスト（2行後）

8. その動詞データベースに対して，様々な考察を加える．

# 第3章　作品（群）別分析

## 3.1　データベース上の各フィールドごとの傾向

ここでは，今回分析した4つの作品（群），「エッダ詩集」（神話詩，英雄詩），「ギュルヴィの惑わし」，「ユングリンガ・サガ」それぞれについての各フィールドごとの傾向を調べる．なお参考のため全体の傾向とも比較する．以下説明において「ギュルヴィの惑わし」，「ユングリンガ・サガ」はそれぞれギュルヴィ，ユングリングと略す．

各作品（群）のレコード数は次にようになる．

| 全体 | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| 15426 | 4133 | 5145 | 3945 | 2203 |

本論文の基礎となる動詞データベースには第2.2節で述べたように38の分析フィールドがあるが，その中で実際にこの章で分析対象とするのはWORD, ENTRY, MEANING, M_CATEGORY, FORM, TENSE, MOOD, REF_FORM, AUX_MAIN, METER, SUBJECT, S_REAL, S_TYPE, S_CATEGORY, S_PERSON, S_NUMBER, COMPLEMENT, C_REAL, C_TYPE, C_CATEGORY, OBJECT, O_REAL, O_TYPE, O_CATEGORY, O_PERSON, O_NUMBER, O_CASEの27フィールドである．

そこでこれからそれらのフィールドでのデータ数，頻度，比率を分析することにより各フィールドにおける4つの作品（群）の傾向を見ていく．

◎　WORD

テキストに実際に出てくる単語（分析対象の動詞）であるため，個々については分析できないが，何種類の単語（分析対象の動詞）があるのか，どのような単語（分析対象の動詞）が多く用いられているのかについて傾向を読みとることは出来る．

作品（群）別に単語（分析対象の動詞）が何種類あるのかについては以下のようになる．(() 内はレコード総数／WORD数)

| 全体 | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| 3820(4.04) | 1549(2.67) | 2083(2.47) | 1141(3.46) | 631(3.49) |

各作品（群）によってレコード総数が異なるため，単純に単語（分析対象の動詞）の数を比べるこ

とは出来ないが，レコード総数に対する WORD 数の比率を見ると，韻文作品である神話詩，英雄詩グループと散文作品であるギュルヴィ，ユングリンググループとに分けられ，韻文の方がより多くの種類の単語を用いていることがわかる．

次にどの単語が多く登場するかについてみてみる．

頻度上位

| 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| er | 722 | 4.68% | er | 173 | 4.19% | var | 168 | 3.27% |
| var | 691 | 4.48% | var | 126 | 3.05% | er | 154 | 2.99% |
| mun | 190 | 1.23% | heitir | 63 | 1.52% | mun | 88 | 1.71% |
| heitir | 187 | 1.21% | skal | 61 | 1.48% | kvað | 83 | 1.61% |
| vera | 128 | 0.83% | mun | 53 | 1.28% | hefir | 46 | 0.89% |
| skal | 127 | 0.82% | sé | 47 | 1.14% | væri | 37 | 0.72% |
| mælti | 126 | 0.82% | vera | 40 | 0.97% | vera | 37 | 0.72% |
| hét | 124 | 0.80% | kom | 35 | 0.85% | skal | 36 | 0.70% |
| hafði | 124 | 0.80% | Segðu | 34 | 0.82% | hét | 36 | 0.70% |
| kom | 122 | 0.78% | kann | 33 | 0.80% | hafði | 34 | 0.66% |

| ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|
| er | 353 | 8.95% | var | 253 | 11.48% |
| var | 144 | 3.65% | hafði | 56 | 2.54% |
| mælti | 103 | 2.61% | hét | 54 | 2.45% |
| heitir | 99 | 2.51% | tók | 46 | 2.09% |
| segir | 74 | 1.88% | fór | 45 | 2.04% |
| eru | 57 | 1.44% | váru | 44 | 2.00% |
| mun | 48 | 1.22% | er | 42 | 1.91% |
| segia | 46 | 1.17% | kom | 41 | 1.86% |
| vera | 43 | 1.09% | skyldi | 41 | 1.86% |
| hefir | 39 | 0.99% | varð | 34 | 1.54% |

頻度上位に er, var は全ての作品（群）に入っており，神話詩，英雄詩，ギュルヴィでは１，２位で

ある．ギュルヴィ, ユングリング の散文作品では er, var のｂｅ動詞の比率が韻文作品（群）よりもかなり高い．ユングリングでは var は 1 位で 2 位以下を大きく引き離しており，他の上位に入っているものも er 以外は全て過去形動詞であり，ユングリングが年代記として過去の事実を述べていることがわかる．また mun, vera は神話詩, 英雄詩, ギュルヴィには入っているが，ユングリングには入っていない．

◎ ENTRY

どのような動詞が用いられているのかを見る指標となるフィールド．動詞は時制，人称，数により出現する形が変化するが，ENTRY （辞書の見出しになっている形）であればそれらに関わらずにどのような動詞が用いられているかを見ることが出来る．作品（群）別に固有（その作品（群）にのみ登場する）の動詞があれば，その作品（群）を特徴づけているキーワードの可能性があり，この ENTRY は重要な分析フィールドである．また第 5 章以降で神々や英雄など個別に分析する際にも，同様に注目して分析すべきフィールドとなる．

用いられている ENTRY の種類は以下のようである．(() 内はレコード総数／ ENTRY 数)

| 全体 | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| 940(16.41) | 546(7.57) | 619(8.31) | 429(9.20) | 275(8.01) |

レコード総数に対する ENTRY 数は神話詩が一番多く，多様な動詞が用いられていることがうかがえるが，他の作品（群）との差が余り大きくなく，特徴というほどのものではない．

頻度上位

| 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| vera | 2251 | 14.59% | vera | 554 | 13.40% | vera | 601 | 11.68% |
| hafa | 522 | 3.38% | munu | 159 | 3.85% | munu | 197 | 3.83% |
| munu | 501 | 3.25% | skulu | 149 | 3.61% | hafa | 182 | 3.54% |
| heita | 419 | 2.72% | vita | 140 | 3.39% | skulu | 131 | 2.55% |
| koma | 419 | 2.72% | koma | 134 | 3.24% | kveða | 109 | 2.12% |
| segja | 416 | 2.70% | heita | 106 | 2.56% | koma | 105 | 2.04% |
| skulu | 412 | 2.67% | hafa | 99 | 2.40% | segja | 95 | 1.85% |
| fara | 305 | 1.98% | segja | 83 | 2.01% | verða | 93 | 1.81% |
| verða | 282 | 1.83% | nema | 74 | 1.79% | fara | 87 | 1.69% |
| vita | 262 | 1.70% | fara | 66 | 1.60% | ganga | 87 | 1.69% |
| - | - | - | ganga | 66 | 1.60% | - | - | - |

| ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|
| vera | 699 | 17.72% | vera | 397 | 18.02% |
| segja | 179 | 4.54% | hafa | 85 | 3.86% |
| heita | 161 | 4.08% | fara | 83 | 3.77% |
| hafa | 156 | 3.95% | heita | 79 | 3.59% |
| munu | 125 | 3.17% | koma | 76 | 3.45% |
| mæla | 108 | 2.74% | taka | 70 | 3.18% |
| koma | 104 | 2.64% | segja | 59 | 2.68% |
| sjá | 83 | 2.10% | verða | 58 | 2.63% |
| skulu | 80 | 2.03% | kalla | 56 | 2.54% |
| verða | 73 | 1.85% | eiga | 56 | 2.54% |

頻度についてみると，どの作品（群）でも vera が他の ENTRY を大きく引き離して 1 位である．ギュルヴィ，ユングリングではそのレコード総数に対する比率はさらに大きくなり，散文作品では vera がより多く用いられていることがわかる．hafa, koma, segja は全ての作品（群）で頻度上位に出ている．

次に，特定の作品（群）にしか用いられない，その作品（群）に個別の ENTRY について調べてみる

と神話詩は 548 の ENTRY のうち 137 が神話詩にしか用いられていない．つまり 4 つに 1 つが固有の ENTRY ということになる．同様に他の作品（群）について調べてみると以下のようになる．

| 作品（群） | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| ENTRY 数 (a) | 546 | 619 | 429 | 275 |
| 固有の ENTRY 数 (b) | 131 | 195 | 81 | 32 |
| (a/b) | 4.17 | 3.17 | 5.30 | 8.60 |

固有の ENTRY は韻文作品（群）(神話詩, 英雄詩) に多く，散文作品では少ない．なかでも英雄詩には非常に多くの固有の ENTRY が用いられている．

◎ MEANING

ENTRY の表している意味を示すフィールド．ENTRY が同じでもその意味することが異なる場合があり，また ENTRY が異なっても意味が同じ場合もある．ENTRY の場合と同じように，その動詞で表されている意味が特別なものでその作品（群）にのみ出てくる場合は，その作品（群）を特徴づけるキーワードの可能性があり，重要なフィールドである．また第 5 章以降に神々や英雄を個別に分析する際にも重要である．

用いられている意味の種類は以下のようである．

| 全体 | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| 1340(11.51) | 640(6.46) | 765(6.73) | 587(6.72) | 402(5.48) |

ユングリングに出てくる意味の数が若干少ないが，それほど大きな差ではなく，種類の数から特徴を見出すことは難しい．

頻度上位

| 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 助動詞 | 1305 | 8.46% | 助動詞 | 392 | 9.48% | 助動詞 | 490 | 9.52% |
| ｂｅ | 1176 | 7.62% | ｂｅ | 311 | 7.52% | ｂｅ | 323 | 6.28% |
| 言う | 658 | 4.27% | 知る | 164 | 3.97% | 言う | 222 | 4.31% |
| 受け身 | 470 | 3.05% | 言う | 111 | 2.69% | 完了 | 170 | 3.30% |
| 完了 | 464 | 3.01% | 得る | 100 | 2.42% | 受け身 | 110 | 2.14% |
| 呼ばれる | 376 | 2.44% | 呼ばれる | 92 | 2.23% | 行う | 95 | 1.85% |
| 知る | 298 | 1.93% | 完了 | 92 | 2.23% | 与える | 91 | 1.77% |
| 持つ | 294 | 1.91% | 受け身 | 81 | 1.96% | 持つ | 88 | 1.71% |
| 来る | 248 | 1.61% | 来る | 74 | 1.79% | 見る | 82 | 1.59% |
| ある | 221 | 1.43% | 持つ | 73 | 1.77% | 殺す | 73 | 1.42% |

| ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ｂｅ | 375 | 9.51% | ｂｅ | 167 | 7.58% |
| 助動詞 | 321 | 8.14% | 受け身 | 119 | 5.40% |
| 言う | 265 | 6.72% | 助動詞 | 102 | 4.63% |
| 受け身 | 160 | 4.06% | 呼ばれる | 75 | 3.40% |
| 呼ばれる | 154 | 3.90% | 完了 | 70 | 3.18% |
| 完了 | 132 | 3.35% | 言う | 60 | 2.72% |
| ある | 82 | 2.08% | 持つ | 57 | 2.59% |
| 持つ | 76 | 1.93% | 呼ぶ | 55 | 2.50% |
| 見る | 70 | 1.77% | いる | 52 | 2.36% |
| 呼ぶ | 65 | 1.65% | 来る | 49 | 2.22% |

頻度についてみると，助動詞，ｂｅ，言う，持つ，完了，受け身は全ての作品（群）の上位に見られる．

次に，特定の作品（群）にしか用いられない，その作品（群）に個別の MEANING について調べてみると総 MEANING 数に対する固有の MEANING (a/b) はユングリングにおいて少ないが，その他はあまり差がない．

| 作品（群） | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| MEANING 数 (a) | 640 | 766 | 587 | 402 |
| 固有の MEANING 数 (b) | 197 | 291 | 182 | 95 |
| (a/b) | 3.25 | 2.63 | 3.23 | 4.23 |

◎ M_ CATEGORY

このフィールドはそれぞれの動詞の表している意味をカテゴリー別に分類したものである．このカテゴリー分けは『日本語のシンタクスと意味　I』（寺村秀夫）での動詞の分類を基準に，助動詞についてのカテゴリーをつけ加えたもので，先に第2.2節で示したように全部で４９のカテゴリーがある．

各作品（群）別の特徴としては神話詩には19（感情的品定め）がない．英雄詩には全て出てくる．ギュルヴィには60（冗語的挿入）がない．ユングリングには18（感情の直接的表出），19（感情的品定め），75（「まさに～する」），76（未来），81（許可），83（「敢えて～する」）がない．なお23（部分集合，種類の存在）は全ての作品（群）に出てこなかった．

頻度から見てみると以下のようになる．

頻度上位

| 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1538 | 9.97% | 1 | 402 | 9.73% | 1 | 570 | 11.08% |
| 30 | 964 | 6.25% | 29 | 296 | 7.16% | 30 | 307 | 5.97% |
| 29 | 737 | 4.78% | 30 | 198 | 4.79% | 31 | 285 | 5.54% |
| 31 | 688 | 4.46% | 14 | 182 | 4.40% | 12 | 285 | 5.54% |
| 12 | 664 | 4.30% | 31 | 163 | 3.94% | 29 | 263 | 5.11% |
| 21 | 645 | 4.18% | 12 | 163 | 3.94% | 2 | 238 | 4.63% |
| 11 | 614 | 3.98% | 21 | 163 | 3.94% | 11 | 201 | 3.91% |
| 2 | 593 | 3.84% | 10 | 156 | 3.77% | 21 | 198 | 3.85% |
| 27 | 566 | 3.67% | 9 | 147 | 3.56% | 13 | 185 | 3.60% |
| 9 | 559 | 3.62% | 27 | 147 | 3.56% | 9 | 184 | 3.58% |

| ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 30 | 370 | 9.38% | 1 | 228 | 10.35% |
| 1 | 338 | 8.57% | 11 | 141 | 6.40% |
| 33 | 202 | 5.12% | 50 | 118 | 5.36% |
| 27 | 179 | 4.54% | 33 | 115 | 5.22% |
| 21 | 175 | 4.44% | 21 | 109 | 4.95% |
| 50 | 161 | 4.08% | 9 | 108 | 4.90% |
| 2 | 160 | 4.06% | 27 | 105 | 4.77% |
| 8 | 151 | 3.83% | 12 | 102 | 4.63% |
| 31 | 145 | 3.68% | 31 | 95 | 4.31% |
| 10 | 139 | 3.52% | 8 | 94 | 4.27% |

1（物理的働きかけ），21（物理的存在），31（自発，自然現象，自動詞など）は全ての作品（群）で頻度上位に出ている．

◎ FORM

動詞の出現形を分類するフィールド．全部で９つに分類される．ユングリングに imp（命令形）が出てこない以外はどの作品（群）もほぼ全ての形が出てくる．

| | 全体 | | 神話詩 | | 英雄詩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| pret | 5728 | 37.13% | 1062 | 25.70% | 1972 | 38.33% |
| pres.p | 86 | 0.56% | 35 | 0.85% | 32 | 0.62% |
| pres | 4752 | 30.81% | 1659 | 40.14% | 1227 | 23.85% |
| past.ps | 590 | 3.82% | 121 | 2.93% | 234 | 4.55% |
| past.pp | 699 | 4.53% | 139 | 3.36% | 238 | 4.63% |
| inf | 2272 | 14.73% | 651 | 15.75% | 907 | 17.63% |
| imp | 297 | 1.93% | 140 | 3.39% | 148 | 2.88% |
| conj2 | 535 | 3.47% | 87 | 2.11% | 243 | 4.72% |
| conj1 | 467 | 3.03% | 239 | 5.78% | 144 | 2.80% |

| | ギュルヴィ | | ユングリング | |
|---|---|---|---|---|
| pret | 1228 | 31.13% | 1466 | 66.55% |
| pres.p | 12 | 0.30% | 7 | 0.32% |
| pres | 1654 | 41.93% | 212 | 9.62% |
| past.ps | 156 | 3.95% | 79 | 3.59% |
| past.pp | 183 | 4.64% | 139 | 6.31% |
| inf | 511 | 12.95% | 203 | 9.21% |
| imp | 9 | 0.23% | 0 | 0.00% |
| conj2 | 111 | 2.81% | 94 | 4.27% |
| conj1 | 81 | 2.05% | 3 | 0.14% |

神話詩, ギュルヴィでは pres（現在形）が一番多く，英雄詩では pret（過去形）が一番多い．神話詩と英雄詩では pret/ pres の比率がほぼ逆転している．ユングリングでは他の 3 つの作品（群）と異なり pres が非常に少ない．その代わりに pret が非常に多くなっている．これはユングリングがノルウェー王の年代記として，起こった出来事を記述する作品であることと関係があるものと思われる．

◎ TENSE

動詞の表している時制を分類するフィールド．全部で 7 つに分類される．神話詩, ユングリングに f.p（未来完了）が出てこないが，f.p は全体でも 5 例しかないためあまり特徴とは言えない．

| | 全体 | | 神話詩 | | 英雄詩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 3940 | 25.54% | 1086 | 26.28% | 1558 | 30.28% |
| pret | 5659 | 36.68% | 1050 | 25.41% | 1934 | 37.59% |
| pres.p | 245 | 1.59% | 66 | 1.60% | 109 | 2.12% |
| pres | 4591 | 29.76% | 1629 | 39.41% | 1178 | 22.90% |
| past.p | 174 | 1.13% | 25 | 0.60% | 43 | 0.84% |
| f.p | 5 | 0.03% | 0 | 0.00% | 1 | 0.02% |
| f | 812 | 5.26% | 277 | 6.70% | 322 | 6.26% |

| | ギュルヴィ | | ユングリング | |
|---|---|---|---|---|
| x | 868 | 22.00% | 428 | 19.43% |
| pret | 1183 | 29.99% | 1492 | 67.73% |
| pres.p | 61 | 1.55% | 9 | 0.41% |
| pres | 1584 | 40.15% | 200 | 9.08% |
| past.p | 47 | 1.19% | 59 | 2.68% |
| f.p | 4 | 0.10% | 0 | 0.00% |
| f | 198 | 5.02% | 15 | 0.68% |

FORM と同様に神話詩, ギュルヴィでは pres（現在）が一番多く，英雄詩では pret（過去）が一番多い．神話詩と英雄詩では pret/ pres の比率がほぼ逆転している．ユングリングでは他の３つの作品（群）と異なり pres が非常に少ない．その代わりに pret が非常に多くなっている．これも FORM と同様にユングリングがノルウェー王の年代記であることと関係があるものと思われる．

◎ MOOD

動詞の表す法を分類するフィールド．全部で９種類ある．英雄詩に conj.sub（従属節における接続法）がない．ギュルヴィに conj.pres4（接続法現在，疑いのある提案）がないがこれは全体で２例しかないため，特徴にはならない．ユングリングには imp（命令法）がなく，conj.pres（接続法現在）も conj.pres2（要求，命令）が１例だけである．神話詩, 英雄詩の韻文作品（群）の方がギュルヴィ, ユングリングの散文作品より ind（直接法）が少ない．

| | 全体 | | 神話詩 | | 英雄詩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 3640 | 23.60% | 935 | 22.62% | 1410 | 27.41% |
| ind | 10488 | 67.99% | 2732 | 66.10% | 3200 | 62.20% |
| imp | 296 | 1.92% | 140 | 3.39% | 148 | 2.88% |
| conj.sub | 224 | 1.45% | 3 | 0.07% | 0 | 0.00% |
| conj.pret | 375 | 2.43% | 85 | 2.06% | 243 | 4.72% |
| conj.pres4 | 2 | 0.01% | 1 | 0.02% | 1 | 0.02% |
| conj.pres3 | 179 | 1.16% | 94 | 2.27% | 76 | 1.48% |
| conj.pres2 | 115 | 0.75% | 68 | 1.65% | 38 | 0.74% |
| conj.pres1 | 107 | 0.69% | 75 | 1.81% | 29 | 0.56% |

| | ギュルヴィ | | ユングリング | |
|---|---|---|---|---|
| x | 866 | 21.95% | 429 | 19.47% |
| ind | 2879 | 72.98% | 1677 | 76.12% |
| imp | 8 | 0.20% | 0 | 0.00% |
| conj.sub | 155 | 3.93% | 66 | 3.00% |
| conj.pret | 17 | 0.43% | 30 | 1.36% |
| conj.pres4 | 0 | 0.00% | 0 | 0.00% |
| conj.pres3 | 9 | 0.23% | 0 | 0.00% |
| conj.pres2 | 8 | 0.20% | 1 | 0.05% |
| conj.pres1 | 3 | 0.08% | 0 | 0.00% |

◎ REF_FORM

その動詞が再帰形 (-st) の場合，その再帰形が何を表しているのかを分類するフィールド．再帰形は全部で4種類の意味を表す．全体でも再帰形は4%弱しか出てこないので，あまり特徴的なものは見あたらない．refl（再帰）が一番多い．参考のためx以外での比率もあげる．

| | 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 14908 | 96.64% | - | 4028 | 97.46% | - | 4975 | 96.70% | - |
| refl | 380 | 2.46% | 73.36% | 69 | 1.67% | 65.71% | 120 | 2.33% | 70.59% |
| rec | 89 | 0.58% | 17.18% | 24 | 0.58% | 22.86% | 29 | 0.56% | 17.06% |
| p | 29 | 0.19% | 5.60% | 7 | 0.17% | 6.67% | 15 | 0.29% | 8.82% |
| inc | 20 | 0.13% | 3.86% | 5 | 0.12% | 4.76% | 6 | 0.12% | 3.53% |

| | ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 3776 | 95.72% | - | 2129 | 96.64% | - |
| refl | 139 | 3.52% | 82.25% | 52 | 2.36% | 70.27% |
| rec | 23 | 0.58% | 13.61% | 13 | 0.59% | 17.57% |
| p | 4 | 0.10% | 2.37% | 3 | 0.14% | 4.05% |
| inc | 3 | 0.08% | 1.78% | 6 | 0.27% | 8.11% |

◎ AUX_MAIN

本動詞 (m)，助動詞 (a) の分類をするフィールド．ユングリングにおいて本動詞の比率が若干高いが，全作品（群）において本動詞が約８５％，助動詞が約１５％である．

| | 全体 | | 神話詩 | | 英雄詩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| m | 13214 | 85.66% | 3557 | 86.06% | 4381 | 85.15% |
| a | 2212 | 14.34% | 576 | 13.94% | 764 | 14.85% |

| | ギュルヴィ | | ユングリング | |
|---|---|---|---|---|
| m | 3352 | 84.97% | 1924 | 87.34% |
| a | 593 | 15.03% | 279 | 12.66% |

◎ METER

古西ノルド語にはいくつかの韻律が見られるが，分析動詞がその韻律に組み込まれているのかどうかを分類するフィールド．全部で５つの韻律がある．神話詩で約 36 %，英雄詩で約 32 %の動詞に韻律の影響が見られる．ギュルヴィ, ユングリングの散文作品でも作品中に韻文作品が引用されている場合にはその韻律が影響してくるため，若干数の動詞に韻律の影響が見られる．参考のため x 以外での比率もあげる．

| | 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 12115 | 78.54% | - | 2632 | 63.68% | - | 3476 | 67.56% | - |
| m | 589 | 3.82% | 17.79% | 0 | 0.00% | 0.00% | 585 | 11.37% | 35.05% |
| l | 1160 | 7.52% | 35.03% | 893 | 21.61% | 59.49% | 209 | 4.06% | 12.52% |
| k | 43 | 0.28% | 1.30% | 0 | 0.00% | 0.00% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| f | 1517 | 9.83% | 45.82% | 608 | 14.71% | 40.51% | 875 | 17.01% | 52.43% |
| d | 2 | 0.01% | 0.06% | 0 | 0.00% | 0.00 | 0 | 0.00% | 0.00% |

| | ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 3849 | 97.57% | - | 2158 | 97.96% | - |
| m | 4 | 0.10% | 4.17% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| l | 58 | 1.47% | 60.42% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| k | 0 | 0.00% | 0.00% | 43 | 1.95% | 95.56% |
| f | 34 | 0.86% | 35.42% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| d | 0 | 0.00% | 0.00% | 2 | 0.09% | 4.44% |

◎ SUBJECT

分析対象となる動詞のテキスト上での主語を表すフィールド．その動詞が具体的にどの単語を主語としているのかが明らかになる．

全体的な傾向としては，韻文作品（群）では x（テキストに明示されていない）が一番多く，それに続いて ek（一人称単数），þú（二人称単数），hann（三人称単数男性）の順で数が多い．一方散文作品では hann, x, er（関係代名詞），þeir（三人称複数男性）の順になっている．特にユングリングで hann, Hann が多い．

頻度上位

| 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 2096 | 13.59% | x | 602 | 14.57% | x | 795 | 15.45% |
| hann | 1282 | 8.31% | ek | 470 | 11.37% | ek | 551 | 10.71% |
| ek | 1145 | 7.42% | þú | 356 | 8.61% | þú | 343 | 6.67% |
| þú | 775 | 5.02% | hann | 225 | 5.44% | hann | 218 | 4.24% |
| er | 678 | 4.40% | er | 165 | 3.99% | hón | 176 | 3.42% |
| þeir | 405 | 2.63% | -tu | 140 | 3.39% | er | 152 | 2.95% |
| -tu | 332 | 2.15% | -ðu | 54 | 1.31% | -tu | 147 | 2.86% |
| Hann | 261 | 1.69% | hón | 52 | 1.26% | þeir | 92 | 1.79% |
| hón | 228 | 1.48% | -do | 46 | 1.11% | Sigurðr | 54 | 1.05% |
| þat | 179 | 1.16% | þeir | 44 | 1.06% | Hann | 51 | 0.99% |

| ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|
| hann | 483 | 12.24% | hann | 356 | 16.16% |
| x | 468 | 11.86% | x | 231 | 10.49% |
| er | 240 | 6.08% | er | 121 | 5.49% |
| þeir | 152 | 3.85% | þeir | 117 | 5.31% |
| Þórr | 130 | 3.30% | Hann | 103 | 4.68% |
| ek | 114 | 2.89% | hon | 36 | 1.63% |
| hon | 93 | 2.36% | Óðinn | 32 | 1.45% |
| Hann | 78 | 1.98% | þat | 30 | 1.36% |
| þú | 76 | 1.93% | Ingialdr konungr | 29 | 1.32% |
| þat | 74 | 1.88% | Svíar | 29 | 1.32% |

◎ S_REAL

分析対象となる動詞の主語を具体的に示すフィールド．例えばテキスト上で代名詞 ek, hann とあってもそれが誰を示しているのかを明らかにするフィールド．その動詞が実際には何を主語としているのかがわかり，その主語に固有の動詞，その動詞に固有の主語などを明らかにする際に重要なフィールド．第 5 章以降で行う神々，英雄などの個別主語の分析する際にはこのフィールドをもとにしてデータを抽出し，その抽出したデータに対して考察を加える．

全体的な傾向としては，神話詩では北欧神話の主神とされる「オージン」が一番多く，次に一般論を述べるのに用いられる「人」，神話世界の守り手とされる「ソール」の順になっており，上位に神々が 5 つ入っており神話詩の名前の通りになっている．英雄詩ではよりその傾向が顕著で，上位のうち 9 つまでが，英雄およびその一族である女性で占められている．ギュルヴィでは神話世界を散文形式で語っているため上位に「ソール」，「アース神」，「オージン」，「ロキ」と神々が 4 つまで入っている．ユングリングでは x（文法的に語が置かれているが具体的には示せないものなど）が一番多いが，その他には「オージン」，「インギャルド」など王の名前が上位に並び，王家の年代記であることがうかがえる．

頻度上位

| 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| オージン | 740 | 4.80% | オージン | 476 | 11.52% | シグルズ | 482 | 9.37% |
| ソール | 635 | 4.12% | 人 | 320 | 7.74% | グズルーン | 412 | 8.01% |
| x | 586 | 3.80% | ソール | 261 | 6.32% | アトリ | 259 | 5.03% |
| シグルズ | 482 | 3.12% | ロッドファーヴニ | 164 | 3.97% | ブリュンヒルド | 234 | 4.55% |
| グズルーン | 412 | 2.67% | ロキ | 131 | 3.17% | ヘルギ | 206 | 4.00% |
| 人 | 381 | 2.47% | x | 126 | 3.05% | グンナル, ホグニ | 158 | 3.07% |
| アース神 | 314 | 2.04% | アース神 | 77 | 1.86% | グンナル | 127 | 2.47% |
| アトリ | 259 | 1.68% | ヘイムダッル | 65 | 1.57% | x | 115 | 2.24% |
| ロキ | 247 | 1.60% | スキールニル | 64 | 1.55% | シグルーン | 110 | 2.14% |
| ブリュンヒルド | 234 | 1.52% | フェニャ, メニャ | 59 | 1.43% | ヴォルンド | 74 | 1.44% |

| ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ソール | 374 | 9.48% | x | 142 | 6.45% |
| アース神 | 236 | 5.98% | オージン | 125 | 5.67% |
| x | 203 | 5.15% | インギャルド | 74 | 3.36% |
| ギュルヴィ王 | 188 | 4.77% | アウン | 62 | 2.81% |
| オージン | 102 | 2.59% | スウェーデン人 | 51 | 2.32% |
| 節 | 102 | 2.59% | エギル | 48 | 2.18% |
| ロキ | 99 | 2.51% | ハールヴダン | 47 | 2.13% |
| ウートガルザ・ロキ | 95 | 2.41% | ショーズオールヴ | 38 | 1.72% |
| ハール | 93 | 2.36% | アグニ | 36 | 1.63% |
| それ | 70 | 1.77% | 節 | 30 | 1.36% |
| フェンリル狼 | 70 | 1.77% | - | - | - |

◎ S_TYPE

分析対象となる動詞の意味上の主語のテキスト中でタイプを表すフィールド．主格主語の他に対格主語，与格主語，意味上の主語が目的語の位置にある場合（動詞が目的格補語になっている）などを表す．

韻文作品（群）でn（主格主語）の比率が散文作品に比べて若干低く，c（明示されていないが文脈

からわかる）の比率が高い．

| | 全体 | | 神話詩 | | 英雄詩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 495 | 3.21% | 91 | 2.20% | 87 | 1.69% |
| s | 130 | 0.84% | 41 | 0.99% | 42 | 0.82% |
| r | 733 | 4.75% | 196 | 4.74% | 167 | 3.25% |
| o | 364 | 2.36% | 103 | 2.49% | 191 | 3.71% |
| n | 11859 | 76.88% | 3125 | 75.61% | 3853 | 74.89% |
| g | 7 | 0.05% | 2 | 0.05% | 4 | 0.08% |
| d | 180 | 1.17% | 41 | 0.99% | 66 | 1.28% |
| c | 1600 | 10.37% | 513 | 12.41% | 705 | 13.70% |
| a | 58 | 0.38% | 21 | 0.51% | 30 | 0.58% |

| | ギュルヴィ | | ユングリング | |
|---|---|---|---|---|
| x | 191 | 4.84% | 126 | 5.72% |
| s | 45 | 1.14% | 2 | 0.09% |
| r | 242 | 6.13% | 128 | 5.81% |
| o | 55 | 1.39% | 15 | 0.68% |
| n | 3073 | 77.90% | 1808 | 82.07% |
| g | 1 | 0.03% | 0 | 0.00% |
| d | 56 | 1.42% | 17 | 0.77% |
| c | 277 | 7.02% | 105 | 4.77% |
| a | 5 | 0.13% | 2 | 0.09% |

◎ S_ CATEGORY

先にS_ REALに出てきたものをカテゴリー分けしたフィールド．作品（群）における主語のカテゴリー別の傾向がわかる．

英雄詩ではhm（英雄男性）が，ユングリングではk（王）が圧倒的多数を占め，それぞれの作品（群）において扱われている内容を明確に示している．神話詩ではgma（アース神男性）が一番多いが英雄詩でのhm，ユングリングでのkほどではない．ギュルヴィにおいてはx（S_ REALがxのものや今回の分析で設定したカテゴリー以外のもの）が一番多いが，gmaの比率が神話詩とほぼ等しく，上位に出てくるのほかのカテゴリーも神話詩に似ている．

頻度上位

| 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 2988 | 19.37% | gma | 925 | 22.38% | hm | 2293 | 44.57% |
| hm | 2461 | 15.95% | x | 680 | 16.45% | x | 867 | 16.85% |
| gma | 1838 | 11.91% | mm | 370 | 8.95% | hf | 690 | 13.41% |
| k | 1302 | 8.44% | s | 289 | 6.99% | v | 439 | 8.53% |
| hf | 701 | 4.54% | m | 204 | 4.94% | dm | 157 | 3.05% |
| mm | 475 | 3.08% | jf | 197 | 4.77% | th | 107 | 2.08% |
| m | 474 | 3.07% | gjm | 148 | 3.58% | onh | 104 | 2.02% |
| v | 451 | 2.92% | jm | 146 | 3.53% | jf | 47 | 0.91% |
| jm | 443 | 2.87% | hm | 144 | 3.48% | y | 43 | 0.84% |
| s | 377 | 2.44% | ga | 98 | 2.37% | gma | 40 | 0.78% |

| ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|
| x | 1022 | 25.91% | k | 1016 | 46.12% |
| gma | 872 | 22.10% | x | 419 | 19.02% |
| jm | 289 | 7.33% | kga | 179 | 8.13% |
| ga | 250 | 6.34% | m | 128 | 5.81% |
| k | 194 | 4.92% | tk | 74 | 3.36% |
| lj | 144 | 3.65% | kf | 68 | 3.09% |
| y | 112 | 2.84% | mm | 46 | 2.09% |
| m | 112 | 2.84% | kgv | 44 | 2.00% |
| gjm | 108 | 2.74% | y | 30 | 1.36% |
| ong | 99 | 2.51% | onk | 28 | 1.27% |

◎ S_PERSON

分析対象とする動詞の主語の人称を表すフィールド．基本的には一，二，三人称の 3 種類であるが，非人称構文や主語の特定できないものがあるためそれらを分類する x を加えた 4 種類．

動詞の人称はその作品（群）が対話中心なのか（一，二人称が多い），語り中心なのか（三人称が多い）を見る目安となる．韻文作品（群）では一，二人称の比率がそれぞれ 17% 前後と散文作品（5

% 以下）に比べて非常に高く，登場するものの間での直接的な対話が多いことがわかる．それに対してユングリングではほぼ 100% が三人称で出来事を語る年代記であることを確認する結果となっている．ギュルヴィも物語形式ではあるが，一部韻文作品の引用があるためユングリング程三人称の比率が高くはなっていない．それでも 90% 以上が三人称である．

| | 全体 | | 神話詩 | | 英雄詩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 53 | 0.34% | 36 | 0.87% | 6 | 0.12% |
| 3 | 11885 | 77.05% | 2686 | 64.99% | 3428 | 66.63% |
| 2 | 1753 | 11.36% | 711 | 17.20% | 854 | 16.60% |
| 1 | 1735 | 11.25% | 700 | 16.94% | 857 | 16.66% |

| | ギュルヴィ | | ユングリング | |
|---|---|---|---|---|
| x | 9 | 0.23% | 2 | 0.09% |
| 3 | 3573 | 90.57% | 2198 | 99.77% |
| 2 | 188 | 4.77% | 0 | 0.00% |
| 1 | 175 | 4.44% | 3 | 0.14% |

◎ S_ NUMBER

分析対象となる動詞の主語の数（単数か複数か）を表すフィールド．

神話詩で若干 s（単数）が多い他は，全体的に余り差がない．

| | 全体 | | 神話詩 | | 英雄詩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 95 | 0.62% | 57 | 1.38% | 22 | 0.43% |
| s | 12078 | 78.30% | 3326 | 80.47% | 3993 | 77.61% |
| p | 3253 | 21.09% | 750 | 18.15% | 1130 | 21.96% |

| | ギュルヴィ | | ユングリング | |
|---|---|---|---|---|
| x | 13 | 0.33% | 3 | 0.14% |
| s | 3047 | 77.24% | 1711 | 77.67% |
| p | 885 | 22.43% | 489 | 22.20% |

◎ COMPLEMENT

分析対象となる動詞が補語をとる場合にその補語を示すフィールド．

COMPLEMENT をとるレコード数は次のようである．(() は COMPLEMENT をとるレコード数／レコード総数)

| 全体 | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| 2715(17.60% ) | 711(17.20% ) | 762(14.81% ) | 786(19.92% ) | 456(20.70% ) |

COMPLEMENT の種類．(() は種類数／レコード総数)

| 全体 | 神話詩 | 英雄詩 | ギュルヴィ | ユングリング |
|---|---|---|---|---|
| 2180(7.08) | 587(7.04) | 673(7.64) | 694(5.68) | 406(5.43) |

COMPLEMENT をとるレコード数がそれほど多くなく，かつそれぞれの COMPLEMENT が 1 例づつの場合が多く個別の例になり，特徴を見いだすことは出来ない．

◎ C_ REAL

COMPLEMENT が具体的に何を表しているのかを示すフィールド．COMPLEMENT の場合と同様にレコード数がそれほど多くなく，かつそれぞれの C_ REAL が 1 例づつの場合が多く個別の例になり，特徴を見いだすことは出来ない．

◎ C_ TYPE

COMPLEMENT がある場合のタイプを分類するフィールド．無い場合は x となる．神話詩は n（名詞）の場合も a（形容詞）の場合もほぼ同じ割合であるが，英雄詩は n が少なく，a が多くなっている．ギュルヴィは英雄詩と逆で n が多く，a が少なくなっている．ユングリングはそれらよりも s らに n が多く，a が少ない．参考のため x 以外での比率もあげる．

| | 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 13079 | 84.79% | - | 3546 | 85.80% | - | 4542 | 88.28% | - |
| s | 6 | 0.04% | 0.26% | 1 | 0.02% | 0.17% | 4 | 0.08% | 0.66% |
| r | 1 | 0.01% | 0.04% | 0 | 0.00% | 0.00% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| n, a | 1 | 0.01% | 0.04% | 0 | 0.00% | 0.00% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| n | 1113 | 7.22% | 47.42% | 265 | 6.41% | 45.14% | 205 | 3.98% | 34.00% |
| adv | 258 | 1.67% | 10.99% | 78 | 1.89% | 13.29% | 76 | 1.48% | 12.60% |
| a | 968 | 6.28% | 41.24% | 243 | 5.88% | 41.40% | 318 | 6.18% | 52.74% |

| | ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 3207 | 81.29% | - | 1784 | 80.98% | - |
| s | 1 | 0.03% | 0.14% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| r | 1 | 0.03% | 0.14% | 0 | 0.00% | 0.00% |
| n, a | 0 | 0.00% | 0.00% | 1 | 0.05% | 0.24% |
| n | 389 | 9.86% | 52.71% | 254 | 11.53% | 60.62% |
| adv | 62 | 1.57% | 8.40% | 42 | 1.91% | 10.02% |
| a | 285 | 7.22% | 38.62% | 122 | 5.54% | 29.12% |

◎ C_ CATEGORY

C_ TYPE で n になった場合に，それがどのカテゴリーに属するものかを示すフィールド．カテゴリー分類は S_ CATEGORY と同じ．分析対象となるレコードがどの作品（群）においても非常に少なく，特徴的な事実は見いだせない．参考のため x 以外での比率もあげる．

頻度上位

| 全体 | | | | 神話詩 | | | | 英雄詩 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 14731 | 95.49% | - | x | 3979 | 96.27% | - | x | 5010 | 97.38% | - |
| hm | 100 | 0.65% | 14.39% | gma | 29 | 0.70% | 18.83% | hm | 68 | 1.32% | 50.37% |
| k | 99 | 0.64% | 14.24% | hm | 18 | 0.44% | 11.69% | v | 19 | 0.37% | 14.07% |
| gma | 78 | 0.51% | 11.22% | ong | 16 | 0.39% | 10.39% | hf | 14 | 0.27% | 10.37% |
| ong | 60 | 0.39% | 8.63% | h | 15 | 0.36% | 9.74% | jm | 5 | 0.10% | 3.70% |
| jm | 31 | 0.20% | 4.46% | s | 12 | 0.29% | 7.79% | dm | 4 | 0.08% | 2.96% |
| s | 28 | 0.18% | 4.03% | m | 10 | 0.24% | 6.49% | th | 4 | 0.08% | 2.96% |
| v | 20 | 0.13% | 2.88% | lj | 7 | 0.17% | 4.55% | onh | 2 | 0.04% | 1.48% |
| h | 19 | 0.12% | 2.73% | jm | 6 | 0.15% | 3.90% | g | 2 | 0.04% | 1.48% |
| lj | 19 | 0.12% | 2.73% | k | 5 | 0.12% | 3.25% | ong | 2 | 0.04% | 1.48% |
| - | - | - | - | tg | 5 | 0.12% | 3.25% | gma | 2 | 0.04% | 1.48% |
| - | - | - | - | lg | 5 | 0.12% | 3.25% | y | 2 | 0.04% | 1.48% |

| ギュルヴィ | | | | ユングリング | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 3712 | 94.09% | - | x | 2030 | 92.15% | - |
| gma | 47 | 1.19% | 20.17% | k | 94 | 4.27% | 54.34% |
| ong | 40 | 1.01% | 17.17% | onk | 12 | 0.54% | 6.94% |
| jm | 20 | 0.51% | 8.58% | kf | 12 | 0.54% | 6.94% |
| lg | 12 | 0.30% | 5.15% | hm | 11 | 0.50% | 6.36% |
| lj | 12 | 0.30% | 5.15% | kga | 6 | 0.27% | 3.47% |
| s | 12 | 0.30% | 5.15% | h | 4 | 0.18% | 2.31% |
| jf | 11 | 0.28% | 4.72% | kgv | 3 | 0.14% | 1.73% |
| gfa | 11 | 0.28% | 4.72% | tk | 3 | 0.14% | 1.73% |
| ga | 10 | 0.25% | 4.29% | m | 3 | 0.14% | 1.73% |
| - | - | - | - | s | 3 | 0.14% | 1.73% |

◎ OBJECT

分析対象となる動詞のテキスト上での目的語を表すフィールド．目的語をとらない場合は x となる．動詞がどのような語を目的語としているのかがわかり，特にこのフィールドでは実際にテキストに出てくる単語レベルでのつながりが明らかになる．

種類としては英雄詩に比較的多くの OBJECT が用いられている．またギュルヴィに出てくる目的語は比較的少ない．作品別の傾向としては韻文作品（群）のほうが散文作品に比べて若干 x の比率が低く，何らかの形で目的語をとる場合が多いことがうかがえる．ユングリングでは特に at+（節）が目的語としてきている場合が他の作品（群）に比べて多い．その他は個別の例が多く，特徴的な傾向は見いだせない．参考のため x 以外での比率もあげる．

頻度上位

| 全体 | | | | 神話詩 | | | | 英雄詩 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 8924 | 57.85% | - | x | 2338 | 56.57% | - | x | 2647 | 51.45% | - |
| at+ | 346 | 2.24% | 5.32% | at+ | 77 | 1.86% | 4.29% | at+ | 81 | 1.57% | 3.24% |
| er | 180 | 1.17% | 2.77% | er | 49 | 1.19% | 2.73% | er | 54 | 1.05% | 2.16% |
| hann | 108 | 0.70% | 1.66% | þér | 38 | 0.92% | 2.12% | þik | 40 | 0.78% | 1.60% |
| þat | 97 | 0.63% | 1.49% | þik | 35 | 0.85% | 1.95% | þat | 37 | 0.72% | 1.48% |
| þik | 79 | 0.51% | 1.22% | þat | 30 | 0.73% | 1.67% | mik | 34 | 0.66% | 1.36% |
| þér | 73 | 0.47% | 1.12% | ráð | 25 | 0.60% | 1.39% | þér | 28 | 0.54% | 1.12% |
| mik | 61 | 0.40% | 0.94% | hann | 20 | 0.48% | 1.11% | mér | 18 | 0.35% | 0.72% |
| honum | 36 | 0.23% | 0.55% | mik | 20 | 0.48% | 1.11% | því | 18 | 0.35% | 0.72% |
| því | 33 | 0.21% | 0.51% | hvé+ | 14 | 0.34% | 0.78% | hann | 16 | 0.31% | 0.64% |
| - | - | - | - | mér/þat | 14 | 0.34% | 0.78% | menn | 5 | 0.23% | 0.58% |

| ギュルヴィ | | | | ユングリング | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 2593 | 65.73% | - | x | 1346 | 61.10% | - |
| at+ | 133 | 3.37% | 9.84% | at+ | 55 | 2.50% | 6.42% |
| er | 50 | 1.27% | 3.70% | hann | 27 | 1.23% | 3.15% |
| hann | 45 | 1.14% | 3.33% | er | 27 | 1.23% | 3.15% |
| honum | 22 | 0.56% | 1.63% | honum | 14 | 0.64% | 1.63% |
| þat | 19 | 0.48% | 1.41% | þat | 11 | 0.50% | 1.28% |
| hana | 13 | 0.33% | 0.96% | sigr | 8 | 0.36% | 0.93% |
| þat at+ | 9 | 0.23% | 0.67% | konungdóm | 7 | 0.32% | 0.82% |
| hvar+ | 9 | 0.23% | 0.67% | her | 7 | 0.32% | 0.82% |
| sik | 9 | 0.23% | 0.67% | ríki | 5 | 0.23% | 0.58% |

◎ O_REAL

分析対象となる動詞がとる目的語が具体的には何なのかを示すフィールド．目的語をとる動詞と主語とに固有の結びつきがある場合の両者の関係がこのフィールドを含めて分析することによってより明らかになる．第 5 章以降の神々，英雄など個別の分析の際にも重要な項目となる．

種類としては，ギュルヴィに出てくる目的語が若干少な目であるが，その他はあまり差がない．ど

の作品（群）もx（目的語がない）が一番多いが，xを除いたもので見た場合，神話詩では「オージン」，「ソール」，「ロキ」など神々が上位に来ており，英雄詩では「シグルズ」，「ヘルギ」，「アトリ」，「グズルーン」など英雄およびその一族が上位に来ていて作品（群）の扱っている内容をよく表している．ギュルヴィも神話を語っているという内容に即して，「フェンリル」，「ソール」，「バルドル」など神話に登場するものたちが上位に多くみられる．ユングリングでは王の伝記という性格を受けて「国」，「軍隊」，「勝利」などが目だつ．全ての作品において2位になっている「節」であるが，特にギュルヴィにおいてその比率が高い．参考のためx以外での比率もあげる．

頻度上位

| 全体 | | | |
|---|---|---|---|
| x | 8650 | 56.07% | - |
| 節 | 701 | 4.54% | 10.35% |
| それ | 124 | 0.80% | 1.83% |
| 助言 | 70 | 0.45% | 1.03% |
| オージン | 60 | 0.39% | 0.89% |
| シグルズ | 58 | 0.38% | 0.86% |
| ヘルギ | 46 | 0.30% | 0.68% |
| アトリ | 45 | 0.29% | 0.66% |
| 黄金 | 44 | 0.29% | 0.65% |
| ソール | 44 | 0.29% | 0.65% |

| 神話詩 | | | | 英雄詩 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 2237 | 54.13% | - | x | 2574 | 50.03% | - |
| 節 | 180 | 4.36% | 9.49% | 節 | 245 | 4.76% | 9.43% |
| 助言 | 67 | 1.62% | 3.53% | シグルズ | 58 | 1.13% | 2.23% |
| オージン | 39 | 0.94% | 2.06% | それ | 57 | 1.11% | 2.19% |
| それ | 30 | 0.73% | 1.58% | ヘルギ | 46 | 0.89% | 1.77% |
| ロッドファーブニ | 24 | 0.58% | 1.27% | アトリ | 45 | 0.87% | 1.73% |
| 魔法の歌 | 22 | 0.53% | 1.16% | グズルーン | 39 | 0.76% | 1.50% |
| ソール | 21 | 0.51% | 1.11% | ブリュンヒルド | 37 | 0.72% | 1.42% |
| ロキ | 17 | 0.41% | 0.90% | グンナル | 34 | 0.66% | 1.31% |
| 言葉 | 16 | 0.39% | 0.84% | 黄金 | 33 | 0.64% | 1.27% |

| ギュルヴィ | | | | ユングリング | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 2521 | 63.90% | - | x | 1318 | 59.83% | - |
| 節 | 203 | 5.15% | 14.26% | 節 | 73 | 3.31% | 8.25% |
| フェンリル狼 | 25 | 0.63% | 1.76% | 国 | 29 | 1.32% | 3.28% |
| それ | 23 | 0.58% | 1.62% | それ | 14 | 0.64% | 1.58% |
| ソール | 23 | 0.58% | 1.62% | 軍隊 | 12 | 0.54% | 1.36% |
| バルドル | 20 | 0.51% | 1.40% | 勝利 | 9 | 0.41% | 1.02% |
| 鎖 | 17 | 0.43% | 1.19% | オージン | 8 | 0.36% | 0.90% |
| ミョッルニル | 15 | 0.38% | 1.05% | 牛 | 7 | 0.32% | 0.79% |
| アース神 | 14 | 0.35% | 0.98% | 王 | 5 | 0.23% | 0.56% |
| ロキ | 12 | 0.30% | 0.84% | 財宝 | 5 | 0.23% | 0.56% |

ユングリング：　船，戦闘，オーラヴ，ヴィースブル，ヴァンランディ，ドーマルディ 5

◎ O_CATEGORY

分析対象となる動詞が目的語をとる場合，その目的語がどのカテゴリーに分類されるのかを示すフィールド．カテゴリー分類はS_CATEGORYと同じ．

O_REALで述べたように，目的語をとる動詞と主語とに固有の結びつきがある場合の両者の関係を目的語まで含めて分析することは，その結びつきをより明確にする．そしてその場合，個別の目

的語として分析するだけでなく，このフィールドのようにカテゴリー分けして関係を分析すると，作品（群）における目的語の傾向がわかる．神話詩ではgを含むもの（神に関わりのあるもの）が，英雄詩ではhm（英雄男性）hf（英雄女性）が，ユングリングではkを含むもの（王に関わりのあるもの）がそれぞれ上位に多く見られる．ギュルヴィにおいては神話詩に近い傾向が見られる．参考のためx以外での比率もあげる．

頻度上位

| 全体 | | | | 神話詩 | | | | 英雄詩 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 11493 | 74.50% | - | x | 3020 | 73.07% | - | x | 3618 | 70.32% | - |
| y | 702 | 4.55% | 17.85% | y | 180 | 4.36% | 16.17% | hm | 439 | 8.53% | 28.75% |
| hm | 503 | 3.26% | 12.79% | ong | 93 | 2.25% | 8.36% | y | 245 | 4.76% | 16.04% |
| ong | 233 | 1.51% | 5.92% | gma | 92 | 2.23% | 8.27% | hm/x | 101 | 1.96% | 6.61% |
| gma | 164 | 1.06% | 4.17% | s | 92 | 2.23% | 8.27% | hf | 86 | 1.67% | 5.63% |
| s | 119 | 0.77% | 3.03% | hm | 47 | 1.14% | 4.22% | onh | 80 | 1.55% | 5.24% |
| k | 117 | 0.76% | 2.97% | gma/x | 42 | 1.02% | 3.77% | v | 64 | 1.24% | 4.19% |
| hm/x | 110 | 0.71% | 2.80% | x/x | 38 | 0.92% | 3.41% | x/hm | 45 | 0.87% | 2.95% |
| x/x | 100 | 0.65% | 2.54% | mm | 37 | 0.90% | 3.32% | ong | 41 | 0.80% | 2.69% |
| hf | 92 | 0.60% | 2.34% | jm | 34 | 0.82% | 3.05% | hf/x | 38 | 0.74% | 2.49% |

| ギュルヴィ | | | | ユングリング | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 3141 | 79.62% | - | x | 1714 | 77.80% | - |
| y | 205 | 5.20% | 25.50% | k | 117 | 5.31% | 23.93% |
| ong | 98 | 2.48% | 12.19% | y | 72 | 3.27% | 14.72% |
| gma | 68 | 1.72% | 8.46% | onk | 37 | 1.68% | 7.57% |
| lj | 47 | 1.19% | 5.85% | k/x | 26 | 1.18% | 5.32% |
| onj | 34 | 0.86% | 4.23% | kga | 22 | 1.00% | 4.50% |
| jm | 30 | 0.76% | 3.73% | kf | 21 | 0.95% | 4.29% |
| lg | 24 | 0.61% | 2.99% | x/k | 17 | 0.77% | 3.48% |
| x/x | 23 | 0.58% | 2.86% | m | 14 | 0.64% | 2.86% |
| ga | 20 | 0.51% | 2.49% | lk | 13 | 0.59% | 2.66% |

◎ O_ PERSON

分析対象となる動詞がとる目的語の人称を表すフィールド.

散文作品では S_ PERSON と同様にほとんど一，二人称がない．ユングリングにおいては目的語がある場合は全て三人称である．韻文作品（群）では目的語がある場合三人称は神話詩 88.42%，英雄詩 88.80% と非常に高い．total は各人称が実際いくつ出ているのか（複数目的語の場合，それぞれ一つとして数える）を示す．参考のため x 以外での比率もあげる．

| | 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 259 | 1.58% | 4.07% | 91 | 2.06% | 5.04% | 152 | 2.73% | 6.08% |
| 2 | 266 | 1.62% | 4.18% | 118 | 2.67% | 6.54% | 128 | 2.30% | 5.12% |
| 3 | 5844 | 35.63% | 91.76% | 1596 | 36.07% | 88.42% | 2219 | 39.90% | 88.80% |
| x | 10035 | 61.17% | - | 2620 | 59.21% | - | 3062 | 55.06% | - |
| total | 16404 | - | - | 4425 | - | - | 5561 | - | - |

| | ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 16 | 0.39% | 1.33% | - | - | - |
| 2 | 20 | 0.49% | 1.66% | - | - | - |
| 3 | 1171 | 28.60% | 97.02% | 858 | 36.92% | 100.00% |
| x | 2887 | 70.52% | - | 1466 | 63.08% | - |
| total | 4094 | - | - | 2324 | - | - |

◎ O_ NUMBER

分析対象となる動詞がとる目的語の数（単数か複数か）を表すフィールド.

ユングリングで若干 s（単数）の比率が高い他は余り差がない．total は単数・複数が実際いくつ用いられているのか（複数目的語の場合，それぞれ一つとして数える）を示す．参考のため x 以外での比率もあげる．

| | 全体 | | | 神話詩 | | | 英雄詩 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| s | 4804 | 29.29% | 75.57% | 1371 | 30.98% | 76.21% | 1855 | 33.36% | 74.38% |
| p | 1553 | 9.47% | 24.43% | 428 | 9.67% | 23.79% | 639 | 11.49% | 25.62% |
| x | 10047 | 61.25% | - | 2626 | 59.34% | - | 3066 | 55.14% | - |
| total | 16404 | 100.00% | - | 4425 | 100.00% | - | 5560 | 100.00% | - |

| | ギュルヴィ | | | ユングリング | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| s | 906 | 22.12% | 75.00% | 672 | 28.92% | 78.50% |
| p | 302 | 7.37% | 25.00% | 184 | 7.92% | 21.50% |
| x | 2887 | 70.50% | - | 1468 | 63.17% | - |
| total | 4095 | 100.00% | - | 2324 | 100.00% | - |

◎ O_CASE

分析対象となる動詞がとる目的語の格を示すフィールド.

目的語がある場合，どの作品（群）でもag（文法的目的語）が一番多く，do（本来の与格）がそれに続いている．参考のためx以外での比率もあげる．

頻度上位

| 全体 | | | | 神話詩 | | | | 英雄詩 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 9858 | 63.91% | - | x | 2586 | 62.57% | - | x | 2965 | 57.63% | - |
| ag | 3091 | 20.04% | 55.51% | ag | 851 | 20.59% | 55.01% | ag | 1124 | 21.85% | 51.56% |
| do | 1067 | 6.92% | 19.16% | do | 288 | 6.97% | 18.62% | do | 455 | 8.84% | 20.87% |
| g | 317 | 2.05% | 5.69% | do/ag | 103 | 2.49% | 6.66% | g | 137 | 2.66% | 6.28% |
| do/ag | 282 | 1.83% | 5.06% | g | 82 | 1.98% | 5.30% | do/ag | 97 | 1.89% | 4.45% |
| ag/do | 195 | 1.26% | 3.50% | ag/do | 67 | 1.62% | 4.33% | ag/do | 76 | 1.48% | 3.49% |
| di | 101 | 0.65% | 1.81% | di | 32 | 0.77% | 2.07% | di | 41 | 0.80% | 1.88% |
| do/x | 50 | 0.32% | 0.90% | do/do | 12 | 0.29% | 0.78% | x/do | 32 | 0.62% | 1.47% |
| do/do | 50 | 0.32% | 0.90% | do/g | 11 | 0.27% | 0.71% | do/do | 30 | 0.58% | 1.38% |
| x/do | 50 | 0.32% | 0.90% | ag/ag | 11 | 0.27% | 0.71% | do/x | 29 | 0.56% | 1.33% |
| ag/ag | 50 | 0.32% | 0.90% | - | - | - | - | - | - | - | - |

| ギュルヴィ | | | | ユングリング | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| x | 2861 | 72.52% | - | x | 1446 | 65.64% | - |
| ag | 662 | 16.78% | 61.07% | ag | 454 | 20.61% | 59.97% |
| do | 196 | 4.97% | 18.08% | do | 128 | 5.81% | 16.91% |
| g | 56 | 1.42% | 5.17% | g | 42 | 1.91% | 5.55% |
| do/ag | 47 | 1.19% | 4.34% | do/ag | 35 | 1.59% | 4.62% |
| ag/do | 26 | 0.66% | 2.40% | ag/do | 26 | 1.18% | 3.43% |
| di | 20 | 0.51% | 1.85% | ag/ag | 15 | 0.68% | 1.98% |
| ag/ag | 12 | 0.30% | 1.11% | do/g | 8 | 0.36% | 1.06% |
| do/g | 12 | 0.30% | 1.11% | do/x | 8 | 0.36% | 1.06% |
| ag/g | 9 | 0.23% | 0.83% | di | 8 | 0.36% | 1.06% |

## 3.2　「エッダ詩集」

神話詩，英雄詩は個々の作品を集めたもののため，全体としての傾向は 2.0. データベース上の各フィールドごとの傾向を見るだけで，その他は個別の主語についての分析で扱う．

## 3.3　「ギュルヴィの惑わし」

「ギュルヴィの惑わし」はスウェーデン王ギュルヴィがガングレリと名乗ってアースガルズへと赴き，応対に出たハール，ヤヴンハール，スリジと名乗る 3 人との問答形式で，神々の世界について明らかにしていく話である．ハールたちは神々の世界について「エッダ詩集」からの引用を交えて語る．

### 3.3.1　王ギュルヴィとそれに答える 3 人の神々とで，異なる動詞が用いられているのか．

神々の世界を明らかにしていく部分以外ではほとんどがギュルヴィ王とハールたちとのやりとりである．そのやりとりの部分で作者スノッリがギュルヴィ王とハールたちをどのように描いているのか，ギュルヴィ王とハールたちでは異なる描写がされているのかを見るために，ギュルヴィ王を主語とする動詞とハールたちを主語とする動詞を比べてみる．

ギュルヴィ王を主語とする動詞は 189 例，ハールたちを主語とする動詞は 125 例である．そのうち両者に共通に用いられている動詞は以下の 14 例である．ENTRY, MEANING, PLACE, (PHRASE) を示す．

- hafa　完了　GYLFG 34.57.P

- kunna　助動詞　GYLFG 44.6.P
- munu　助動詞　GYLFG 44.16.P
- segja　言う　GYLFG 11.3.P
- segja　話す　GYLFG 51.3.P
- sjá　見る　GYLFG 44.16.P
- trúa　信じる　GYLFG 5.42.P
- vera　ｂｅ　GYLFG 2.39.P
- vita　知る　GYLFG 53.39.P
- þykkja　思われる　GYLFG 44.24.P

以上10例は他の多くの主語に対しても用いられている．

- heyra　聞く　GYLFG 44.14.P
- spyrja　尋ねる　GYLFG 2.40.P

以上２例は他の多くの主語に対しても用いられている．s_ category で'g' が付くものが（神々のカテゴリーに入るもの）が多い．

- hyggja　思う　GYLFG 48.62.P

他の多くの主語に対しても用いられている．オージン，ソール，ウートガルザ・ロキ (Útgarða-Loki) など．

- mæla　言う　GYLFG 13.14.P

他の多くの主語に対しても用いられている．フレイ，ソール，ウートガルザ・ロキなど．

ギュルヴィ王やハールたち以外では神々（オージン，ソール，フレイなど）やそれに類する特殊な能力を持つもの（ウートガルザ・ロキ）に対して用いられている動詞も一部あるが，全体としてそれほど何かを特徴づけるようなものは見られない．

次にハールたちだけに用いられて，ギュルヴィ王には用いられていない動詞は以下の10例である（ハール，スリジ，ヤヴンハールの２者以上に対して用いられている場合も１つとして考える）．ENTRY, MEANING, PLACE, (PHRASE) を示す．

# を付けたものは「ギュルヴィの惑わし」においてハールたちに対してだけこの組み合わせが用いられている動詞を示す．

- ætla　考える　GYLFG 47.64.P

  他の主語に対しても用いられている．

- sitja　座っている　GYLFG 2.39.P

  他の多くの主語に対しても用いられている．また，ハールたちは広間の一段高いところに「座って」ギュルヴィ王の相手をしているので「座っている」も特に注目すべき動詞ではない．

- svara　答える　GYLFG 12.4.P

  他の多くの主語に対しても用いられている．また，「答える」はギュルヴィ王がハールたちを訪ねて，世界のことについていろいろ質問をすると言う状況では当然ハールたちにしか用いられてなくても不思議ではない．

- hlæja　笑う　GYLFG 26.11.P　hlæja við

  「ハール」が主語のものが 2 例，ハールたち以外では「チュール (Týr) を除くみんな」が主語のものが 1 例の全部で 3 例見られる．神々に対してのみ用いられている．

- # koma　負ける　GYLFG 44.21.P

  ここでは，vera と組み合わされて受け身表現として用いられている．まったく同じ表現ではないが，vera + láta の受け身表現で「負ける」の意味でロキに対しても用いられており，vera + の受け身表現としての「負ける」は神々に特徴的なものである可能性がある．koma は「来る」の意味で他の主語に対して普通に用いられている．

- vera　受け身　GYLFG 44.21.P

  他の主語に対してごく普通に用いられている．

- vera　出来る　GYLFG 44.13.P　vera til fœrr

  vera búinn 及びそれに類する表現としてはハールたち以外では「ソール，ロキ，シャルヴィ」など神々とその従者に対して「出来る」の意味で用いられている．

- # vænta　思う　GYLFG 44.6.P
- # taka　使う　GYLFG 34.60.P

  「取る」，「捕まえる」では他の主語に対しても多く用いられているがそのほとんどが主語のカテゴリーとして'g' を含む神々に対してである．そのため taka という動詞は「ギュルヴィの惑わし」においては神々に特徴的な動詞と言えるかもしれない．

- # virða　判断する　GYLFG 19.5.P

  他には「重視する」の意味で「アース神」に対して用いられている．この virða も神々に対してのみ用いられていると言える．

このようにギュルヴィ王とハールたちに焦点を当てて調べて見た結果，「ギュルヴィの惑わし」においてハールたちを主語とする動詞には他の神々を主語として取るものがいくつかありスノッリ自身がハールたちを神々として意識していたことがうかがえる．

またギュルヴィ王に用いられていてハールたちに用いられていない動詞は以下の46例である．ENTRY, MEANING, PLACE, (PHRASE) を示す．

# を付けたものはギュルヴィ王に対してだけこの語 (ENTRY) と意味 (MEANING) の組み合わせが用いられている動詞を示す．

- fara　行く　GYLFG 2.6.P
- ganga　ついて行く　GYLFG 2.24.P ganga eptir
- ganga　進む　GYLFG 54.4.P ganga braut
- heita　呼ばれる　GYLFG 20.59.P
- kalla　呼ぶ　GYLFG 13.6.P
- koma　帰る　GYLFG 54.5.P koma heim
- koma　出る　GYLFG 2.44.P koma út
- koma　入る　GYLFG 2.9.P koma inn
- mega　助動詞　GYLFG 2.10.P
- njóta　役に立つ　GYLFG 53.41.P
- sjá　会う　GYLFG 2.23.P
- sjá　上を見る　GYLFG 2.10.P sjá yfir
- sjá　理解する　GYLFG 34.54.P
- skulu　助動詞　GYLFG 2.23.P
- standa　立っている　GYLFG 2.46.V
- vera　完了　GYLFG 19.4.P
- vilja　助動詞　GYLFG 2.43.P

  以上の１７例は他の多数の主語に対して用いられている．
- gefa　与える　GYLFG 1.2.P
- heyra　聞く　GYLFG 19.5.P

  この２例も他の多数の主語に対して用いられているが，S_CATEGORY で'g' を含むもの（神々のカテゴリーに属するもの）が多い．
- beiðast　求める　GYLFG 2.21.P

「頼む」の意味でオージン，ソールなどに対して用いられている．

- bregða　変装する　GYLFG 2.6.P　bregða á sik líki e-s

  「変える，変身する」の意味でロキ，アース神に対して用いられている．

- byrja　出発する　GYLFG 2.5.P　byrja ferð

  「始める」の意味でソールに対して用いられている．

- finna　見つける　GYLFG 34.53.P

  ソール，アース神，ウートガルザ・ロキに対して用いられている．

- fregna　尋ねる　GYLFG 2.46.V

  「聞き知る」の意味でソールに対して用いられている．

- hefja　始める　GYLFG 3.1.P

  「引き上げる」の意味でソールに対して用いられている．

- hugsa　考える　GYLFG 2.3.P

  ソール，フェンリル狼に対して用いられている．

- kunna　知る　GYLFG 42.3.P

  アース神，ブラギ，オージンに対して用いられている．「助動詞」としては他の多数の主語に対して用いられている．

- líta　見る　GYLFG 54.2.P　líta út

  フレイ，ソール，ウートガルザ・ロキに対して用いられている．

- lítast　思われる　GYLFG 44.12.P

  フェンリル狼，ウートガルザ・ロキ，ソールに対して用いられている．

- nefnast　名乗る　GYLFG 2.20.P

  オージン，女巨人に対して用いられている．

- nema　得る　GYLFG 53.42.P

  「つかむ」の意味でソールに，「止まる」の意味で4頭の牛に対して用いられている．

- ráða　支配する　GYLFG 1.1.P

  フレイ，ニョルズ，オージンに対して用いられている．

- reyna　試す　GYLFG 34.58.P

  フェンリル狼，ロキ，ソール他に対して用いられている．

- sjást　見回す　GYLFG 54.2.P　sjást um

  「恐れる」の意味でオージンに対して用いられている．

- skilja　理解する　GYLFG 34.59.P

  ソール，クヴァシル (Kvasir) に対して用いられている．「約束する」の意味でゲルズに対して用いられている．

- verða　b e　GYLFG 19.4.P

  「鎖」に対して用いられている．また他の意味で他の多数の主語に対して用いられている．

- vera　助動詞　GYLFG 44.25.P　vera at

  ソールに対して用いられている．

- þykkja　思う　GYLFG 2.28.P

  「思われる」の意味で他の主語に対しても多数用いられている．

- # dylja　隠す　GYLFG 19.7.P
- # dyljast　変装する　GYLFG 2.6.P
- # lítast　見渡す　GYLFG 2.27.P lítast um

  「見回る」の意味でウートガルザ・ロキに対して用いられている．

- # marka　理解する　GYLFG 22.7.P
- # sœkja　得る　GYLFG 2.21.P　sœkja til

  他の意味では他の多数の主語に対して用いられている．

- # undrast　驚く　GYLFG 2.2.P
- # vera　なる　GYLFG 2.45.P
- # þegja　黙る　GYLFG 44.25.P

ギュルヴィ王に用いられていてハールたちに対して用いられていない動詞には一般的に他の多数の主語に対して用いられている動詞が多いが，神々（オージン，ソールフレイなど）やその他特殊な能力をもつ存在（ウートガルザ・ロキ，フェンリル狼）などに対して用いられているものも多く，スノッリがギュルヴィ王もある程度特別な存在としてとらえていたことがうかがえる．つまりスノッリはギュルヴィ王，ハールたちに対して両者を区別するような動詞の用い方はしておらず，ギュルヴィ王，ハールたちの両方に対して神々や特殊な存在と同じ動詞を用いているのである．

### 3.3.2　神々が再話の形で語る物語での動詞の用法と，それの補足説明として加えている「エッダ詩集」断片での動詞の用法に違いが見られるのか．

「ギュルヴィの惑わし」でスノッリが韻文を引用している場面は全部で55箇所ある（間に一行でも散文部分があれば別の引用とする）．動詞の数で言うと「ギュルヴィの惑わし」に出て来る全3945例中，韻

文部分で用いられているものは 289 例である．それらを以下のように分類した．

同じ主語との組み合わせにおいて

#　散文では異なる動詞が使われている　31 例

◎　韻文と散文とで同じ動詞が使われている（同じ章において）　53 例

○　韻文と散文とで同じ動詞が使われている（別の章において）　11 例

×　韻文での話が散文では言い換えられていない　100 例

（別の章または韻文部分で類似の表現が見られる場合は () 内にその場所を示した）

△　散文に類似の表現が見られる　94 例

（S_ REAL, ENTRY, MEANING が異なる，但し S_ REAL が異なる場合は S_ CATEGORY が類似の場合のみ）

個々の例については資料参照．

なお助動詞，受け身，完了については散文で同じものが使われているが，特徴的とは言えないので×に分類した．また# を付けたものの中でスノッリが散文で書き換えている動詞が固有の場合（本論文で分析対象とした全ての動詞の中で語と意味の組み合わせが他に見られない場合）に＊を付けた．

#（散文では異なる動詞が使われている）を付けたもの（31 例）は，スノッリが別の動詞を用いて言い換えていると考えられる．# の例について意味/ 主語だけを抜き出して見ると以下のようになる．

尋ねる/ ギュルヴィ王

流れ出る/ 毒の雫

横たわる/ ベルゲルミル

赤く染める/ フェンリルの一族の一人

（黒く）なる/ 太陽の光, 風

つくる/ モートソグニル, ドゥーリン（侏儒）

熱くなる/ 聖なる川

来る/ 露

住む/ シャツィ

選ぶ/ フレイヤ

進む/ 何

進む/ グナー

ある/ 大地, 天

生まれる/ 巨人

つくる/ 邪悪な雲

生む/ 太陽

つくる/ x

行く/ ソール

いる/ 多くの蛇

持つ/ バルドル

住む/ スカジ

飛ぶ/ 何

飛ぶ/ グナー

満足させる/ オージン

戦う/ エインヘリャル
集まる/ アース神
与える/ 誰が
集まる/ アース神
座っている/ エインヘリャル
相談する/ 聖なる神々（アース神）
殺す/ ソール

オージン，ソールなどの神々や巨人，侏儒などの特殊な存在が主語となっている例が多く，それらの主語にとって特徴的と思われる事例を描写しているものもあるためスノッリが敢えて韻文とは異なる動詞を用いたとも考えられるが，一般的な表現も見られるため，この31例だけからスノッリが意図的に異なる動詞を用いたとは断言出来ない．

散文で書き換えられている動詞のうち9例に＊を付けたものである．それらの主語は神々，侏儒，巨人であり，スノッリがそれら普通の人間でない存在に対して特別な意識を持って意図的に書き換えた，すなわちスノッリがそれらの動詞をその主語に対する固有の動詞としてわざわざ用いた可能性はあると思われる．以下に＊を付けたものについてあげる．

左から分類, ENTRY, MEANING, S_ REAL, O_ REAL, PLACE, (PHRASE) を示す.

- # verða　生まれる　巨人　x　GYLFG 5.37.V　verða ór
  - ＊ kvikna　生命が生まれる　GYLFG 5. 18.P　(verða なる GYLFG 5.19)
- # leggja　横たわる　ベルゲルミル　x　GYLFG 7.14.V
  - ＊ fara upp　乗る　GYLFG 7.6.P
- # skepja　つくる　x　侏儒の人々　GYLFG 14.32.V
  - ＊ kvikna　生まれる　GYLFG 14.20.P
- # gera　つくる　モートソグニル，ドゥーリン（侏儒）　多くの人の形をしたもの（侏儒）GYLFG 14.36.V
  - ＊ kvikna　生まれる　GYLFG 14.20.P
  - ＊ skipast 変身する　GYLFG 14.22.P
  - ＊ taka kviknan 生命を得る　GYLFG 14.22.P
- # ganga　集まる　アース神　x　GYLFG 42.63.V
  - ＊ setjast　GYLFG 42.33.P
- # gætast　相談する　聖なる神々（アース神）　以下の節　GYLFG 42.66.V　gætast um e-t

＊ ganga á tal 話し合う　GYLFG 42.12.P

・ # vera á þingi　集まる　アース神　x　GYLFG 51.92.V

＊ setjast　GYLFG 42.33.P

「ギュルヴィの惑わし」に登場する北欧神話において重要な存在である神々，巨人，英雄，ドヴェルグ（侏儒），巫女などについての個別の分析は第 5,6,7 章において行う．

## 3.4　「ユングリンガ・サガ」

北欧神話の神々と同名のオージン，ニョルズ，フレイなどに関わる動詞にはほかの王たちとは異なる特徴があるのかどうかについて調べた．

「ユングリンガ・サガ」内での ENTRY + MEANING の組み合わせが固有の動詞のうちで神々と同じ名前を持つ王たちを主語とするものと，他の王たちを主語とするものを比べてみる．

神々と同じ名前を持つ王たちを主語とする固有の動詞（59 例）と他の王を主語とする固有の動詞（208 例）を比べてみると一部「魔法をかける」，「槍の跡をつける」，「オージンの特徴をつける」などの神々特有と思われる動詞が前者に見られるものの，全体としては両者を厳然区別していると思われるほどの違いは見られなかった．個別の例は資料参照．

## 3.5　作品（群）別分析まとめ

第 3.3 節の「ギュルヴィの惑わし」については，初めにスノッリが質問する側のギュルヴィ王と答える側のハールたちとで動詞を意識して使い分けていたかを調べた．その結果，両者の間に特に差は無く，両者とも神々などと同じように特殊な存在としてスノッリが考えていたのではないかと思われる例がいくつか見られた．

次に「ギュルヴィの惑わし」において韻文と同じ内容を散文で語りなおしている例が 289 例あり，そのうち 31 例において韻文と散文とで異なる動詞が用いられていた．ただその 31 例については主語，意味において特に注目に値するものはなかった．しかし散文部分で語りなおされている動詞のうち 9 例が「ギュルヴィの惑わし」に固有の表現（ENTRY と MEANING の組み合わせが他には出ていない）であり，それらの主語が神々，侏儒，巨人という特殊な存在であるということから，スノッリが敢えてそれらの動詞を選んで使っていた可能性はあると思われる．

第 3.4 節の「ユングリンガ・サガ」については北欧神話の神々と同名のオージン，ニョルズ，フレイなどに関わる動詞にはほかの王たちとは異なる特徴があるのかどうか，固有の動詞（他の存在を主語として取らない動詞）について両グループのデータを分析したが，特に大きな違いは見られなかった．

# 第4章　個別分析の方法

これから個別の動詞について主語毎に個別に分析する方法について説明する．

## 4.1　データ抽出

extract

以下の３つのレベルにおいてデータを抽出し，それに対して考察を加える．

- 語 (ENTRY) がその主語に対してのみ用いられている場合（その作品（群）において固有）．
  - 同じ意味 (MEANING) が異なる語 (ENTRY) でその主語に対して用いられている可能性はある．その主語を特徴づける動詞である可能性が一番高い．
- 意味 (MEANING) がその主語に対してのみ用いられている場合（その作品（群）において固有）．語 (ENTRY) が固有の場合は語 (ENTRY) のところで扱う．
  - 同じ語 (ENTRY) が異なる意味 (MEANING) でその主語に対して用いられている可能性はある．
  - その意味 (MEANING) がその主語の特徴と密接に関係していれば，その主語を特徴づける動詞である可能性がある．
- 語 (ENTRY), 意味 (MEANING) の組み合わせがその主語に対してのみ用いられている場合（その作品（群）において固有）．語 (ENTRY), 意味 (MEANING) がそれぞれ固有の場合は語 (ENTRY), 意味 (MEANING) のところで扱う．
  - 同じ語 (ENTRY), 同じ意味 (MEANING) がそれぞれ異なる意味 (MEANING), 語 (ENTRY) でその主語に対して用いられている可能性はある．
  - その意味 (MEANING) がその主語の特徴と密接に関係していれば，その主語を特徴づける動詞である可能性がある．

それぞれの場合において，文脈から判断して重要な役割を果たしていれば，その主語を特徴づける動詞と言える．

なお，個々の特徴や文脈での役割などを明確に判断するため，神々や英雄などがそれぞれ単独で主語となっている例について分析を行った．

## 4.2　分析基準

ひとつの ENTRY につけられている MEANING をいくつかにグループわけし，そのグループが固有かどうか判断する．

上で述べた 3 つのレベル（語，意味，語＋意味）で抽出した固有の動詞について以下の点から考察を加える．

- 作品上，文脈上重要な場面で用いられている．
- その主語の特徴とされることに関っている．

どちらかを満たしている場合．

⟶ キーワードとして用いられている可能性がある（個々の分析において# をつける）．

# を付けたものについて次の 4 つに分類する．

I　ENTRY も MEANING も両方とも固有

II　ENTRY だけが固有

III　MEANING だけが固有

IV　ENTRY + MEANING の組み合わせが固有

(I がキーワードとして用いられている可能性が一番高い)．

第 5, 6, 7 章における分析は以下のように記述する．

先ず神々，英雄など分析対象となるものの名前，データ総数，その分析対象について特徴とされていること，作品（群）別の個別データ分析の順に記述する．個別のデータ分析においてはその分析対象の名前，分析対象作品（群），データ数，分析区分（ENTRY, MEANING, ENTRY + MEANING），固有のデータ数の順に示す．なお MEANING においては ENTRY で，ENTRY + MEANING においては ENTRY または MEANING ですでに分析されているものは重複するので数えない．

## 4.3　個別のデータ分析における表記，記号について

- ENTRY では ENTRY, MEANING, PLACE, (PHRASE)
- MEANING では MEANING, ENTRY(PHRASE), PLACE
- ENTRY + MEANING では ENTRY, MEANING, PLACE, (PHRASE)

を示し，その後にコメントを加える．

# は先に説明したように，単にそこにしか用いられていないだけでなく，その主語の特徴や文脈から判断してキーワードとして用いられている可能性のあるものに付け，I から IV の分類を添えた．# を付け

た動詞の個別のデータについては資料参照.

当該の動詞について，その主語の特徴とされていることと関わりがあるのかどうか，文脈での用いられ方などから判断して，その主語を特徴づけている動詞かどうかについて述べる．なお韻文中で用いられているものについては韻律の影響についても考慮した.

MEANING, ENTRY + MEANING において＊を付けたものはその ENTRY と結びつく MEANING を大きくいくつかにグループ分類したものであり，個々の MEANING としては他にはないためその主語に固有の動詞としてチェックされているが類似の意味が存在するため，ENTRY + MEANING においては分析対象からは外したことを意味する．グループ分類は MEANING 訳語の上での類似性を判断したもので，以下のような例の場合類似性があると考え，意味においての固有性が薄いと考え分析対象からは外した．M_ CATEGORY が異なる場合もある.

例：　黙る 10　黙っている 31

減らす 12　減る 10　小さくなる 10

企む 29　決める 12　考える 29　思う 31　望む 29

ENTRY + MEANING の分析において上で説明した＊の付いているものについては ENTRY, MEANING のみを示す.

# 第5章　神々を主語とする動詞の個別分析

以下の神話についての主要参考文献4冊全てにおいて独立した神としての記述があり，かつ今回の動詞データベースにおいて主語としての頻度上位に入っている神々について個別に分析を行った．

◇ *Myth and Religion of the Norse.*, E.O.G. Turville-Petre

◇ *Gods and Myths of Northern Europe.*, H.R. Ellis Davidson

◇ *Nordiske Guder og Helte.*, Anders Bæksted

◇ 『北欧神話』（菅原邦城）

**オージン (Óðinn) 740 例**

- 北欧神話の主神
- 神々の父
- 戦いの神
- 英雄・戦士の庇護者
  - 戦場にヴァルキュリャを送り，勝敗を決める
- 死の神
  - 戦場で倒れた英雄をエインヘリャルとしてヴァルホル (Valhǫll) に迎え，世界の滅亡ラグナロクに備える．戦闘で倒れること，戦死は英雄たちにとって栄誉であった．狼ゲリ (Geri)，フレキ (Freki) を飼っている．
- 詩芸・知恵・ルーンの神
  - 自らを自らに捧げてルーンを獲得
  - ミーミル (Mímir) の泉に片目を担保として差し出し，秘められた知識を得る（片目・隻眼の神）
  - 巨人スットゥング (Suttungr) から詩芸の蜜酒を盗む
  - ワタリガラスのフギン (Huginn)，ムニン (Muninn) を送り出し，世界の情報を集める
- 魔術・呪術の神
  - 変身する
  - セイズ (seiðr)（呪術）を行う
  - ルーン，ガルドル (galdr)（呪歌）を操る

- 自分の庇護する戦士をベルセルク (berserkr) の激情（戦闘での狂気の状態，非常に強い）状態にする

- その他
  - ８本足の馬スレイプニル (Sleipnir)
  - 槍グングニル (Gungnir)
  - 腕輪ドラウプニル (Draupnir)
  - 館ヴァルホル
  - 妻フリッグ

**オージン（神話詩）(476)**

- ENTRY(6)

・ # II　unda　傷つける　HAV 138.4.VG

HAV においてオージンが九日九晩の間飲まず食わず，ルーンを獲得するために槍に「傷つけられる」場面で用いられている．オージンは Dǫrruðr, Geirlǫðnir（どちらも「槍の神」）という別称 (heiti) を持ち[注1]，その「槍」で，またオージンと強く結びつけられるルーンを獲得するまさにその場面で用いられていることから，この動詞はオージンを特徴づけるものと言えよう．

・ # II　fyrirgera　惑わす　GRM A.PG

GRM の冒頭の Frá sonom Hrauðungs konungs（フラウズング王の息子について）において，オージンの妻フリッグ が自分の侍女フッラ (Fulla) を送ってゲイロズ (Geirrøðr) に注意を与える場面で登場する．どうして注意を与える状況になったのかと言うと，オージンがフラウズング (Hrauðung) 王の次男ゲイロズを，オージンの妻フリッグ が長男アグナル (Agnarr) を養い育てていた．その後アグナル，ゲイロズは国に戻るが，その際ゲイロズはオージンから授けられた計略によりアグナルを追いやり，王位に就く．その後王ゲイロズの悪い噂を聞いたオージンとフリッグ は，それが正しいのかどうか賭けをする．そしてオージンはグリームニルと名乗って王の元へ行きゲイロズを試すのであるが，フリッグ はその前にゲイロズに対してグリームニルが彼を「惑わす」ことのないように注意を与えるのである．自らの正体を明らかにせず，「惑わす」ことはオージンの特徴的な行動の一つであり，この fyrirgera もそういう文脈の中で，オージンにのみ用いられていることから注目に値する動詞である．

---

注1 Falk, p.6, p.12

・ # I　　frævast　　豊かになる　　HAV 141.1.VG

HAV においてオージンが九日九晩の間飲まず食わず，槍に傷つき，嵐にさらされながら自分を自分自身に捧げてルーン（文字，秘密の知恵）を獲得した後の節に出てくる動詞である．ルーンはこの HAV に見られる話から「知恵」の神オージンのものとされており，それを獲得して「豊かになる」のはオージンをおいて他にはありえない．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　fjǫtra　　縛る　　HAV 13.5.VG

HAV において旅人に対して様々な注意を与える部分に出てくるが，この fjǫtra に対して初めて ek（代名詞一人称単数）が用いられている．この fjǫtra の登場する文は，グンロズ (Gunnlǫð)（HAV の後半部分や，スノッリの『エッダ』においてオージンが詩の蜜酒を盗む挿話に登場する女巨人）との関わりを示しているため，ek は明らかにオージンであると思われる．この作品の語り手がオージンであることを明示する最初の文にこの fjǫtra は用いられているのである．韻律の影響がうかがえる．

・ # I　　ferja　　船で渡す　　HRBL 3.1.VG/ HRBL 55.2.VG

HRBL に２例見られる．どちらの例もこの動詞を使っているのは北欧神話世界の守り手とされるソールである．この２つの ferja の間でオージン，ソールはお互いに自慢話を交えながらお互いを罵り続ける．初めの ferja は作品の初めの部分で，ソールが遠征からの帰路川にさしかかり，そこでハールバルズという名で渡し守に扮しているオージンに対して，ソールは「お礼はするから「船で渡して」くれ」と丁寧に頼む場面に登場し，２つ目の ferja では作品の最後の方で「他を回るから道を教えろ」とあきらめた後で「お前は全く「船で渡す」気がないな」と叫ぶ場面に出て来る．この作品では最後までソールは相手がオージンであることに気づかないことになっているが，この２つの ferja はどちらの場合もソールがオージンより弱い立場にある場面で用いられている．初めの例では川を一人では渡れないために頼んでおり，２つ目の例ではさんざん罵られて怒り狂っているが，実際にその力を相手に向けて叩きのめすことが出来ないため川を渡ることをあきらめざるをえない．従ってこの作品において ferja はオージンとソールの力関係を示す動詞であるとは言えないだろうか．HRBL 3.1 の方は韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　þylja　　話す　　HAV 111.1.VG

HAV において吟遊詩人ロッドファーヴニ (Loddfáfnir) に対してオージンが様々な助言を与える場面 (Loddfáfnismál) の初めに出てくる動詞．単語としては同じ節に出てくるþulr（予言者，賢人）から派生

しており，「呪文や隠された知識をつぶやく」という意味を含む[注2]．魔術師，呪術師の側面を持つオージンならではの動詞である．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(15)

・ # III　論争する　＊　mæla e-n orðum　VM 4.6.VG

VM の冒頭において，賢い巨人ヴァフスルーズニルに古代の知恵について勝負を挑みに行くと言うオージンに対してその妻フリッグ が「あなた (オージン) が巨人と「論争する」時はいつでも，知恵があなたを助けるでしょう」と述べる部分に出てくる．mæla は単独では基本的に何かを発言する際に用いられる動詞で，「言う」，「話す」といった訳が多く見られ，オージンの他に様々な主語と結びついている．しかし，この「論争する」(mæla e-n orðum) のフレーズは他では全く見られない．しかも上で述べたようにこれから巨人と古代の知恵について勝負しに行く際に用いられていると言うことは「知恵の神」オージンを特徴づける意味であると言えよう．また「言い争う」という類似の意味もいくつか出てくるが，それらは単に「相手を罵る」，「口論する」というものであり，「論争」するものではない．

・ # III　味わう　＊　bergja　LS 9.4.VG

LS でロキが宴会をしているオージンに対して「２人に対して出されたものでなければビールを「味わう」つもりはないと言ったではないか」と非難する場面で用いられている．bergja はこの他には GK-II に出てくる．そこでは「食べる」の意味で用いられている．bergja には基本的に「食べる」，「飲む」という意味があり，この LS でオージンを主語としている bergja も「飲む」と訳すことも可能である．その場合「食べる」，「飲む」という意味は他にも数多く見られ，あまり特徴的な意味とは言えない．しかし，bergja 自体わずか２例しか出ておらず，もう一例も「死に掛けの戦士」が主語となっており，「死」の神として英雄の「死」を司るオージンと何か関係があるのかもしれない．

・ # III　魔法を使う　＊　síða　LS 24.1.VG

LS でロキがオージンに「人はお前 (オージン) がサームス島で「魔法を使って」いたと言っている（中略）これは女のすることだ」と罵っている．オージンは「魔術，呪術」の神として知られており，特に女性と結びつけられるセイズ（呪術）との関係が深いとされ，この「魔法を使う」はオージンに特徴的な動詞と言える．ちなみに，この他に MEANING に「魔法」という言葉の出てくる例はいくつかあるが，主語

注2 Evans, pp. 123-124

の特定できるものではオージンを除いて全て女性が主語になっている．このことは先に述べたセイズ（呪術）と女性との関係を裏付けているものと思われる．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　忠告する　＊　ráða
HAV 112.1/ 113.1/ 115.1/ 116.1/ 117.1/ 119.1/ 120.1/ 121.1/ 122.1/ 125.1/ 126.1/ 127.1/ 128.1/ 129.1/ 130.1/ 131.1/ 132.1/ 134.1/ 135.1/ 137.1.VG

＊ Ráðomk þér, Loddfáfnir, at/ en þú ráðnemir,
というセットフレーズで用いられている．

HAV の Loddfáfnismál と呼ばれる部分に用いられている．そこでは，先に ENTRY のところで述べたþylja（呪文や隠された知識を「話す」p. 70 参照）の含まれる節に続いて，「忠告する」で始まる同じ形式の節が２０節語られており，吟遊詩人ロッドファーヴニに対してオージンが様々な「忠告」を与えている．知恵の神オージンにふさわしい表現である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　危険にさらす　hætta e-m til　HAV 106.6.VG

HAV で Gunnlǫð をだまして詩芸の蜜酒を得る際に「オージンが自分の頭を「危険にさらす」」という場面で用いられている．詩芸はオージンの能力の代表的なものの一つであり，この動詞はそれを獲得するための行為を表しており，オージンに特徴的な動詞と言える．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　栄える　hafast　HAV 141.3.VG

HAV においてルーンを獲得した後，先に ENTRY のところで見た frævast（「豊かになる」）に続いて「賢くなり，育ち，「栄えた」」とオージン自身が語っている．ルーンや知恵との結びつきを表している．

・ # III　もみ消す　bœta　HAV 152.6.VG

HAV においてオージンがルーン（魔法の呪文）についてその効果，力について語る部分で第８番目の呪文について語る際に用いられている．「人の子の間に憎しみが生まれたら，それを直ちに「もみ消す」ことが出来る」と語っている．憎しみを「もみ消す」ことは，憎しみを生み出す邪悪な存在として Bǫlverkr（邪悪を行う者），Hvatmóðr（争いに駆り立てる者），Ófnir（争いに駆り立てる者），Skollvaldr（裏切りを引き起こす者）といった名前で呼ばれる[注3] オージンの能力の一つであろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　ぶら下がる　＊　hanga　HAV 138.1.VG

注3 Falk, p.5, p.19, p.23, p.26

HAV において，オージンがルーンを獲得するために自分を自分自身に捧げる際に，「ぶら下がった」と語られている．この出来事からオージンには Hangaguð, Hngatýr（どちらも吊るされた者の神）Hangi（吊るされた者）[注4] の名前がつけられている．オージンのルーン，魔術との最初の関わりを表す重要な動詞といえる．

・ 道に迷う　verða villir vega　HAV 47.3.VG

HAV において友人の大切さを説く部分で用いられ，オージン自身が「昔若かった頃ひとりぼっちでさまよい，「道に迷った」が，人に出会って嬉しかった．人の喜びは人である」と言っている．韻律の影響がうかがえる．

・ 色をつける　*　fá　HAV 80.5.VG

HAV の前半の格言詩の部分に突然出てくるルーンについての節で用いられている．この節自体は全体の文脈から外れており，多少意味不明であるが，この節までの格言をまとめるものであるかもしれない[注5]．韻律の影響がうかがえる．

・ 疑わしい　vera ifi á e-m　HAV 108.1.VG

HAV においてオージンが女巨人グンロズをだまして詩芸の蜜酒を得たと語る場面に出てくる．「もしグンロズが助けてくれなければ，巨人の館から出られたか「疑わしい」」とオージン自身が語っている．韻律の影響がうかがえる．

・ 機嫌がいい　sitja í hugum　HDL 2.2.VG

Hyndllulióð の最初の部分で女神フレイヤ ( が女巨人ヒュンドラを起こして，「オージンに「機嫌がいい」状態でいてもらうことを願う」場面で出てくる．

・ 楽しませる　*　gleðja　HRBL 30.5.VG

HRBL でオージンが「(ソールが東の方で巨人と戦っているとき)，オージン自身も東にて女性を「楽しませた」」と語っている．韻律の影響がうかがえる．

・ 引き返す　*　hverfa aptr　HAV 99.1.VG

---

注4 Falk, p.15
注5 Evans, p.6, pp.113-114

HAV においてオージンが恋愛について語り，その具体例として巨人ビッリング (Billingr) の娘を誘惑する際に，初めは拒まれたので「引き返す」ことになる．

・ とどめておく　＊　halda　HRBL 32.2.VG

HRBL において，「もしソールの助けがあれば，（先に「楽しませる」のところで述べた）女性を「とどめておく」ことが出来たのに」と語る場面で用いられている．

- ENTRY + MEANING(22)

・ # IV　heyja　持つ　HRBL 30.4.VG

渡し守に変装しているオージンがソールに対していろいろ自慢する中で，女性たちと密会を「持った」と述べている．ソールが巨人との戦いという硬い話をしているのに対して女性との関わりという柔らかい話題を持ち出している．heyja には「引き起こす」という意味もあるがそれは全て（3例とも）英雄に対して用いられている．何か集まりや戦いを「持つ」という意味では神々に特徴的な動詞なのかも知れない．

・ # IV　glepja　妨げる　HRBL 52.3.VG

ソールが「よくも引き留めて遅らせてくれたな」とオージンの変装している渡し守に叫んだのに対して「ソールの旅を「妨げよう」なんて考えたことはない」と述べている．それまでにすでにかなりソールに対してからかってきているオージンがさらに立場の優位性（川を渡るための主導権を握っている）ことから述べたものであり，かつ先に ferja のところでも述べたようにオージンとソールとの力関係を暗示しているものと思われる．

・ # IV　fylgja　戦う　HRBL 24.2.VG　fylgja vígom

ソールと戦いの自慢をしている場面で，渡し守に変装しているオージンが「Valland（ヴァッランド）にいて「戦った」」と述べている．Valland を val（戦闘での死者）の land（土地，国）と考えれば，「戦い，死の神」としてのオージンの特徴と結びつく．vígom 「戦闘」が韻律の支配を受けている．fylgja は「従う」の意味で他の場所でも他の主語にも用いられている．

・ # IV　drepa　操る　LS 24.3.VG　drepa á e-t

ロキがオージンに対して「巫女のように魔法を「操って」いた」と罵っている．「魔法を「操る」」(drepa á vétt) はオージンにとっては当然の行為であり，特徴的なものと考えられる．drepa は他の例ではほとんど「打つ，殺す」で用いられている．vétt が韻律の支配を受けている．

・ # IV　stǫðva　止める　HAV 150.5.VG

オージンが自らの魔術についての知識を述べる場面で，５番目の魔法の歌として矢がオージンが「止める」ことが出来ないほど早くは飛んでこないと言っている．オージンの魔力を表しており，特徴的と考えられる．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　leita　つくる　HAV 141.5.VG/ HAV 141.7.VG

オージンが９日９晩自らに自らを捧げ木に吊り下げられた後ルーンの知恵を獲得する．そして言葉と行為を「つくった」と述べている．言葉，行為自体が自らを生み出すともとれるが，「ルーン，魔術，詩芸の神」としてのオージンに特徴的に用いられている．leita をつづけることでの韻律的効果も見られる．

・ vera　旅する　VM 4.3.VG　vera á sinnom

巨人ヴァフスルーズニルのところへ知恵比べの旅に出るオージンにフリッグ が幸運を願って無事「旅する」ようにと言う．vera の熟語も「旅する」もともにオージンを含めさまざまな主語にさまざまな意味，動詞で用いられている．同じ節で fara 「旅する」が用いられているため vara á sinnom を用いたものと思われる．

・ fara　座る　VM 9.3.VG　fara í sess

巨人ヴァフスルーズニルのもとに知恵比べに来たオージンに対してヴァフスルーズニルが「座れ」と言っている．sess に韻律の影響がうかがえる．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * yppa | 顔を上げる | * verpa | かける |
| * véla | だまし取る | * svikja | だまし取る |
| * snúa | 変える | * kenna | 知らせる |
| * hverfa | 変える | * hljóta | 受ける |
| * halda | 繋ぐ | * forða | 守る |
| * bjóða | もたらす | * bera | 持ち上げる |
| * auka | もたらす | *þurfa | 求める |

**オージン（英雄詩）(37)**

- ENTRY(0)
- MEANING(1)

・ # III　災いを引き起こす　*　bera sakrúnar　HH-II 34.8.VH

父ホグニを殺されたダーグ (Dagr) がその復讐に英雄ヘルギを殺す．それに対してヘルギの妻であり，ダーグの姉，ホグニの娘シグルーンがダーグに不幸を願う．それに反論する形でダーグがオージンが親族の間に「災いを引き起こし」たのだと言う．オージンはお気に入りの英雄を自分のもとに集め，最後のラグナロクにおいて巨人と戦うエインヘリャルにする．このこと自体は英雄に取って栄誉なことであるが，回りには復讐，憎しみが残り，災いの種となる．このような英雄の生殺与奪の権利はオージンに特徴的なことであり，そこから生じる災いがオージンに帰されても当然である．sakrúnar に韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(6)

・ draga　取り出す　RM C.PH　draga e-t fram

侏儒であるオトゥル (Otr) を殺した償いにその皮を黄金で覆うことになった．全てを黄金で覆ったと思われたときに一ヶ所黄金でない部分があったので，オージンがアンドヴァリ (Andvari) の腕輪を「取り出し」そこを覆った．draga は「引く」などの意味があり，この組み合わせ draga e-t fram もそれほど特徴的とは思われない．

* ljá　与える　* lúka　囲む
* hyggja　考え出す　* hverfa　去る
* hafa　かぶる

**オージン（「ギュルヴィの惑わし」）(102)**

- ENTRY(1)

・ # II　stjórna　支配する　GYLFG 3.11.P

「ギュルヴィの惑わし」においてギュルヴィ王がガングレリと名乗り，ハールに古代の王 (オージン) がどんな力を持っているのかを尋ねたのに対して，ハールがオージンは彼の全ての国 (ríki sínu) を stjórna「支配する」と答えている．「支配する」という MEANING で一番よく用いられている ráða がその直後に出ており，全ての部分 (ǫllum hlutum) を「支配する」とされている．Holtsmark はこの ríki sínu を himinríki（天上の支配権）と結びつけている[注6]．もしそうであるなら一般的な ráða の前に，この stjórna

[注6] Holtsmark 1964, p. 23

が用いられていることと，今回分析した範囲ではオージン以外には用いられていないことから，スノッリが特にオージンとの結びつきを考慮して用いたと考えられるのではないだろうか.

- MEANING(3)

・ # III　担保に入れる　leggja e-t at veði　GYLFG 15.18.P

「ギュルヴィの惑わし」においてギュルヴィ王が神々の聖なる場所を尋ねたのに対して，ヤヴンハールが神々の世界を解説する．その際にミーミルの泉にオージンが片方の目を「担保に入れ」てその泉から知恵の水を飲むと語られる．その話の内容を確認するために VSP の一節 (VSP 28) が引用され，そこでも veði（担保）という語が出てくる．leggja 自体はごく一般的に用いられている動詞であるが，veði との組み合わせはここだけである．知恵の神とされるオージンにとってミーミルの泉は非常に重要なものであり，片目を「担保に入れ」てでも飲む必要のあるものであった．スノッリもそれを承知していたため VSP の引用だけでなく，本文にもこの表現を用いたのではないだろうか.

・ 受け止める　*　bera　GYLFG 49.45.P

「ギュルヴィの惑わし」において Baldur の死に際してその痛手をオージンが最も厳しく「受け止め」た．bera もそれ自体はごく一般的な動詞であるが，バルドルの死は神々の世界に起こった事件のなかでも最大級のものであり，バルドルの父であり，主神であるオージンが最も激しく「受けとめる」のは当然のことである.

・ （助言を）受ける　*　taka ráð　GYLFG 51.55.P

「ギュルヴィの惑わし」においてギュルヴィ王がラグナロクについて尋ねるのに対してハールが答える場面で，オージンがミーミルの泉に出向き，そこでミーミルから「(助言を）受ける」と描かれている．「受ける」，taka は他にも一般的に見られるため，「(助言を）受ける」自体でオージンを特徴づけているとは言いにくいが，先に述べたような重要な場面に用いられている．「知の神」オージンとミーミルとの関係を意識したものかもしれない.

- ENTRY + MEANING(4)

・ # IV　skipa　連れて来る　GYLFG 20.20.P

ギュルヴィ王の質問に対して神々について答える中で「オージンが戦場で倒れたものをヴァルホルに「連れて来る」ため Valfǫðr（戦死者の父）と呼ばれている」と述べられている．この行為はオージンに特徴的な行為である．

・ fá　用意する　GYLFG 38.3.P　fá e-m at e-m

ギュルヴィ王が「戦場で倒れたものに食事の時に何を「用意する」のか」という質問をしている．fá には「与える」という意味があるので，この用法がオージンに固有のものとは言えない．

＊stefna　立ち向かう　＊ríða　乗って進む

**オージン（「ユングリンガ・サガ」）(125)**

- ENTRY(6)

・ # II　vitrast　現れる　YS 9.7.P

「ユングリンガ・サガ」に登場するオージンはスウェーデン王家の伝説上の始祖とされており，神と英雄の両要素を併せ持った存在である．そのオージンが死んだ後もスウェーデン人たちはその偉大な力を信じて大きな戦いの前にはオージンが vitrast 「現れる」と考えている．オージンが死ぬ際にも自分自身で Goðheimar （神々の国）へ向かうと述べられており，またスウェーデン人たちもオージンが古代のアースガルズ (Ásgarðr) へ行き，そこで永遠の命を得ると考えていた．このようにオージンがほとんど神のようにみなされている状況で，神話世界の戦いの神オージンと同様に戦いに関わって vitrast 「現れる」ことは大いに意味があり，そこにしかこの vitrast が用いられていないことは，この動詞がオージンを特徴づける働きをしている可能性を示している．

・ # I　tígna　尊敬する　YS 6.7.P

オージンの能力についての章において「どうしてオージンはそんなにも tígna「尊敬」されるのか」と述べられている．「ユングリンガ・サガ」において王家の始祖であり，神に限りなく近いオージンにのみ用いられている．他の作品（群）に見られないのは，「ユングリンガ・サガ」においては人間が作品の中心であり，神話的人間ではなく現実の人間から神に対する描写として tígna が用いられたのではないだろうか．

・ # I　smyrja　塗り込む　YS 4.19.P

オージンたちとヴァンと呼ばれる一族とが戦い，疲れきった後に和平を結び，人質交換する．その際にオージンたちは指導者にふさわしいヘーニル (Hœnir) に賢者ミーミルをつけて送った．しかし，ヘーニル

はミーミルがいないと何も決められなかったのでヴァンたちはオージンたちにだまされたと思い，ミーミルの首を切って送り返した．オージンはそのミーミルの首に腐らないように薬草を smyrja「塗り込み」，魔法をかけてその首がオージンに秘密の知識を語るようにした．神としてのオージンは魔術，知恵と結びつけられているため，ここでの用法も特徴的と言える．

・ # I　magna　魔法をかける　YS 4.20.P

先に述べた smyrja と同じ場面で，ミーミルの首に秘密の知識を語らせるために magna「魔法をかける」．smyrja, magna ともに神としてのオージンの力である魔術に関わっており，こういう魔術に関しての作業を描写する動詞が「ユングリンガ・サガ」のオージンに用いられていることは，これらの動詞に「ユングリンガ・サガ」のオージンに神的要素のあることを示す働きがあるのではないだろうか．

・ # II　sløkkva　消す　YS 7.5.P

これもオージンの特殊な力について述べている章に出てくる．オージンは言葉によって炎を sløkkva「消す」ことが出来る．これも先に述べたように神としてのオージンの魔術的要素と関わっており，「ユングリンガ・サガ」のオージンを神のように描くために用いられたのではないだろうか．

・ # I　eigna　ふさわしくする　YS 9.3.P

オージンが病気で死ぬ間際に槍で体に傷をつけ，武器に倒れたものに eigna「(神オージンにとって) ふさわしく」する．これは英雄，王たちにとって病で死ぬことは決して名誉なことではなく，むしろ不名誉であること示している場面である．また英雄，王たちが武器で倒れた場合は神オージンのもとでエインヘリャルとして戦士として世界の滅亡に備えるという，最高の栄養が与えられる可能性がある．これらのことから「ユングリンガ・サガ」のオージンもこういう行動を取ったと考えられる．「ユングリンガ・サガ」において神と同じ名前を持つ王はオージンの他にニョルズ，フレイの２人がいるが，彼らが病気で死ぬ際にはこういう行動は取っていない．「ユングリンガ・サガ」においても特別な存在であるオージンにはそうあるべきだという何かがあるため，eigna が用いられたのではないだろうか．神オージンと王オージンの同一視がうかがわれる．

- MEANING(5)

・ # III　来させる　*　bjóða til e-s　YS 9.9.P

オージンが死んだ後もスウェーデン人はオージンの力を信じており，大きな戦いの前には彼が現れるとされた．そしてオージンはあるものには勝利を与え，あるものは自分のもと（死者の世界）へ「来させた」とされる．これは戦士，英雄の運命を握って，彼らを選別し，ragnarǫk に備えて自分のもとに集めるとされる神オージンの行動であり，ここでも「ユングリンガ・サガ」におけるオージンと神オージンの同一視がうかがわれる．

・ # III　槍の跡をつける　marka sik geirsoddi　YS 9.2.P

オージンが病気で死ぬ間際に自分で「槍の跡をつける」．これは先に ENTRY の eigna のところでも述べたように，名誉ある死のために必要なことであり，英雄，王たちにとって名誉が一番大事であった．この「槍の跡をつける」は，さらに神オージンがその特徴の一つである知恵のルーンを獲得するために槍で傷ついたこと（p. 69 参照）との関係もうかがわせる．また槍グングニルは神オージンの武器でもあり，この「槍の跡をつける」は神オージンと王オージンとの同一視において重要な動詞であると思われる．

・ # III　唱える　*　kveða　YS 4.19.P

ENTRY の smyrja, magna と同じ場面に用いられている．オージンが薬草を塗り込んだ Mímir の頭の上で魔法の歌を「唱える」．ここでもやはり，魔術の神オージンのイメージが重なっており，「ユングリンガ・サガ」のオージンをより神に近づけようとする意図があるのではないだろうか．

・ 旅に出る　*　fara í brot　YS 2.18.P

「ユングリンガ・サガ」の初めの部分で，オージンが長い間「旅に出る」ことがよくあったとされている．

・ いない　vera í brottu　YS 3.3.P

先に述べた「旅に出る」に続く章で，オージンが「いない」時にはその 2 人の兄弟 Vé, Vílir が国を治めたとされる．

- ENTRY + MEANING(7)

・ # IV　gera　もたらす　YS 7.20.P

オージンの能力を述べる中で「人に死，不幸，病気を「もたらす」」とされている．これもオージンの中の魔法の力との関係を示しており，特徴的である．

・ kenna　習う　YS 7.16.P

伝説の王オージンの特殊な能力を述べる中で「これら全ての技を彼はルーンと魔法の歌によって「習った」」とされている．魔法を使う点はオージンの代表的な特徴の一つであるが，kenna は「知る」という意味でも他で多く使われているためここでの用法がそれほど特徴的であるとは思われない．

＊ temja　教える　＊ taka　住む

＊ fara　乗って進む　＊ fara　出かける

＊ dveljast　いる

**ソール (Þórr) 635 例**

- 神々と人間の守り手（力の神）
  - ハンマーミョッルニルが武器
  - 巨人，侏儒を退治する

    巨人：ヒュミル，フルングニル (Hrungnir)，ゲイロズ，スリュム

    侏儒：アルヴィース
- ミズガルズ蛇の仇敵
- ウートガルザ・ロキ訪問
- 植民に際しての守護者
- 雷鳴の神
  - 空の神．雨風を支配する
- 豊穣の神
- その他
  - 山羊の車に乗る
  - 異教時代末期の神々に対する賛歌においてソールは直接二人称で呼び掛けられている[注7]

**ソール（神話詩）(261)**

- ENTRY(12)

・ # II　væta　濡らす　HRBL 13.3.VG

オージン扮する渡し守が川を渡してくれないので，それに対してソールが「川を歩いて渡って，荷物を「濡らす」のは悲しいことだ」と嘆く場面で用いられる．オージンに対してソールが弱い立場にあること

[注7] Turville-Petre 1964, p.85

を強調しているのだろうか.

・ # II　svífa　行く　HYM 18.6.VG

ソールとチュールが巨人ヒュミルのところへ神々の宴会でのビールを醸造するための大きな釜を借りに出向く．それからソールとヒュミルが釣りに出かけミズガルズ蛇をあわや釣り上げそうになるが，ヒュミルが恐がって釣り糸を切ってしまう．その後，ソールたちはヒュミルを殺し大釜をもって帰る．この話の流れにおいて，ソールが釣り餌となる牛のもとへ「行く」場面で用いられている．この牛を餌としてソールはミズガルズ蛇を釣り上げそうになる．ソールとミズガルズ蛇は最大のライバルであり，その戦い（釣り上げること）の準備を表しているこの動詞は重要である．韻律の影響がうかがえる．

・ # I　skorða　支柱で支える　HRBL 39.4.VG

ソールとオージンがお互いに何をやってきたかを言い合いしている中で，ソールがベルセルクの妻を殺したと述べたのに対して，オージンがソールを女を殺すような恥ずかしいことをしたと非難する．それに対してソールが彼女たちはまるで狼のようで，ソールが「支柱で支える」船を音をたてて打ち，鉄の棒で脅したのだと述べている．力自慢であるソールに特徴的である．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　neyta　使う　SnES18 2.1.VG

スノッリの『エッダ』の写本のうち Codex Upsaliensis にのみ見られるもので，「詩語法」の一部の変異形としてあげられている一節に出てくる．この部分はソールが巨人ゲイロズを訪問し，ゲイロズの娘たちがソールを天へ持ち上げようとした時に，アースの力を「使った」と自分で述べている．本文ではソールがその娘たちの背骨を折ったとされている．アース神一番の力持ちであるソールにふさわしい表現である．

・ # I　hniósa　くしゃみをする　HRBL 26.8.VG

・ # II　físa　おならをする　HRBL 26.8.VG

オージンがソールを力はあるが勇敢な心はないと馬鹿にする場面で，ソールが巨人フィヤラルに聞こえるのを恐れて「くしゃみ」も「おなら」もしなかったと述べている．人間の生理的な現象を表す hniósa, físa がともにここでソールに対して用いられているのは非常に興味深い．韻律的な影響があることも考えられるが，意味的にとても人間的な表現であり，通常は神々に対してはあまりふさわしい表現とは思われない．もちろん文脈上ソールを馬鹿にするために神にふさわしくない動詞を持ってきたとも考えられるが，あえてこの動詞を用いることでソールという神に対する親近感を表現したのではないだろうか．異教

時代の神々への賛歌においてもソールに対して直接二人称で訴えかけるものが見られ[注8]，ソールに対する信仰は親近感を伴っていた．両方とも韻律の影響がうかがえる．

・ # I　hnúka　しゃがみこむ　LS 60.5.VG

ロキがソールを馬鹿にする場面で，かつてソールが巨人の手袋の中で「しゃがみこん」でいたと述べている．上で述べた hniósa, físa の場面 (HRBL) でも同様に恐怖の余り手袋に「押し込められる」とされている．このことから，「ソールが手袋に入って隠れている」という行為はソールを馬鹿にする典型的な表現となっていると思われる．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　hœta　脅す　LS 62.3.VG

ロキに対して神々への悪口をやめさせるためにソールがロキを「打つ」ぞと脅したのを受けて，ロキが「たとえミョッルニルで「脅さ」れても，長生きするつもりだ」と答える場面で用いられている．ソールがその特徴の一つであるハンマーミョッルニルを直接用いて「脅し」ており，重要であると考えられる．韻律の影響がうかがえる．

・ # I　egna　餌を取りつける　HYM 22.1.VG

ヒュミルと一緒に釣りに出たソールが「餌（牛の頭）を取りつける」．結果としてこの餌にミズガルズ蛇が食いつき，ソールの大蛇釣りが始まる．このソールの大蛇釣りは他の作品にも見られ[注9]，ソールとミズガルズ蛇は世界の滅亡ラグナロクの際にも戦ういわば最大のライバル同士で，この大蛇釣りの部分はその前哨戦にあたり，重要と考えられる．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　bindast　着る　TRK 17.5.VG

ソールが盗まれたハンマーミョッルニルを取り戻すためにフレイヤに変装するというアイデアに対して，ソールが「もし自分が花嫁衣装を「着る」ならば，アース神たちは自分のことを女々しいと呼ぶだろう」と述べている．このフレイヤに変装して花嫁衣装を「着る」という行為によってミョッルニルを取り戻すことが可能になり，この「着る」は物語の流れにおいて非常に重要である．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　þreifast　探す　TRK 1.8.VG

---

注8 Turville-Petre 1964, p.85
注9 菅原 1984, pp. 168-169

ハンマーミョッルニルが盗まれたのに気づいたソールが，怒りに打ち震えながらミョッルニルを「探し」始める．ミョッルニルはソールの力の象徴であり，それがないことは神々全体にとって非常事態であり，それを「探す」ことは重要である．

・ # II　þrasa　怒る　LS 58.3.VG

ロキが神々をさんざん馬鹿にしているところへソールが登場し，そのソールに向かってロキが「どうしてそんなに「怒」っているのか」と言う．ソールの怒りは巨人などに対する際のソールの特徴の一つである．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(13)

・ # III　手を伸ばす　*　seilast　HRBL 27.3/ 28.1.VG

HRBL 27.3.VG

オージン扮する渡し守にさんざん馬鹿にされて，ソールが「もし「手を伸ばす」ことが出来たら，お前を殺してやるのに」と叫ぶ．

HRBL 28.1.VG

それに対してオージンが「まったく理由もないのに，いったい何を「伸ばす」必要があるのだ」と答えている．ソールの武器はハンマーミョッルニルであり，それを用いれば川向こうの渡し守を倒すことはたやすいことに思える．しかし，ミョッルニルには言及せずにおとなしく「腕を伸ばす」という表現を用いているのには，オージンに固有の ENTRY(ferja) のところでも述べたように（p. 70 参照），オージンとソールとの力関係を表しているのではないだろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　黙らせる　ráða e-m ro　LS 55.4.VG

ロキの悪口雑言がすぎるので，フレイの召使いのベイラ (Beyla) が「ソールがやって来て，悪口を言うロキを「黙らせる」」と言っている．ソールの神々の守り手，力あるものとしての性格を考えての発言であると思われる．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　投げ上げる　*　verpa e-t upp　HRBL 19.3.VG

ソールが巨人シャツィ (þjazi) を倒して，その目を天に「投げ上げた」と渡し守に扮したオージンに自慢している．巨人に対する勝利はソールにとって特徴的である．

・ # III　引っ張り上げる　vinda e-m upp　HYM 27.3.VG

ミズガルズ蛇を釣り上げるのに失敗した後，戻ってきてソールが船を「引っ張り上げる」．ソールの力を示しており，特徴的と考えられる．

・ # III　押し込める　*　troða　HRBL 26.4.VG

渡し守に扮するオージンがソールに対して手袋に「押し込め」られていたと馬鹿にする場面に用いられている．p. 83 で述べた「しゃがみこむ」と同様に，強いはずのソールに対する侮辱の典型的な例で用いられている．

・ # III　打ち落とす　*　drepa e-t af e-m　LS 57.5.VG

悪口雑言を繰り返すロキの前にソールが登場し，「首から頭を「打ち落とす」ぞ」と言っている．具体的に力を行使するソールに特徴的な表現と考えられる．

・ 優しい　láta einart viðe-t　HDL 4.4.VG

フレイヤが自分の愛人オッタル (Óttarr) の家系について女巨人ヒュンドラに尋ねに行った際に，ヒュンドラに起きて話をしてもらうために，「ソール（巨人の敵とされる）があなたに「優しい」ように頼むつもりです.」と述べている．einart に韻律の影響がうかがえる．

・ 明かす　*　segja til e-s　HRBL 8.9/ 9.1.VG

渡し守に扮したオージンに名前を「明かせ」と言われ，それに対して「明かし」てやろうと答えている．韻律の影響がうかがえる．

・ 振り返る　*　líta aptr　HYM 35.2.VG

ソールがヒュミルのところから大釜を持ちだした後，一度ヒュミルの館の方に「振り返った」．そこでヒュミルたち巨人があとを追いかけてくるのを見て，彼らを皆殺しにした．韻律の影響がうかがえる．

・ 食事を与える　*　fœða　HRBL 3.2.VG

川にさしかかったソールが渡し守に扮するオージンに船で渡してくれと頼んだ後に，背中にしょっている「食事を与えよう」と言う．韻律の影響がうかがえる．

・ 思い切ってする　＊　þora　LS 58.4.VG

ロキの罵りの中で「フェンリル狼と戦うときには「思いきってし」ないくせに」と言われている．þora は他の箇所では「助動詞（敢えて〜する)」で用いられているの．ここでは本動詞の部分がないためこの意味に訳したが，基本的には同様の意味であると思われる．韻律の影響がうかがえる．

・ 向こうへ行く　＊　fara　HRBL 54.1.VG

渡し守に扮するオージンが言い合いの末，ソールに向かって岸から離れて「向こうへ行け」と叫んでいる．韻律の影響がうかがえる．

・ 呼びかける　＊　kalla　HRBL A.PG/ 2.2.VG

HRBL A.PG
HRBL の冒頭の散文部分で，ソールが渡し守（実はオージン）に「呼びかけ」て韻文の対話が始まる．
HRBL 2.2.VG
呼びかけられたオージンが「呼びかけ」ているのは誰かと尋ねている．韻律の影響がうかがえる．

・ 言い張る　＊　teljast í ráðom e-s　ALV 5.2.VG

ソールのもとへ娘を花嫁としてもらいに来た侏儒アルヴィースが，ソールにそんな約束破ってやると言われて，それに対して「美しい娘の結婚を決める権利を「言い張る」のは誰だ」と尋ねている．ráðom に韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(22)

・ # IV　koma　落とす　LS 63.5.VG　koma e-m neðan

LS の最後の部分でソールがロキに「お前を地獄に「落としてやる」」と述べている．ソールの特徴である力を誇示する表現である．

・ # IV　koma　取り戻す　TRK 32.9.VG　koma at e-m

TRK の最後でスリュムに奪われていたミョッルニルをついに「取り戻した」と述べられている．ミョッルニルはソールにとって非常に重要なものであり，それを「取り戻す」場面での表現も重要である．

・ # IV　fœrast　身につける　HYM 31.3.VG　fœrast í e-t

巨人ヒュミルとの力比べで非常に硬い杯を割るためにソールがアースの力を「身につけ」，その杯をヒュミルの頭にぶつけて割る．アース神の中で一番の力持ちであるソールにのみこの用法が用いられていることは特徴的と言える．

・ vera　戻る　LS 55.2.VG　vera heiman

悪口雑言の限りをつくすロキを脅すために召使いの Beyla が「ソールが「戻ったら」お前 (ロキ) を黙らせるだろう」と述べている．よく遠征に出るソールの特徴に関わるとも考えられるが，heiman が韻律の支配を受けておりあまり重要度はないと思われる．

・ komast　いる　HRBL 33.2.VG

オージンが女性の自慢話をして，ソールの助けが必要だったと述べるのに対してソールが「もしそこに「いたら」，助けてやったのに」と応酬している．重要性は認められない．

・ hirða　残す　HYM 7.5.VG

ヒュミルの館に向かうソールが角のすばらしいヤギを「残した」．ヤギはソールに特徴的な持ち物であるが，この用法はそれほど特徴的なものとは思われず，また韻律の影響もうかがえる．

・ dýja　震わせる　TRK 1.6.VG

ミョッルニルを盗まれたことを知ったソールが髪の毛を「震わせた」．本来 dýja は何かを「振る」意味で用いられる動詞であり，ここでは対象が髪の毛になったため「震わせる」という訳がついた．ソールに特徴的なものではないと思われる．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * vinna | 分ける | * veifa | 投げる |
| * taka | たどり着く | * svelta | 苦しむ |
| * slá | 投げる | * sœkja | 取る |
| * launa | 仕返しをする | * komast | 渡る |
| * hverfa | 行く | * hefja | 降ろす |
| * halda | 向く | * hafa | 運ぶ |
| * fara | 渡る | * bresta | 壊す |
| *þekkja | 気づく | | |

ソール（「ギュルヴィの惑わし」）(374)

- ENTRY(8)

・ # II　sparast　残す　GYLFG 46.83.P　sparast til e-s

ウートガルザ・ロキが杯が飲み干せないソールに対して，「お前が飲み干すことが出来るであろう以上の一口を「残して」いるのではないだろうな.」と尋ねている．ソールに対する挑発的な表現で，ソールとウートガルザ・ロキとの対決を盛り上げる表現とも考えられる．

・ # II　sefast　落ち着く　GYLFG 44.52.P

山羊が足を引きずっているのを見たソールはものすごく怒って，農夫たちはそれをみて恐れおののいてすべての財産を差し出すと言う．その恐れを見たソールは怒りを鎮め，「落ち着いた」．「怒り」はソールの特徴の一つと言えるが，怒りを鎮めて「落ち着く」ことはその逆でありソールにとってはめずらしい表現である．

・ # II　lypta　持ち上げる

GYLFG 46.106.P　lypta upp

杯を飲み干せなかったソールに対してウートガルザ・ロキ が次に猫を地面から持ち上げる (hefia upp) ように言う．ソールは猫を「持ち上げた」．しかし猫はソールが持ち上げれば持ち上げるほど，背を丸めたので結局片足が地面から離れただけだった．

GYLFG 47.40.P　lypta upp

GYLFG 47.41.P　lypta

ソールたちがいくつかの技で敗れウートガルザ・ロキ の館を出た後にウートガルザ・ロキ がソールたちを魔法でたぶらかしていたと告白し，次のように言った．「お前が猫を「持ち上げた」時はものすごいことをすると思った．本当のところ，お前が大地から猫の片足を「持ち上げた」時，見ていたみんなは恐れおののいたのだ．あの猫は見かけ通りの猫ではなく，大地を取り巻いているミズガルズ蛇だったのだ.」この3つの lypta 全てがソールが実はミズガルズ蛇を「持ち上げた」ことについて述べている．前にも述べたがソールとミズガルズ蛇は最大のライバルであり，その両者の関係に対してのみ用いられており，またソールの特徴である力わざを示しているため特徴的な動詞と言えるであろう．

・ # I　leiðrétta　正す　GYLFG 48.7.P

ソールのウートガルザ・ロキ のもとへの旅を聞いた後にギュルヴィ王がハールに「ソールは復讐はしなかったのか」と尋ねたのに対してハールが答える.「ソールが今語った旅を「正した」ことは秘密ではない」. それに続いてソールのヒュミルのもとでのミズガルズ蛇釣りの話が語られる. ギュルヴィ王の質問では hefna 「復讐する」という動詞を用いているのに対して, ここでは leiðrétta 「正す」という動詞で答えており, また後に続く話も直接ウートガルザ・ロキ への復讐ではない. 神であるソールが巨人の行った行為を「正す」という意味で用いられていると考えれば, 後に続く話ともつじつまが合い, この動詞が巨人が悪, 神々が正義という関係において神ソールに特徴的なものと考えることができるのではないだろうか.

・ # I　hreyfa　ゆるくする　GYLFG 45.45.P

巨人スクリューミル (Skrýmir) の袋に入っている食料を取り出すために, スクリューミルが眠っている間にソールが袋を開けようとする. しかしソールは紐の端を「ゆるくする」ことが出来ない. 力があるはずのソールがこの時すでにウートガルザ・ロキ の魔法にかかっていることをほのめかしている.

・ # I　ginna　からかう　GYLFG 48.44.P

ヒュミルと一緒に釣りに出たソールがミズガルズ蛇を釣り上げ, 船まで引き上げたときウートガルザ・ロキ がソールをからかったのと同じくらいソールはミズガルズ蛇を「からかった」. この ginna もこれまで述べてきたのと同様にソールの最大の敵ミズガルズ蛇との関わりで用いられており, かつソールにしか用いられていないためソールに特徴的な動詞と言えるのではないだろうか.

・ # II　birta　示す　GYLFG 46.55.P

ロキとロギ (Logi), シャルヴィ (Þiálfi) とフギ (Hugi) との勝負が終わった後, ウートガルザ・ロキがソールにどんな技を「示す」のかと尋ねる. それまでの対戦では「出来る」(vera búinn við), 「行う」(leika) が用いられているが, ソールを神と知っているウートガルザ・ロキ が birta を特別な意味をこめて用いている可能性がある.

・ # II　ætlast　考える　GYLFG 47.58.P　ætlast fyrir

だまされたとわかったソールがウートガルザ・ロキ の城を壊そうと「考える」. ætla は他にも様々な意味 (主に「考える, 望む」) で, 様々な主語に用いられているが騙されたことに対するソールの怒りを考えると特別な用法であるかもしれない.

- MEANING(20)

・ # III　踏ん張る　*　spyrna við　GYLFG 48.50/ 48.51.P

・ # III　踏み抜く　hlaupa　GYLFG 48.51.P

ミズガルズ蛇を釣り上げかけたとき，ソールはアースの力を使って両足で船の底板を「踏み抜く」くらい強く「踏ん張り」，海底に「踏ん張った」．これらの意味もこれまでにも述べているようにソールの最大のライバルであるミズガルズ蛇との前哨戦で用いられているため，ソールの特徴である力を示している．

・ # III　屠殺する　*　skera　GYLFG 44.29.P

ロキと旅に出たソールは夜になりある農夫のところに泊まる．そのときソールは連れていた二頭のヤギを「屠殺」し，皮をはいで料理する．このヤギは次の朝になると生き返る（元に戻る）特別なものであり，ソールは「牡ヤギたちの主君」と呼ばれることもあった[注10]．

・ # III　退治する　*　berja　GYLFG 42.29.P

神々が巨人にミズガルズの城壁を築かせ，その代償にフレイヤを与える約束をする．その時ソールは東方へ巨人を「退治」しに出かけていた．神々の守り手であり，何度も巨人を退治する話に登場するソールにとってこの「巨人を「退治する」こと」は当然のものである．

・ # III　振り上げる　reiða fram　GYLFG 47.56/ 48.64.P

GYLFG 47.56.P

ウートガルザ・ロキ が魔法を使ってソールをたぶらかしていたのを知らされて，ミョッルニルを「振り上げる」がウートガルザ・ロキ はどこにもいない．

GYLFG 48.64.P　reiða e-t til

ミズガルズ蛇を釣り上げるのを邪魔したヒュミルに拳を「振り上げ」ヒュミルの耳を打った．どちらの例でも直接的に力を使うソールの特徴と結びついている．

・ # III　伸びる　*　seilast　GYLFG 46.108/ 47.45.P

GYLFG 46.108.P

ウートガルザ・ロキ のところで猫を持ち上げようとして，できる限り「伸び」，猫の片足を地面から浮かせる．この猫は実はミズガルズ蛇であった．

注10 菅原 1984, p.135

GYLFG 47.45.P

ウートガルザ・ロキ がソールをだましていたのを告白する場面で，「ソールがあと少しで天に届くくらい「伸び」た」と述べている．どちらの場面でもソールにとっての最大のライバルであるミズガルズ蛇を持ち上げるために「伸び」ている．seilast はスクリューミルに対して用いられている一例を除いては，ソールに対して用いられており，「伸びる」，「手を伸ばす」の意味で用いられている．強力な力を持ったものが力を込めて「伸びる」場合に用いられている動詞であり，ソールの特徴とよく結びついている．

・ # III　鋭く見る　*　hvessa augum á e-t　GYLFG 48.54.P

ヒュミルのもとでミズガルズ蛇を釣り上げたソールが船べりでミズガルズ蛇を「鋭く見る」．ミズガルズ蛇はソールに毒を吹きかける．非常に恐ろしい光景である．ソールとその最大のライバルであるミズガルズ蛇との対決を鮮やかに描き出している表現である．

・ # III　使わない　*　missa　GYLFG 21.25.P

ハールがソールの持ち物について語る場面で，ソールが鉄の手袋を「使わない」でミョッルニルを使うことは出来ないと述べている．ソールにとってミョッルニルは最大の武器であり，かつそれを使うためには鉄の手袋が必ず必要となる．そのことを強調している表現である．

・ # III　押しつける　herða　GYLFG 44.48.P

農夫のところに泊まったソールが次の朝山羊の足が具合が悪いのを見つけ，怒って指が白くなるくらいにまでミョッルニルの柄に手を「押しつけた」．ソールの怒りを強調する表現であろうか．

・ # III　一生懸命飲む　*　þreyta á drykkiuna　GYLFG 46.77.P

ウートガルザ・ロキ の館で一度目で飲み干せなかったソールが二度目に息が続く限り「一生懸命飲む」．こういった力わざはソールに特徴的なものといえるかもしれない．

・ # III　ほどく　*　leysa　GYLFG 45.44.P

食料の入ったスクリューミルの袋を開けようとしたソールはその結び目が「ほどけ」なかった．先に ENTRY の hreyfa のところでも述べたが (p. 89 参照)，力のあるソールがウートガルザ・ロキ の魔法にかかって力が出せない場面で用いられており，ソールがそういった特殊な状態に陥っていることをほのめかしているのであろうか．

・ 飛び起きる　spretta upp　GYLFG 48.14.P

一人の若者としてヒュミルのもとに泊まったソールがヒュミルが釣りに出かける準備をしていると「飛び起き」て一緒に行く準備をする.

・ 覗きこむ　*　sjá í　GYLFG 46.80.P

ウートガルザ・ロキ に言われた杯を二口目で飲み干せなかった後に，ソールがその杯の中を「のぞきこむ」. ソールには初めと変わりないように思えた.

・ 当てる　setja　GYLFG 46.75/ 46.89.P

46.75P

ウートガルザ・ロキ に言われた杯を最初の一口で飲み干せなかった後，ソールは何も言わずにもう一度杯に口を「当て」て飲み始める.

46.89.P

二口目でも飲み干せなかったソールがもう一度杯に口を「当て」て飲み始める

・ 凍える　*　kala　GYLFG 48.17.P

ヒュミルと釣りに出かけた若者に扮したソールに対してヒュミルが「ずっと沖合いまで行くとお前は「凍える」かもしれない」と言う.

・ 体を傾ける　lúta　GYLFG 46.68.P

杯を飲み干し始めたソールが「この杯に二度と「体を傾ける」必要はないだろう」と考えた.

・ 息する　e-m vinnast til ørindi　GYLFG 46.77.P

二度目の挑戦でソールは「息する」限り（息の続く限り）一生懸命飲む.

・ 息が続かない　e-n þrjóta ørindi　GYLFG 46.68.P

一口目の時にソールは「息が続かなく」なり，杯から顔を上げた.

・ 走って行く　*　hlaupa　GYLFG 45.67.P

巨人 Skrýmir が眠っているところへ「走って行き」，ミョッルニルを振り上げて，こめかみを打つ.

・ よろめく　verða lauss á fótum　GYLFG 46.125.P

ウートガルザ・ロキ の館でソールはエッリ (Elli) という老女と相撲を取る．ソールはエッリに技をかけられ「よろめく」．このエッリは実は「老齢」というものだった．

- ENTRY + MEANING(40)

・ # IV　ríða　振る　GYLFG 45.56.P

眠っている巨人スクリューミルに対してミョッルニルを素早く，強く「振った」．ソールの特徴のひとつであるミョッルニルに対して用いられており，ソールに固有の用法である可能性がある．

・ # IV　knýjast　一生懸命やる　GYLFG 46.124.P

ウートガルザ・ロキ に言われて老女と相撲を取ることになったソールが相撲を「一生懸命」やった．力勝負はソールの得意技であり，それに関して用いられている用法のため特徴的と言える．

・ # IV　hafa　関わる　GYLFG 51.61.P　hafa fang

ラグナロクにおいて「ソールはミズガルズ蛇と戦うことに「関わって」いたためオージンを助けることが出来なかった」と述べられている．ソールとミズガルズ蛇は最大のライバルであり，最後の決戦に関してこの用法が用いられていることは意味があると思われる．

・ # IV　fœrast　使う　GYLFG 48.50.P　fœrast í e-t

HYM において「アースの力を「身につける」」とされているものと同じ．ミズガルズ蛇を釣り上げる際の表現で，アース神の中で一番の力持ちであるソールにのみこの用法が用いられていることは特徴的と言える．

・ # IV　setja　打つ　GYLFG 48.64.P　setja viðe-t

せっかく釣り上げたミズガルズ蛇を，釣り糸を切って逃がしたヒュミルに腹をたてたソールがヒュミルの耳を「打った」．力を直接行使するソールの特徴と結びつく．

・ # IV　rétta　伸ばす　GYLFG 46.107.P　rétta e-t upp

ウートガルザ・ロキ に力を示すために猫を持ち上げようとするが，猫が背を丸めるためソールが手を「伸ばす」ことになる．MEANING の「伸びる」(seilast) のところで述べたように，この猫はミズガルズ蛇であり，この表現はソールの力を示す場面で用いられており，特徴的と言える．

・ # IV　　fœra　　投げる　　GYLFG 48.59.P

ミズガルズ蛇を釣り上げて，それに向けてミョッルニルを「投げた」．最大のライバルであるミズガルズ蛇との戦いで用いられているため特徴的と言えるかも知れない．

・ # IV　　þrjóta　　一生懸命やる　　GYLFG 46.90.P

ウートガルザ・ロキ との対決で杯を飲み干す際に「一生懸命やった」．力技にかけるソールに特徴的と言える．

・ vera　　起きる　　GYLFG 45.61.P　　vera nývaknaðr

巨人スクリューミルの頭を渾身の力を込めて叩いたソールが，全く影響を受けていないスクリューミルに「何かあったのか」と尋ねられ，「今「起きた」ところだ」と答えている．vera よりも nývaknaðr のほうが重要な意味を持っている熟語であり，vakna という動詞は他の主語にも用いられており，特徴的なものとは思われない．

・ taka　　離す　　GYLFG 46.79.P　　taka e-t af e-m

ウートガルザ・ロキ にその力を示すためにソールは杯を飲み干そうとする．一口で飲み干せなかったソールが２度目の挑戦でも飲み干すことが出来ず，口を杯から「離した」．

・ leggja　　引き上げる　　GYLFG 48.40.P　　leggja e-t upp

ヒュミルの言うことを無視してソールはさらに漕いで沖に出て，そこで船のオールを「引き上げ」釣り糸を垂れた．

・ láta　　残す　　GYLFG 45.1.P　　láta e-t eptir

それまで連れていたヤギを「残して」，ソールはヨトゥンヘイムへの旅に出た．

・ fara　　体験する　　GYLFG 44.3.P

魔法についてギュルヴィ王が次のように質問する．「ソールは魔法に直面するようなことを「体験」したことはないのですか」と．この後にソールと巨人の魔法の関わりが語られる．

・ fara　受ける　GYLFG 47.10.P

ウートガルザ・ロキ との対決に敗れて出発する際にソールが「この出会いによって大いなる不名誉を受けていないとは言えない」と述べている．この後真実（魔法でだまされていたこと）が語られる．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * una | 好む | * standa | 耐える |
| * standa | 起きる | * stíga | 進み出る |
| * spenna | 身につける | * snúast | 向きを変える |
| * sjá | 見つける | * ráða | 決心する |
| * njóta | 得る | * mœta | 出会う |
| * lúta | 顔を上げる | * líka | 望む |
| * koma | 得る | * koma | 帰って来る |
| * hyggjast | 考える | * hrinda | 投げ入れる |
| * hefja | 引き上げる | * halda | つかむ |
| * hafa | もたらす | * greiða | 用意する |
| * grípa | 捕まえる | * fara | 持って行く |
| * byrja | 始める | * brjóta | 砕く |
| * bregða | 振る | * bjóða | 返す |

**ロキ (Loki) 247 例**

- 巨人族
- オージンと義兄弟の関係
- 変身・悪知恵の神
  - 牝馬に変身してスレイプニル (Sleipnir)（8本足の馬，オージンの馬）を産む
  - 侏儒にミョッルニル（ソールのハンマー）など神々の財宝を作らせる
  - バルドルの弟で盲目のホズ (Hǫðr) をそそのかしてバルドルを殺させ，またバルドルが復活するのを妨げる
- 女性的側面
  - 女巨人との間にヘル (Hel)，ミズガルズ蛇，フェンリル狼をもうける
- トリックスター

策略をめぐらし，いたずらをして，それまであった秩序を一時的に破壊するという役割を担って神話や伝承に登場する人物や動物．いたずらの相手は神や王といった強大な支配者であったり，伝統的な行動規範や秩序であったりする．しばしば自分の仕掛けたわなに自らはまり，自分の身を危うくしたり，妻や子を詩にいたらしめたりするというドジを踏む．さらにトリックスターは，現在その社会が持っている産物とか制度とかを創造する糸口を作り出してもいる．その点では文化英雄でもある．(『文化人類学事典』より抜粋.)

– 漁網の考案者（神々から追いかけられている時に考え出した）
– 神々に捕まり自分の息子の腸で縛られ，上から毒を滴らされ，毒が顔にかかると体を震わせる．それが地震と呼ばれている．

**ロキ（神話詩）(131)**　当然ではあるが，ロキにしか用いられていない ENTRY, MEANING は神話詩では LS にのみ出てくる．

- ENTRY(3)

・ # I　　rœgja　　悪口を言う　　LS 55.5.VG

フレイの召使いのベイラが「神々に「悪口を言う」ものたちをソールが黙らせてくれる」と述べている．常に悪知恵を働かせる神々にとっての厄介者ロキにふさわしい動詞である．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　gremja　　怒らせる　　LS 12.6.VG

神々をからかい始めたロキにブラギ (Bragi) が「神々を「怒らせる」な」と言う．これも神々にとっての厄介者ロキにふさわしい動詞である．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　mólka　　ミルクを搾る　　LS 23.6.VG

罵られたオージンがロキに対して「八冬の間地の底にいて，「ミルクを搾って」いたではないか，子供まで生んだではないか」と言う．ロキは男性とされているが，このような女性の行うことをやったとしてオージンに罵り返されている．ロキの中性的立場が表現されている．

- MEANING(3)

・ # III　　浴びせる　　*　　ausa e-m á e-t　　LS 4.5.VG

神々が宴会をしている所へ入ろうとするロキに対してエーギル (Ægir) の召使いであるエルディル (Eldir) が「神々に罵りの言葉を「浴びせて」も，神々はそれをあなたの体で拭き取るでしょう」と言う．神々への罵りという行為はロキに典型的な行動である．

・ # III　身を隠す　＊　felast　LS G.PG

宴席で神々を散々罵ったロキは鮭に変身して滝に「身を隠す」．変身することはロキの特徴の一つであり，その上この「身を隠し」ている間に漁網を考案するなどの重要な行為を行っている．

・ # III　気ままに振る舞う　＊　leika lauss hala　LS 49.3.VG

神々を罵り続けるロキにニョルズの妻スカジ (Skaði) が「いつまでも「気ままに振る舞う」ことは出来ない」と言う．場面によって神にもなり，神に敵対する者にもなるロキにはふさわしい動詞である．韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(7)

・ # IV　finna　答える　TRK 26.3.VG/ TRK 28.3.VG　finna orð

フレイヤに化け花嫁になりすましたソールを迎えた宴会の席であまりに食欲旺盛であったり，目が血走っている花嫁に疑問をもったスリュムの質問にロキが機転を利かせて「答える」．他の作品でも口が達者な存在として描かれているロキにはふさわしい表現と言える．orð に韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　fá　怒らせる　LS 21.3.VG　fá e-m e-t at gremi

ゲヴュン (Gefion) を罵ったロキに対してオージンが「ゲヴュンを「怒らせる」とはお前は気が狂っている」と述べている．人を怒らせることはロキに特徴的である．gremi に韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　hafa　果たす　TRK 10.1.VG

ソールがロキをミョッルニルを盗んだスリュムのもとへ使いにやり，ロキが帰ってきたときに「使いは「果たした」のか」と聞いている．ロキは他の作品においても神々の使い走りとして描かれることが多く，この表現もロキにふさわしい．韻律の影響がうかがえる．

＊ líða　解き放たれる　＊ kippast　動く

＊ fljúga　飛び上がる　＊ fœra　もたらす

**ロキ（英雄詩）(17)**

- ENTRY(1)

・ # II　afla　得る　RM A.PH

侏儒レギンの兄オトゥルを殺した代償としてオージン，ヘーニルがロキを黄金を「得る」ために送る．ロキは TRK でも神々の使いとして巨人のもとへ行っているし，またスノッリの『エッダ』においてもロキが神々の財宝を侏儒に作らせており，この文脈での行動はロキにふさわしいものと考えられる．

- MEANING(0)

- ENTRY + MEANING(1)

＊ ljósta　殺す

**ロキ（「ギュルヴィの惑わし」）(99)**

- ENTRY(1)

・ # II　kennast　覚えている　GYLFG 50.6.P

バルドルがヘルの元から帰るのを阻止したソック (þǫkk)，実はロキは，その後長い間「覚えている」形で神々から仕返しをされる．バルドルの死およびそれに関わる物語は北欧神話全体でも非常に重要であり，またこの表現が神々に災いをもたらし，それに対して報復を受ける流れにおいて用いられているため特徴的と考えられる．

- MEANING(8)

・ # III　結び目を結ぶ　＊　ríða ræxna　GYLFG 50.13.P

神々から隠れるときに，神々が滝でどのようにして彼を捕まえるかを考えていた．そして紐を使って「結び目を結び」網を作った．ここから現在の網が出来たとされている．これは文化人類学でいうトリックスターの文化英雄的側面と関係があり，ロキにはふさわしい描写である．また自分の考案した網で神々に捕らえられてしまう点もトリックスター的ではある．

・ # III　気に入らない　＊　e-m líka illa　GYLFG 49.17.P

誰が何をしてもバルドルが傷つかないのを見てロキはそれが「気に入らなかった」．天の邪鬼であるロキにふさわしい意味である．

・ # III　陥れる　koma　GYLFG 33.8.P

ロキの性格その他についての描写の中で「ロキはいつも神々を困難に「陥れた」」と述べられている．これもロキにはふさわしいものである．

・ # III　引き抜く　*　slíta upp　GYLFG 49.28.P

バルドルが傷つかないのが「気に入らない」ロキはフリッグからやどりぎだけはバルドルを傷つけることが出来ることを聞きだし，そのやどりぎを「引き抜く」．そしてそれをバルドルの弟で盲目のホズに渡しバルドルを殺させる．「引き抜く」という意味はそれほど特徴的なものとは考えられないが，その用いられている状況が神々をいつも混乱させているロキにふさわしい．

・ # III　のたうち回る　*　kippast　GYLFG 50.53.P

バルドルの死に責任があるとして，ついに神々に捕らえられたロキが上から毒蛇の毒がかかるように息子の腸で縛られる．そばに妻のシギュン (Sigyn) が立っていて毒を受けているが，その器がいっぱいになるとそれを捨てに行く，その時毒がロキにかかり大地が揺れるほどに「のたうち回る」．すぐ後に続く文で「これ（ロキが「のたうち回る」こと）は地震と呼ばれている」とあり，厄介なこと（地震）の起源と結びつけられており，トリックスターであるロキには特徴的と言えるかもしれない．

・ # III　達成する　koma á leið　GYLFG 50.1.P

バルドルが復活しなかったことに関して，ロキがすごいことを「達成した」（行った）とギュルヴィ王が述べている．神々にとって非常に大切な存在であるバルドルの復活を妨げる行為はロキにふさわしい．

・ 前を進む　*　fara fyrir e-m　GYLFG 50.29.P

神々からの仕返しを避けるために鮭に変身して身を隠しているロキが神々が投げ入れた網の「前を進み」逃げる．

・ 潜んでいる　*　leggjast niðr　GYLFG 50.26.P

鮭に変身しているロキが2つの石の間に「潜んでいる」．

- ENTRY + MEANING(11)

・ # IV　kosta　払う　GYLFG 42.42.P　kosta til

フレイヤと引き換えにアースガルズの城壁をつくるのを巨人に頼んだ神々は，城壁が約束通りにできあがりそうになった時，その責任は巨人に有利な約束を結ぶように助言したロキにあるとして彼を責めた．その際にロキは「何を「払おう」とも巨人の作業を進ませない」ことを約束した．ロキはこの他にもいろいろな話において賠償や財宝の獲得と関わっている（TRK, スノッリの『エッダ』）．そのためこの表現もロキに特有のものと言えるかも知れない．

・ # IV　hlaupa　越える　GYLFG 50.31.P　hlaupa upp

バルドル殺しの責任がロキにあると思った神々はロキを捕まえに行く．ロキは鮭に姿を変えて滝に隠れていた．神々がロキが考えだした漁網でロキを捕らえようとしたときにロキはその網を「越えて」滝に飛び上がったとされている．これ自体はそれ程特徴的とは思われないが，この時ソールに尻尾を掴まれたので鮭の後ろの部分が細くなったという説明が後に続く．これもロキの文化英雄的側面と関わっているものと思われる．

・ láta　負ける　GYLFG 46.29.P

ウートガルザ・ロキ の館での最初の勝負で「ロキがロギとの競技に「負けた」とみんなが思った」と述べられている．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * renna | 飛び上がる | * renna | 滑り落ちる |
| * ríða | 旅する | * haga | 手配する |
| * felast | 隠れる | * fela | 隠れる |
| * fara | 連れて行く | * bregða | 変身する |

**フレイ (Freyr) 108 例**

- ヴァン神族
- ニョルズの息子
- ヴァンとアースとの戦いの際の講和で人質としてアースのところへ来た
- 豊穣・平和の神
  - 雨と太陽，大地の成長を支配する
- 巨人の娘ゲルズに恋する（スキールニルを使いに出す）

フレイ（神話詩）(32)

- ENTRY(1)

・ # II　fiást　憎む　SKM 33.3.VG

ゲルズにフレイの思いを伝えに行ったスキールニルがなかなか承知しないゲルズに向かって「オージンがお前に怒っている，ソールがお前に怒っている，フレイがお前を「憎む」だろう，お前は神々の大いなる怒りを受けたのだ」と脅す．fiá という動詞も LS においてニョルズが「フレイを「憎む」ものは誰もない」と述べており，神々と憎しみとの結びつきに用いられる表現と言えるかもしれない．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(1)

・ # III　売る　*　selja　LS 42.3.VG

ロキがフレイに対して「黄金でゲルズを買い，自分の刀を「売って」しまった」と罵っている．フレイがゲルズを手にいれることと，最大の武器である相手に勝手に切りつける刀をスキールニルに与えてしまったため最後のラグナロクにおいて素手で巨人と戦う羽目になることはフレイを語る上で重要なことである．韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(1)

・ # IV　lifa　ｂｅ　SKM 19.6.VG

フレイの命でゲルズを説得しにきたスキールニルが「お前（ゲルズ）にとってフレイが最も好ましい「ｂｅ」」と述べている．lifa はほとんどが「生きる」で用いられているため，またフレイとゲルズとの関係はこの SKM において基本となっているため，この「ｂｅ」の用法は特徴的と言える．

フレイ（「ギュルヴィの惑わし」）(60)

- ENTRY(0)

- MEANING(1)

・ # III　持っていない　*　missa　GYLFG 37.48/ 51.64.P

GYLFG 37.48.P

フレイが最後のラグナロクにおいてムスペッル (Muspell) の息子と戦うとき刀を「持っていない」ことは大いに不利な点になるだろうと語られている．

GYLFG 51.64.P

フレイが最後のラグナロクにおいて素晴らしい刀を持っていないために死んだと語られている．刀を「持っていない」ことはフレイにとっては非常に重要な要素であり，特徴的な表現と言える．

- ENTRY + MEANING(2)

・ # IV　láta　耐える　GYLFG 37.27.P　láta e-t til e-s

ゲルズのもとへ使者として出向くスキールニルがフレイの刀をその報酬としてもらいたいと申し出る．それに対してフレイは「刀の無いことは「耐えられ」ないがその刀を与える」．フレイにとってこの「刀の無いこと」は後の世界の滅亡の戦いにおいて大いに不利な点となる．それに関する場面でのこの用法は特徴的といえるかもしれない．

・ # IV　berast　立ち向かう　GYLFG 51.62.P　berast móti e-m

世界の滅亡の戦いラグナロクにおいてフレイはスルト (Surtr) に「立ち向かう」．その結果フレイは倒される．神々の中で主要な存在であるフレイの最後に関わる場面で用いられているため特徴的と言えるかもしれない．

**フレイ（「ユングリンガ・サガ」）(16)**　伝説上の王としてのフレイ

- ENTRY(1)

・ # II　dýrka　誉め称える　YS 10.8.P

ニョルズの跡を継いだフレイの時代スウェーデンには平和と豊饒がもたらされたため，他のどの王よりもフレイは「誉め称えられた」．神話においては豊饒をもたらすヴァン出身とされるフレイとの関係がうかがえる動詞である．

- MEANING(1)

・ # III　病気になる　taka sótt　YS 10.15.P

フレイの妻が神話で語られているのと同じゲルズという名であり，フレイからユングヴィ (Yngvi) の一族が出ていると語られた後，フレイの死について述べられる．神話世界とのつながりを保ちながらも，現実的な死に方を描くことによって実際の王家の血筋と結びつけたのであろうか．

- ENTRY + MEANING(0)

**フレイヤ (Freyja) 84 例**

- ヴァン神族
- ニョルズの娘
- 生と死，愛情と戦闘，豊穣・成長と魔法・セイズ（呪術）の神
- 戦場での死者をオージンと分け合う
- 羽衣で変身する
- セイズ（呪術）をアース（オージン）にもたらした

**フレイヤ（神話詩）(55)**

- ENTRY(2)

・ # II　frata　おならをする　LS 32.6.VG

ロキがフレイヤを「神々がお前が兄といるところを見つけたとき，その時お前は「おならをした」だろう」と罵る．兄弟が夫婦になるというヴァンの習慣と関係する場面でのフレイヤに対する罵りで，本来神にふさわしくない非常に人間的な生理現象を持ち出してきている．注目に値する動詞である．韻律の影響がうかがえる．

・ # I　fnása　鼻を鳴らす　TRK 13.2.VG

ソールのハンマーミョッルニルを取り返すために，ソールとロキがフレイヤに花嫁衣装を来てスリュムのところへ行ってくれと頼む．それに対してフレイヤは怒り，「鼻を鳴らす」．この動詞も神にはあまりふさわしくない生理的な現象を描き出しており，注目に値する．韻律の影響がうかがえる．

frata, fnása 共に神々を身近なものとして印象づける狙いがあったのであろうか．神々にだからこそこういった表現を用いることが出来たのではないだろうか．人間などに対しては逆に卑近になりすぎるために用いることが出来なかったのではないだろうか．

- MEANING(3)

・ # III　恋しく思う　*　þreyja　HDL 47.2.VG

HDL の最後でヒュンドラがフレイヤに「いつも「恋しく思って」オズ (Óðr) を追いかけたのに，多くの人がお前のスカートの下の潜り込んだ」と非難している．恋多き女神，愛情の女神として知られるフレイヤにふさわしい表現である．

・ # III　貸す　*　ljá　TRK 3.6.VG

ミョッルニルが盗まれたのでそれを探すためにソール，ロキがフレイヤのところに来て「飛ぶことの出来る羽衣を「貸して」くれと頼む」．この羽衣を来て変身してロキはソールのハンマーミョッルニルを盗んだ巨人スリュムのところへ行く．この羽衣はフレイヤの特徴の一つである．ljá は英雄詩においてオージンが Dagr に槍を「与える」場面に出てくる．オージン，フレイヤは戦死者を折半して分けるとされる神々である．

・ かぶせる　*　slá e-m of e-t　HDL 48.1.VG

フレイヤが HDL の最後の部分でヒュンドラの罵りに対して「魔女ヒュンドラに炎を「かぶせて」やろう」と言う．魔術を使う女神としてのフレイヤとの関連はうかがえるが，単に「かぶせる」だけではそれほど固有のものとは思われない．

- ENTRY + MEANING(5)

vísa　向ける　HDL 6.3.VG　vísa e-m á e-t

ヒュンドラがフレイヤに対して「お前の愛人オッタルが死出の道を行くとき，お前が目を私たちに「向ける」」と述べている．

láta　外す　TRK 29.5.VG　láta e-t af e-m

フレイヤに化けて花嫁になりすましたソールに対してスリュムの姉が持参金として黄金の腕輪をねだり，ソールに対して腕輪を「外せ」と言っている．

* veita　救う　* renna　追いかける

* binda　着る

**フレイヤ（「ギュルヴィの惑わし」）(24)**

- ENTRY(0)

- MEANING(0)

- ENTRY + MEANING(1)

＊ líka　好む

フレイヤ（「ユングリンガ・サガ」）(5)

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(0)

ニョルズ (Njǫrðr) 54 例

- ヴァン神族
- ヴァンとアースとの戦いの際の講和で人質としてアースのところへ来た
- フレイ，フレイヤの父親
- 富の神・海の神
  - 海，船にかかわる富
  - 風の進路を支配する
  - 海と火を鎮める
- 巨人の娘スカジとの結婚

ニョルズ（神話詩）(21)

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(0)

ニョルズ（「ギュルヴィの惑わし」）(20)

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(1)

＊ stilla　静める

ニョルズ（「ユングリンガ・サガ」）(13)

- ENTRY(0)
- MEANING(1)

・ # III　オージンの特徴をつける　marka sik Óðni　YS 9.20.P

伝説の王であるニョルズが病気で死ぬ前に「オージンの特徴をつけ」させた．王としては戦士としての死に方がふさわしいことを表している．

- ENTRY + MEANING(1)

＊ halda　保つ

バルドル (Baldr) 45 例

- オージンの息子
- 最も優れており，みんなが称え，容姿が美しく，明るく輝く
- 最も賢く，最も雄弁，最もいつくしみ深い
- 裁きが不変のままではありえない
- ロキの策略によって弟ホズ（盲目の神）によって殺される
- 神々の世界滅亡後，ホズとともに新しい世界に生き返る

バルドル（神話詩）(8)

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(2)

＊ vega　打ち殺す　＊ stíga　登る

バルドル（「ギュルヴィの惑わし」）(37)

- ENTRY(1)

・ # II　saka　傷つく　GYLFG 49.15.P/ 49.18.P/ 49.21.P

三つの例とも sakaði ekki 「傷つかない」の形で出てくる．

神々がバルドルをどれだけ射っても「傷つかない」．バルドルが「傷つかない」ことがロキには気に入らない（p. 98 参照）．女に化けたロキがフリッグに「みんながバルドルを射っているが，彼は「傷つかない」」と言う．「傷つかない」ことはこの場面で述べられているバルドルの死に対する神々の不安を払拭するのに非常に有効であった．しかしこのことがきっかけでロキの計略によりバルドルは盲目の弟ホズに殺されてしまう．

- MEANING(1)

・ 見送る　＊　leiða e-t út　GYLFG 49.109.P

死んでしまったバルドルをヘルから取り戻すための使者ヘルモーズ (Hermóðr) がヘルとの話を終えて戻る際にバルドルが「見送る」．

- ENTRY + MEANING(0)

**チュール (Týr) 27 例**

- 戦闘の神
- 片手のアース
  - フェンリル狼を縛る際に右手を差し出し，噛み切られた
- オージン，ソールに次ぐ第三の神

**チュール（神話詩）(16)**

- ENTRY(0)
- MEANING(1)

・ # III　仲を取り持つ　bera tilt med e-m　LS 38.3.VG

ロキにけなされたフレイをかばってチュールが発言したのに対してロキが「黙れ，お前は決して「仲を取り持つ」ことは出来なかった」と言っている．ここで述べられていることは，「ギュルヴィの惑わし」でスノッリが「狼への保証として右手を差し出し片手になってしまったのに，チュールは人々の調停者とは呼ばれていない」と述べている事実とも一致している．チュールにとって「仲裁，調停」という類のことは大きな意味を持っているものと思われる．tilt に韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(2)

＊vera　失う　＊leita　試す

**チュール（「ギュルヴィの惑わし」）(11)**

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(0)

**ヘイムダッル (Heimdallr)　86 例**

- 神々の見張り番
- 視覚，聴覚が非常に優れる
  - フリョーズ (hljóð) をユッグドラシルの下に隠している
- ９人の母（９人姉妹）の息子
- 人間の祖リーグ
  - 王侯，自由農民，奴隷の諸族の祖となる

**ヘイムダッル（神話詩）(65)**

- ENTRY(0)
- MEANING(1)

・ # III　未来のことを知る　＊　vita fram　TRK 15.3.VG

ソールのミョッルニルを取り戻すために神々が議論しているところで，ヘイムダッルが「ソールに花嫁衣装を着せればいい」と提案する．その際に「ヘイムダッルは他のヴァンのように未来のことを知っていた」」と述べられている．神々の見張り番として素晴らしい聴覚，視覚を持っているヘイムダッルのイメージから出た表現かもしれない．韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(4)

・ # IV　vaka　見張る　LS 48.6.VG

ロキがヘイムダッルに向かって「昔つらかったとき神々の見張り番として「見張って」いただろう」と言っている．ヘイムダッルの特徴と結びつく表現である．韻律の影響がうかがえる．

＊ segja　（助言を）与える　＊ ráðast　行く

＊ ráða　行く

ヘイムダッル（「ギュルヴィの惑わし」）(21)

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(0)

## まとめ

このように個別の神々を主語とする動詞について ENTRY，MEANING，ENTRY と MEANING の組み合わせの 3 つのレベルにおいてそれぞれ機械的に他の主語とは結びつかない，その神にしか用いられていない固有の動詞を抜き出し，それぞれの神々の特徴や文脈上重要な点との関わりなどについて分析を行った結果，個々の神々にとって大きな意味を持っていると思われる固有の動詞が存在することが明らかになった．それらの中で特に重要と思われるものについて以下にまとめてみる．() 内は動詞の分類を示す（第 4 章参照）．

オージンは「戦い，死，知恵，ルーン，魔術」を司る神とされている．このオージンを主語とする動詞の中でオージンにしか用いられていない固有の動詞（他のものを主語としては取らない）が，以下に示すようにオージンの特徴とされることを直接表現したり，それらの特徴と文脈において間接的に関わっている．

ルーンに関して：

- ルーンを獲得して「豊かになる (frævast)」(I)
- ルーンを獲得するため自らを「傷つける (unda)」(II)
- ルーンを獲得するために「ぶら下がる (hanga)」(III)

知恵，魔術に関して：

- 自らの正体を明らかにせず，「惑わす (fyrirgera)」(II)
- 魔術的な側面を含んで「話す (þylja)」(II)
- 巨人と古代の知恵について「論争する (mæla e-n orðum)」(III)
- 女性に属する特殊能力である「魔法を使う (síða)」(III)

- 様々な知恵に関して「忠告する (ráða)」(III)
- 詩芸を獲得するため自分の頭を「危険にさらす (hætta e-m til)」(III)
- 知恵を獲得して「栄える (hafast)」(III)
- 憎しみを生み出す一方で，憎しみを「もみ消す (bœta)」(III)
- 親族の間に「災いを引き起こす (bera sakrúnar)」(III)
- 魔法を「操る (drepa)」(IV)
- 矢を「止める (stǫðva)」(IV)

戦い，死に関して：

- 戦場で倒れたものを「連れて来る (skipa)」(IV)
- 人に死，不幸，病気を「もたらす (gera)」(IV)

北欧神話の主神として：

- 全ての国を「支配する (stjórna)」(II)

またオージンの特徴とは直接関わってはいないが，一番力強いとされるソールに対する主神オージンの優位性を示すために用いられていると考えられる動詞も見られた．

- ソールとの力関係を暗示するかのような場面で用いられる「船で渡す (ferja)」(I)
- ソールを「妨げる (glepja)」(IV)

王オージンが登場する「ユングリンガ・サガ」においても以下のように神オージンの特徴をうかがわせるものや，王として特別の存在であることを示す固有の動詞が見られた．

魔法に関して：

- 秘密の知識をミーミルに語らせるために薬草を「塗り込む (smyrja)」(I)
- ミーミルの頭に「魔法をかける (magna)」(I)
- 言葉で炎を「消す (sløkkva)」(II)
- 魔法の歌を「唱える (kveða)」(III)

戦士（英雄），王として：

- 能力を述べる場面での「尊敬される (tígna)」(I)

- その死後も大きな戦いの前には「現れる (vitrast)」(II)
- 病気で死ぬ間際に「槍の跡をつけて (marka sik gerisoddi)」(III)，神オージンに受け入れてもらうのに自らを「ふさわしくする (eigna)」(I)

ソールは「神々の守り手，巨人を退治する神」として知られており，そのソールに固有の動詞もまた巨人，ミズガルズ蛇と言った神々の敵との関係で用いられているため，ソールと密接な関係にあるキーワードと見なすことが出来ると思われる．また直接的な行動で相手を倒す表現も幾つか見られ，これらもソールには特徴的であると考えられる．

- ミズガルズ蛇を釣るために「餌をつける (egna)」(I)
- ウートガルザ・ロキ のもとへの旅を「正す (leiðrétta)」(I)
- 巨人の袋の紐を「ゆるくする (hreyfa)」(I)
- ミズガルズ蛇を「からかう (ginna)」(I)
- ミズガルズ蛇を釣り上げるための餌である牛のところへ「行く (svífa)」(II)
- 巨人のもとでアースの力を「使う (neyta)」(II)
- ロキをミョッルニルで「脅す (hœta)」(II)
- ロキが神々を罵っている場面に「怒って (þrasa)」(II) 登場する
- スリュムに盗まれたミョッルニルを「探す (þreyfast)」(II)
- ウートガルザ・ロキ との勝負で猫の姿をしたミズガルズ蛇を「持ち上げる (lypta upp)」(II)
- ロキを「黙らせる (ráða e-m ro)」(III)
- 巨人シャツィを倒してその目を天に「投げ上げる (verpa e-t upp)」(III)
- 船を「引っ張り上げる (vinda)」(III)
- ロキの首を「打ち落とす (drepa e-t af e-m)」(III)
- ミズガルズ蛇を釣り上げる時に船の底板を「踏み抜き (spyrna)」(III)，「踏ん張った (hlaupa)」(III)
- 職人になりすました巨人がミズガルズの城壁を作っている時に東方で他の巨人たちを「退治する (berja)」(III)
- ウートガルザ・ロキ に騙されたことを知った時にミョッルニルを「振り上げる (reiða fram)」(III)
- 猫の姿をしたミズガルズ蛇を持ち上げようとできる限り，天に届くくらいまで「伸びる (seilast)」(III)
- ミズガルズ蛇を船べりまで釣り上げた時に「鋭く見る (hvessa augum á e-t)」(III)
- ミョッルニルを「取り戻す (koma at e-m)」(IV)

- 巨人ヒュミルとの力比べでアースの力を「身につける (fœrast í e-t)」(IV)
- 巨人スクリューミルに対してミョッルニルを「振る (ríða)」(IV)
- ミズガルズ蛇と戦うことに「関わる (hafa fang)」(IV)
- 巨人ヒュミルの耳を「打つ (setja við e-t)」(IV)
- ミズガルズ蛇を捕まえる際にアースの力を「使う (fœrast í e-t)」(IV)
- ミョッルニルを「投げる (fœra)」(IV)

このような「神々の守り手」として神々の敵と戦うこと以外では「くしゃみ，おなら」といった普通の人間の生理現象を表す動詞，花嫁衣装を「着る」といった少し滑稽な動詞や，また本来なら力強い存在であるはずのソールが「しゃがみこむ」や「押し込め」られたりするという弱々しさを感じさせる動詞がソール固有の動詞となっている．このことは少し難解な性格を持つ主神のオージンよりも実際に巨人などを退治するソールの方が，当時の北欧の人たちにとっては現実味があり，親しみやすかったことを表しているのかもしれない．

- 怯えたソールが「くしゃみをする (hniósa)」(I) ことも「おならをする (físa)」(II) こともなかった
- スリュムのもとへミョッルニルを取り戻しに行くために花嫁衣装を「着る (bindast)」(II)
- 巨人の手袋の中で「しゃがみこむ (hnúka)」(I)
- 手袋に「押し込め (troða)」(III) られていた

ロキは神々とも巨人ともされる曖昧な存在で，ずるがしこい知恵で常に神々の間に不和をもたらしている．ロキに固有の動詞もまたそういったロキのトリックスター的性格と一致する．

- 神々に対して「悪口を言う (rœgja)」(I)
- 神々を「怒らせる (gremja)」(II)
- 罵りの言葉を神々に「浴びせる (ausa e-m á e-t)」(III)
- 神々に対して「気ままに振る舞う (leika lauss hala)」(III)
- バルドルが傷つかないのが「気に入らない (e-m líka illa)」(III)
- 神々を困難に「陥れる (koma)」(III)
- バルドルを殺すやどりぎを「引き抜く (slíta upp)」(III)
- バルドルが復活を阻止しようとしてそれを「達成する (koma á leið)」(III) ゲヴュン (Gefion) を「怒らせる (fá e-m e-t at gremi)」(IV)

魚網の考案や地震のもとがロキに固有の動詞で表現されていることも注目に値する．トリックスターの文化英雄的側面と関わっている．

- 神々がどのようにして自分を捕まえるかを考えている間に紐の「結び目を結ぶ (ríða rænna)」(III)（これが現在の魚網のもとになったとされる）
- 神々に捕まったロキが毒蛇の毒に「のたうち回る (kippast)」(III)（この時に揺れが地震とされる）
- 神々がロキが考えだした漁網で鮭に変身しているロキを捕らえようとしたときにロキはその網を「越えて (hlaupa upp)」滝に飛び上がった（この時にソールに尻尾を掴まれたので鮭の後ろの方が細くなっている）

また女性的側面をも併せ持つロキにふさわしい表現も見られる．

- 女性のように「ミルクを搾る (mólka)」(II)

頭の回転が早い点や神々に対して弱い立場にある点をうかがわせる表現もある．

- 花嫁に化けたソールが怪しまれないように機転をきかせて「答える (finna orð)」(IV)
- 神々に捕まらないように「身を隠す (felast)」(III)
- 神々がロキを使いとして黄金を「得る (afla)」(II) ために送る
- 巨人シャツィのところへのソールの使いを「果たす (hafa)」(IV)

フレイは豊穣の神とされるが，フレイに固有の動詞として豊穣と関わるものは王フレイにおいての一例のみであり，それ以外はゲルズに恋して，彼女を手に入れるために自分の最大の武器である刀を失い，その結果困った状態になるという物語についてのものである．神としてオージン，ソールほど強く意識されておらず，単に物語の主人公の一人として描かれている．

- 王フレイが平和と豊穣をもたらしたため「誉め称え (dýrka)」(II) られた
- 思うままにならないゲルズを「憎む (fíast)」(II)
- ゲルズを手に入れるために，最大の武器である刀を「売る (selja)」(III)
- ラグナロクにおいてその刀を「持っていない (missa)」(III)
- スキールニルに刀を与える時に刀の無いことに「耐えられ (láta e-t til e-s)」(IV) ないが，ゲルズへの思いの方が強く，刀を与える
- ラグナロクの時に刀なしでスルトに「立ち向かう (berast)」(IV)

フレイヤはオージンと戦場での死者を折半したり，セイズと呼ばれる呪術を用いたり，豊穣性とも関わる強力な女神であるが，固有の動詞においてはそれらの特徴を示すものはなく，人間的で，恋多き女神として描かれている．また特殊な羽衣と関わる表現が一例見られる．

- 巨人スリュムに嫁いでくれと頼まれた時に，怒って「鼻をならす (fnása)」(I)
- 近親相関の場を見とがめられた時に「おならをする (frata)」(II)
- 失踪した夫オズを「恋しく思う (þreyja)」(III)
- ロキが巨人スリュムのところへ偵察に行く時に羽衣を「貸す (ljá)」(III)

フレイ，フレイヤの父とされ，豊穣性を司り，海を支配する神であるニョルズに固有の動詞にはそれらの特徴と結びつくものはなく，王ニョルズにおいて一例神々との関係を示唆する動詞が見られるだけである．

- 王ニョルズが死ぬ前に「オージンの特徴をつける (marka sik Óðni)」(II)

バルドルはオージンの息子であり，美しく賢い，完璧な神とされる．しかしロキのために死んでしまう．これは神々にとっては大きな悲しみであった．バルドルに固有の動詞としてその死への不安を払拭するかのような動詞が用いられている．

- 神々がどれだけバルドルに矢を射かけても「傷つく (saka)」(II) ことはない

チュールもまた戦いの神であるが，「戦闘」に関してはもっぱらオージン，ソールが司っている．チュールに関してはフェンリル狼を神々が鎖で縛る時に，安心させるためにチュールがその片方の手をフェンリル狼の口におき，神々が縛り上げた時にフェンリル狼に片手を噛みちぎられた物語が有名である．片手を噛みちぎられた後彼は「調停者」とは呼ばれなくなったとされる．ロキにこの点を罵られていることは彼にとってかつては「仲裁」することが重要な役割であったことを示しているのではないだろうか．

- ロキに「仲を取り持つ (bera tilt med e-m)」(III) ことは出来ないと罵られる

ヘイムダッルは神々の見張り番であり，そのために非常に優れた視力，聴力を持つとされる．以下の固有の動詞はその特殊な能力との関係をうかがわせるものである．

- ソールを花嫁に化けさせると言う提案をした際に，ヘイムダッルは「未来のことを知る (vita fram)」(III) と言われる

- 神々の見張り番として「見張る (vaka)」(IV)

作品（群）において神々にとっての固有の動詞（その神以外の主語は取らない動詞）を ENTRY, MEANING, ENTRY + MEANING の3つのレベルにおいて抽出し，それらの動詞とこれまでの研究ですでに言われている神々の特徴や作品上重要な場面との関係について調べた結果，それぞれの神々に対して固有に用いられ，神々の特徴と結びついていたり，文脈上重要な場面で用いられている動詞がいくつか存在することが明らかになった．このことは逆に「神々にとって特徴的な行動・状態や場面上での重要な役割を描写している動詞は他の存在を主語としては取らない，つまり神々にとって固有である」という当たり前のように思えることを実証している．つまり私たちが文献資料から神話での神々のイメージを作り上げる際には動詞が大きな役割を果たしているのである．従って他の主語とは結びつかず特定の神々しか主語として取らない動詞によって神話の聞き手・読者は神々の特徴をより一層理解し，認識出来たのではないだろうか．すなわちそれらの動詞は神々をより一層神々らしく描き出し，その特徴を改めて浮き彫りにし，より鮮やかに印象づけるキーワードとして働いているのである．

特にオージン，ソール，ロキについては他の神々と比べて動詞の総数が多いだけでなく，固有の動詞に彼らの特徴と深く関わっている動詞，作品のポイントとなる場面で用いられている動詞が多く見られ，それらの動詞がキーワードとして作品に埋めこまれることによって，北欧神話において重要な存在である彼らがさらに重要な存在として認識されていた可能性がうかがえる．

さらに付け加えれば，データベースからそれぞれの主語に固有の動詞を抜き出し，それら固有の動詞を手がかりとして分析を進めてもある程度その主語の特徴や作品における重要な場面が明らかに出来るものと思われ，文献資料分析において動詞に注目することの重要性が認識出来た．

なお韻律の影響については第8章で述べる．

# 第6章　英雄を主語とする動詞の個別分析

各英雄詩において主要な登場人物であり，かつ頻度上位の英雄について調べた．

英雄とされるものは当時の最も上流階級，すなわち王とその一族である．北欧の英雄詩においては以下の点が重要とされる[注1]．

- 親族のつながり
- 悲劇的な結末
- 最高の勇気
- 厳格な名誉
- 運命が結果を支配
- 運命に抵抗するのは無駄

これらの点に注目しながら英雄に固有の動詞を分析して行く．

**シグルズ (Sigurðr) 482 例**

- ヴォルスング (Vǫlsungar) 一族
- シグムンド (Sigmundr) の息子
- レギンに育てられる
- レギンが名刀グラム (Gramr) を与える
- 父の復讐を果たす（フンディング王の一族を撃つ）
- レギンの兄ファーヴニを殺し，その後ファーヴニ殺しのシグルズと呼ばれる
- レギンを殺す
- ギューキ王のもとへ行く途中でオージンに眠らされていたブリュンヒルドを助け，結婚を約束する
- ブリュンヒルドから多くの知識を得る
- ギューキ王の妻グリームヒルド (Grímhildr) の計略でブリュンヒルドとのことを忘れ，ギューキ王とグリームヒルドの娘グズルーンと結婚する
- グズルーンの兄グンナル，ホグニと誓いを立てる

---

注1 KLNM VI, p.413

- グンナルの頼みでグンナルとブリュンヒルドの結婚に手を貸す
- ブリュンヒルドにそそのかされたグンナルの計略で，グンナルの弟グトホルムによって殺される

**シグルズ（英雄詩）(482)**

- ENTRY(10)

・ # I　vikja　寄せる　RM I.PH

RM においてシグルズが父の仇を討つために航海しているとき嵐に襲われた．そのときフニカル (Hnikarr) と名乗る男が岩の上から声をかけてきたので，それを乗せるために船を陸に「寄せた」．この男を乗せると嵐が静まった．その後このフニカルはシグルズにいろいろな知恵を授けた．このフニカルは実はオージンの変装したものだった．英雄の庇護者であるオージンを乗せるために船を「寄せた」わけであり，その後のシグルズの英雄としての行動に大きな関わりのある行為であると考えられる．それを表現する vikja という動詞がこの場面でのシグルズにのみ用いられていることは重要である．

・ # II　skynja　調べる　FM E.PH

ファーヴニを倒した後，シグルズはレギンに言われたようにファーヴニの心臓を焼く．それが十分に焼けたかどうかを「調べる」ためにシグルズは心臓を触った．その結果シグルズは鳥の声がわかるようになり，邪悪なレギンのたくらみを知りレギンを殺す．シグルズにとってはこの「調べる」ために心臓に触れるという行為は大きな意味を持っている，またその結果鳥の声がわかるというふつうの人間の能力を超える力を得ることも英雄としての要素に大きく関係しているものと思われる．

・ # II　neyða　強制する　GRP 25.4.VH

シグルズが母方の叔父で予言者でもあるグリーピを訪ねた際にグリーピから自分の運命について聞きだそうとするが，グリーピはなかなか言わない．しかしついにグリーピが話す時に「お前シグルズがそれ（未来ことを話すこと）を私に「強制する」から話してやろう」と言う．この結果聞きだされたシグルズの未来は「死」まで含むものであった．普通の人間ならば知り得ない未来のことについて聞き出す場面で用いられているためこの動詞も重要であると考えられる．

・ # II　nemast　得る　GRP 23.4.VH

未来のことを尋ねるシグルズに対してグリーピが「お前の人生には何も恥ずかしいことはない．立派な王よ．このことを「得」(「習得」) なさい.」と言う．王として，英雄としての誇りを強調している表現であろうか.

・ # II　klyfja　乗せる　FM H.PH　klyfja e-t meðe-m

ファーヴニを殺した後で財宝を馬グラニ (Grani) に「乗せる」．この事件の後シグルズは「ファーブニ殺し」(Fáfnisbani) と呼ばれる．財宝と名馬とその英雄を特徴づける事件の最後の場面ということを考えると英雄シグルズに特徴的な動詞と言える.

・ # II　hrœðast　恐れる　HB 9.8.VH

シグルズの死後，ブリュンヒルドも死に，二人は火葬にされ地獄へと赴く．その途中ブリュンヒルドは女巨人の館の門を通ろうとするときにその女巨人に罵られる．それに対して自分の身の上を語る．その中でオージンに眠らされた自分に対して，「恐れる」ことのないもの (シグルズ) がその眠りを破るとオージンが定めたと述べている．英雄として必要な要素である勇気に関する表現であり，かつシグルズとブリュンヒルドの一連の物語の始まりである出会いの場面についての描写であるため重要である．韻律の影響がうかがえる.

・ # I　gista　立ち寄る　SD 26.5.VH

レギンを殺した後，南に向かっていたシグルズが山の上で盾でかこまれた中にヴァルキュリャが眠っているのを見つける．このヴァルキュリャはオージンに眠らされていたシグルドリーヴァ (ブリュンヒルド) であった．シグルドリーヴァがシグルズにルーン（秘密の知恵）やいくつかの助言を与える中で「四番目の助言として，もし邪悪な魔女が道中にいるなら，「立ち寄る」よりそのまま進むのが良い，たとえ夜であったとしても」と述べている．結果として自分の死につながるグズルーンとの結婚に対する警告であろうか．韻律の影響がうかがえる.

・ # II　flœja　逃げる　SD 21.1.VH

シグルドリーヴァ（ブリュンヒルド）がシグルズにいろいろなルーンについて教えた後，シグルズにこの後どうするかの選択を迫る．それに対してシグルズが「私は「逃げ」ない」と答える．英雄として重要な勇気を示している表現である.

・ # II　drukna　溺れる　FM 11.4.VH

戦う前のやり取りの中でファーヴニがシグルズに対して「ノルンの定めを岸の近くで得るだろう，お前は「溺れる」」と述べる．特に英雄的な表現とは思われないが，シグルズの死を暗示しているのであろうか．

・ # II　benja　殺す　FM 25.5.VH

ファーヴニを殺したシグルズに対してレギンが「お前は勝利を喜んでいる，剣グラムを草で拭いている．お前は私の兄を「殺し」た．私自身が少しはそれを引き起こしたのではあるが．」と述べている．シグルズはファーヴニ殺しのシグルズとも呼ばれるようになる．竜ファーヴニを殺すことは英雄として重要な要素であり，かつ殺した直後にファーヴニの弟であるレギンがこの動詞を用いていることは注目に値する．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(10)

・ # III　馬具をつける　*　beita　GH 19.1.VH

GH において，アトリを殺し，ヨーナクル王 (Jónakr) と結婚し息子をもうけたグズルーンが，自分とシグルズとの間の子であるスヴァンヒルドがヨルムンレク (Iǫrmunrekr) に殺されたのを聞いてヨーナクル王との間の息子たちに復讐をするように扇動する．この作品の最後の部分でグズルーンがシグルズに向かって嘆く場面で「馬に「馬具をつけて」，ここに走ってきて」と頼んでいる．馬は英雄にとって必要不可欠な要素である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　独り占めする　vera einvaldi e-t　FM 38.6.VH

鳥の話がわかるようになったシグルズに鳥が「レギンを殺せば黄金を「独り占め」できるだろうに」と言う．富と英雄の関係を示唆している．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　張りつめる　spenna　SD 9.5.VH

シグルドリーヴァ (ブリュンヒルド) がシグルズに出産を助けるルーンを教える中で「太股を「張りつめ」なければならない」と述べている．英雄と出産との間に何か特別な関係があるのだろうか．

・ # III　成長する　*　vaxa upp　SF A.PH

シンフォトリの死およびそれにまつわる話が語られる中で，シグルズの父シグムンドの死後その妻でありシグルズの母であるヒョルディース (Hiǫrdís) がヒャルプレク王 (Hiálprekr) の息子アールヴィ (Álfi)

と結婚し，シグルズはそのもとで子供時代「成長した」．父が亡くなっているにも関わらず王のもとで「成長した」ことはシグルズにとっては大いなる幸運である．

・ # III　焼け死ぬ　*　brenna　SD 31.5.VH

シグルドリーヴァ (ブリュンヒルド) がシグルズに与える助言のなかで「勇敢な戦士と争う場合は「焼け死ぬ」より戦うほうがいい」と述べている．「焼け死ぬ」は戦士にとって不名誉な死に方であって，戦闘で死ぬ名誉を強調しているのだろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　火傷をする　*　brenna　FM E.PH

殺したファーヴニの心臓を焼いているシグルズが焼けたかどうか調べるために指で触ってみて「火傷をする」．この結果鳥の話がわかるようになり，レギンに裏切られる前に殺すことが出来る．そして英雄としての旅が続けられる．そのためこの行為「火傷をする」は ENTRY のところで述べた「調べる (skynja)」(p. 117 参照) と同様にシグルズにとって非常に重要な行為である．

・ # III　一緒に旅をする　*　ríða e-m í sinni　SKS 3.4.VH

ファーヴニを殺した後シグルズはギューキ王のもとを訪ね，王の娘グズルーンと結婚する．それから王の息子グンナルたちとブリュンヒルドを求めて「一緒に旅をする」．グンナルと一緒であることがこの後に続く一連の物語シグルズ，グズルーン，グンナル，ブリュンヒルドたちの物語の一つのポイントとなる．sinni に韻律の影響がうかがえる．

・ # III　違反する　vinna til saka　BSG 1.2.VH

お互いに誓いを立てたはずのシグルズに対して裏切られたと思ったグンナルがシグルズを殺そうとした．それに対してホグニが「シグルズが何を「違反した」のですか」と尋ねる．英雄たちにとって約束，誓いは絶対的な価値を持つものである．英雄の中でも一番に名をあげられるシグルズにだけこの表現が用いられていることは，誓いに「違反する」ことは重大な罪と考えられていたことを示しているのだろうか．saka に韻律の影響がうかがえる．

・ # III　生かす　*　spara　FM 37.2.VH

鳥の話がわかるようになったシグルズに鳥が「彼 (シグルズ) がレギンを「生かして」おくなんてなんて愚かなんだ」と言う．この一連の鳥の話から，裏切られる前にレギンを殺すことになるため，先の「独り

占めする」と共にシグルズに対する大いなる助言となっている．シグルズがレギンに対して力で優っていることを示しているとも考えられる．

・ 準備できている　vera búinn　GRP 18.3.VH

叔父グリーピに自分の将来についての予言を聞きに来たシグルズがなかなか予言を教えてくれないグリーピに対して「もう（馬に乗って）行く「準備は出来ている」，私の人生はどうなのですか」と言っている．

- ENTRY + MEANING(50)

・ # IV　vera　優れている　GK-II 2.1.VH　vera uf e-m

グズルーンが「シグルズはグンナル, ホグニより「優れている」」とショーズレク (Þjóðrekr) に語っている．傑出した英雄であるシグルズにふさわしい表現である．

・ # IV　verða　会う　GRP 33.1.VH　verða fyr e-m

叔父のグリーピのもとへ未来のことを聞きに来たシグルズに他人の裏切りに「会う」と語る．裏切られるのが英雄に特有な運命であればこの表現もシグルズに特徴的なものと言えるだろう．

・ # IV　taka　外す　SD A.PH　taka e-t af e-m

シグルズとシグルドリーヴァと名乗るブリュンヒルドが初めて出会う場面で，鎧を着せられて眠らされているブリュンヒルドの鎧をシグルズが「外す」．ヴァルキュリャとして有名なブリュンヒルドと鎧の結びつきは重要であり，かつ今後大きな物語の中心人物となる２人の出会いの場面で用いられているため特徴的な表現と言える．

・ # IV　knega　理解する　SD 19.5.VH

シグルドリーヴァと名乗るブリュンヒルドがシグルズに魔法の言葉ルーンを教える中で「ルーンを正しく「理解する」」と述べている．knega は本来「出来る，能力」などを表す助動詞として用いられており，「理解する」はそれらと関連のある意味ではある．しかし英雄シグルズの場合のみ本動詞的な用いられ方をしていて，かつルーンとの関わりであることを考えれば特徴的なものと言えるかもしれない．

・ # IV　hefja　抱きしめる　SKS 4.8.VH　hefja e-t sér at armi

グンナルに扮したシグルズがブリュンヒルドの横に寝るが，間に剣グラムを置いてキスもしなければ，「抱きしめる」こともしなかった．これによりだまされたブリュンヒルドはグンナルの妻となり，後にシグルズ自身の死へとつながる悲劇のきっかけとなる．シグルズにとっては大きな転機に当たる場面で用いられており，特徴的な用法と言えるかも知れない．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　fela　渡す　SKS 4.10.VH

シグルズがグンナルと自らを偽ってブリュンヒルドの心を奪った後，ブリュンヒルドをグンナルに「渡す」．先に klyfja のところでも述べたがこの事件はシグルズにとって非常に大きな意味を持っているだけに，韻律の影響がうかがえるものの特徴的な用法であると言える．

・ # IV　eiga　使う　FM 28.5.VH

ファーヴニを倒した後シグルズがレギンに対して「ファーヴニの力に対して私は自分の力を「使った」」と述べている．英雄が力を使うことは特徴的であり，それがシグルズにとって大きな敵であったファーヴニに対しての力であるため，この用法はシグルズを特徴づけているものと思われる．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　bjarga　埋める　SD 33.2.VH

シグルドリーヴァと名乗るブリュンヒルドがシグルズにルーンを教える中で「あなたシグルズが死体を「埋める」」と述べられている．英雄が勝利した後その相手の死体を「埋める」と考えると，英雄を特徴づけるものと言える．

・ # IV　þyrma　守る　GRP 47.4.VH/ SKS 28.5.VH

GRP 47.4.VH

グリーピが「ブリュンヒルドがグンナルにお前シグルズは誓いを「守らない」というかもしれない」と将来の不幸を示唆する言葉を述べている．韻律の影響がうかがえる．

SKS 28.5.VH

死ぬ間際にシグルズがグンナルに対して誓いを「守った」と述べている．どちらの場合もこの後のブリュンヒルド，グンナル，シグルズ三者の不幸なつながりと関わる表現である．また英雄と誓いの結びつきは重要である．

・ # IV　vinna　だます　SKS 28.4.VH　vinna grand viðe-t

シグルズがグンナルを「だまし」ていないと述べている．「だます」ことは英雄にとって恥ずべき行為であり，先に述べたþyrma に対応して特徴的な表現と言える．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　verpa　襲う　SKS 22.3.VH　verpa eptir e-m

グトホルム (Guðthormr) に刺されたシグルズが一矢報いようとグトホルムを「襲った」．ただ倒されるのではなく，相手に反撃をするという行為は英雄にふさわしく特徴的と言える．eptir に韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　ráða　復讐する　SKS 22.1.VH　ráða til hefnda

ホグニ, グンナルが弟のグトホルムをそそのかしてシグルズを殺させるがその際にシグルズが一矢報いるために「復讐する（反撃する)」．英雄にとって復讐（反撃）は非常に重要な要素である．hefnd に韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　muna　望む　RM 15.6.VH

レギンがグラムをシグルズに与えた後にファーヴニを殺すように言うのに対して「父の仇を討つよりも黄金の腕輪を「望む」ならフンディング王の息子達は笑うだろう」とシグルズが述べている．英雄と財産，名誉との関係を表現している．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　ljúga　破る　BSG 2.4.VH

グンナルが「シグルズは誓いを立てたのにそれら全てを「破った」」と述べている．「(誓いを）守る (þyrma)」，「だます (vinna grand við-t)」などと同様に誓いと英雄の関係は非常に重要なものである．

・ # IV　gera　結婚する　GRP 34.2.VH　gera hleyti

「婚姻関係を行う」シグルズが叔父であるグリーピに未来のことを尋ねる中で「自分はグンナルのもとで「結婚し」，グズルーンと結婚する」のか」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ reka　入れる　RM G.PH

シグルズをそそのかしてファーヴニを殺させようとするレギンがグラムという刀をつくりそれをシグルズに与える．そのグラムの切れ味を試す場面でシグルズが川の流れに絹の房を「入れる」．刀グラムは英雄シグルズにとって非常に大切なものではあり，その切れ味に関する部分で用いられている点は考慮すべきかもしれないが，英雄そのものを直接特徴づける表現とは思われない．

・ ná　努力する　FM 7.1.VH

ファーヴニが討たれ死ぬ間際にシグルズに向かって「もし「努力して」英雄達の友の間で育ったなら，立派に戦うところを見ることもあったろうが」と述べている．この ná は冗語的であるとも考えられるため，特徴的なものとは言えない．

・ ganga　生きる　FM 2.2.VH

シグルズがファーヴニに剣を刺した後，自分の素性を隠して「母の無い子として「生きてきた」」と述べている．「生きる」を「人生を進む」と理解すれば ganga にとっては普通の用法であり，また韻律の影響もうかがえる．

・ búa　関わる　SKS 40.3.VH　búa um e-t

ブリュンヒルドがシグルズの死を聞いて自殺する前に「自分の愛したのは他ではなくシグルズだけ，シグルズが女性の気まぐれと「関わる」」と述べている．英雄に特徴的な表現とは思われない．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * vinna | 傷つける | * verpa | 入れる |
| * vaða | 行く | * taka | 触れる |
| * sveipa | 抱きしめる | * strjúka | 拭く |
| * sjá | 気をつける | * setja | 集める |
| * rísta | 切る | * rísta | 引き裂く |
| * nema | 受け取る | * leysa | 離す |
| * launa | 返す | * kunna | 習う |
| * komast | 得る | * kljúfa | 割る |
| * hvetjast | そそのかす | * hlœða | 積む |
| * halda | 置く | * hafa | 考える |
| * gleðja | 喜ばせる | * gá | 注意を払う |
| * firrast | 離れる | * finna | 出会う |
| * eggja | 導く | * efla | 戦う |
| * drepa | 壊す | * bregða | 入れる |
| * bregða | 終わらせる | * bregða | つける |
| *þykkja | 考える | | |

**ヘルギ (Helgi) 206 例**

ヘルギと名のつく英雄は Helgi Hjǫrvarðssonr, Helgi Sigmundssonr と「ユングリンガ・サガ」の Helgi Hálfdanarsonr の三人いるが，Helgi Hálfdanarsonr は例も少なく（11 例），独立した英雄としての分析は省略した．

ヘルギ H (Helgi Hjǫrvarðssonr　HHV)

- ヒョルヴァルズとシグルリンの息子
- ヴァルキュリャのスヴァーヴァとの恋
- 母方の祖父の敵フローズマル (Hróðmarr) を倒す
- 巨人ハティ (Hati) を殺す
- ハティの娘フリームゲルズ (Hrímgerðr) が賠償を要求
- フローズマルの息子アールヴ (Álfr) に殺される

ヘルギ S (Helgi Sigmundssonr　HH-I, HH-II)

- ヴォルスング一族
- シグムンドの息子
- フンディング王を倒し，その後フンディング殺しのヘルギと呼ばれる
- ホグニ王の娘シグルーンを巡ってグランマール (Granmarr) 王の息子たちと戦い，グランマール王たちだけでなく，ホグニ王まで殺す
- オージンの庇護を受けたシグルーンの弟ダーグ (Dagr) によって殺される
- 墓からシグルーンのもとへ戻る

**ヘルギ（英雄詩）(206)**

ヘルギ H (Helgi Hjǫrvarðssonr　HHV) (59)
ヘルギ S (Helgi Sigmundssonr　HH-I, HH-II)(147)

- ENTRY(2)

・ # II　njósna　偵察する　HH-II A.PH　njósna til e-s

HH-II の冒頭でヘルギ S がフンディング王を「偵察」に行ったことが述べられている．その後フンディング王を殺害し父の仇を討つ．そしてヘルギ S はフンディング殺しのあだ名を得る．父を殺されたことへ

の復讐の準備であり，英雄的行為と関係があるかもしれない．

・ # II　dvala　遅らせる　HH-I 50.12.VH

グズムンドたちとの戦いにおいて「ヘルギ S はもはや戦いを「遅らせる」ことはない」と述べられている．戦いを好む戦士にはふさわしい表現である．

- MEANING(5)

・ # III　予感がする　*　gruna um e-t　HHV G.PH

ヘルギ H がアールヴと戦って死ぬ「予感がする」と述べている．未来について言及することは特殊な能力によるものである．この類の能力についての動詞は巫女，神々，一部の英雄たちにのみ用いられており，死後オージンのもとでエインヘリャルとなる一流の英雄にふさわしい表現である．

・ # III　上陸させる　*　fœra　HH-I 32.6.VH/ HH-II F.4.VH

HH-I 32.6.VH

グズムンドたちとの戦いでヘルギ S が戦士たちを陸地に「上陸させる」．

HH-II F.4.VH

HH-I での描写を引用する形で出てきている．

戦闘において指揮官として戦士たちを「上陸させる」ことは英雄にとっては至極当然の行為である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　死期を決める　*　ljósta e-t helstǫfum　HHV 29.2.VH

ヘルギ H が巨人の娘フリームゲルズと戦っている際にアトリが「ヘルギ H がお前（フリームゲルズ）の「死期を決めて」しまっている」と述べている．巨人に勝つことも英雄にとっては重要な要素である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　鋭くする　*　hvessa　HH-I 6.5.VH

生まれたばかりのヘルギ S について述べている場面で「目を英雄のように「鋭く」する」と書かれている．同じ hvessa を用いて「鋭く見る」はソールに対してのみ用いられており，目が鋭いこと戦士としての特徴として重要なものであると思われる．韻律の影響がうかがえる．

・ 考えられる　＊　hyggja　HH-II 50.2.VH

死んだ後のヘルギ S が墓に戻ってきてシグルーンと語り合った後に死者の国へ戻る．その後シグルーンが「ヘルギ S はオージンの館から戻ってきていると「考えられる」ならすでに戻って来ているだろう」と述べている．

- ENTRY + MEANING(21)

・ # IV　vísa　そそのかす　HH-I 19.3.VH　vísa e-m til e-s

ホズブロッド (Hǫðbroddr) と結婚することになったシグルーンがヘルギ S に向かって「あの王ホズブロッドを戦いに「そそのかさ」なければ，私は彼と結婚する」と述べている．ヴァルキュリャでもあるシグルーンが英雄ヘルギ S に対して言う言葉としてはふさわしく，問題解決を戦闘にゆだねる点も英雄に特徴的であると言える．韻律の影響もうかがえる．

・ # IV　standa　支配する　HH-II 30.10.VH　standa á hálsi e-m

シグルーンをめぐる争いでその父ホグニも倒れる．ホグニの息子でシグルーンの弟のダーグ (Dagr) がオージンにいけにえを捧げ父の仇であるヘルギ S を倒す．そのダーグが「一番強く，王を「支配して」いたヘルギ S を倒した」との知らせをシグルーンのもとへ持ってくる．「王を「支配する」」ことは英雄として名誉なことであり，特徴づける表現と言えるかも知れない．hálsi が韻律の影響を受けている．

・ # IV　láta　払う　HH-I 12.1.VH　láta uppi

フンディング王を殺したヘルギ S に対して，フンディング王の息子たちが賠償を求めたが，ヘルギ S は「払わ」なかった．当時の習慣であった賠償金を拒み，その息子たちとさえ戦う姿勢を示す節においての表現であり，あくまで戦闘にこだわる英雄を描き出しているものと考えられる．

・ # IV　láta　上げる　HH-II 19.3.VH

シグルーンの婚約者であるホズブロッドとの戦いに向かうヘルギ S の軍船にホズブロッドの兄弟のグズムンドが「黄金の旗印を「上げている」のは誰か」と尋ねる．旗印を「上げる」ことが出来るのはその軍隊を率いる英雄である．そのためこの表現も英雄に特徴的なものである．

・ # IV　biðja　集める　HH-I 21.4.VH

ヘルギ S がシグルーンの婚約者であるホズブロッドを倒すために「軍隊を「集める」」．戦闘のための行為であり，英雄的な表現である．

・ slá　濡らす　HH-II 44.8.VH

ダーグに討たれたヘルギ S が墓から出たことを知ったシグルーンがヘルギ S の元へやってきて「ヘルギ S が血（死者の露）に「濡れている」」と述べる．この血を戦いでの返り血と考えるならば，戦場で死ぬことを貴ぶ英雄にふさわしい表現と言えるが，単に討たれたときの自分の傷口からの血であると考えると英雄に特徴的であるとは言えない．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * vega | 襲う | * taka | 着る |
| * stýra | 指揮する | * skæva | 動く |
| * nema | 奪う | * liggja | 留まる |
| * lýsa | 示す | * kasta | 脱ぐ |
| * fá | 支払う | * dyljast | 隠れる |
| * byggja | いる | * bregða | 取り除く |
| * bera | 勝っている | * ala | 満足させる |
| *þryngva | 支配する | | |

**グンナル (Gunnarr) 127 例**

- ギューキ王の息子
- ホグニ，グズルーンの兄
- ブリュンヒルドと結婚し，ブリュンヒルドにそそのかされシグルズを殺させる
- シグルズの死後アトリのもとへ嫁いだ妹グズルーンを訪ねる
- 財宝に目がくらんだアトリによって殺される

**グンナル（英雄詩）(127)**

- ENTRY(1)

・ # III　fullvega　戦う　SKS 33.2.VH

シグルズが死んだ後ブリュンヒルドがグンナルに対して述べる中で「「戦って」こられたあなたグンナルを誰も非難しない」と言っている．戦士にとって戦うことは当然である．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(6)

・ # III　内密の話に呼ぶ　*　heita sér e-m at rúnom　SKS 14.8.VH

だまされたと知ったブリュンヒルドにシグルズを殺すように頼まれたグンナルがホグニをどうすべきか「内密の話に呼ぶ」．英雄らしからぬ行為ではあるが，グンナル，ホグニによるシグルズ殺しは一連の物語において重大な事件であり，その場面で用いられているため重要であると考えられる．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　思い悩む　sveipa　SKS 13.3.VH

だまされたと知ったブリュンヒルドにシグルズを殺すように頼まれたグンナルが「思い悩む」．ブリュンヒルドの頼み，シグルズとの英雄同士の信頼関係というこの物語における重要な要素を対象としている．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　演奏する　hrœra　AM 66.2.VH/ slá　AM 66.3.VH

グズルーンが嫁いだアトリがグズルーンの願いを聞いてシグルズの復讐と財宝の奪還に乗り出し，グンナル，ホグニ兄弟と戦う．グンナル，ホグニ兄弟は敗れ，グンナルは財宝の在処を知っているために囚われの身となり，両手を縛られている．そこにグンナルの妹であるグズルーンが琴を差し入れる．そのことをグンナルは足で「演奏する」．それは非常に上手だった．音楽が英雄の素養の一つと考えられていたのであろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　かき鳴らす　sveigja　OD 29.6.VH

グンナルを慕っていたアトリの妹オッドルーンが囚われの身となったグンナルのために宴会を開き，そこでグンナルがハープ（琴）を「かき鳴らす」．上で述べた「演奏する」と同様に英雄と音楽との関係を示している．

・ 推測する　*　ráða　AM 22.6.VH

グンナルの二番目の妻グラウムヴォル (Glaumvǫr) が自分の見た夢（グンナルが絞首台に吊るされていて，蛇がグンナルを食べる）についてグンナルに語る．そしてそれについて「推測」しろと言う．韻律の影響がうかがえる．

・ がっかりする　*　hnipna　GK-II 7.1.VH

グズルーンがシグルズについて嘆いている中で「グンナルはホグニがシグルズが怪我で死んだと私に告げたとき「がっかりした」」と言っている．韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(11)

・ # IV　missa　死ぬ　AK 11.4.VH

アトリからの招待を受けて旅立つ前にグンナルが「もしグンナルが「死ねば」，狼が財宝を支配するだろう」と述べている．missa は他のところでは「失う」という意味で用いられており，それほど特徴的な表現とは思われない．しかし属格主語を取って英雄に用いられている点は少し特殊ではある．

・ # IV　láta　変える　SKS 65.5.VH

ブリュンヒルドが死ぬ間際にグンナルに「シグルズと一緒に死んだ戦士がみんな入れるくらいに館を「変えて」くれ」と頼む．戦死した英雄が入れる館とはオージンの館を連想させ，それだけの力がグンナルにあることを示唆している表現かもしれない．

・ # IV　halda　誓う　BSG 18.7.VH　halda eiðom viðe-t

グンナルがシグルズに対して以前に「誓っていた」．英雄にとって誓いは非常に大事な要素であり，その誓いを破ってシグルズを殺した場面でこの表現が用いられていることは特徴的である．

・ # IV　næma　殺す　BSG 1.4.VH　næma e-t fiǫrvi （命を「取る」）

ホグニがグンナルに向かって「シグルズを「殺そう」なんて」と述べている．シグルズと言う一級の英雄を「殺す」行為は非常に大きな意味を持っており，特徴的な表現の可能性がある．fiǫrvi が韻律の支配を受けている．

・ vinda　向ける　AK 6.1.VH

シグルズを殺されたグズルーンはアトリの元へ嫁いだ．そのアトリ王がグズルーンの兄たちグンナル，ホグニを財宝目当てに自分たちの城に来させるために使者を使わす．その使者の話を聞いた後グンナルがホグニにこの話をどう考えるのかを聞くために頭をホグニに「向けた」．特に英雄的な行動とは結びついていない．

・ vera　縛る　AK 29.2.VH　vera í bǫndom

アトリの罠にかかってグンナルが「縛られた」.　特に英雄的な行動とは結びついていない.

・ hrœra　行く　BSG 13.1.VH　hrœra fót

グンナル, ホグニ, グズルーン, ブリュンヒルドたちがシグルズに死について語っている中で, グンナルが「行く」. hrœra はほかの場面で「動かす」の意味で用いられており, ここでも「足を動かす」と考えられるので特徴的とは言えない.

＊ sjá　訪ねる　＊ ráða　だます

＊ knýja　弾く　＊ hafa　思われる

**ホグニ (Hǫgni) 61 例**

- ギューキ王の息子
- グンナルの弟, グズルーンの兄
- シグルズの死後アトリのもとへ嫁いだ妹を訪ねる
- 財宝に目がくらんだアトリによって殺される

なお「ユングリンガ・サガ」に 4 例ホグニという名の王が登場するが, 別人であるため分析対象には加えなかった.

**ホグニ（英雄詩）(61)**

- ENTRY(1)

・ # II　verjast　戦う　AK 19.6.VH

アトリとの戦いにおいてホグニが「七人を切り, 八人目を火の中へ投げ込んだ」の後に「ホグニはこのように「戦う」必要があった」と述べられている. ホグニの最期での超人的な戦闘を描いており, 英雄にふさわしい表現である.

- MEANING(1)

・ # III　投げ込む　＊　hrinda　AK 19.4.VH

アトリとの戦いにおいてホグニは非常に勇敢に戦い七人の戦士を切り, 八人目を「火の中へ「投げ込んだ」」. verjast で述べたように英雄にふさわしい超人的な戦闘の場面で用いられている. 韻律の影響がうかがえる.

- ENTRY + MEANING(7)

gerast　出発する　AM 11.1.VH　gerast heiman

ホグニの妻でルーンに長けているコストベラ (Kostbera) がホグニがアトリの罠に向けて出発するときに「「出発」するのですね」と述べている.

| | | | |
|---|---|---|---|
| * níta | 断る | * kløkkva | 怯える |
| * heita | 婚約させる | * gætast | 気にする |
| *óast | 恐れる | *árna | させる |

**グズルーン (Guðrún) 412 例**

- ギューキ王の娘
- グンナル，ホグニの妹
- 最初シグルズと，次ぎにアトリと結婚する
- 兄たちの復讐のため，自分とアトリとの間に生まれた息子を殺してアトリに食べさせる
- ホグニの息子ニヴルング (Niflungr) と共にアトリを殺す
- その後，ヨーナクル (Jónakr) 王に嫁ぎ３人の息子を得る
- シグルズとの間に出来た娘スヴァンヒルドの復讐をするようにその３人の息子たちを扇動する
- ３人の息子たちは死ぬ

**グズルーン（英雄詩）(412)**

- ENTRY(15)

・ # II　snýta　殺す　AM 85.5.VH

グズルーンがアトリに嫁いだ後，そのアトリが財宝を奪うためにグンナル, ホグニ（グズルーンの兄弟）を殺す．それに対する復讐としてグズルーンはアトリと自分との間に生まれた息子たちを殺した．そのことを知ったアトリがグズルーンに対して「お前はアトリの一族（息子）を「殺した」」と責めている．このAM において「身内を殺すこと」への復讐は「身内を殺すこと」である点を強調しているのであろうか．韻律の影響が見られる．

・ # II　lyfja　殺す　AM 78.4.VH　lyfja e-m elli

snýta で述べたように自分とアトリとの間に生まれた息子を殺す場面でグズルーンが息子たちに「私 (グズルーン) はお前たち（息子たち）を「殺す」ことを望んでいる」と述べている．自分の息子を殺すこ

とで復讐を果たすという異常ではあるが重要な場面で用いられている．韻律の影響が見られる．

・ # I　　lækna　　治す　　GK-II 39.7.VH
・ # II　　líkna　　世話をする　　GK-II 39.7.VH

アトリが不吉な夢を見たことに対してグズルーンが「私があなたを焼き始めると，例えあなたのことを嫌っていても「世話をして」，「治す」でしょう」と述べている．グズルーンのヴァルキュリャ的側面（特殊な能力を持つ女性英雄）との関わりを示していると考えられる．両方とも韻律の影響が見られる．

・ # II　　kveina　　嘆く

GK-I 1.7.VH

シグルズの死んだ後その傍らで悲しんではいたが，他の女たちのように手を打ったり，「嘆い」たりはしなかった．

GK-II 11.7.VH

GK-I 1.7.VH と同じ場面の描写をグズルーン自身が述べている．「私は他の女たちのように手を打ったり，「嘆い」たりはしなかった」．どちらの例においても非常に強い女性としてグズルーンを描いている．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　hrjóðast　　脱ぐ　　AM 49.4.VH　　hrjóðast ór e-m

アトリとグンナル，ホグニとの戦いにおいてグズルーンはグンナルの側について戦うために上着を「脱いで」刀を取り，アトリの戦士を倒した．妻からヴァルキュリャへの変身を表しているのであろうか．韻律の影響が見られる．

・ # II　　hræfa　　耐える　　AM 71.7.VH　　hræfa um e-t

グンナル，ホグニを殺された後グズルーンがアトリに対して「ホグニが生きている間は何でも「耐えた」」と述べている．グズルーンの精神的強さを表している．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　hnafa　　切り落とす　　GH 12.5.VH

自分とヨーナクル王との間に生まれた息子たちを，自分とシグルズとの間に生まれた娘スヴァンヒルドの復讐へ駆り立てるためにいろいろと経験したこと（復讐）を語る中で「アトリとの間の息子たちの頭を「切り落とす」までは償いを得ることはなかった」と述べている．復讐に対する執着の強さを示している表現である．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　hjúfra　泣く　GK-I 1.5.VH/ GK-II 11.5.VH

GK-I 1.5.VH

シグルズの死後その傍らに悲しんで座っているグズルーンが「「泣く」ことはしなかった」と述べられている．

GK-II 11.5.VH

GK-I での状況を自分自身で述べている．

共にグズルーンの精神的強さを表しているのであろうか．両者とも韻律の影響が見られる．

・ # II　hœlast　自慢する　AM 84.4.VH

アトリに向かって自分たちの息子を殺したことを述べる最後に部分で「私はそれを「自慢は」しない」と言っている．復讐のために必要であったとは言え，自分の行った行為のむごさを自覚している表現である．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　hálsa　抱く　GK-I 13.7.VH/ GK-3 4.1.VH

GK-I 13.7.VH

シグルズの死後，悲しんでいるグズルーンに対してギューキ王の娘グッルルンド (Gullrǫnd)（グズルーンの姉妹）が次のように言う「シグルズを見て，キスしなさい，かつて彼を「抱いた」ように」．グズルーンとシグルズとの愛情を強調している．韻律の影響がうかがえる．

GK-3 4.1.VH

浮気の疑いをかけられたグズルーンがアトリに対して「ショーズレクを「抱いた」だけ」と弁明している．韻律の影響がうかがえる．

・ # I　grýma　悪意を抱く　SKS 60.8.VH

ブリュンヒルドがグンナルに語る中で「グズルーンが寝床にいるアトリに刃先を向けて「悪意を抱く」」と述べる．アトリへの復讐の気持ちを強調している．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　gleyma　忘れる　GK-II 24.1.VH

グリームヒルド (Grímhildr) のつくった飲物を飲んだグズルーンがグンナル，ホグニたちのことを「忘れた」と述べられている．グリームヒルドは以前にもシグルズがブリュンヒルドを「忘れる」ように計略をめぐらせている．ここでは悲惨な復讐に対する戸惑いの気持ちが表されている．韻律の影響がうかがえる．

・ # I　fullhyggja　一番愛している　GH 15.4.VH

殺されたスヴァンヒルドについて「子供たちの中で「一番愛していた」」と述べている．スヴァンヒルドが殺されたことに対する復讐をするように他の息子たちに働きかけている作品であるため，スヴァンヒルドに対するグズルーンの思いは重要なポイントとなる．

・ # II　vexa　ワックスをかける　AM 103.3.VH

グズルーンがアトリに対してアトリの死体を包む経帷子に「ワックスをかけたい」と述べている．戦死者を選ぶ女ヴァルキュリャとしての能力に関わる表現であろうか．他に 2 例見られる vexa とは別の動詞．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(17)

・ # III　欺瞞に満ちている　*　leika tveim skiǫldom　AM 74.8.VH

グズルーンは兄弟を殺されたことへの復讐を考えているにも関わらず，アトリに嘘をつく．グズルーンは「欺瞞に満ちている」と述べられている．非英雄的行為である「欺瞞」ですら復讐のためには許されることを示しているのだろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　押しのける　*　hrinda　GH 13.3.VH

復讐をけしかける話の中でグズルーンは自分が実の息子を殺してまで復讐した話をする．そのことに対して「私はノルンの囲い（運命）を「押しのけたかった」」と述べている．復讐と運命との関わりを表している表現である．

・ # III　手を掛ける　festa hendr　AM 49.8.VH

グンナル，ホグニを守るために刀を抜いたグズルーンについて「彼女は「手を掛ける」ときはいつでも戦いに長けている」と述べられている．ヴァルキュリャとしてのグズルーンを表している．

・ # III　手に落ちる　koma í hendr e-s　AM 56.6.VH

アトリがグズルーンとの関係を悔やんでいる中で「あなたが私たちの「手に落ちた」時から滅多に平安はなかった....」と述べている．アトリとグズルーンの結婚は結果的に大きな悲劇をもたらしている．hendr に韻律の影響がうかがえる．

・ # III　ためらう　hvarfa　GK-II 6.1.VH

シグルズの死についてグンナルに尋ねるのを長いこと「ためらった」．シグルズの死はグズルーンにとって大きな出来事である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　こらえる　varna viðe-m　AK 30.7.VH

グンナル, ホグニの死を聞いたグズルーンが涙を「こらえた」．グズルーンの精神的強さを示している．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　身体を屈める　*　hníga viðe-m　GK-I 15.1.VH

シグルズの死体を見てグズルーンが枕に「身体を屈める」．悲しい感情を身体で表現している．グズルーンの感情と関わる表現である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　寂しく思う　*　sakna　GK-I 20.1.VH

「シグルズがいなくて「寂しく思う」」と述べられている．グズルーンの感情と関わる表現である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　偲ぶ　*　erfa　AM 75.2.VH

グズルーンがグンナル, ホグニを「偲ぶ」ための宴会を準備した．グズルーンの感情と関わる表現である．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　軽やかに歩く　*　skæva　AK 37.1.VH

息子たちを殺した後アトリの元に酒，つまみなどを運ぶ際にグズルーンは「軽やかに歩く」．復讐の一部を終えた満足感を表しているのであろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ 手を入れる　taka í e-t　GK-3 7.4.VH

グズルーンが煮えたぎる釜に「手を入れる」前に 700 人の戦士が広間に入った．熱い湯に手を入れることはショーズレクとの関係での自らの身の潔白を晴らすための行為である．

・ 座らせる　leggja　AM 77.2.VH

グズルーンはグンナル, ホグニを殺された復讐にアトリと自分との間の子供を殺す時にその子供たちを「座らせる」.

・ ため息をつく　verpa ǫndo　SKS 29.1.VH

シグルズが死ぬ際にグズルーンが嘆いて「ため息をついた」.

・ 選び出す　*　velja　GH 7.4.VH/　kjósa　e-t af e-m　GK-II 34.1.VH

GH 7.4.VH

スヴァンヒルドの復讐をさせるためにグズルーンが箱からシグルズの兜を「選び出し」, それを息子たちのところへ持ってくる.

GK-II 34.1.VH

「王たちの中からアトリを「選び出した」のは私だ, しかしいやいや結婚した」と述べている.

・ 酔わせる　*　drekka　AK 15.4.VH

アトリの招待に応じてグンナル, ホグニがやって来た時グズルーンは少し「酔わせられていた（酔っぱらっていた)」. 兄たちが殺されることを知っているグズルーンの不安な気持ちを表しているのか, または酔っていることによってこの後のグズルーンの発言に対する信頼性を弱めているのか.

・ 気遣う　*　gá　AK 41.8.VH

グズルーンがアトリとの間の息子を殺したことがわかった後, 騒然とする中で, グズルーンは黄金を家来たちに分け与えた. 彼女は神殿のことはまったく「気遣わ」なかった.

・ （家から出ないように）助言する　*　letja e-t heiman　AM 48.2.VH

アトリの招待に応じてやってきたグンナル, ホグニに対してグズルーンが「(家から出ないように）助言した」. 韻律の影響がうかがえる.

- ENTRY + MEANING(57)

・ # IV　láta　復讐する　AK 43.8.VH　láta e-t giǫld e-s

兄グンナル, ホグニを殺されたグズルーンがアトリに「復讐する」. 英雄にとっての特徴的な行動である復讐を表しており, グズルーンが女性とは言え, 英雄のカテゴリーに入る存在であるため特徴的な表現と言える.

・ # IV　gœða　悪くなる　AM 71.6.VH　gœða á

アトリにグンナル, ホグニを殺されたグズルーンが特にホグニが死んだのを知らされたときにこれから自分が「悪くなる」と述べて，英雄の特徴の一つである復讐を暗示している．特徴的な表現と言えるかも知れない．

・ # IV　vega　運ぶ　GH 10.4.VH

グズルーンが自分とヨーナクル王との間に生まれた息子たちを，自分とシグルズとの間に生まれた娘スヴァンヒルドの復讐へ駆り立てるためにいろいろと経験したこと（復讐）を語る中で「私は三回英雄たちを」運んだ」と述べている．これはシグルズ, グンナル, ホグニというグズルーンにとって大切な人を火葬するために「運んだ」ことを示唆している．グズルーンがこの三人の英雄たちにとって不幸（死）をもたらす存在であることと関係があるかもしれない．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　stríða　戦う　AM 76.6.VH

グズルーンが兄たちの復讐のためにアトリたちと「戦った」．女性の英雄としての特徴と考えられる．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　skipta　手配する　AM 79.3.VH

兄たちへの復讐のためにグズルーンがアトリとの間に生まれた息子たちの首を切り落とすように「手配した」．非常に重要な復讐に関わっている．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　reifa　運ぶ　AK 35.4.VH

グズルーンが貢ぎ物（アトリとの間に出来た息子の死体からつくったもの）をアトリに「運ぶ」．グズルーンの復讐を特徴づける行為との関わりからすれば重要な表現と言える．

・ # IV　lesa　集める　GK-II 11.3.VH

グズルーンがシグルズの死体を「集める」．グズルーンとシグルズとの直接的関わるを表現している．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　leiða　一緒に暮らす　SKS 41.4.VH　leiða e-t aldri

シグルズが死んだのをグズルーンが嘆いているのを聞いたブリュンヒルドが「グズルーンがシグルズと「一緒に暮らす（人生を送る)」ことは無い」と述べている．シグルズ, グズルーン, ブリュンヒルドの関係をよく表している場面で用いられている

・ # IV　leggja　キスする　GK-I 13.6.VH　leggja munn viðe-t

グズルーンが死んだシグルズに「キスをする」．グズルーンのシグルズに対する愛情を表している．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　hreyta　投げる　AM 46.4.VH

アトリが兄たち (グンナル, ホグニ) に対して刀を向けたのを知った時，グズルーンは首輪を「投げた」．兄たちを守るためにヴァルキュリャとして戦うことを意味しているのだろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　hafa　殺す　AM 51.3.VH　hafa e-t í helio

アトリがグンナル, ホグニを討とうとしたときにグズルーンが兄たちを守るためにアトリの戦士を「殺す」．女性戦士としての特徴を描いている．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　hafa　結婚する　GK-II 34.4.VH

シグルズの死後グリームヒルドに勧められてアトリとの結婚を承諾する場面で用いられている．一連の物語の中でアトリとグズルーンとの結婚は最終局面へ向かう大きな出来事である．

・ # IV　ganga　結婚する　GK-II 27.2.VH　ganga meðe-m

グリームヒルドに結婚を勧められている際に「シグルズ以外の戦士とは「結婚する」ことはない」と述べている．シグルズとの強い結びつきを表している．

・ # IV　festa　手を掛ける　AM 49.8.VH　festa hendr

アトリたちとグンナル, ホグニが戦っているのを見たグズルーンが戦いに参加する場面での描写．hendr が韻律の影響を受けている．

・ # IV　efna　守る　AM 104.3.VH

グズルーンが約束を「守って」アトリを殺した．約束を守ること，復讐という英雄にとって重要な事を表現している．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　bella　喜ぶ　GK-II 29.2.VH　bella glaumi

シグルズの死を悲しんでいるグズルーンがグリームヒルドにアトリとの結婚を勧められるなかで「私は「喜ぶ」ことは出来ない」と述べている．シグルズへの強い思いがうかがえる．glaumi に韻律の影響がうかがえる．

・ synja　取り除く　GK-3 8.8.VH　synja e-s fyrir e-t

アトリとの会話の中でグズルーンは「過ちを「取り除く」必要がある」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ létta　止める　GK-II 31.9.VH

シグルズが死んで嘆いているグズルーンにグリームヒルドがアトリとの再婚を勧める．それに対して拒否することを「止めない」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ hefja　埋める　AM 102.8.VH　hefja e-t út

グズルーンが兄たちの復讐を行い，アトリを殺す．死ぬ間際にアトリがグズルーンに「私アトリを「埋めて」くれ」と言う．英雄的な特徴と結びつく表現ではない．

・ drýgja　増やす　AM 82.5.VH

アトリに復讐するためにアトリと自分の間に生まれた子を殺し，その頭蓋骨から杯をつくったグズルーンがアトリに飲物を「増やす」(注ぎ足す)．韻律の影響が見られる．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * yppa | 開ける | * verja | 包む |
| * vaða | 突進する | * telja | 期待する |
| * svíkja | だまし取る | * spilla | 死ぬ |
| * spilla | 殺す | * slá | 叩く |
| * skera | 首を切り落とす | * skella | 切り落とす |
| * sá | まき散らす | * rœkja | 心配する |
| * rœða | 話しかける | * ráða | 望む |
| * níta | 拒む | * mæla | 嘘をつく |
| * lokka | 誘惑する | * komast | 行く |
| * kjósa | 選びだす | * hverfa | 向く |
| * hrinda | 追い払う | * hlaða | 身につける |
| * grafa | 壊す | * gráta | 嘆く |
| * gá | 気にする | * fljóta | 泳ぐ |
| * fara | 進み出る | * falla | 失う |
| * drekka | 葬式を行う | * bregða | 降ろす |
| * blóta | 殺す | * bjóða | 示す |
| * bera | 言う | * benda | 示す |
| * auka | 子供をもうける | *œxla | 用意する |
| *árna | 行う | | |

**ブリュンヒルド (Brynhildr) 234 例**

- ブズリ (Buðli) の娘
- アトリの妹
- ヴァリュキュリャ
- シグルズと結婚を約束するが，だまされてグンナルと結婚する
- グンナルをそそのかしてシグルズを殺させ，その後自殺する

**ブリュンヒルド（英雄詩）(234)**

- ENTRY(5)

・ # II　sveltast　死ぬ　OD 19.7.VH

グンナルの死を嘆いているオッドルーンが出産の苦しみにいるボルグニュ (Borgny) に対して過去の出来事を語る中で「ブリュンヒルドがシグルズの元で「死んだ」」と述べている．ブリュンヒルドとシグルズの関係を表している．韻律の影響もうかがえる．

・ # II　　miðla　　引き裂く　　SKS 47.7.VH

グンナルをそそのかしシグルズを殺させた後，ブリュンヒルドがそのシグルズを追って死ぬ時に，自分の身を刀で「引き裂いた」．ブリュンヒルドの激しい性格を表している．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　glata　　殺す　　HB 4.6.VH

地獄へ向かうブリュンヒルドに対して巨人の女が「お前がグンナル, ホグニを「殺し」，その館を滅ぼした」と述べている．激しい気性のブリュンヒルドにふさわしい表現である．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　　gefast　　結婚する　　SKS 37.6.VH

アトリが妹のブリュンヒルドに「結婚し」なければ財産は分けないと言う．シグルズをめぐる一連の話においてブリュンヒルドとグンナルの結婚は大きな意味を持っている，それについてこの gefast で言及されている．

・ # II　　gœla　　喜ばせる　　SKS 9.3.VH

ブリュンヒルドがシグルズとグズルーンとの間を嫉妬して「醜い考え（復讐）によって自分を喜ばせるだけ」と述べている．この三者の関係が一連の物語で悲劇を生み出す．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(7)

・ # III　　眠っている　　*　　sofa　　GRP 15.1.VH/ SD 2.2.VH

GRP 15.1.VH

シグルズが叔父グリーピの元で未来のことを尋ねた際にグリーピが「山の上に王の娘 (ブリュンヒルド) が鎧を着て「眠っている」」述べる．

SD 2.2.VH

シグルズが山の上で鎧を着て横たわっている女性と出会い，鎧をはずす．そしていろいろと質問する．それに対してシグルドリーヴァ（ブリュンヒルド）が「私は長い間「眠っていた」」と答える．ブリュンヒルドはオージン（神）により眠らされシグルズ（英雄）により起こされる．そしてそこから悲劇が始まる．

・ # III　吹き出す　*　fnœsa　GK-I 27.6.VH

シグルズが怪我をしたのを見たときブリュンヒルドが毒を「吹き出した」．グズルーンの立場を中心とした作品であるためブリュンヒルドを魔女のように描いたのであろうか．事実ブリュンヒルドはヴァルキュリャとして人間を越える能力を持っていた．

・ # III　ヴァルキュリャになる　geta hiálm　OD 16.2.VH

グンナルがブリュンヒルドに「ヴァルキュリャになれ」と命じた．ブリュンヒルドはヴァルキュリャの代表としてその名をあげられる存在であるため，この意味がブリュンヒルドにしか用いられていないことは当然であると思われる．hiálm に韻律の影響がうかがえる．

・ # III　あしらう　skipa　GRP 49.4.VH

シグルズが叔父グリーピに未来のことを尋ねる最後の方の部分でグリーピが「ブリュンヒルドがお前を「あしらう」」と述べる．それに続いて「グンナル，シグルズがブリュンヒルドに魔法を使う」とも述べている．シグルズとブリュンヒルドとの不幸な関係を暗示する表現である．

・ 崩れ落ちる　*　hníga　SKS 48.1.VH

グンナルをそそのかしシグルズを殺させた後，ブリュンヒルドがそのシグルズを追って死ぬ前に長枕に「崩れ落ちた」．韻律の影響がうかがえる．

・ 確信する　verða víss e-s　HB 13.5.VH

地獄へ向かう道中で巨人の女に対してブリュンヒルドが「私はグンナル，グズルーンたちが私をだましたことを「確信した」」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ 押し返す　*　hrinda　SKS 43.1.VH

シグルズが死んだ後，思いを果たしたブリュンヒルドがシグルズの後を追って死のうとするのをグンナルたちが止めようとする．しかしブリュンヒルドはそれらを「押し返した」．韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(22)

・ # IV　vega　与える　SD C.PH

オージンが自らの意に反して別の英雄を勝たせたブリュンヒルドに罰として眠りの刺を刺す際に「これから先は決して勝利を「与える」ことはない」と宣告している．戦死者を選ぶ女ヴァルキュリャとしての特徴と深く結びついている表現であり重要である．

・ # IV　rekja　織る　HB 1.6.VH/ OD 17.2.VH

HB 1.6.VH

ブリュンヒルドには「地獄にシグルズを訪ねて行くよりも布を「織る」ほうがあっている」と述べられている．

OD 17.2.VH

ブリュンヒルドが布を「織り」，人々と国とを持っていた（支配していた）．どちらの場合も borða が韻律の影響を受けていることがうかがえるが，ヴァルキュリャは人の人生を紡ぐとされている[注2]ため特徴的な表現なのかも知れない．

・ # IV　strengja　強くなる　GK-I 27.2.VH

シグルズの死後ブリュンヒルドが「強くなる」．韻律の影響が見られる．

・ # IV　ráða　与える
SD 22.1/ 23.1/ 24.1/ 26.1/ 28.1/ 29.1/ 31.1/ 32.1/ 33.1/ 35.1/ 37.1

þat ræðek þér it .... のパターンになっている．

シグルズに助言を「与える」．戦士を庇護するヴァルキュリャとしては当然の表現である．

・ # IV　leika　望む　SKS 39.3.VH　leika e-m í mun

シグルズを殺させた後ブリュンヒルドが自らの身の上を話す場面で「シグルズを「望んでいた」」と述べている．シグルズとブリュンヒルドとの関わりは一連の物語において中心となるものであるが，この表現でシグルズへの思いが表されている．mun に韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　hafa　抱きしめる　SKS 6.5.VH　hafa e-t sér á armi

だまされたと知ったブリュンヒルドが「シグルズを腕に「抱きしめたい」」と語る．hafa を用いているところから単に抱くのではなく，抽象的に所有することも意図しているのかも知れない．シグルズとの関係で用いられているため特徴的な表現かも知れない．

注2 菅原 1984, p.68

・ komast　生まれる　SKS 45.7.VH　komast fyr kné móður

シグルズを殺させた後自らも死のうとするブリュンヒルドについてホグニが「彼女は「生まれる」時からねじまがって出てきた」と述べている．韻律の影響が見られる．

・ hafna　失う　SKS 31.7.VH

シグルズが死んだのを知ってグズルーンが嘆くのを聞いたブリュンヒルドが笑うのを見たグンナルが「どうして顔色を「失う」のか」と尋ねる．韻律の影響がうかがえる．

・ ganga　捨てる　SKS 14.6.VH　ganga frá e-m

ブリュンヒルドがグンナルを「捨てる」ことをグンナルがしばしば考える．

・ beiða　泣かす　GK-I 23.6.VH　beiða e-t gráz

シグルズが死んで嘆いているグズルーンをブリュンヒルドが「泣かせた」．gráz に韻律の影響がうかがえる．

| | | | |
|---|---|---|---|
| * vinna | 害を加える | * týna | 殺す |
| * smjúga | 身につける | * setjast | 起き上がる |
| * hvetjast | 大きくする | * hvetja | 怒らせる |
| * heita | 婚約する | * gerast | 始める |
| * finna | 考え出す | * binda | まみれる |
| * bera | 生まれ変わる | *þryngva | 圧迫する |

**シグルーン (Sigrún) 110 例**

- ホグニ王の娘
- ヴァリュキュリャ
- ヘルギ H と結婚する

**シグルーン（英雄詩）(110)**

- ENTRY(0)
- MEANING(6)

・ # III　魔法で呼び戻す　kjósa　HH-II 29.4.VH

王でさえ運命に抵抗できないと述べられた後にシグルーンが「私は死んだ人を生き返らせたい」と言う．戦闘での運命を司るとされるヴァルキュリャ[注3]にはふさわしい動詞である．

・ # III　和らげる　*　svefja　HH-II 42.10.VH

死んだヘルギSが墓に戻ってきて，その怪我をした傷口からの血を「和らげる」ことを妻であるホグニ王の娘でヴァルキュリャのシグルーンに頼む．ヴァルキュリャとしての能力を表している．韻律の影響がうかがえる．

・ もたれかかる　felast　HH-II 29.6.VH

シグルーンがヘルギSに対して「死んだ者を生き返らせたい，そしてあなた（ヘルギS）の胸に「もたれかかれる」ものならば」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ 涙を流す　*　gráta　HH-II 45.5.VH

ヘルギSがシグルーンに「ヘルギSが血にまみれたのを引き起こしたのはお前だ．お前は眠る前につらい「涙をながす」．その涙が血のように落ちる」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ 若くして死ぬ　*　verða skammlíf　HH-II R.PH

死んでしまったヘルギSが墓に戻ってきてシグルーンと話をする．しかしヘルギSは再び死者の世界に戻ってしまい，結局シグルーンは「悲しみにより「若くして死ぬ」」．これに続いて「その後ヘルギS，シグルーンは生まれ変わったと信じられている」と述べられている．

・ よりかかる　*　hníga　HH-II 25.4.VH

シグルーンの親兄弟たちとホズブロッドを含むグランマルたちとの戦いの後，シグルーンが瀕死の状態の婚約者ホズブロッドのもとへ行き「「よりかかる」ことはない」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(10)

・ # IV　vinna　止める　HH-II 28.5.VH

シグルーンをめぐる争いに勝ったヘルギSのもとへ来たシグルーンに対してヘルギSが「戦いを「止める」な」と述べている．戦いを司るヴァルキュリャにふさわしい．韻律の影響がうかがえる．

注3 菅原 1984, p.68

・ renna　しがみつく　HH-II E.PH　renna á e-t

ホズブロッドと結婚することに決まったシグルーンがヘルギ S を探して，そして会えたときに彼の首に「しがみついた」.

・ hirða　心配する　HH-II 18.1.VH

ホズブロッドとの結婚を知らせに来たシグルーンに向かってヘルギ S が「ホグニの怒りも，一族の怒りも「心配する」な」と述べている．韻律の影響がうかがえる.

＊ugga　怯える　＊sitja　留まる

＊sœkja　捜す　＊sœkja　つかむ

＊lifa　暮らす　＊huggast　悲しむ

＊brjóta　破る

**アトリ (Atli) 201 例**

アトリという名前の英雄は 3 名登場するが，ここではフン族の王アトリのみを分析対象とする.

- フン (Hunn) 族の王
- ブズリの息子
- ブリュンヒルドの兄
- 財宝目当てにグズルーンの兄グンナル，ホグニを殺す
- グズルーンに自分たちの間に生まれた息子たちの心臓を食べさせられる
- グズルーンとホグニの息子に殺される

**アトリ（英雄詩）(201)**

- ENTRY(5)

・ # II　rekjast　目覚める　AM 90.2.VH　rekjast ór svefni

グズルーンが兄弟グンナル, ホグニの仇を討つためにホグニの息子フニヴルング (Hniflungr) に寝入っているアトリを刺させる．そのときアトリが「目覚める」．この後グズルーンとアトリとの間で物語の最後へ向けての対話が始まる．韻律の影響がうかがえる.

・ # II　nýta　食べる　GK-II 42.8.VH

アトリがおかしな夢を見て，それについて語る中で「私が狼の死体を「食べ」なければならなかった」と述べている．後にグズルーンに復讐される際に自分自身の息子を食べることを暗示しているのであろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # I　melta　消化する　AK 38.5.VH

グズルーンがアトリに復讐する手始めに自分とアトリとの間の息子を殺し，その心臓をアトリに食べさせた後に，グズルーンが「お前が死肉を「消化する」」と述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ # II　hrinkja　奪う　GK-3 5.5.VH/ GK-3 5.7.VH

グズルーンがアトリに対して「あなたは私から鎧を着た兄弟を「奪い」，すべての親族を「奪った」」と述べている．強大な王としてのアトリの存在を示し，これから始まる復讐を暗示しているのであろうか．韻律の影響がうかがえる

・ # II　greipa　行う　AM 86.11.VH

兄弟を殺されたことを非難しているグズルーンが「お前はひどいことを「行った」」と述べている．アトリがホグニを殺したことを意味しており重要である．韻律の影響がうかがえる

- MEANING(6)

・ # III　尊大である　hefja stórum　AM 97.4.VH

アトリとグズルーンが罵り合う中でグズルーンが「私もおとなしくなかったけれど，あなたはもっと「尊大であった」」と述べている．王としてのアトリにはふさわしい．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　警戒する　varna viðe-m　AK 42.4.VH

グズルーンが復讐のために自分との間の子を殺し，その心臓を食べさせたことを知ったアトリは酔っぱらい，グズルーンを「警戒し」なかった．その結果アトリはグズルーンに殺されてしまう．韻律の影響がうかがえる．

・ 利用する　*　njóta　AM 56.4.VH

アトリがグズルーンを「利用する」ことが出来る．

・ 無理矢理させられる　＊　beiða　AM 92.5.VH

アトリがホグニの息子フニヴルングに刺されて死ぬ間際にグズルーンに語る中で「私はお前に求婚するために「無理矢理戻ってこさされた」のだ」と述べる．こういう不幸な結果に終わる結婚を後悔しての発言であろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ 成功する　＊　vinna　AM 72.9.VH

グズルーンが「アトリがグズルーンの兄たちを殺したことを良いことだと納得させるのには「成功」しなかっただろう」と述べている．

・ 殺したと宣言する　＊　lýsa víg　AM 69.2.VH

「戦いを明らかにする」．アトリがグズルーンにグンナル，ホグニを殺したことを伝えた後にそれに対してグズルーンが「喜んでいるね，「殺したと宣言して」」と述べている．

- ENTRY + MEANING(30))

・ # IV　eiga　完了　AK 31.2.VH

グンナルがアトリに殺される前にアトリに向かって「かつて誓った誓いがこのようになった」と述べている．この中で誓うことに関して eiga を完了の助動詞として用いている．ふつうは一般の動詞として用いられる eiga を助動詞的に用いる用法は特殊である．

・ # IV　bera　ｂｅ　SKS 33.7.VH

ブリュンヒルドがグンナルに向かって自分の兄であるアトリが一番強いと述べている中で用いられている．英雄の強さを描写する際に用いられているため特徴的な用法である．

・ # IV　valda　決める　AM 60.9.VH

とらわれの身となったホグニがアトリに向かって「自分で「決めろ」（好きにしろ）」と言っている．同じ英雄のカテゴリーに入るホグニを自由に処分できることを意味する表現であり，英雄としてのアトリの力を表している．

・ # IV　telja　支払う　SKS 37.12.VH

「ブリュンヒルドの兄であるアトリが彼女が結婚しなければ父から相続した財産などを「支払わない」と言っている」とブリュンヒルドが言う．英雄社会における財産相続について述べている．

・ # IV　　stríða　　引き起こす　　HM 8.1.VH

アトリがアトリ自身とグズルーンとの間の子エルプ (Erpr), エイティル (Eitill) の死を「引き起こした」とグズルーンは考えている．グズルーンによる復讐劇のなかでは重要な事件について言及している．

・ stíga　　殺す　　AM 68.2.VH　　stíga um e-t

アトリがグンナル, ホグニを「殺す」．英雄であるアトリがグンナル, ホグニという英雄を２人も「殺す」ことに用いられている表現であり，英雄特有のものと言えるかも知れない．韻律の影響がうかがえる．

・ sofa　　死ぬ　　SKS 60.6.VH　　sofa lífi

ブリュンヒルドが死ぬ際に未来のことを語る．その中で「アトリが「死ぬ」」と述べている．韻律の影響が見られる．

・ reifa　　喜ばせる　　AM 13.6.VH

グンナル, ホグニがアトリの招待を受けて出ていく時に，ホグニが「アトリがグンナル, ホグニを黄金で「喜ばせる」」と述べている．

・ leifa　　残す　　AM 83.6.VH

グズルーンがグンナル, ホグニを殺された復讐にアトリとの間に生まれた子どもたちを殺し，その頭蓋骨で杯をつくり，その心臓をアトリに食べさせた後にアトリに向かって次のように言う．「あなたは（息子の心臓を）「残さず」食べた」．

・ bœta　　殺す　　AM 72.8.VH　　bœta bana e-s

グズルーンが兄たちを殺したアトリに対して「グンナル, ホグニを「殺した」」と述べている．韻律の影響が見られる．

・ vilja　　受け取る　　OD 22.2.VH　　vilja e-t at e-m

アトリは妹オッドルーンに対するグンナルからの結納金を決して「受け取らない」．英雄的な特徴を表しているとは思われない．

・ vera　喜ぶ　AM 69.1.VH　vera feginn

グンナル, ホグニを殺されたグズルーンがアトリに対して「彼らを殺したと宣言して「喜んでいる」」と述べている. feginn に韻律の影響が見られる.

・ sjá　調べる　AM 70.2.VH　sjá e-t til

アトリが両者 (アトリ, グズルーン) に都合のいい案を「調べる」. 韻律の影響がうかがえる.

・ láta　落ち着いている　AM 101.7.VH　láta kyrt um e-m

グズルーンがアトリをののしる中で「いつも訴訟に屈して,「落ち着いていた」」と述べている. 英雄にとって訴訟で負けることは屈辱であるにも関わらず「落ち着いていた」と言われることはかなりの侮辱であると思われるが, アトリを特徴づける表現とまでは言えない.

・ láta　向ける　AK 34.1.VH

グンナル, ホグニを殺したアトリが自分の国へ馬を「向ける」.

・ halda　耐える　AM 101.6.VH

グズルーンがアトリをののしる中で「いつも訴訟に屈して,「耐えなかった」」と述べている.

| | | | |
|---|---|---|---|
| * tyggva | 噛む | * tína | 数え上げる |
| * stríða | 悲しむ | * spyrja | 聞き知る |
| * slíta | 切り取る | * sœkja | 訴える |
| * nefna | 言う | * lítast | 見回す |
| * kalla | 呼び寄せる | * gá | 注意深い |
| * eggja | 扇動する | * bregða | 言う |
| * beita | 害を加える | * búa | 留まる |

**ヴォルンド (Vǫlundr) 74 例**

- フィン (Finn) 族の王スラグフィズル (Slagfiðr) の息子
- 王や兄がヴァリュキュリャの妻たちを探して留守の間谷に残っていた
- スウェーデン王ニーズズに捕まる
- 足の腱を切られて, ニーズズ王たちのために宝物を作らされる
- ニーズズ王の息子を殺し, 娘ボズヴィルド (Bǫðvildr) をだましてニーズズ王に復讐する

ヴォルンド（英雄詩）(74)

- ENTRY(0)
- MEANING(5)

・ # III　鍛える　herða　VKV 18.5.VH

フィン族の王子であるヴォルンドが王ニーズズ に捕らわれ，足の腱を切られ王たちのために細工ものを作らされる．それに対してヴォルンドが「ニーズズ 王の腰にある刀は私が研いで「鍛えた」もの」と嘆いている．ヴォルンドの特殊な能力を表している．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　回復する　verða á e-m　VKV 29.2.VH

ニーズズ 王の息子を殺し娘ボズヴィルドをたぶらかした後，ヴォルンドが「ニーズズ 王に切られた腱が「回復」した」と述べている．復讐が完了したことを意味しているのだろうか．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　研ぐ　*　hvessa　VKV 18.3.VH

上で述べたのと同じ場面で「私ヴォルンドが「研いで」鍛えた」と述べられている．刀鍛冶としてのヴォルンドの能力を表している．韻律の影響がうかがえる．

・ # III　はめ込む　*　slá　VKV 5.3.VH

妻が去った後一人ウールヴダール (Úlfdalr) に残ったヴォルンドは黄金を「はめ込んで」いた．刀鍛冶としてのヴォルンドには当然の表現である．

・ # III　なおす　*　bœta　VKV 27.1.VH

ニーズズ 王の娘ボズヴィルドが腕輪が割れたのでヴォルンドのところにやってくる．それに対して「私が割れ目を「なおし」ましょう」と言う．刀鍛冶としてのヴォルンドには当然の表現である．韻律の影響がうかがえる．

- ENTRY + MEANING(12)

・ # IV　slá　つくる　VKV 25.7.VH

復讐のためにヴォルンドがボズヴィルドに首飾りを「つくり」，彼女をだます．韻律の影響がうかがえる．

・ # IV　hefjast　飛び上がる　VKV 29.6.VH/ VKV 38.2.VH

どちらの場合も hefjast at lopti で用いられている.

復讐を成し遂げた後の満足感から来る笑いとともに「飛び上がる」. 韻律の影響がうかがえるが, 作品においては復讐達成を明らかに示す重要な場面で用いられている.

・ leggja　埋める　VKV 24.4.VH

ヴォルンドが復讐のためにニーズズの息子たちを殺した際にその足を「埋めた」. undir fen fiǫtrs（炉の近くにある熱したものを冷ます場所の下）という副詞句との組み合わせでこの意味になるため, それほど特徴的とは言えない.

ganga　用意する　VKV 9.1.VH

ヴォルンドが肉を焼く「用意をする」. 特徴的な表現とは言えない.

| | | | |
|---|---|---|---|
| * spenna | 縛る | * sníða | 切り落とす |
| * slá | 振る | * skolla | 漂う |
| * selja | 送る | * lykja | 繋ぐ |
| * líða | 歩く | * bíða | 得る |

**オッドルーン (Oddrún) 59 例**

- アトリとブリュンヒルドの妹
- グンナルに恋をする
- 出産で困っているところに来て, グンナルについての話を語る

**オッドルーン（英雄詩）(59)**

- ENTRY(0)
- MEANING(1)

・ ひざまづく　ganga fyr kné　OD 7.3.VH

出産で苦しんでいるボルグニュの元に来たオッドルーンが Borgný の膝に「ひざまづく」.

- ENTRY + MEANING(5)

・ svipta　降りる　OD 3.7.VH

初めの部分でオッドルーンがボルグニュの出産を助けにきて，その館に入って鞍から「降りる」．韻律の影響がうかがえる．

・ hníga　助ける　OD 10.1.VH　hníga e-m til hjálpar

オッドルーンがボルグニュが助けるに値しないと思っていたので「助ける」つもりはなかったと述べている．韻律の影響がうかがえる．

・ halda　拒む　OD 22.7.VH　halda viðe-m

グンナルとオッドルーンが愛に抵抗できず，オッドルーンはグンナルを「拒まなかった」．韻律の影響がうかがえる．

＊ vita　見る　＊ gefa　結婚させる

**スヴァーヴァ (Sváva) 48 例**

- エイリミ (Eylimi) 王の娘
- ヴァルキュリャ
- ヘルギ H と結婚する
- ヘルギ H の死後，ヘルギ H の復讐をしたヘルギ H の異母弟のヘジンと結婚する

**スヴァーヴァ（英雄詩）(48)**

- ENTRY(0)
- MEANING(2)

・ 冷静である　deila hug　HHV 40.2.VH

ヘルギ H が死に際にスヴァーヴァに対して「幸せであれ，「冷静であれ」」と述べている．

・ 被る　leita　HHV 38.4.VH

ヘルギ H の変事を聞いたスヴァーヴァが「私はひどい痛みを「被った」」と述べている．

- ENTRY + MEANING(6)

・ # IV　vísa　送る　HHV E.PH　vísa e-m e-t til

スヴァーヴァが親の仇を討つというヘルギ H に刀を「送った」．復讐は英雄にとって非常に重要なことであり，それに関して用いられているため特徴的な表現と言えるかも知れない．

・ # IV　festa　守る　HHV 26.7.VH

女巨人フリームゲルズ (Hrímgerðr) が「スヴァーヴァがヘルギ H たちの船を「守った」」と述べている．ヴァルキュリャとしてのスヴァーヴァの特徴を表現しているものと思われる．韻律の影響がうかがえる．

・ leiða　与える　HHV 41.8.VH

死ぬ間際のヘルギ H がスヴァーヴァに「ヘジン（腹違いの弟）に愛を「与えて」くれ」と述べている．

＊ skoða　見張る　＊ bera　優れている

＊ búa　出発する

**ギュルヴィ王 191 例**

- スウェーデン王
- 知識豊かな，賢者とされる
- ガングレリと名乗り，神々のもとアースガルズ (Ásgarðr) へ世界の知識を尋ねに行く

**ギュルヴィ王（「ギュルヴィの惑わし」）(188)**

- ENTRY(0)
- MEANING(3)

・ # III　変装する　＊　bregða á sik líki e-s /　＊　dyljast　GYLFG 2.6/ 2.6.P

ギュルヴィ王が知識を求めてアースガルズへ向かう時に老人の姿に「変装」して向かう．しかし神々はそれを見破った上でギュルヴィ王の相手をする．その後ギュルヴィ王はガングレリと名乗りいろいろと知識を聞き出していく．人間界の王であるギュルヴィ王が神々と会うためには「変装する」ことが必要であったのであろうか．

・ # III　上を見る　＊　sjá yfir　GYLFG 2.10.P

ギュルヴィ王が神々の館に入ったときその館が非常に高かったので彼はほとんど「上を見る」ことが出来なかった．神々の力の象徴として館の高さを強調しているものと思われる．

・ ついて行く　＊　ganga eptir　GYLFG 2.24.P

ギュルヴィ王が館の入り口で出会った人（アース神）に「ついて行く」.

- ENTRY + MEANING(3)

・ # IV　marka　理解する　GYLFG 22.7.P

ギュルヴィ王に対してハールがバルドルの美しさについていろいろと比喩的な表現をあげたあとで,「これらからバルドルの美しさを「理解」できるだろう」と述べている. バルドルの美しさはバルドルの本質的な特徴であり, それを説明する中で用いられている表現であるため何らかの意図があるのかもしれない.

＊ sjást　見回す　＊ byrja　出発する

**ギュルヴィ王（「ユングリンガ・サガ」）(3)**

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(0)

**インギャルド (Ingjaldr) 74 例**

- ウプサラ王.（スウェーデン諸王の中で一番）
- ブラウトーオヌンド (Braut-Ǫnundr) 王の息子

**インギャルド（「ユングリンガ・サガ」）(74)**

- ENTRY(0)
- MEANING(2)

・ # III　焼き殺す　＊　brenna inni　YS 39.5.P

インギャルドが宴会を開いているグランマル, ヒョルヴァルズ (Hiǫrvarðr) を「焼き殺した」. 勢力争いをしている王としては当然の行為であろう.

・ さらす　＊　steðja　YS 38.14.P

インギャルドがグランマルと戦闘しているとき，味方が逃げ出したために「ものすごい危機に「さらされた」」.

- ENTRY + MEANING(9)

・ vera　大きくなる　YS 34.23.P　vera roskinn

インギャルドが「大きくなった」時, インギャルドの父親のオヌンド (Ǫnundr) がガウトヒルド (Gauthildr) にインギャルドと結婚してくれと頼んだ.

・ steðja　いる　YS 40.5.P

インギャルドの死についての章において「彼がレニンギ (Ræningi) に「いる」時，イーヴァル (Ívarr) の軍隊が近づいていることを聞いた」とある．setðja は「置く」という意味で他にも用いられており，ここでも受け身で用いられているため「置かれている」とも理解できる，

・ leggjast　逃げる　YS 40.8.P　leggjast á flótta

イーヴァルの軍隊が近づいているのがわかった時，インギャルドはそれに対抗する力がなかったので，明らかに「逃げ」ないといけないと考えた．英雄にはふさわしくない表現である．

・ hverfa　出て来る　YS 41.6.P　hverfa ór e-m

インギャルドの後，ウプサラ (Uppsala) の王国はユングリング一族から「出て来ている」．王家の血筋が変わる場面ではあるが，それほど特徴的な表現とは思われない．

＊ skipa　配置する　＊ fara　終わらせる

＊ erfa　葬式を行う　＊ auka　大きくする

＊ætla　企む

**エギル (Egill) 48 例**

エギルという名の英雄はもう一人登場するが，ここではスウェーデン王のエギルだけを扱う．

- スウェーデン王
- アウン (Aun) 王の息子

エギル（「ユングリンガ・サガ」）(48)

- ENTRY(1)

・ # II　hleypa　追いかける　YS 26.45.P　hleypa eptir

エギルが狩りに出かけたとき一頭の動物を見つけ家来から離れて森の中へそれを「追いかけて」行った．結局王はその動物（牛）に殺されてしまう．　この直前に「追いかける」の意味で elta を用いているので異なる動詞を用いた可能性もあるが，王の死に結びつく表現であるので重要であると思われる．.

- MEANING(3)

・ # III　転じる　*　snúast til e-s　YS 26.17.P

トゥンニ (Tunni) が襲ってきたのを知ったエギルは反撃に「転じた」．しかし敗れてしまう．反撃することは英雄・王としては当然の行為である．

・ # III　乗り入れる　*　ríða　YS 26.44.P

エギルが狩りのために森に「乗り入れた」．先に hleypa のところで述べたように王の死へつながる表現である．

・ 泊まる　*　taka sér náttstað　YS 26.14.P

父アウン (Aun) の側近であったトゥンニの乱を聞いたエギルはそれを抑えるために出かけた先で一晩「泊まった」．そこをトゥンニに襲われる．

- ENTRY + MEANING(4)

・ # IV　koma　投げる　YS 26.47.P　koma e-m á e-t

エギルが森で牛を見つけて槍を「投げる」が外れて，逆に牛の角で刺し殺される．英雄・王としては当然の行為である．

＊ setja　入れる　＊ ríða　近づく

＊ elta　追いかける

**アウン (Aun) 62 例**

- スウェーデン王
- ヨルンド (Jǫrundr) 王の息子

Aun （「ユングリンガ・サガ」）(62)

- ENTRY(0)
- MEANING(1)

・ 直面する　standa　YS 25.48.P

アウンがウプサラで老衰に「直面した」. アウンの死に際してスノッリがショーズオールヴ (Þióðólfr) の作品を引用している.

- ENTRY + MEANING(3)

＊ hverfa　向ける　＊ halda　持ち上げる

＊ gefa　いけにえを捧げる

## まとめ

以上英雄を主語とする動詞について ENTRY, MEANING, ENTRY + MEANING 別に固有のものを抜き出し，この章の冒頭でも述べた英雄的特徴や物語において重要な点との関わりなどについて分析を行った．その結果，英雄についても特徴的な表現や重要な場面で用いられているキーワードとなるような動詞が存在することが明らかになった．それらの中で特に重要と思われるものについて以下にまとめてみる．

シグルズは英雄として勇気ある行動を取り，オージンの一番のお気に入りとしてオージン自身との関わりや特殊な能力（魔術的）を身につけていることが，固有の動詞から見て取れる．

- 仇討ちの途中で英雄の庇護者であるオージンの変装したフニカルを乗せるために船を「寄せる (vikja)」(I)
- ブリュンヒルドから教えられたルーンを正しく「理解する (knega)」(IV)

また物語において非常に重要なブリュンヒルド, グンナル, レギン，ファーヴニとの関わりやにおいても固有の動詞が用いられている．

- ファーヴニの心臓が焼けたかどうか「調べる (skynja)」(II)，その結果「火傷をして」(brenna) 鳥の話していることがわかるようになり，レギンの企みを知る
- ブリュンヒルドがシグルズに与える助言の中で邪悪な魔女のもとへは「立ち寄る (gista)」(I) なと述べられている
- オージンに眠らされたブリュンヒルドの眠りを「恐れる (hrœðast)」(II) ことなく破る
- ブリュンヒルドからルーンの知識を教わった後で「逃げ (flœja)」(II) ないと述べている
- グズルーンがすでに死んでいるシグルズに「馬具をつけ (beita)」(III) 走ってきてと頼んでいる
- ブリュンヒルドを求めてグンナルと「一緒に旅をする (ríða e-m í sinni)」(III)
- グンナル, ホグニより「優れている (vera uf e-m)」(IV)
- 眠りから覚めたブリュンヒルドの鎧を「外す (taka e-t af e-m)」(IV)
- ブリュンヒルドをグンナルに「渡す (fela)」(IV)
- ファーヴニを「殺す (benja)」(II)

その他にも財宝との関わりを表す場合にも固有の動詞が用いられている．

- ファーヴニを殺した後で財宝を馬グラニに「乗せる (klyfja e-t meðe-m)」(II)
- レギンを殺せば黄金を「独り占め (vera einvaldi e-t)」(III) できる

ヘルギ S に固有の動詞も英雄としての当然の働き，戦闘における動作を描き出している．

- ヘルギ S がフンディング王を「偵察する (njósna til e-s)」(II)
- ヘルギ S が戦いを「遅らせる (dvala)」(II) ことはない
- ヘルギ S が兵士を「上陸させる (fœra e-t at landi)」(III)
- 生まれたばかりのヘルギ S が目を「鋭くする (hvessa)」(III)
- ヘルギ S が黄金の旗印を「上げる (láta)」(IV)
- ヘルギ S が軍隊を「集める (biðja)」(IV)

ヘルギ H に固有の動詞は戦士というよりは，運命を操る何か特殊な能力と関わっている．

- ヘルギ H がÁlfr と戦って死ぬ「予感がする (gruna um e-t)」(III)
- ヘルギ H が巨人の娘フリームゲルズの「死期を決める (ljósta e-t helstǫfum)」(III)

グンナルに固有の動詞も戦士としてのグンナル，シグルズに誓いをたてたグンナル，シグルズを裏切ってしまうグンナルなどを描き出しており，グンナルの作品における立場を明確に表していると言える．

- ブリュンヒルドがグンナルに対して，これまで「戦って (fullvega)」(II) 来たと述べる
- グンナルはかつてはシグルズに対して「誓った (halda eiðom viðe-t)」(IV)
- ブリュンヒルドにシグルズを殺すように頼まれたグンナルがホグニを「内密の話に呼ぶ (heita sér e-m at rúnom)」(III)

また囚われた後の場面での琴との関係は，グンナルの英雄以外の側面を特徴づけているものなのかもしれない．

- アトリとの戦いで敗れ，囚われたグンナルがグズルーンが差し入れた琴を「演奏する (hrœra)」，「かき鳴らす (sveigja)」(III)

ホグニに固有の動詞は英雄として当然の行為を表している．

- アトリとの戦いでホグニは「戦う (verjast)」(II) 必要があった

グズルーンは女性でありながら当時の英雄にとっては当然であった復讐を成し遂げる．それも自らの子供を殺すという非常に衝撃的なことによって．固有の動詞からもその復讐について読み取れる．

- グズルーンがアトリと自分との間の息子（アトリの一族）を「殺す (snýta, lyfja e-m elli)」(II)，頭を「切り落とす (hnafa e-t af e-m)」(II)
- 寝床にいるアトリに刃先を向けて「悪意を抱く (grýma)」(I)
- 兄弟を殺されたことへの復讐を隠しているグズルーンが「欺瞞に満ちている (leika tveim skiǫldom)」(III)
- 実の息子を殺してまで成し遂げた復讐の話をする際に，ノルンの囲い（運命）を「押しのけたかった (hrinda)」(III) と述べている
- アトリに兄グンナル，ホグニの「復讐をする (láta e-t giǫld e-s)」(IV)
- 復讐の鬼になることを自分が「悪くなる (gœða á)」(IV) と述べている

復讐としては別のものになるが，

- ヨーナクル王との間に生まれた息子たちをシグルズとの間に生まれた娘スヴァンヒルドの復讐に駆り立てる場面で殺されたスヴァンヒルドを「一番愛して (fullhyggja)」(I) いたと述べる

グズルーンのシグルズへの愛情に関するものもいくつかあげられるが，以下のように非常に気丈な態度を示して，その精神的強さを表していると思われるものもある．

- シグルズの死を「嘆く (kveina)」(II) ことや「泣く (hjúfra)」(II) ことはしない

またヴァルキュリャとしての特殊な能力をうかがわせる表現もある．

- グズルーンが不吉な夢を見たアトリに対して，例え嫌っていても「世話をして (líkna)」(II)，「治す (lækna)」(I) と述べる

いくつか女戦士としての描写もある．

- 兄グンナル，ホグニと一緒に戦うために上着を「脱いで (hrjóðast ór e-m)」(II) 戦う
- 兄たちを守るためにアトリの戦士を「殺す (hafa e-t í helio)」(IV)

ブリュンヒルドに固有の動詞はシグルズ，グンナル，グズルーンらの登場する物語での転機となる動作を描写している．

- グンナルをそそのかし，シグルズを殺させた後で自分の身を刀で「引き裂く (miðla)」(II)
- グンナルと「結婚する (gefast)」(II)
- グンナルがブリュンヒルドに「ヴァルキュリャになれ (geta hiálm)」(III) と命じる

またオージンのヴァルキュリャとしてのブリュンヒルドを描いているものもある．

- オージンが自分の意に反して別の英雄に勝利を与えたブリュンヒルドに眠りの刺を刺す際に，今後勝利を「与える (vega)」(IV) ことはないと述べている

シグルーンを主語とする固有の動詞ではヴァルキュリャとしての能力を描き出している．

- 死んだ人を「魔法で呼び戻す (kjósa)」(III)

アトリを主語とする固有の動詞は，グンナル，ホグニを殺したことへの復讐として自分の妻に，その妻との間の子さえ殺され，その肉を食べさせられると言う非常に残酷な場面で用いられている．これらの動詞を用いることによって復讐の残酷さを強調していたのかもしれない．

- グズルーンが殺した自分の息子の死肉を「消化する (melta)」(I)
- アトリが夢の中で狼の死体を「食べる (nýta」(II)，息子たちの肉を食べることを暗示

物語全体では主に質問ばかりして，特に際立った活動をしていないギュルヴィ王であるが，神々の知識を仕入れるために先ず「変装」することが固有の動詞で表現されていることは注目に値する．

- ギュルヴィ王がアースガルズへ向かう際に「変装する (bregða á sik líki e-s, dyljast)」(III)

エギルを主語とする固有の動詞では，結果的に王エギルの死に結びついている表現がみられる．

- 王エギルが狩りに出かけた時に，一頭の動物を見つけ「追いかける (hleypa eptir)」(II)．結局王はその動物に殺される

以上見てきたように動詞データベースからそれぞれの英雄を主語とする固有の動詞を抜き出し，それぞれの主語の特徴や物語との関わり方について調べた．英雄とされるものは当時の最も上流階級である王や貴族たちであり，彼らにとってはこの章の冒頭でも述べたように親族のつながり，勇気，名誉，運命が大きな意味を持っている．それらに注目しながら英雄に固有の動詞を分析した結果，英雄にとって重要とされる要素と関わりの深い戦闘，勇気，遠征，復讐，誓い，裏切り，婚姻について描写している例が英雄に固有の動詞に多く見られた．その他にも一般的な英雄のイメージとは少し離れるが楽器との関わりを示す例もあった．また女性英雄に対してはこれらに加えて魔法（神々のしもべとしてのヴァルキュリャ的），精神的強さとの関わりを示す動詞があった．

このように他の存在を主語には取らない特定の英雄だけを主語として取る固有の動詞から英雄らしい表現が読み取れることは，動詞データベースから固有の動詞を抜き出してその主語の姿を探って行くという方法が神々ほど特殊な能力を持たない英雄についても有効であることを示している．もちろん全ての固有の動詞が先に述べた要素と関わっているわけではないため，固有の動詞が全てその主語の特徴を描写しているとは言えないが，それらの固有の動詞が固有（他の存在を主語として取らない）であるが故に作品中でその主語を特徴づけるキーワードとして働いている可能性は否定しきれない．

またシグルズがレギンの企みを見抜く場面やエギルが動物を「追いかける」など作品においてその英雄にとっての転機を表している例もあり，固有の動詞が重要な働きをしていることをさらに裏付けている．なかでもシグルズ，ヘルギS，グンナル，グズルーン，ブリュンヒルド，アトリにおいては分析対象となる固有の動詞も多いため，先に述べた要素との結びつきがより明確に認められた．

なお韻律の影響については第 8 章で述べる．

# 第7章　その他，作品において重要な役割を果たす存在（巨人，怪物など）を主語とする動詞の分析

神々や英雄ではないが作品において重要な役割を果たしている特殊な存在について分析を加えた．

**巫女 (vǫlva) 60 例**

- オージンに対して世界の始まりから滅亡までや未来，運命について語る

**巫女 （神話詩）** (54)

- ENTRY(1)

・ # I　snjóa　つもる　BDR 5.5.VG

バルドルの運命について聞きに来たオージンに対して巫女が「雪に「つもられ」，雨にうたれ，露に濡れている私に困難なことをもたらすのは誰か」と尋ねている．巫女と自然現象との関りを強調している可能性がある．韻律の影響がうかがえる．

- MEANING(0)

- ENTRY + MEANING(1)

＊ drífa　濡らす

**巫女 （「ギュルヴィの惑わし」）** (6)

- ENTRY(0)

- MEANING(0)

- ENTRY + MEANING(1)

・ vera　出ている GYLFG 5.23.V　vera frá e-m

いろいろな種族の出自を述べている中で「すべての巫女はヴィズオールヴル (Viðólfr) から「出ている」」と述べられている．

**スキールニル (Skírnir) 85 例**

- フレイのしもべ
- SKM においてフレイの使いでゲルズのもとへ行き，フレイとの結婚を迫る．この使いへの報酬としてフレイの刀を手に入れる

**スキールニル（神話詩）(64)**

- ENTRY(2)

・ # II　fyrirbjóða　禁じる　SKM 34.5.VG

・ # II　fyrirbanna　妨げる　SKM 34.6.VG

フレイの使者としてゲルズのところへ出向いたスキールニルがなかなか承諾しないゲルズに対して次のように言って脅す：「聞け，巨人よ，霜の巨人よ，スットゥングの息子よ，アース神よ．私がこの娘（ゲルズ）に男の歓びを「禁じる」のを，「妨げる」のを」．神フレイの代理として強い力を持っていることをうかがわせる．韻律の支配がうかがわれる．

- MEANING(1)

・ # III　覚悟する　e-m er e-s ón at e-m　SKM 2.2.VG

落ち込んでいるフレイを心配したスカジ（ニョルズの妻）がフレイの召使いのスキールニルに対してどうしたのか聞いてくるように頼んだのに対して，「もし私がそのようなことを尋ねたなら，あなた方の息子（フレイ）が私を叱るであろうことを「覚悟しています」」と述べる．召使いとしての立場を明らかに示している表現である．

- ENTRY + MEANING(7)

・ # IV　verpa　外す　SKM 40.2.VG　verpa e-m af e-t

ゲルズを口説くために出かけていたスキールニルが戻ってきたとき，フレイが「馬から鞍を「外す」前に話してくれ」と頼んでいる．ゲルズを思うフレイの焦る気持ちという作品において重要な要素を強調する場面で用いられている．

＊ temja　従わせる　＊ stíga　降りる

＊ stíga　踏み出す　＊ rísta　削る

＊ beiða　話す　＊árna　成し遂げる

**スキールニル（「ギュルヴィの惑わし」）(21)**

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(2)

＊ hafa　連れて来る　＊ beiða　話しかける

**ロッドファーヴニ (Loddfáfnir) 164 例**

- HAV の後半部分で語りかけられる存在として登場する
- 具体的にどういう存在かは不明

**ロッドファーヴニ （神話詩）(164)**

- ENTRY(1)

・ # II　hrekja　追い払う　HAV 135.6.VG

オージンがロッドファーヴニに忠告する部分で「客をあざ笑うな，「追い払う」な，親切にしろ」と述べられている．

- MEANING(3)

・ # III　得をする　＊　njóta
HAV 112.3/ 113.3/ 115.3/ 116.3/ 117.3/ 119.3/ 120.3/ 121.3/ 122.3/ 125.3/ 126.3/ 127.3/ 128.3/ 129.3/ 130.3/ 131.3/ 132.3/ 134.3/ 135.3/ 137.3.VG

オージンがロッドファーヴニに対して「助言を受け入れたなら，「得をする」だろう」と言っている．

・ 仲違いする　vera af flauslitom　HAV 121.6.VG

助言の仲で「友とは決して「仲たがいするな」」と述べられている．

・ 親切にする　geta　HAV 135.7.VG

助言の仲で「客をあざ笑うな，追い払うな，「親切にしろ」」と述べられている．

- ENTRY + MEANING(8)

・ geyja　あざ笑う　HAV 135.5.VG

ロッドファーヴニに対していろいろな教訓が述べられている中で「客を「あざ笑って」はいけない」とされている．韻律の影響がうかがえる．

・ geta　喜ぶ　HAV 128.7.VG　geta at e-m

ロッドファーヴニに対する教訓の中で「邪悪なことを喜ぶのではなく，良いことを「喜ぶ」ようにしろ」と述べられている．韻律の影響がうかがえる．

・ fást　食べる　HAV 116.7.VG

ロッドファーヴニに対する教訓の中で「朝食を「食べろ」」とされている．韻律の影響がうかがえる．

＊ senna　言い争う　＊ nema　受ける

＊ líta　見上げる　＊ kunna　気づく

＊ gá　心配する

**レギン (Reginn) 66 例**

- 侏儒
- シグルズを育て，グラムと言う刀を与える
- シグルズをそそのかし遺産争いをしている自分の兄ファーヴニを殺させる

**レギン（英雄詩）(66)**

- ENTRY(1)

・ # II　elska　愛する　RM A.PH

RM の冒頭の散文部分でレギンがシグルズを養育し「愛した」と述べられている．「愛する」は他の場合では unna, frjá が用いられており，この elska は特別な意味合いをもっていると思われる．

- MEANING(1)

・ # III　裏切る　＊　ráða　FM 22.1/ 22.2/ 37.5.VH

FM 22.1.VH/ 22.2.VH

レギンにそそのかされファーヴニを殺しに来たシグルズに対してファーヴニが「レギンは俺を「裏切り」，お前も「裏切る」だろう」と述べている．２例とも韻律の影響がうかがえる．

FM 37.5.VH

シグルズはファーヴニを殺した後ファーヴニの焼いた心臓にふれて鳥の話がわかるようになる．鳥の一羽が「あそこにシグルズを「裏切った」レギンが横になっている」と話している．韻律の影響がうかがえる．

自分自身のために兄ファーヴニを殺し，養育してきたシグルズをも殺そうと考えているレギンを特徴づける表現である．

- ENTRY + MEANING(2)

・ # IV　veita　育てる　RM A.PH　veita e-m fóstr

RM の冒頭の散文でレギンがシグルズを「育てた」とある．elska と同様にレギンとシグルズとの間の特殊な関係を表しているのかもしれない．

＊frýja　そそのかす

**ハール (Hár) 93 例**

- 「ギュルヴィの惑わし」でギュルヴィ王の質問に答える３人のうちで中心の神
- 世界についての様々な知識を持つ
- オージンとも見なされている

**ハール（「ギュルヴィの惑わし」）(93)**

- ENTRY(0)
- MEANING(0)
- ENTRY + MEANING(3)

・ taka　使う　GYLFG 34.60.P

ギュルヴィ王がフェンリル狼を神々がどのようにして縛ったかについての説明を聞いている中で，「例えとしてそれを「使った」ことはわかった，それではどのようにしてその鎖をつくったのか」と尋ねている．

＊ virða　判断する　＊ vænta 思う

**ウートガルザ・ロキ (Útgarða-Loki) 95 例**

- 魔法によってソールたちを騙した巨人

**ウートガルザ・ロキ（「ギュルヴィの惑わし」）(95)**

- ENTRY(2)

・ # II　spotta　馬鹿にする　GYLFG 48.45.P

ソールとウートガルザ・ロキとの物語を語った後，ハールがソールのミズガルズ蛇釣りの話をする中で「ウートガルザ・ロキがソールを「馬鹿にした」のと同じくらいソールがミズガルズ蛇をからかった」と述べている．ウートガルザ・ロキの神をも上回る力を表す動詞であろうか．

・ # I　glotta　にやにや笑う　GYLFG 46.11.P

ソールたちがウートガルザ・ロキの館にやってきたときにウートガルザ・ロキが「ソールたちを見て歯を出して「にやにや笑った」．この後始まるソールたちとの対戦に対する余裕を表しているのか．

- MEANING(3)

・ 目を向ける　＊　líta til e-s　GYLFG 46.11.P

ソールたちが館にやってきた時にウートガルザ・ロキが彼らの方へ「目を向けた」．

・ 会いに行く　＊　koma til fundar viðe-t　GYLFG 47.19.P

ソールたちとの競争が終わった後種明かしをする際にウートガルザ・ロキが「ソールの力を知っていたのでめくらましをかけてからソールたちに「会いに行った」」と語っている．

・ ありそうだと言う　＊　kalla meiri vǫn at　GYLFG 46.33.P

ウートガルザ・ロキがシャルヴィが走るのが早いことは「ありそうだ言った」．

- ENTRY + MEANING(8)

・ # IV　fara　操る　GYLFG 48.2.P　fara meðe-m

ソールたちとウートガルザ・ロキとの話を聞いた Gylfi が「ウートガルザ・ロキは非常に良く魔法を「操る」」と述べている．魔法というウートガルザ・ロキの特殊な能力について用いられており，fara の一般的な移動に関わる表現とは大きく異なっているため，この表現は特徴的と言える．

・ # IV　setja　用意する　GYLFG 47.3.P

ソールたちとの競争に魔法で勝ったウートガルザ・ロキがソールたちが帰る朝に彼らに食事を「用意する」．最後のもてなしとして何か意味があると考えられる．

・ # IV　gera　かける　GYLFG 47.18.P

ソールたちが城を出た後魔法によって惑わしていたことを白状する中で，「私はお前たちに目くらましを「かけた」」と述べている．ウートガルザ・ロキの魔力と関係がある．

・ # IV　endast　死ぬ　GYLFG47.24.P　e-m endast til bana

ソールとの競争を魔法を使ったことを白状した後にウートガルザ・ロキが実際はどんなであったかを説明する中で「最初の一撃が当たったら「死ぬ」かと思った」と述べている．ソールの力を強調している．

・ fylgja　送り出す　GYLFG 47.5.P　fylgja e-m út

ソールたちが帰るときにウートガルザ・ロキが彼らを「送り出す」．

・ fá　連れて来る　GYLFG 46.32.P　fá til

ウートガルザ・ロキとの競争においてシャルヴィが「彼が「連れて来る」誰とでも競争する」と述べている．

＊ trúa　思う　＊ bregða　動かす

**フェンリル狼 (Fenrisúlfr) 85 例**

- ロキの子供
- 神々にとっての最大の脅威の一つ
- チュールの手を噛み切る
- 世界の最後に縛られていた鎖をちぎって，神々に向かい，オージンを倒す

フェンリル狼（神話詩）(15)

- ENTRY(0)
- MEANING(3)

・ # III　走り去る　*　renna　VSP 44.4/ 49.4/ 58.4.VG

３例とも

Geyr (nú) Garmr miǫk
fyr Gnipahelli,
festr mun slitna,
en freki renna.

の形で用いられている．

世界の終わりであるラグナロクの際にそれまで縛られていたフェンリル狼の鎖が壊れフェンリル狼は「走り去る」．その結果フェンリル狼はオージンと戦い，オージンの死の原因となる．オージンの死は世界の終わりを象徴する出来事の一つである．

・ # III　噛み切る　*　slíta　LS A.PG

LS の冒頭部分でいろいろと説明されている部分でチュールについて「フェンリル狼が縛られるときにその片手を「噛み切った」ので片手である.」と述べてある．チュールの手を「噛み切る」ことは神話世界では非常に有名な事件である．

・ 状態がいい　hafa vel　LS 39.4.VG

ロキがチュールを罵ったのに対してチュールが「俺は手をなくしたが，お前はフェンリル狼をなくした．双方ともの不幸だ．フェンリル狼はラグナロクまで縛られたままで「状態が良くない」な.」と反論する．

- ENTRY + MEANING(0)

フェンリル狼（「ギュルヴィの惑わし」）(70)

- ENTRY(3)

・ # II　leysast　抜け出す　GYLFG 34.31.P

フェンリル狼の存在を危惧した神々がなんとかしてこれを縛り上げようとする．その初めの鎖を簡単に壊し，フェンリル狼は鎖から「抜け出した」．

・ # II　grenja　吠える　GYLFG 34.98.P

チュールの片手と引換に縛り上げられたフェンリル狼が口に剣をつっかえぼうにされて恐ろしげに「吠えている」．縛られていながらも恐ろしい存在であることを表現するために特にこの動詞を用いたのであろうか．狼の特徴とされる遠吠えを表している．

・ # I　brjótast　転げ回る　GYLFG 34.88.P　brjótast um

フェンリル狼が最後に縛り上げられたときにその鎖を壊そうとして「転げ回った」．フェンリル狼の力と神々の鎖の強さを表している．

- MEANING(5)

・ # III　体を揺する　hrista　GYLFG 34.41.P
・ # III　叩きつける　ljósta　GYLFG 34.41.P
・ # III　ピンと体を伸ばす　knýjast　GYLFG 34.42.P

２つめの鎖で縛り上げられた際にフェンリル狼が「体を揺すり」，鎖を地面に「叩きつけ」，「ピンと体を伸ばす」と鎖は壊れてしまう．

・ # III　伸びをする　*　spyrna　GYLFG 34.87.P

フェンリル狼が最後に縛り上げられたときに鎖を壊そうと「伸びをする」．すると鎖はますますきつくなる．

・ # III　もがく　fást um　GYLFG 34.96.P

縛り上げられた後神々はフェンリル狼を鎖と石で固定する．それに対してフェンリル狼が激しく「もがき」それらを噛み切ろうとする．

「体を揺する」，「叩きつける」，「ピンと体を伸ばす」，「伸びをする」，「もがく」の５つ全てフェンリル狼にとって非常に重要な縛り上げられる場面での表現である．

- ENTRY + MEANING(3)

・ # IV　gapa　大きく口を開ける　GYLFG 34.95/51.35/51.37.P

34.95

ついに鎖で縛られたフェンリル狼が「大きく口を開けて」神々を噛もうとする．

51.35/51.37

最後のラグナロクにおいてフェンリル狼が「大きく口を開けて」進んでくる．「大きく口を開ける」の意味はこのフェンリル狼の他にミズガルズ蛇や狼にも用いられており，神々にとっての脅威となる怪物を描写する表現である．ここでもそれをフェンリル狼が怪物であることを強調するために用いられているものと思われる．

・ verða　行う　GYLFG 34.39.P

神々がフェンリル狼を縛るためにつくった 2 つめの鎖をフェンリル狼が試す場面で「危険に身を置くことを「行う」と考えた」とある．

＊ slíta　切る

**スリュム (Þrymr) 21 例**

- 巨人
- ソールのハンマーミョッルニルを盗む

**スリュム（神話詩）(21)**

- ENTRY(0)

- MEANING(2)

・ # III　のぞき込む　＊　lúta　TRK 27.1.VG
・ # III　飛び退く　＊　støkkva　TRK 27.3.VG

花嫁に化けたソールにキスをしようと「のぞき込んだ」スリュムがソールの恐ろしい目を見て「飛び退いた」．この後ロキによる巧みな言い訳があり，またソールが化けていることをうかがわせる表現である．

- ENTRY + MEANING(1)

・ jafna　　なでる　　TRK 6.6.VG

ミョッルニルを盗まれたのがわかった後，ロキがそれを盗んだのがスリュムであることを確認するためにスリュムのもとへ来た時に，ロキに応対するスリュムが馬のたてがみを「なでた」.

## まとめ

以上神々，英雄以外で重要な役割を果たす存在を主語とする固有の動詞について分析を行ったが，神々や英雄の分析と同様に特徴的な動詞がいくつかあることがわかった．それらの中で特に重要なものについて以下にまとめてみる．

巫女は様々な場面で運命について語る存在として登場する．巫女が普段どのような状態にあるのかはわからないが，自然の力との関わりが巫女の力になっているのかもしれない．

- バルドルの運命を尋ねに来たオージンに起こされた時に，雪に「つもられ (snjóa)」(I) ていたと述べている

スキールニルは神フレイの召し使いであり，その神の威光を笠に着ている表現と召し使いとしての立場を表している表現が固有の動詞に見られる．

- ゲルズに男の歓びを「禁じる (fyrirbjóða)」(II)，「妨げる (fyrirbanna)」(II)
- フレイがなぜ落ち込んでいるのかを尋ねて来るように言われた際に，フレイに叱られることを「覚悟する (e-m er e-s ón at e-m)」(III) と述べている

レギンは侏儒として神々，巨人などと同じように特殊な能力を持つとされるが，固有の動詞としてはシグルズとの関わりにおいてまったく正反対の動詞が用いられている．邪悪な侏儒としてのレギンの存在を際立たせているものと思われる．

- シグルズを「育て (veita e-m fóstr)」(IV)，「愛した (elska)」(II) と述べられている
- 兄ファーヴニ，自分の育てたシグルズを「裏切る (ráða)」(III)

ソールたちを魔術で手玉に取ったウートガルザ・ロキに固有の動詞からはソールたちの関係や，魔術との関わりがうかがえる．

- 自分の館にやってきたソールたちを見て「にやにや笑った (glotta)」(I)

- ソールを「馬鹿にした (spotta)」(II)
- 非常によく魔法を「操る (fara meðe-m)」(IV) とギュルヴィ王が述べている

神々にとって最大の敵のひとつであるフェンリル狼に固有の動詞は，神々がフェンリル狼を縛る際と，神々に立ち向かう場面とに用いられており，これら固有の動詞が使われることによってフェンリル狼の物語での役割がより鮮やかに描き出されているのではないだろうか．

- 神々に最後に丈夫な鎖をかけられ縛り上げられた際に，その鎖を壊そうと「転げ回った (brjótast um)」(I)
- 神々が最初にかけた鎖から「抜け出す (leysast)」(II)
- 縛り上げられた状態でも「吠えている (grenja)」(II)
- ラグナロクの際に鎖が壊れフェンリル狼が「走り去る (renna)」(III)
- 鎖をかけられた時にチュールの片手を「噛み切る (slíta)」(III)
- ２つめの鎖をかけられた際に「体を揺すり (hrista)」(III)，「叩きつける (ljósta)」(III)，「ピンと体を伸ばし (knýjast)」(III)，鎖を壊す
- 最後の鎖をかけられた際にも「伸びをし (spyrna)」(III)，「もがく (fást um)」(III)
- 鎖で縛られた状態で神々を噛もうと「大きく口を開ける (gapa)」(IV)
- ラグナロクで「大きく口を開けて (gapa)」(IV) 進んで来る

神々を超える力を持つウートガルザ・ロキ，フェンリル狼と邪悪な侏儒レギンなどに対してもは，それぞれにとって特徴的な意味を持ち，文脈において重要な働きをする固有の動詞もいくつか見られた．これら特殊な能力を持つ存在に対しても動詞が果たしている役割の重要性が認識出来た．神々や英雄を主語とする動詞の分析のところでも述べたように固有の動詞を分析することによってその主語の特徴や物語での役割が明らかになるという考え方はこの章で扱った特殊な存在についても有効であると思われる．

なお韻律の影響については第 8 章で述べる．

# 第8章　韻文作品における韻律の影響について

**分析データ（# を付けたデータ）と韻律の関係**

本論文では ENTRY, MEANING, ENTRY + MEANING それぞれにおいて，その動詞について文脈に即して，その動詞が表している内容と主語との関係から特徴的と判断して# を付けたため，韻律の影響があるかどうかで分析対象から排除はしていない．しかしながら各データについて韻律の影響を調べてあるので，# を付けたデータと韻律との関係について見てみる．なお複数例ある場合そのどれか一つにでも韻律の影響がうかがえるなら数える．また ENTRY + MEANING で＊の付いているものについては ENTRY, MEANING と重複するので数えない．

# の付いているデータのうち韻律の影響がうかがえるデータ数/ 韻文中で用いられていて# の付いているデータ総数（E + M は ENTRY + MEANING を表す）．

| 名前 | 作品分類 | ENTRY | MEANING | E + M | 総数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 神々全体 | | 19/23 | 10/22 | 3/14 | 32/59 |
| | | (82.6% ) | (45.5% ) | (21.4% ) | (54.2% ) |
| オージン | 神話詩 | 4/5 | 4/8 | 1/6 | 9/19 |
| | 英雄詩 | - | 0/1 | - | 0/1 |
| ソール | 神話詩 | 10/12 | 2/6 | 0/3 | 12/21 |
| ロキ | 神話詩 | 2/3 | 2/2 | 1/3 | 5/8 |
| フレイ | 神話詩 | 1/1 | 1/1 | 0/1 | 2/3 |
| フレイヤ | 神話詩 | 2/2 | 0/2 | - | 2/4 |
| チュール | 神話詩 | - | 0/1 | - | 0/1 |
| ヘイムダッル | 神話詩 | - | 1/1 | 1/1 | 2/2 |
| 英雄全体 | | 29/35 | 26/39 | 24/60 | 79/134 |
| | | (82.9% ) | (66.7% ) | (40% ) | (59.0% ) |
| シグルズ | 英雄詩 | 4/7 | 3/7 | 7/14 | 14/28 |
| ヘルギ | 英雄詩 | 0/1 | 3/3 | 1/5 | 4/9 |
| グンナル | 英雄詩 | 1/1 | 4/5 | 0/4 | 5/10 |
| ホグニ | 英雄詩 | 0/1 | 1/1 | - | 1/2 |
| グズルーン | 英雄詩 | 14/15 | 7/10 | 8/16 | 29/41 |

| 名前 | 作品分類 | ENTRY | MEANING | E + M | 総数 |
|---|---|---|---|---|---|
| ブリュンヒルド | 英雄詩 | 5/5 | 1/4 | 1/7 | 7/16 |
| シグルーン | 英雄詩 | - | 1/2 | 1/1 | 2/3 |
| アトリ | 英雄詩 | 5/5 | 2/2 | 3/9 | 10/16 |
| ヴォルンド | 英雄詩 | - | 4/5 | 2/2 | 6/7 |
| スヴァーヴァ | 英雄詩 | - | - | 1/2 | 1/2 |
| その他の存在 | | 3/5 | 2/7 | 0/2 | 5/14 |
| | | 3/5 | 2/7 | 0/2 | 5/14 |
| 巫女 | 神話詩 | 1/1 | - | - | 1/1 |
| スキールニル | 神話詩 | 2/2 | 0/1 | 0/1 | 2/4 |
| ロッドファーヴニ | 神話詩 | 0/1 | 0/1 | - | 0/2 |
| レギン | 英雄詩 | 0/1 | 1/1 | 0/1 | 1/3 |
| フェンリル狼 | 神話詩 | - | 0/2 | - | 0/2 |
| スリュム | 神話詩 | - | 1/2 | - | 1/2 |

ENTRY に関しては神々，英雄ともにかなり高い確率で韻律の影響がうかがえるため，それらの動詞が神々や英雄の特徴を意識してというよりは韻律を考慮して選択されている可能性がある．しかし韻律を考慮して選択された語が固有のデータとして抽出されていても，個々のデータ分析において先にも述べたようにその動詞が表現している内容と主語の特徴とを検討してその主語にとって特徴的なものと判断しており，今回の分析において重要であることには変わりがない．また，MEANING や ENTRY + MEANING になると韻律の影響を受けているデータの比率が低くなり，単純に韻律だけでその動詞が選択されたとは言えなくなる．

韻文作品における韻律の影響は大きいものであり無視することは出来ないが，古西ノルド語の韻律についてはその音節の数え方，行の区切り方において様々に議論されており，確定的な理論はまだ出ていないため[注1]，本論文ではこれ以上詳しくは扱わないこととする．

注1 Jónas 1988, pp.33-36

# 第9章　結論

本論文では，北欧神話分析の新しい試みとして文献資料の動詞に注目し，神々や英雄などを特徴的に描き出している動詞を見つけ出すことを目的に分析を行った．具体的には，北欧神話の第一次文献資料とされる「エッダ詩集」，スノッリ・ストゥルルソンの「ギュルヴィの惑わし」，同じくスノッリの「ユングリンガ・サガ」の３作品（群）を分析対象とし，これらに出て来る動詞について 38 のフィールド（分析項目）からなるデータベースを作成し，様々な側面から分析を行った．分析データの総数は 15,426 例であった．以下各章での分析についてまとめてみる．

第 3 章においては先ず初めにデータベースを数値的に分析して作品（群）別傾向を調べ，次にスノッリの２作品における特徴について述べた．数値的分析からは，以下のような作品（群）としての傾向が読み取れた．アルファベット大文字はデータベース上のフィールドを表す．

- 全ての作品（群）で語 (ENTRY) としては vera（英語のｂｅ動詞にあたる）が一番多い．
- 韻文作品である「エッダ詩集」の方がスノッリの２つの散文作品に比べて，より多くの固有の語 (ENTRY) が見られる．
- 神話詩では出現形 (FORM)，時制 (TENSE) において pres（現在）が pret（過去）より比率が高く，英雄詩では逆に pret（過去）が pres（現在）より高い．主に神々の話を扱った「ギュルヴィの惑わし」でも神話詩に近い数値が出ている．また「ユングリンガ・サガ」においては pret（過去）の比率が圧倒的に高く，年代記としての特徴であると考えられる．
- 全ての作品（群）で本動詞と助動詞の比率は大体 85% 対 15% である．
- 韻文作品（群）では主語 (SUBJECT) として ek（一人称単数），þú（二人称単数）が上位に来ており，対話形式の韻文が多いことがうかがえる．散文作品では hann（三人称男性単数）が１位になっており，物語としての特徴が見られる．
- 主語のカテゴリー (S_ CATEGORY) では神話詩で gma（アース神男性），英雄詩で hm（英雄男性），「ユングリンガ・サガ」で k（王）が１位になっており，「ギュルヴィの惑わし」でも特定出来るカテゴリーとしては gma（アース神男性）が１位であり，各作品（群）の内容をうかがわせるものとなっている．
- 目的語のカテゴリー (O_ CATEGORY) では神話詩で g を含むもの（神に関わりのあるもの）が，

英雄詩でhm（英雄男性），hf（英雄女性）が，「ユングリンガ・サガ」でkを含むもの（王に関わりのあるもの）がそれぞれ上位に多く見られる．「ギュルヴィの惑わし」においては神話詩に近い傾向が見られ，主語のカテゴリー(S_CATEGORY)と同様に各作品（群）の内容を反映している．

- 主語の人称(S_PERSON)では韻文作品（群）では一，二人称の比率がそれぞれ16, 17%前後と散文作品（5%以下）に比べて非常に高く対話形式が多いことがわかる．「ユングリンガ・サガ」では三人称がほぼ100%であり年代記であることが明らかである．「ギュルヴィの惑わし」も物語形式であり90%以上が三人称である．

また「ギュルヴィの惑わし」において王ギュルヴィとそれに対して神々の世界について答える3人の神々についてスノッリが動詞を使い分けているのかについて調べたが，両者とも特殊な存在として描かれており，特に動詞の用法に違いは見られなかった．次に「ギュルヴィの惑わし」で神々に関する知識についてスノッリが散文で書いている部分と，「エッダ詩集」などの韻文作品から引用している部分で動詞の用法に違いがあるのかについて調べて見た．引用されている韻文部分に出て来る動詞は289例でそのうち同じ内容が散文では異なる動詞で描かれているものが31例あった．しかしそれらについては，主語についても意味(MEANING)についても何か特別な点は見られなかった．ただし散文で書き換えられている動詞のなかで，今回分析対象とした全ての動詞と比較して，その語(ENTRY)と意味(MEANING)との組み合わせがこの「ギュルヴィの惑わし」にしか出てこないものが9例あり，それらをスノッリが敢えてそれらの主語（神々，侏儒，巨人）に対する特徴的な動詞として用いた可能性，すなわちスノッリがそれらの主語（神々，侏儒，巨人）を特別に意識していた可能性はあると思われる．

「ユングリンガ・サガ」についても神々と同じ名前を持つとされる王たちとその他の王たちとで動詞の用法に違いがあるのかを調べて見た．確かに初代のオージンは特殊な能力を持っており，他の作品群で神々に対して用いられる動詞の主語となっている例がいくつかあるが，全体として神々と同じ名前を持つ王とその他の王で動詞の用法に際立った差異は認められなかった．

次の第5, 6, 7章では神々，英雄，その他作品において重要な役割を果たす存在についてそれぞれ個別に動詞の用法について調べて見た．方法としてはデータベースにおいてそれらを主語とする動詞を抜き出し，各作品（群）別にそれらの動詞の中で他のものを主語としては用いられていない，すなわち固有のものをENTRY, MEANING, ENTRY + MEANINGの3つのレベルについて抽出した．その後それら固有の動詞について文脈に照らし合わせて，主語となっている神々や英雄にとって特徴的な要素を含んだものであるかを検討した．

先ず第5章においてはオージン，ソールを始めとする神々について調べて見た．「戦い，死，知恵，ルーン，魔術」を司る神とされているオージンを主語とする固有の動詞としてこれらの特徴と関わるルーンを

獲得するために「ぶら下がり (hanga)」，自らを「傷つける (unda)」，「魔法を使う (síða)」，（詩芸を獲得するため）自分の頭を「危険にさらす (hætta e-m til)」，親族の間に「災いを引き起こす (bera sakrúnar)」，戦場で倒れたものを「連れて来る (skipa)」などがある．また王オージンが登場する「ユングリンガ・サガ」においても固有の動詞として王オージンが秘密の知識をミーミルに語らせるために薬草を「塗り込む (smyrja)」，言葉で炎を「消す (sløkkva)」，その死後も大きな戦いの前には「現れる (vitrast)」といった神オージンの特徴をうかがわせるものや，王として特別の存在であることを示すものが見られた．

ソールに固有の動詞としてはロキをミョッルニルで「脅す (hœta)」，ウートガルザ・ロキ との勝負で猫の姿をしたミズガルズ蛇を「持ち上げる (lypta)」，東方で巨人を「退治する (berja)」，ミョッルニルを「振り上げる (reiða fram)」，ミズガルズ蛇を捕まえる際にアースの力を「使う (fœrast í e-t)」など直接的な行動で相手と関わる表現が見られ，「神々の守り手，巨人を退治する神」として知られるソールには特徴的であると考えられる．

ロキは神々とも巨人ともされる曖昧な存在で，ずるがしこい知恵で常に神々の間に不和をもたらしている．ロキに固有の動詞にもまた神々に対して「悪口を言う (rœgja)」，神々を「怒らせる (gremja)」のようなロキのトリックスター的性格と一致するものやトリックスターの文化英雄的側面と関わりを示す「(紐の）結び目を結ぶ (ríða ræxna)」（これが現在の魚網のもとになったとされる）ものがあった．

またフレイにおいてはその最大の武器である刀をゲルズ獲得のために手放したことに関しての動詞が固有であり，チュールと仲裁，ヘイムダッルと予見，見張りとの関わりなどがそれぞれ固有の動詞で表現されている．

このように他の存在を主語として取らないそれぞれの神々に固有の動詞を分析することからそれらの神々にとって特徴的とされることが明らかになると言うことは，神話の聞き手・読者が神々の特徴を認めたり，理解したりするのに動詞が非常に大きな役割を果たしていることを裏付けている．

神々にとって固有の動詞は，神話作品が語られたり，読まれたりする際にはある種のキーワードとして働き，神々の特徴をより鮮明に描き出し，神々のイメージを明確に私たちに印象づけてくれるのである．つまり神々のイメージをそれら固有の動詞が作り出すのである．特にオージン，ソール，ロキについては分析対象データ数も多く，それぞれの特徴と関わったり，作品の重要な場面で用いられたりする動詞，すなわち上で述べたようなキーワードとなる動詞が多く存在し，北欧神話において他の神々よりは動詞によっても強く印象づけられていたものと思われる．

次の第6章ではシグルズを始めとする英雄を主語に取る動詞について神々と同様に固有の動詞を抜き出し，それぞれの主語の特徴や作品との関わり方について調べた．英雄とされるものは当時の最も上流階級である王や貴族たちであり，彼らにとっては親族のつながり，勇気，名誉，運命が大きな意味を持ってい

る．それらに注目しながら英雄に固有の動詞を分析した結果，英雄にとって重要とされる要素と関わりの深い戦闘，勇気，復讐，誓い，裏切り，婚姻についての例が固有の動詞に多く見られた．例としてはシグルズがファーヴニを「殺す (benja)」，ヘルギ S が兵士を「上陸させる (fœra e-t at landi)」，シグルズがオージンを「恐れる (hrœðast)」ことなくブリュンヒルドの眠りを破る，グズルーンが復讐のためにアトリと自分との間の息子を「殺し (snýta, lyfja e-m elli)」，頭を「切り落とす (hnafa e-t af e-m)」，グンナルはかつてはシグルズに対して「誓った (halda eiðom viðe-t)」が，ブリュンヒルドにシグルズを殺すように頼まれホグニを「内密の話に呼ぶ (heita sér e-m at rúnom)」，ブリュンヒルドがグンナルと「結婚する (gefast)」などがあげられる．その他にもシグルズがファーヴニを殺した後で財宝を馬グラニに「乗せる (klyfja e-t meðe-m)」のように財宝との関わりを表す場合にも固有の動詞が用いられている．シグルズがファーヴニの心臓が焼けたかどうか「調べる (skynja)」，その結果「火傷をして (brenna)」鳥の話していることがわかるようになりレギンの企みを知るなど主人公にとっての転機となる場面でも固有の動詞が用いられている．

このように英雄に対してもその特徴と結びつく固有の動詞がいくつかあることが明らかにされたことは，英雄にとっても神々のところで述べたのと同様に動詞が私たちがその特徴を決める際に大きな役割を果たしていることの証しであり，動詞データベースから固有の動詞を抜き出してその主語の姿を探って行くという今回の分析方法が有効であることを示していると思われる．特にシグルズ，ヘルギ S，グンナル，グズルーン，ブリュンヒルド，アトリなどの各作品での主人公たちは分析データも数多くあるため，固有の動詞からその英雄としての姿をより一層明らかに描き出すこと出来た．

第 7 章では神々，英雄という分類に入らないが北欧神話世界において重要な役割を果たしている存在について分析した結果神々や英雄と同様に．特徴的と思われる固有の動詞がいくつかあることがわかった．

シグルズを「育て (veita e-m fóstr)」，「愛した (elska)」，そして自分の兄ファーヴニを殺させ，その後シグルズを「裏切る (ráða)」が固有の動詞に見られ，邪悪な侏儒としてのレギンの存在を際立たせているものと思われる．

神々にとって最大の敵のひとつであるフェンリル狼に固有の動詞は，神々に最後に丈夫な鎖をかけられ縛り上げられた際に，その鎖を壊そうと「転げ回った (brjótast um)」，鎖をかけられた時にチュールの片手を「噛み切る (slíta)」，ラグナロクで「大きく口を開けて (gapa)」進んで来るなどがあげられ，これら固有の動詞が使われることによってフェンリル狼の作品での役割がより鮮やかに描き出されているのではないだろうか．

なお韻文作品で用いられている動詞については韻律の影響も調べた．その結果，語 (ENTRY) レベルで抽出した固有の動詞に関しては神々，英雄ともにかなり高い確率で韻律の影響がうかがえるため，それ

らの動詞が神々や英雄の特徴を意識してというよりは韻律を考慮して選択されている可能性がある．しかし韻律を考慮して選択された語が固有のデータとして抽出されていても，個々のデータ分析において先にも述べたようにその動詞が表現している内容と主語の特徴とを検討してその主語にとって特徴的なものと判断しており，今回の分析において重要であることには変わりがないと考えられる．また，意味 (MEANING) や語 (ENTRY) と意味 (MEANING) の組み合わせレベルでの動詞では韻律の影響を受けているデータの比率が低くなり，単純に韻律だけでその動詞が選択されたとは言えなくなる．

神々や英雄を特徴づけるような動詞について調べた修士論文を出発点として，北欧神話の第一次文献資料から神々や英雄などの特殊な存在を主語とする動詞の中から，その主語に固有の動詞すなわち他の主語を取らない，その主語にしか用いられていない動詞を抜き出し，これまでの研究で言われているその主語の特徴や作品における重要な場面との関係を分析対象を増やして，より詳細に調べてきた．その結果，韻律の影響がうかがえるものの，神々や英雄その他特殊な存在を主語とする動詞にはその主語に固有であり，かつその主語の特徴や重要な場面と密接な関係のある動詞がいくつか存在することが確認出来た．先行研究で明らかにされている神々や英雄の特徴が，文献資料から動詞の網羅的なデータベースを作成し，それに対して分析を加えるという，本論文で取り組んだ新しい試みによっても裏付けられたと言える．

このことから文献資料において固有の動詞を抽出し分析することにより，その主語の特徴やその動詞が用いられている場面の重要性が見えて来るのではないかと考えられる．言い換えれば動詞を手がかりに，つまり動詞をキーワードとして文献資料を分析する可能性が開けてきたのではないだろうか．北欧神話文献資料分析においてこれまでの名詞研究に加えて動詞研究の重要性が認識出来たと思われる．

神話や伝説の世界での主役である神々，英雄にそれぞれ固有の動詞は聞き手・読者が神々や英雄のイメージを作り上げる際に大きな役割を果たしており，神々の動詞，英雄の動詞と呼べるのではないだろうか．

確かに神々や英雄と言った特殊な存在は，普通の人間では出来ない行動をするためそれらに対して固有の動詞が使われているからといって，それほど注目に値するものではないかもしれないが，実際の文献資料において動詞だけからでもそれらの特徴が読み取れることが明らかになったことは十分に意義のあることと思われる．

# 参考文献


## 刊本

[1] Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte I. Vǫluspá, Hávamál.* København. Ejnar Munksgaard.

[2] Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte II. Gudedigte.* København. Ejnar Munksgaard.

[3] Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte III. Heltedigte, første del.* København. Ejnar Munksgaard.

[4] Holtsmark, Anne; Helgason, Jón (udg.). 1976. *Snorri Sturluson Edda. Gylfaginning og prosafortellingene av Skáldskaparmál.* København. Ejnar Munksgaard.

[5] Wessén, Elias (udg.). 1952. *Snorri Sturluson Ynglingasaga.* København. Ejnar Munksgaard.

## 翻訳資料

[6] Evans, David A. H. (ed.). 1986. *Hávamál.* London. Viking Society for Northern Research.

[7] Faulkes, Anthony (tr. intr.). 1987. *Snorri Sturluson Edda.* London. J. M. Dent & Sons Ltd.

[8] Holtsmark, Anne; Seip, Didrik Arup (overs.). 1959. *Snorre Sturlusson Kongesagaer.* Oslo. Gyldendal Norsk Forlag.

[9] Häny, Arthur (tr. comment). 1987. *Die Edda. Götter- und Heldenlieder der Germanen.* Zürich. Manesse Verlag.

[10] Häny, Arthur (tr. comment). 1990. *Snorri Sturluson Prosa-Edda. altisländische Göttergeschichten.* Zürich. Manesse Verlag.

[11] Jónsson, Finnur (udg.). 1911. *Snorri Sturluson Heimskringla. Nóregs Konunga Sǫgur.* København. G. E. C. Gads Forlag.

[12] Jensen, Johannes V.; Kyrre, Hans (overs.). 1948. *Snorre Sturlason Heimskringla 3. binde I. Norges Kongesagaer.* København. Gyldendals Boghandel Nordisk Forlag.

[13] Kjerulf, E.. 1945. *Völuspá Fornritanna og ýmiskonar athuganir.* Reykjavík. Ísafoldarprentsmiðja H. F.

[14] Larsen, Martin (overs.). 1943. *Den Ældre Edda og Eddica Minora 2 binde, 1. bind.*

København. Ejnar Munksgaard.

[15] Larsen, Martin (overs.). 1946. *Den Ældre Edda og Eddica Minora 2 binde, 2. bind.* København. Ejnar Munksgaard.

[16] Larsen, Thøger (overs.). 1970. *Snorris Eddasagn.* København. Gyldendal.

[17] Lorenz, Gottfried. 1984. *Snorri Sturluson GYLFAGINNING (Texte, Übersetzung, Kommentar).* Darmstadt. Wissenshcaftliche Buchgesellschaft.

[18] Monsen, Erling (ed. note); Smith A. H. (tr.). 1990. *Snorre Sturlason Heimskringla or The Lives of the Norse Kings.* New York. Dover Publications, Inc.

[19] Munch, P. A. (overs.). 1881. *Norges Konge-Sagaer forfattet af Snorre Sturlassøn.* Christiania. Feilberg & Landmark.

[20] Nordal, Sigurður. 1952. *Völuspá.* Reykjavík. Helgafell.

[21] Pálsson, Heimir (ed.). 1992. *Edda Snorra Sturlusonar.* Reykjavík. Mál og Menning.

[22] Pálsson, Hermann (ed.). 1991. *Hávamál meðformála og skýringum.* Reykjavík. Háskóli Íslands, Háskólaútgáfan.

[23] シーグルズル・ノルダル 著 菅原邦城 訳. 1993. 『巫女の予言. エッダ詩校訂本』. 東京. 東海大学出版会.

[24] 谷口幸男 訳. 1973. 『エッダ－古代北欧歌謡集』. 東京. 新潮社.

[25] 松谷健二 訳. 1986. 『エッダ／グレティルのサガ』. 中世文学集 III. 東京. 筑摩書房.

## 辞書

[26] Baetke, Walter. 1987. *Wörterbuch zur altnordischen Prosaliteratur.* Berlin. Akademie-Verlag.

[27] Cleasby, Richard; Vigfusson, Gudbrand; Craigie, Sir William A.. 1982. *An Icelandic-English Dictionary.* Oxford. Oxford at the Clarendon Press.

[28] Jonsson, Erik. 1863. *Oldnordisk Ordbog.* Kjöbenhavn. Det Kongelige Nordiske Oldskrift-Selskab. Trykt hos J. D. Qvist et Comp..

[29] Farge, Beatrice La; Tucker, John. 1992. *Glossary to the Poetic Edda Based on Hans Kuhn's Kurzes Wörterbuch.* Heidelberg. Carl Winter Universitätsverlag.

[30] Fritzner, Johan. 1867. *Ordbog over Det Gamle Noske Sprog.* Kristiania. Feilberg & Landmarks Forlag.

[31] Gering, Hugo. 1923. *Glossar zu den Liedern der EDDA (Sæmundar Edda).* Paderborn. Druck

und Verlag von Ferdinand Schöningh.

[32] Gering, Hugo. 1971. *Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda.* Hildesheim, New York. Georg Olms Verlag.

[33] Heggstad, Leiv; Hødnebø, Finn; Simensen, Erik. 1975. *Norrøn Ordbok 3.utgåva av Gamalnorsk Ordbok.* Oslo. Det Norske Samlaget.

[34] Jónsson, Finnur. 1931. *Lexicon Poeticum AntiquæLinguæSeptentrionalis. Ordbog over det Norsk-Islandske Skjaldesprog.* København. S. L. Møllers Bogtrykkeri.

[35] Kuhn, Hans. 1968. *Edda I-II, II. Kurzes Wörterbuch. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern Herausgegeben von Gustav Neckel.* Heidelberg. Carl Winter Universitätsverlag.

## 事典

[36] Jacobsen, Lis; Danstrup, John (red.). 1956. *Kulturhistorisk Leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformationstid I-XXII.* (KLNM) København. Rosenkilde og Bagger.

[37] Kellogg, Robert. 1988. *A Concordance to Eddic Poetry.* East Lansing(USA). Colleagues Press.

[38] Pulsiano, Phillip (ed.). 1993. *Medieval Scandinavia An Encyclopedia.* New York, London. Garland Publishing, Inc.

[39] Simek, Rudolf. 1984. *Lexikon der germanischen Mythologie.* Stuttgart. Alfred Kröner Verlag.

[40] Simek, Rudolf; Pálsson, Hermann. 1987. *Lexikon der altnordischen Literatur.* Stuttgart. Alfred Kröner Verlag.

[41] 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男（編）. 1994. 【縮刷版】『文化人類学事典』. 東京. 弘文堂.

## 文法書

[42] Andersen, Harry. 1936. *Oldnordisk Grammatik. Lydlære, Formlære, Hovedpunkter af Syntaksen.* København. J. H. Schultz Forlag.

[43] Hanssen, Eskil; Mundal, Else; Skadberg, Kåre. 1975. *Norrøn grammatikk. Lydlære, formlære og syntaks i historisk framstilling.* Oslo. Universitetsforlaget.

[44] Iversen, Ragnvald. 1984. *Norrøn grammatikk.* Aschehoug.

[45] Lund, G. F. V.. 1862. *Oldnordisk Ordföjningslære.* København. Berlingske Bogtrykkeri.

[46] Nygaard, M.. 1865. *Eddasprogets Syntax.* Bergen.

[47] Nygaard, M.. 1917. *Bemerkninger, Rettelser og Supplementer til Min Norrøn Syntax (Kristiania 1905).* Kristiania. Jacob Dybwad.

[48] Nygaard, M.. 1966. *Norrøn Syntax.* Oslo. Aschehoug.

[49] 森田貞雄. 1981. 『アイスランド語文法』. 東京. 大学書林.

## 研究書・論文

[50] Ambrosiani, Sune. 1907. *Odinskultens Härkomst.* Stockholm. Justus Cederquists Förlag.

[51] Aðalsteinsson, Jón Hnefill. 1990. "Old Norse Religion in the Sagas of Icelanders." *Gripla VII (Stofnun Árna Magnússonar rit 37).* Reykjavík. Stofnun Árna Magnússonar.

[52] Bayerschmidt, Carl F.. 1965. "The Element of the Supernatural in the Saga of Icelanders." *Scandinavian Studies.* Seattle. University of Washington Press.

[53] Bibire, Paul. 1986. "Freyr and Gerðr: the Story and its Myths." *Sagnaskemmtun (Philologica Germanica 8).* Wien, Köln, Graz. Hermann Böhlaus Nachf.

[54] Boyer, Régis. 1985. "On the Composition of Vǫluspá." *Edda: A Collection of Essays.* Manitoba. University of Manitoba Press.

[55] Briem, Ólafur. 1963. *Vanir og Æsir.* Reykjavík. Heimspekideild Háskóla Íslands.

[56] Briem, Ólafur. 1991. *Norræn Goðafræði.* Reykjavík. Iðunn.

[57] Bæksted, Anders. 1984. *Nordiske Guder og Helte.* København. Politikens Forlag.

[58] Christensen, Hanne. 1983. *Odinskikkelsen i den Nordiske Mytologi. enhed og mangfoldighed i Odinbegrebet.* København. Københavns Universitet.

[59] Davidson, H. R. Ellis. 1985. "Insults and Riddles in the Edda Poems." *Edda: A Collection of Essays.* Manitoba. University of Manitoba Press.

[60] Davidson, H. R. Ellis. 1982 (reprint). *Gods and Myths of Northern Europe.* New York. Penguin Books.

[61] Davidson, Hilda Ellis. 1971. *The Battle God of The Vikings. the first G. N. Garmonsway Memorial Lecture.* University of York Medieval Monograph Series. Cambridge

[62] Einarsson, Stefán. 1957. *A History of Icelandic Literature.* New York. The Johns Hopkins Press.

[63] Einarsson, Stefán. 1961. *Íslensk Bókmenntasaga 874-1960.* Reykjavík. Snæbjörn Jónsson &

Co. H. F.

[64] Falk, Hjalmar. 1924. *Odensheite.* Kristiania.

[65] Faulkes Anthony. 1979. "The Prologue to Snorra Edda." *Gripla III (Stofnun Árna Magnússonar rit 18).* Reykjavík. Stofnun Árna Magnússonar.

[66] Faulkes, Anthony. 1977. "Edda." *Gripla II (Stofnun Árna Magnússonar rit 16).* Reykjavík. Stofnun Árna Magnússonar.

[67] Gouchet, Oliver. 1990. "Sigurðr Freys vinr." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference).* Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[68] Gurevič, Elena A. (Moskva). 1986. "The formulaic pair in Eddic Poetry." *Structure and Meaning in Old Norse Literature (The Viking Collection Vol. 3).* Odense. Odense University Press.

[69] Hallberg, Peter. 1982. *Den norrøne digtning.* København. Gyldendal.

[70] Hallberg, Peter. 1985. "Elements of Imagery in the Poetic Edda." *Edda: A Collection of Essays.* Manitoba. University of Manitoba Press.

[71] Harris, Joseph. 1985. "Eddic Poetry." *Old Norse-Icelandic Literature (Islandica XLV).* Ithaca, London. Cornell University Press.

[72] Haugen, Einar. 1985. "The Edda as Ritual. Odin and His Masks." *Edda: A Collection of Essays.* Manitoba. University of Manitoba Press.

[73] Helgason, Jón. 1934. *Norrøn Litteraturhistorie.* København. Levin & Munksgaard.

[74] Holtsmark, Anne. 1949. *Forelesninger over Vǫluspá.* Hösten.

[75] Holtsmark, Anne. 1964. *Studier i Snorres Mytologi.* Oslo. Universitetsforlaget.

[76] Holtsmark, Anne. 1970. *Norrøn mytologi. Tro og myter i vikingtiden.* Oslo. Det Norske Samlaget.

[77] Jónsson, Baldur. 1990. "Orðtalning í eddukvæðum Konungsbókar." *Gripla VII (Stofnun Árna Magnússonar rit 37).* Reykjavík. Stofnun Árna Magnússonar.

[78] Jónsson, Finnur. 1907. *Den Islandske Litteraturs Historie. tilligemed den oldnorske.* København. G. E. C. Gad's Forlag.

[79] Kellogg, Robert. 1990. "The Prehistory of Eddic Poetry." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference).* Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[80] Klingenberg, Heinz. 1985. "Types of Eddic Mythological Poetry." *Edda: A Collection of*

*Essays*. Manitoba. University of Manitoba Press.

[81] Krag, Claus. 1991. *Ynglingatal og Ynglingesaga. En studie i historiske kilder*. Oslo. Universitetsforlaget.

[82] Kristjánsson, Jónas (author); Foote, Peter (tr.). 1988. *Eddas and Sagas. Icelandic Medieval Literature*. Reykjavík. Hiðíslenska bókmenntafélag.

[83] Kristjánsson, Jónas. 1990. "Stages in the Composition of Eddic Poetry." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference)*. Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[84] Lehmann, W. P.. 1965. "The So-called Historical Present in Old Norse." *Scandinavian Studies*. Seattle. University of Washington Press.

[85] Lindblad, Gustaf. 1978. "Centrala eddaproblem i 1970-talets forskningsläge." *Scripta Islandica - Isländska Sälskapets Årsbok 28/ 1977*. Uppsala.

[86] Lindow, John. 1985. "Mythology and Mythography." *Old Norse-Icelandic Literature (Islandica XLV)*. Ithaca, London. Cornell University Press.

[87] Møller, Åge. 1947. *Nordiske Myter*. Odense. Andelsbogtrykkeriet.

[88] McTurk, Roderick Walter. 1990. "The Poetic Edda and the Appositive Style." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference)*. Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[89] Nordal, Guðrún Tómasson, Sverrir Ólason, Vésteinn (ed.). 1992. *Íslensk Bókmenntasaga I*. Reykjavík. Mál og Menning.

[90] Nordal, Sigurður. 1920. *Snorri Sturluson*. Reykjavík. Þór. F. Þórláksson.

[91] Pálsson, Hermann. 1990. "Towards a Classification of Early Icelandic Poetry." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference)*. Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[92] Quinn, Judy. 1990. "Vǫluspá and the Composition of Eddic Verse." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference)*. Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[93] Ross, Margaret Clunies; Martin, B. K. (Sydney). 1986. "Narrative structures and intertextuality in Snorra Edda. the example of Thor's encounter with Geirrøðr." *Structure and Meaning in Old Norse Literature (The Viking Collection Vol. 3)*. Odense. Odense University Press.

[94] Ross, Margaret Cluniess. 1990. "Voice and Voices in Eddic Poetry." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference)*. Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[95] Schach, Paul. 1985. "Some Thoughts on Völuspá." *Edda: A Collection of Essays*. Manitoba. University of Manitoba Press.

[96] Sigurðsson, Gísli. 1990. "On the Classification of Eddic Heroic Poetry in View of the Oral Theory." *Poetry in the Scandinavian Middle Ages (The 7th International Saga Conference)*. Spoleto. Presso La Sede del Centro Studi.

[97] Sveinsson, Einar Ól.. 1962. *Íslenzkar Bókmenntir í Fornöld I*. Reykjavík. Almenna Bóka félagið.

[98] Turville-Petre, E. O. G.. 1964. *Myth and Religion of the North. The Religion of Ancient Scandinavia*. London. Weidenfeld and Nicolson.

[99] Turville-Petre, E. O. G.. 1976. *Scaldic Poetry*. Oxford. Oxford at the Clarendon Press.

[100] Zetterholm, D. O.. 1949. *Studier i En Snorre-Text. Tors Färd till Utgård. I Codices Upsaliensis DG 11 4to och Regius Hafn. 2367 4to*. Köpenhamn. Ejnar Munksgaard.

[101] Zetterholm, D. O.. *Atlamál. Studier i en Eddadikts Stil och Meter*. Stockholm. Hugo Gebers Förlag.

[102] Ægidius, Jens Peter. 1978. *Vølvens Spådom pådansk. En literær- og åndshitorisk undersøgelse*. København. G. E. C. Gads Forlag.

[103] H. R. エリス・デイヴィッドソン 著 米原まりこ 一井知子 訳. 1992. 『北欧神話』. 東京. 青土社.

[104] ジョルジュ・デュメジル 著 松村一男 訳. 1993. 『ゲルマン人の神々』. 東京. 国文社.

[105] ジョルジュ・デュメジル 著 松村一男 訳. 1987. 『神々の構造. 印欧語族三区分イデオロギー』. 東京. 国文社.

[106] フォルケ・ストレム 著 菅原邦城 訳. 1988. 『古代北欧の宗教と神話』. 京都. 人文書院.

[107] 寺村秀央. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』. 東京. くろしお出版.

[108] 菅原邦城 訳. 1979. 『ゲルマン北欧の英雄伝説. ヴォルスンガ・サガ』. 東京. 東海大学出版会.

[109] 菅原邦城. 1973. 「スノッリ・ストゥルソン 一研究ノート.」 IDUN（大阪外国語大学デンマーク語研究室紀要）I.

[110] 菅原邦城. 1976. 「スノッリの父ストゥルラ.」 IDUN（大阪外国語大学デンマーク語研究室紀

要）III.

[111] 菅原邦城. 1980.「首領スノッリ.」ＩＤＵＮ（大阪外国語大学デンマーク語研究室紀要）V

[112] 菅原邦城. 1982.「スノッリとサクソにみるバルドル神話.」ＩＤＵＮ（大阪外国語大学デンマーク語研究室紀要）VI

[113] 菅原邦城. 1984.『北欧神話』. 東京. 東京書籍.

# 資料

■「ギュルヴィの惑わし」においてスノッリが韻文を引用している部分での動詞の用例　同じ主語との組み合わせにおいて

#　散文では異なる動詞が使われている　31 例

◎　韻文と散文とで同じ動詞が使われている（同じ章において）　53 例

○　韻文と散文とで同じ動詞が使われている（別の章において）　11 例

×　韻文での話が散文では言い換えられていない　100 例

（別の章または韻文部分で類似の表現が見られる場合は () 内にその場所を示した）

△　散文に類似の表現が見られる　94 例

S_ REAL, ENTRY, MEANING が異なる，但し S_ REAL が異なる場合は S_ CATEGORY が類似の場合のみ）

作品に出てくる順に左から分類, ENTRY, MEANING, S_ REAL, O_ REAL, PLACE, (PHRASE) を示す．なお PLACE においては全て「ギュルヴィの惑わし」のデータのため，データベース上で作品の区別を示す GYLFG は省略した．#，△をつけた例については個別の MEANING が異なる場合もありうる．

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_ REAL | O_ REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ◎ | draga | 曳く | ゲヴュン | x | 1.14.V<br>1.4/ 1.8.P | |
| × | rjúka | 蒸気が立ち昇る | 蒸気，煙 | x | 1.17.V | |
| × | bera | 持つ | ４頭の牡牛 | ８つの目，４つの頭 | 1.18.V | |
| △ | ganga | 進む | ４頭の牡牛 | x | 1.19.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | （牡牛のひいている）鋤 | | 1.7.P | |
| × | láta | させる | x | x | 2.14.V | |
| △ | blíkja | 輝く | 楯 | x | 2.14.V | |
| | gylla | 黄金で飾られている | | | 2.11.P | |
| × | berja | 投げる | 楯 | 岩 | 2.15.V | |
| × | vera | 受け身 | 楯 | x | 2.15.V | |
| △ | hyggja | 考える | 男 | x | 2.17.V | |
| | | | 人 | | 51.76.P | |
| △ | ganga | 入る | 人 | 扉 | 2.31.V | ganga fram |
| | | | | | 2.24.P | ganga eptir |
| △ | skygnast | 見渡す | 人 | x | 2.32.V | skygnast um |
| | lítast | | ギュルヴィ王 | | 2.27.P | lítast um |
| × | skulu | 助動詞 | 人 | x | 2.32.V | |
| × | vera | ｂｅ | 節 | x | 2.33.V | |
| × | vita | 知る | 人 | 節 | 2.33.V | |
| × | sitja | いる | 敵 | x | 2.35.V | sitja fyrir |
| × | standa | 立っている | ギュルヴィ王 | x | 2.46.V | |
| # | fregna | 尋ねる | ギュルヴィ王 | x | 2.46.V | |
| | spyrja | | | | 2.19.P | |
| △ | sitja | 座る | 話すもの | x | 2.47.V | |
| | | 座っている | ニュースを知っている人 | | 44.16.P | |
| × | skulu | 助動詞 | 話すもの | x | 2.47.V | |
| △ | segja | 話す | 不特定の誰か他多数 | x | 2.47.V | |
| ◎ | vera | ある | x | x | 4.4.V | |
| | | | | | 4.1/ 4.2.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_ REAL | O_ REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ◎ | vera | ある | x | x | 4.5.V | |
| | | | | | 4.1/ 4.2.P | |
| ◎ | vera | ある | x | x | 4.6.V | |
| | | | | | 4.1/ 4.2.P | |
| # | finnast | ある | 大地，天 | x | 4.8.V | |
| | vera | | | | 4.1/ 4.2.P | |
| ◎ | vera | ある | 大きな空間 | x | 4.10.V | |
| | | | | | 4.1/ 4.2.P | |
| ◎ | fara | 来る | スルト | x | 4.24.V | |
| | | | | | 4.22.P | |
| △ | skína | 輝く | 太陽 | x | 4.26.V | |
| | | | x | | 51.44.P/ | |
| | | | | | (51.115.V) | |
| × | gnata | 音を立てて崩れ落ちる | 岩山 | x | 4.28.V | |
| | | | | | (51.117.V) | |
| × | rata | つまずく | 女巨人 | x | 4.29.V | |
| | | | | | (51.118.V) | |
| × | troða | 進む | 人間 | 地獄への道 | 4.30.V | |
| | | | | | (51.119.V) | |
| △ | klofna | 割れる | 天 | x | 4.31.V | |
| | brenna | 燃やす | スルト | 世界中 | 4.23.P | |
| △ | vera | 出ている | 巫女 | x | 5.23.V | vera frá e-m |
| | koma | 生じる | 霜の巨人の一族 | | 5.21.P | |
| ◎ | koma | 出て行く | 巨人 | ユミル | 5.30.V | koma frá e-m |
| | | | | | 5.21.P | |
| ◎ | koma | 出て来る | ユミル | x | 5.32.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 5.21.P | |
| # | støkkva | 流れ出る | 毒の雫 | x | 5.36.V | |
| | standa af | 出て来る | | | 5.7.P | |
| △ | vaxa | 育つ | 毒の雫 | x | 5.37.V | |
| | frjósa | ～になる | | | 5.8.P | |
| # | verða | 生まれる | 巨人 | x | 5.37.V | verða ór |
| | * kvikna | 生命が生まれる | | | 5.18.P | |
| | verða | なる | 生命 | | 5.19.P | |
| ◎ | koma | 出て来る | 巨人の一族 | x | 5.39.V | |
| | | | | | 5.21.P | |
| △ | vera | 起こる | 恐ろしい事 | x | 5.40.V | vera til |
| | vaxa | 増える | 霜の巨人の一族 | | 5.41.P | |
| × | vera | 受け身 | 大地 | x | 7.10.V | |
| ○ | skapa | つくる | 大地 | x | 7.10.V | |
| | | | | | 4.13.P | |
| × | vera | 受け身 | ベルゲルミル | x | 7.11.V | |
| × | bera | 生まれる | ベルゲルミル | x | 7.11.V | |
| × | muna | 思い出す | ヴァフスルーズニル | 節 | 7.12.V | |
| × | vera | 受け身 | ベルゲルミル | x | 7.14.V | |
| # | leggja | 横たわる | ベルゲルミル | x | 7.14.V | |
| | * fara upp | 乗る | | | 7.6.P | |
| | haldast | 留まる | | | 7.7.P | |
| × | vita | 知る | 太陽 | 節 | 8.24.V | |
| △ | eiga | 持つ | 太陽 | 館 | 8.25.V | |
| | setja | 決める | ボルの息子 | 光/ 場所 | 8.21.P | |
| | skapa | 決める | ボルの息子 | 光/ 道 | 8.21.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_ REAL | O_ REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| × | vita | 知る | 月 | 節 | 8.26.V | |
| △ | eiga | 持つ | 月 | どのような力 | 8.27.V | |
| | | | 太陽 | 逃げ道 | 12.5.P | |
| × | vita | 知る | 星 | 節 | 8.28.V | |
| △ | eiga | 持つ | 星 | 場所 | 8.29.V | |
| | setja | 決める | ボルの息子 | 光/ 場所 | 8.21.P | |
| | skapa | 決める | ボルの息子 | 光/ 道 | 8.21.P | |
| × | vera | 受け身 | 大地 | x | 8.42.V | |
| △ | skapa | つくる | 大地 | x | 8.42.V | |
| △ | gera | つくる | やさしい神 | ミズガルズ/ 人 | 8.48.V | |
| | gera | つくる | ボルの息子 | 世界を囲む壁 | 8.37.P | |
| | hafa | 使う | ボルの息子 | ユミルのまつげ/ 神々の砦 | 8.38.P | hafa e-t til e-s |
| | taka | 取る | ボルの息子 | ユミルの脳味噌 | 8.39.P | |
| | kasta | 投げる | ボルの息子 | ユミルの脳味噌 | 8.39.P | |
| | gera | つくる | ボルの息子 | 雲 | 8.40.P | |
| | | ボルの息子たち（神々）による世界創造の描写 | | | | |
| × | vera | 受け身 | 邪悪な雲 | x | 8.51.V | |
| # | skapa | つくる | 邪悪な雲 | x | 8.52.V | |
| | gera | | | | 8.40.P | |
| ◎ | búa | 住む | 巨人の老女 | x | 12.24.V | |
| | | | | | 12.14.P | |
| ◎ | fœða | 育てる | 巨人の老女 | フェンリル狼（狼） | 12.26.V | |
| | | | | | 12.16.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_ REAL | O_ REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ◎ | verða | なる | フェンリルの一族の一人 | x | 12.28.V | |
| | | | | | 12.19.P | |
| ◎ | fyllast | 満ちる | フェンリルの一族の一人 | 死にかけている男の体 | 12.32.V | |
| | | | | | 12.20.P | |
| # | rjóða | 赤く染める | フェンリルの一族の一人 | 神々の住まい/赤い血 | 12.34.V | |
| | stǫkkva | まき散らす | マーナガルムル | 血/ 天 | 12.21.P | |
| # | verða | （黒く）なる | 太陽の光，風 | x | 12.36.V | |
| | týna | 失う | 太陽 | 輝き | 12.22.P | |
| △ | vita | 知る | オージンたち | x | 12.39.V | |
| | | | アース神 | | 25.3.P | |
| △ | ganga | 集まる | アース神 | x | 14.27.V | |
| | setjast | （自分の場所に）座っている | | | 14.19.P | |
| △ | gætast | 相談する | 聖なる神々（アース神） | 以下の節 | 14.30.V | gætast um e-t |
| | ráða | 決める | アース神 | 判決 | 14.19.P | |
| × | skulu | 助動詞 | x | x | 14.31.V | |
| # | skepja | つくる | x | 侏儒の人々 | 14.32.V | |
| | * kvikna | 生まれる | | | 14.20.P | |
| # | gera | つくる | モートソグニル，ドゥーリン（侏儒） | 多くの人の形をしたもの（侏儒） | 14.36.V | |
| | * kvikna | 生まれる | | | 14.20.P | |
| | * skipast | 変身する | | | 14.22.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | * taka kviknan | 生命を得る | | | 14.22.P | |
| × | segja | 言う | ドゥーリン (侏儒) | x | 14.38.V | |
| × | vita | 知る | 巫女 | 全て，節 | 15.19.V (16.34.V 他) | |
| △ | fela | 隠す | オージン | 目 | 15.20.V | |
| | leggja | 担保に入れる | | | 15.18.P | leggja e-t at veði |
| ◎ | drekka | 飲む | ミーミル | 蜜酒 | 15.23.V 15.15.P | |
| △ | vita | 知る | オージンたち アース神 | x | 15.26.V 25.3.P | |
| × | skulu | 助動詞 | ソール | x | 15.39.V | |
| ◎ | vaða | 渡る | ソール | 川 | 15.39.V 15.35.P | |
| △ | dœma | 裁く | ソール | x | 15.41.V | |
| | ganga | (裁きの席に) 来る | | | 15.35.P | ganga til dómsins |
| | eiga | 決める | アース神 | | 15.4.P | eiga dóma |
| # | fara | 行く | ソール | x | 15.41.V | |
| | ganga | (裁きの席に) 来る | | | 15.35.P | ganga til dómsins |
| ◎ | brenna | 燃える | ビフロスト | 炎 | 15.44.V 15.46.P | |
| # | hlóa | 熱くなる | 聖なる川 | x | 15.45.V | |
| | brenna | 燃える | 炎 | | 15.46.P | |
| × | hyggja | 思う | ファーヴニ | 節 | 15.59.V | |
| ◎ | vera | be | ノルン | x | 15.59.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 15.56.P | |
| × | eiga | 持つ | ノルン | 一族 | 15.60.V | |
| ◎ | vera | ｂｅ | ノルン | x | 15.61.V | |
| | | | | | 15.56.P | |
| ◎ | vera | ｂｅ | ノルン | x | 15.62.V | |
| | | | | | 15.56.P | |
| × | drýgja | 耐える | ユッグドラシル | 苦労 | 16.12.V | |
| × | vita | 知る | 人 | x | 16.13.V | |
| ◎ | bíta | かじる | 鹿 | x | 16.14.V | |
| | | | | | 16.8.P | |
| ◎ | fúna | 腐る | ユッグドラシル | x | 16.15.V | |
| | | | | | 16.30.P | |
| × | skerða | 傷つける | ニーズホッグ | x | 16.16.V | |
| # | liggja | いる | 多くの蛇 | x | 16.19.V | |
| | vera | | | | 16.9.P | |
| △ | hyggja | 考える | 愚かもの | それ | 16.20.V | |
| | | | 人 | | 51.76.P | |
| × | vera | ｂｅ | 蛇 | x | 16.22.V | |
| △ | hyggja | 思う | オージンソール | 節 | 16.25.V | |
| | | | | | 45.18.P | |
| × | munu | 助動詞 | 蛇 | x | 16.25.V | |
| △ | má | かじる | 蛇 | ユッグドラシルの枝 | 16.26.V | |
| | bíta | | 鹿 | | 16.8.P | |
| × | vita | 知る | 巫女 | ユッグドラシル | 16.34.V | |
| | | | | | (15.19.V 他) | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ◎ | ausa | 注ぐ | ユッグドラシル | 白い泥水 | 16.34.V | |
| | | | | | 16.29.P | |
| × | heita | 呼ばれる | ユッグドラシル | x | 16.35.V | |
| # | koma | 来る | 露 | x | 16.38.V | |
| | falla af | 落ちる | | | 16.42.P | |
| △ | falla | 降りる | 露 | x | 16.39.V | |
| | falla af | 落ちる | | | 16.42.P | |
| ○ | standa | 立っている | ユッグドラシル | x | 16.40.V | |
| | | | | | 15.8.P | |
| × | vita | 知る | 巫女 | 太陽よりも美しく黄金よりも良い館 | 17.23.V | |
| | | | | | (15.19.V/ 16.34.V) | |
| ◎ | standa | 立っている | 太陽よりも美しく黄金よりも良い館 | x | 17.23.V | |
| | | | | | 17.20.P | |
| × | skulu | 助動詞 | 信頼出来る人 | x | 17.27.V | |
| ◎ | byggja | 住む | 信頼出来る人 | x | 17.28.V | |
| | | | | | 17.5/ 17.21/ 17.37.P | |
| × | njóta | 楽しむ | 信頼出来る人 | 歓び | 17.30.V | |
| ◎ | heita | 呼ばれる | 巨人 | x | 18.9.V | |
| | | | | | 18.7.P | |
| ◎ | sitja | 座っている | 巨人 | x | 18.10.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 18.6.P | |
| △ | kveða | 言う | 人 | 風 | 18.13.V | |
| | segja | | 人々 | | 48.61.P | |
| ◎ | koma | 来る | 風 | x | 18.13.V | |
| | | | | | 18.1.P | |
| × | vera | ｂｅ | ロキ | x | 20.12.V | |
| △ | letjast | 止める | ロキ | x | 20.14.V | |
| | hætta | | ソールとエッリ | | 46.127.P | |
| △ | hyggja | 思う | フレイヤ | 節 | 20.16.V | |
| | | | ハール | | 48.62.P | |
| ◎ | vita | 知る | フリッグ | 全ての運命 | 20.16.V | |
| | | | | | 20.9.P | |
| ◎ | segja | 言う | フリッグ | x | 20.17.V | |
| | | | | | 20.9.P | |
| ◎ | heita | 呼ばれる | オージン | x | 20.24.V | |
| | | | | | 20.18.P | |
| △ | hyggja | 思う | オージン | ビールスキルニ | 21.12.V | |
| | | | ハール | | 48.62.P | |
| ○ | vita | 知る | オージン | 建物の屋根 | 21.14.V | |
| | | | | | 9.16.P | |
| △ | vita | 思う | オージン | オージンの息子の建物 | 21.15.V | |
| | | 知る | | | 9.16.P | |
| ◎ | heita | 呼ばれる | ブレイザブリク | x | 22.13.V | |
| | | | | | 22.11.P | |
| # | hafa | 持つ | バルドル | バルドル/館 | 22.14.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | búa | 住む | | | 22.10.P | |
| △ | liggja | ある | 恐ろしいルーン | x | 22.17.V | |
| | vera | | ギンヌンガガップ | | 15.10.P | |
| ○ | vita | 知る | オージン | 恐ろしいルーン | 22.17.V | |
| | | | | | 9.16.P | |
| △ | vera | 疎ましい | 山 | ニョルズ | 23.17.V | vera leiðr e-t |
| △ | vera | いる | ニョルズ | x | 23.18.V | |
| △ | þykkja | 思われる | ニョルズ | 狼の遠吠え | 23.21.V | |
| △ | vera | b e | 狼の遠吠え | x | 23.21.V | |
| | | 海の近くにいる | | | 23.13.P | vera nær sær |
| | | 上の３例はニョルズとスカジの結婚について | | | | |
| △ | sofa | 眠る | スカジ | x | 23.24.V | |
| | （山に住んでいる） | | | | 23.11.P | |
| | | 普段山に住んでいるスカジが生みの近くで眠れないことについて | | | | |
| × | mega | 助動詞 | スカジ | x | 23.24.V | |
| △ | vekja | 起こす | かもめ | スカジ | 23.27.V | |
| △ | koma | 出て来る | かもめ | x | 23.28.V | |
| | （山に住んでいる） | | | | 23.11.P | |
| | | 上の２例も普段山に住んでいるスカジが生みの近くで眠れないことについて | | | | |
| ◎ | heita | 呼ばれる | スリュムヘイム | x | 23.33.V | |
| | | | | | 23.12.P | |
| # | búa | 住む | シャツィ | x | 23.34.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | eiga | 持つ | | 住む場所 | 23.11.P | |
| # | byggja | 住む | スカジ | x | 23.36.V | |
| | hafa | | | | 23.11.P | hafa bústað |
| ◎ | heita | 呼ばれる | フォールクヴァング | x | 24.9.V | |
| | | | | | 24.7.P | |
| × | ráða | 決める | フレイヤ | 席順 | 24.10.V | |
| # | kjósa | 選ぶ | フレイヤ | 戦死者の半分 | 24.13.V | |
| | eiga | 得る | | 死者の半分 | 24.7.P | |
| △ | eiga | 持つ | オージン | 戦死者の半分 | 24.14.V | |
| | eiga | 得る | | 死者の半分 | 24.7.P | |
| ◎ | heita | 呼ばれる | ヒミンビョルグ | x | 27.13.V | |
| | | | | | 27.5.P | |
| △ | kveða | 言う | x | ヘイムダッル | 27.14.V | |
| | | | ハール | | 18.5.P | |
| △ | valda | 支配する | ヘイムダッル | 聖なるところ | 27.15.V | |
| | ráða | | オージン | | 3.12.P | |
| △ | drekka | 飲む | ヘイムダッル | 蜜酒 | 27.17.V | |
| | | | ソール | | 46.67.P | |
| × | vera | ｂｅ | ヘイムダッル | x | 27.20.V | |
| × | vera | ｂｅ | ヘイムダッル | x | 27.21.V | |
| ◎ | heita | 呼ばれる | グリトニル | x | 32.6.V | |
| | | | | | 32.2.P | |
| × | vera | 受け身 | グリトニル | x | 32.7.V | |
| × | styðja | 支える | グリトニル | 黄金 | 32.7.V | |
| △ | þekja | 覆う | グリトニル | 銀 | 32.8.V | |
| | | | ヴァルホル | | 2.13.P | |
| △ | byggja | 住む | フォルセティ | x | 32.10.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | eiga | 持つ | | 広間 | 32.2.P | |
| △ | svæfa | （紛争を）静める | フォルセティ | 全ての紛争 | 32.11.V | |
| | vera | b e | グリトニル | | 32.4.P | |
| # | fljúga | 飛ぶ | 何 | x | 35.48.V | |
| | renna | （空を）走る | 馬 | | 35.45.P | |
| | ríða | 乗る | グナー | x | 35.46.P | |
| | (sjá ríða hennar | （乗って飛んでいるのを）見る | | | 35.47.P) | |
| ◎ | fara | 進む | 何 | x | 35.49.V | |
| | | | | | 35.59.P | |
| # | líða | 進む | 何 | x | 35.50.V | |
| # | fljúga | 飛ぶ | グナー | x | 35.52.V | |
| | renna | （空を）走る | 馬 | | 35.45.P | |
| | ríða | 乗る | グナー | x | 35.46.P | |
| | (sjá ríða hennar | （乗って飛んでいるのを）見る | | | 35.47.P) | |
| ◎ | fara | 進む | グナー | x | 35.53.V | |
| | | | | | 35.59.P | |
| # | líða | 進む | グナー | x | 35.54.V | |
| | renna | （空を）走る | 馬 | | 35.45.P | |
| | ríða | 乗る | グナー | x | 35.46.P | |
| | (sjá ríða hennar | （乗って飛んでいるのを）見る | | | 35.47.P) | |
| × | geta | 得る | ハムスケルピル | ホーフヴァルプニ | 35.57.V | |
| △ | vilja | 望む | オージン | 節 | 36.5.V | |
| | | | アース神 | | 13.13.P | |
| ◎ | bera | 運ぶ | ヴァリュキュリャ | オージン/角杯 | 36.5.V | |
| ◎ | bera | 運ぶ | ヴァリュキュリャ | エインヘリャル/ビール | 36.12.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 36.1.P | |
| × | vera | ｂｅ | 一夜 | x | 37.32.V | |
| × | vera | ｂｅ | ２日目の夜 | x | 37.33.V | |
| × | mega | 助動詞 | フレイ | x | 37.34.V | |
| △ | þreyja | 耐える | フレイ | ３夜 | 37.34.V | |
| | | | | 刀のないこと | 37.27.P | láta e-t til e-s |
| ◎ | þykkja | 思われる | フレイ | 一月 | 37.36.V | |
| | | | | | 37.47.P | |
| × | láta | する | アンドフリームル | セーフリームニル | 38.14.V | |
| ◎ | sjóða | 料理する | セーフリームニル | x | 38.16.V | |
| | | | | | 38.9.P | |
| △ | vita | 知る | 僅かな者人 | 節 | 38.18.V | |
| | | | | | 44.16.P | |
| △ | alast | 食べる | エインヘリャル | 何を | 38.19.V | |
| | | 用意する | オージン | 食事/ 戦場で倒れたもの | 38.3.P | fá e-m at e-m |
| # | seðja | 満足させる | オージン | ゲリ，フレキ | 38.27.V | |
| | gefa | 与える | | ２頭の狼/ 食事 | 38.22.P | |
| ○ | lifa | 生きる | オージン | x | 38.31.V | |
| | | | | | 3.11.P | |
| ◎ | fljúga | 飛ぶ | フギン，ムニン | x | 38.39.V | |
| | | | | | 38.34.P | |
| × | óast | 心配する | オージン | フギン | 38.41.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ◎ | koma | 戻る | フギン | x | 38.42.V | koma aptr |
| | | | | | 38.35.P | |
| △ | sjást | 恐れる | オージン | ムニン | 38.43.V | sjást um e-t |
| | óttast | | アース神 | | 34.46.P | |
| △ | hyggja | 思う | オージン | ５４０の扉 | 40.12.V | |
| | | | ハール | | 48.62.P | |
| ◎ | vera | ある | ５４０の扉 | x | 40.12.V | |
| | | | | | 40.5.P | |
| ◎ | ganga | 出て行く | ８００人のエインヘリャル | x | 40.14.V | |
| | | | | | 40.6/ 40.8.P | |
| × | fara | 向かう | エインヘリャル | x | 40.15.V | |
| × | vega | 殺す | エインヘリャル | フェンリル狼 | 40.15.V | |
| # | hǫggvast | 戦う | エインヘリャル | x | 41.12.V | |
| | berjast | | | | 41.6.P | |
| △ | kjósa | 選ぶ | エインヘリャル | 戦死者 | 41.13.V | |
| | | | ヴァルキュリャ | | 36.14.P | |
| | | | ノルン | | 36.16.P | |
| ◎ | ríða | 乗って戻る | エインヘリャル | x | 41.14.V | |
| | | | | | 41.8.P | |
| # | sitja | 座っている | エインヘリャル | x | 41.15.V | |
| | setjast | 座る | | | 41.8.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ○ | vera | b e | ユッグドラシル | x | 41.20.V | |
| | | | | | 15.6.P | |
| # | ganga | 集まる | アース神 | x | 42.63.V | |
| | * setjast | | | | 42.33.P | |
| # | gætast | 相談する | 聖なる神々(アース神) | 以下の節 | 42.66.V | gætast um e-t |
| | ráða | | | | 42.12.P | ráða ráðum |
| | * ganga | 話し合う | | | 42.12.P | ganga á tal |
| × | hafa | 完了 | 誰が | x | 42.67.V | |
| △ | blanda | 混ぜる | 誰が | 天/不幸 | 42.68.V | |
| | ráða | 提案する | ロキ他 | | 42.34/ 42.37/ 42.38.P | |
| # | gefa | 与える | 誰が | 巨人の一族/フレイヤ | 42.70.V | |
| | gipta | 結婚させる | アース神 | フレイヤ | 42.34.P | |
| | gefa | 与える | アース神 | 太陽と月を巨人に | 42.36.P | |
| △ | gangast | 破られる | 誓い, 言葉, 誓い, 重要な約束 | x | 42.71.V | |
| | gjalda | 支払う(否定) | ソール | 仕事の報酬 | 42.55.P | |
| | synja | 否定する | ソール | 職人(巨人)が住むこと | 42.56.P | |
| △ | fara | 交わす | 誓い, 言葉, 誓い, 重要な約束 | x | 42.74.V | |
| | lofa | 許可する | アース神 | 節 | 42.19.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ráða | 提案する | ロキ他 | | 42.34/ | |
| | | | | | 42.37/ | |
| | | | | | 42.38.P | |
| | sverja | 誓う | ロキ | | 42.41.P | sverja eið |
| # | vega | 殺す | ソール | x | 42.75.V | |
| | senda | （地獄へ）送る | | 職人（巨人） | 42.58.P | senda niðr undir Niflhel |
| | ljósta | 打つ | | 最初の一撃 | 42.57.P | |
| × | þryngva | 満ちる | ソール | 怒り | 42.76.V | |
| × | sitja | 座っている | ソール | x | 42.77.V | |
| × | fregna | 聞き知る | ソール | その様なこと | 42.78.V | |
| × | munu | 助動詞 | ロキ | x | 49.122.V | |
| ◎ | gráta | 泣く | ロキ | 乾いた涙 | 49.122.V | |
| | | | | | 49.121.P | |
| × | njóta | 楽しむ | ロキ | バルドル | 49.126.V | |
| △ | halda | 持つ | ヘル | バルドル | 49.127.V | |
| | | | ソール | 網の一方の端 | 50.24.P | |
| | | | アース神 | 網の一方の端 | 50.25.P | |
| | | | シギュン | たらい | 50.51.P | |
| △ | hafa | 持つ | ヘル | バルドル | 49.127.V | |
| | | | スルト | 炎の剣 | 4.21.P | |
| × | munu | 助動詞 | 兄弟 | x | 51.11.V | |
| △ | berjast | 戦う | 兄弟 | x | 51.11.V | |
| | | | エインヘリャル | | 41.6.P | |
| △ | verðast | 殺し合う | 兄弟 | | 51.12.V | verðast at bǫnom |
| | drepast | | | | 51.8.P | |
| × | munu | 助動詞 | 姉妹の子供 | x | 51.13.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S. REAL | O. REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| △ | spilla | 壊す | 姉妹の子供 | 姻戚関係 | 51.14.V | |
| | | | アース神 | 天と空 | 42.35.P | |
| × | vera | ｂｅ | x | x | 51.15.V | |
| × | vera | 受け身 | 楯 | x | 51.18.V | |
| △ | kljúfa | 引き裂く | 楯 | x | 51.18.V | |
| | rífa | | ヴィーザル | フェンリル狼の口 | 51.77.P | |
| | slíta | | 鷲 | 死体 | 51.103.P | |
| △ | steypast | 落ちる | 世界 | x | 51.20.V | |
| | hverfa | | 星 | | 51.24.P | |
| | hrynja | 倒れる | 山 | | 51.26.P | |
| ◎ | blása | 吹く | ヘイムダッル | 角笛 | 51.81.V | |
| | | | | | 51.53.P | |
| × | vera | ある | 角笛 | x | 51.82.V | |
| ○ | mæla | 話す | オージン | ミーミルの頭 | 51.83.V | mæla við e-t |
| | | | | | 20.10.P | |
| △ | skjalfa | 震える | ユッグドラシル | x | 51.85.V | |
| | | 揺れる | | | 51.55.P | |
| ○ | standa | 立っている | ユッグドラシル | x | 51.86.V | |
| | | | | | 15.8.P | |
| × | ymja | うめく | ユッグドラシル | x | 51.87.V | |
| | | | ヨトゥンヘイム | | 51.91.V | |
| | stynja | | 侏儒 | | 51.93.V | |
| △ | losna | 解き放たれる | ロキ | x | 51.88.V | |
| | | | ナグルファル | | 51.29.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| × | vera | 起こる | 何が | アース神 | 51.89.V | vera með |
| × | vera | 起こる | 何が | アールヴ | 51.90.V | vera með |
| × | ymja | うめく | ヨトゥンヘイム | x | 51.91.V | |
| | | | ユッグドラシル | | 51.87.V | |
| | stynja | | 侏儒 | | 51.93.V | |
| # | vera á þingi | 集まる | アース神 | x | 51.92.V | |
| | * setjast | | | | 42.33.P | |
| × | stynja | うめく | 侏儒 | x | 51.93.V | |
| | ymja | | ユッグドラシル | | 51.87.V | |
| | ymja | | ヨトゥンヘイム | | 51.91.V | |
| ○ | vita | 知る | オージンたち | x | 51.96.V | |
| | | | | | 9.16.P | |
| △ | aka | 来る | フリュム | x | 51.97.V | |
| | | 乗ってやって来る | フレイ | | 49.76.P | |
| | | 乗ってやって来る | フレイヤ | | 49.78.P | |
| × | hafast | 体の前に持つ | フリュム | 楯 | 51.98.V | hafast fyrir |
| × | snúast | もだえる | ミズガルズ蛇 | x | 51.99.V | |
| × | knýja | 叩く | ミズガルズ蛇 | 波 | 51.101.V | |
| × | munu | 助動詞 | 鷲（フレースヴェルギル） | x | 51.102.V | |
| × | hlakka | 叫ぶ | 鷲（フレースヴェルギル） | x | 51.102.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| △ | slíta | 引き裂く | 鷲（フレースヴェルギル） | 死体 | 51.103.V | |
| | | | スヴァジルファェール | ひも | 42.46.P | slíta e-t sundr |
| | | | ソール | 牛の頭 | 48.28.P | slíta e-t af |
| ◎ | losna | 解き放たれる | ナグルファル | x | 51.104.V | |
| | | | | | 51.29.P | |
| × | fara | 出発する | ナグルファル | x | 51.105.V | |
| △ | koma | 来る | ムスペッルの民（巨人） | x | 51.106.V | |
| | | | ある職人（巨人） | | 42.7.P | |
| × | munu | 助動詞 | ムスペッルの民（巨人） | x | 51.106.V | |
| △ | stýra | 舵をとる | ロキ | ナグルファル | 51.108.V | |
| | | 支配する | オージン | 太陽と月の道 | 11.1.P | |
| | | 操る | フリュム | ナグルファル | 51.34.P | |
| △ | róa | 船に乗って来る | 巨人 | x | 51.109.V | |
| | | 漕ぐ | ソール | | 48.15.P | |
| | | 漕ぐ | ヒュミル | | 48.14.P | |
| △ | fara | 来る | スルト | x | 51.113.V | |
| | | 行く | | | 4.22.P | |
| △ | skína | 輝く | 太陽 | x | 51.115.V | |
| | | | | | 4.26.V | |
| | | | x | x | 51.44.P | |
| × | gnata | 音を立てて崩れ落ちる | 岩山 | x | 51.117.V | |
| × | rata | つまずく | 女巨人 | x | 51.118.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| × | troða | 進む | 人間 | 地獄への道 | 51.119.V | |
| ◎ | klofna | 割れる | 天 | x | 51.120.V | |
| | | | | | 51.41.P | |
| △ | koma | 起こる | フリーンの２度目の悲しみ（オージンの死） | x | 51.121.V | koma fram |
| | | | 悪いこと | | 37.47.P | koma við |
| △ | fara | 行く | オージン | x | 51.123.V | |
| | koma | | | | 20.23.P | |
| | ríða | | | | 51.54.P | |
| △ | vega | 戦う | オージン | フェンリル狼 | 51.124.V | vega við |
| | | 殺される | バルドル | | 50.2.P | |
| × | munu | 助動詞 | フリッグの歓び（オージン） | x | 51.127.V | |
| × | falla | 倒れる | フリッグの歓び（オージン） | x | 51.128.V | |
| ○ | ganga | 行く | ソール | x | 51.129.V | |
| | | | | | 45.51/ | |
| | | | | | 45.56/ | |
| | | | | | 46.5.P | |
| × | vega | 戦う | ソール | フェンリル狼 | 51.130.V | vega við |
| | | | オージン | | 51.124.V | |
| △ | láta | させる | ヴィーザル | 剣 | 51.133.V | |
| | | | オージン | | 34.49.P | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| △ | standa | 突き刺す | 剣 | フェンリル狼の息子の心臓 / 両方の手 | 51.134.V | standa til |
| | skjóta | | アース神 | 剣 | 34.96.P | |
| △ | hefna | 復讐する | ヴィーザル | オージン | 51.136.V | |
| | | | ヴァール | 約束を破ったもの | 35.31.P | |
| | | | ソール | そのこと | 48.5.P | |
| ○ | ganga | 来る | ソール | x | 51.137.V | |
| | | | | | 15.35.P | |
| × | munu | 助動詞 | 人間全て | x | 51.141.V | |
| △ | ryðja | 去る | 人間全て | この世 | 51.142.V | |
| | fara | | オーズ | | 35.15.P | fara í braut |
| △ | drepa | 打つ | ソール | フェンリル狼 | 51.143.V | |
| | slá | | | その男 | 45.25.P | |
| × | munu | 助動詞 | 太陽 | x | 51.145.V | |
| △ | sortna | 黒くなる | 太陽 | x | 51.145.V | |
| | týna | 失う | 太陽 | 輝き | 12.22.P | |
| △ | søkkva | 沈む | 大地 | x | 51.146.V | |
| | ganga | 上下に揺れる | 大地 | | 45.12.P | ganga skykkium |
| | skjalfa | 揺れる | 大地 | | 50.54.P | |
| △ | hverfa | 消える | 明るい星 | x | 51.147.V | |
| | | 落ちる | 星 | | 51.24.P | |
| × | geisa | 暴れ回る | 炎 | x | 51.149.V | |
| ◎ | heita | 呼ばれる | 平原 | x | 51.154.V | |
| | | | | | 51.46.P | |
| △ | finnast | 戦う | スルト，やさしい神 | 戦い | 51.155.V | finnast at vígi |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | herja | | スルト | | 4.22.P | |
| × | vera | ｂｅ | 平原 | x | 51.158.V | |
| × | vera | 受け身 | 平原 | x | 51.159.V | |
| × | vita | 知る | 平原 | x | 51.159.V | |
| × | vita | 知る | 巫女 | 館 | 52.17.V | |
| | | | | | (16.34.V) | |
| ◎ | standa | 立っている | 館 | x | 52.17.V | |
| | | | | | 52.9.P | |
| △ | horfa | 向く | 扉 | x | 52.20.V | |
| | | 向いている | 扉 | | 52.13.P | |
| △ | falla | 落ちる | 毒のしずく | x | 52.21.V | |
| | falla inn | blása | 吐く | 蛇 | 毒 52.15.P | |
| | renna | 流れる | 毒の川 | | 52.15.P | |
| × | vera | 受け身 | 館 | x | 52.23.V | |
| △ | vinda | 編む | 館 | 蛇の背 | 52.23.V | |
| | vefa | | 広間 | | 52.13.P | |
| × | skulu | 助動詞 | 偽りの誓いをしたもの | x | 52.25.V | |
| ◎ | vaða | 渡る | 偽りの誓いをしたもの | 激しい流れ | 52.25.V | |
| | | | | | 52.15.P | |
| × | kvelja | いじめる | ニズホッグ | 死体 | 52.30.V | |
| × | byggja | つくる | ヴィーザル，ヴァーリ | 神々の神殿 | 53.14.V | |
| △ | sortna | 暗くなる | 神々の神殿 | スルトの炎 | 53.15.V | |
| | týna | 輝きを失う | 太陽 | | 12.22.P | |
| | verða | （黒く）なる | 太陽の光，風 | x | 12.36.V | |
| | sortna | （黒く）なる | 太陽 | | 51.145.V | |

| 分類 | ENTRY | MEANING | S_REAL | O_REAL | PLACE | (PHRASE) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| × | skulu | 助動詞 | モージ，マグニ | x | 53.17.V | |
| △ | hafa | 得る | モージ，マグニ | ミョッルニル | 53.17.V | |
| | | 持つ | | | 53.7.P | |
| △ | leynast | 隠れる | リーヴ，リーヴスラシル | x | 53.25.V | |
| | | | ２人の人間 | | 53.19.P | |
| × | munu | 助動詞 | リーヴ，リーヴスラシル | x | 53.25.V | |
| × | hafa | 得る | リーヴ，リーヴスラシル | 朝の露 | 53.28.V | |
| △ | alast | 生まれる | 人 | x | 53.29.V | |
| | koma | 出て来る | | | 53.21.P | koma af e-m |
| # | bera | 生む | 太陽 | 娘 | 53.34.V | |
| | geta | | | | 53.30.P | |
| △ | fara | 追いつく | フェンリル狼 | 太陽 | 53.35.V | |
| | | 追いかける | 狼 | 太陽 | 12.10.P | fara eptir e-m |
| × | skulu | 助動詞 | 太陽の娘 | x | 53.36.V | |
| × | ríða | 走る | 太陽の娘 | 母の道 | 53.36.V | |
| △ | deyja | 死ぬ | 神々 | x | 53.37.V | |
| | | | ナンナ | | 49.69.P | |

「ユングリンガ・サガ」での神々と同じ名前を持つ王たちを主語とする固有の動詞（59例）

| ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| gera skaða | 害を加える | gera | 決める | leggja | 設定する | leiðast | 疲れる |
| seljast | 与え合う | þiggja vetrvist | 滞在する | falsa | 偽る | byggja | 結婚する |
| geta | 与える | binda | 縛る | bjóða til e-s | 来させる | dveljast | いる |
| eiga | 得る | eigna | ふさわしくする | fagna | 歓迎する | fara í brot | 出かける |
| fara á | 乗って進む | fara í brot | 旅に出る | fremja | 行う | gera | もたらす |
| kenna | 習う | koma at dauða | 死ぬ | kveða | 唱える | kyrra | 静める |
| magna | 魔法をかける | marka sik geirsoddi | 槍の跡をつける | setjast | 座っている | sløkkva | 消す |
| smyrja | 塗り込む | snúa | 向ける | tígna | 尊敬する | taka sér bústað | 住む |
| temja e-t við e-t | 教える | vefja saman | たたむ | vekja e-t upp | 起こす | vera í brottu | いない |
| vitrast | 現れる | skipta | 分ける | stýra | 支配する | missa fótum | 踏み外す |
| snúast aptr | 戻る | týnast | 死ぬ | falla til e-s | 適している | gera | 選ぶ |
| kveðja | 言う | steðja | 置く | eigast við | 競う | bregða | 変える |
| fœra fyrir e-t | 置く | halda upp | 行う | halda upp e-m | 保つ | marka sik Óðni | オージンの特徴をつける |
| dýrka | 誉め称える | reisa | 建てる | taka sótt | 病気になる | gruna | 疑う |

| ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| hálshǫggva | 首を切り落とす | verða | 耐える | ráða | 決める | | |

## 他の王を主語とする固有の動詞（208例）

| ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| biðja | 命じる | bregða | 取り出す | rœða um | 話す | reiðast | 怒る |
| vaka | 起きている | leika | 遊ぶ | þiggja | 得る | ganga | 歩く |
| hverfa | 向ける | standa | 直面する | binda | つける | bjóða e-m til | 集める |
| fara her-skildi | 侵略する | hafa | 身につける | hafa | 捕まえる | hanga | 吊るされる |
| taka | 得る | vera at blóti | 供儀を行う | finnast | 見つかる | kunna | 出来る |
| leggja á kapp | 競う | temja við e-t | 調教する | draga e-t saman | 引き連れる | ætla | 企む |
| ætla | 望む | auka | 大きくする | brenna inni | 焼き殺す | erfa | 葬式を行う |
| eta | 食べる | fara | 終わらせる | finna | 気づく | gipta | 結婚させる |
| hverfa ór e-m | 出て来る | komast við e-t | 逃げる | steðja | いる | steðja | さらす |
| taka við e-m | 受け取る | una | 満足する | vera roskinn | 大きくなる | leggja stefna | 約束する |
| koma | 去る | verða fyrir | 見つける | vera í brottu | 立ち去る | sigla | 着く |
| elta | 追いかける | hleypa eptir | 追いかける | koma e-m á e-t | 投げる | láta | 失う |
| ríða | 乗り入れる | setja e-t upp | 上げる | setja | 入れる | snúast til e-s | 転じる |
| vexa | 育つ | fara út | 出港する | gera aleyðu | 壊す | leggja | いる |
| stíga á e-t | 乗り込む | stefna | 向かう | gera sætt | 和解する | beita | 殺す |

| ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ganga af e-m | 降りる | hafa heim | 連れて帰る | skjóta | 浮かべる | veita upprás | 上陸する |
| taka | 開く | varðveita | 面倒見る | stǫðva | 操る | festa | 結びつける |
| blása við | 流す | veifa | 振る | hlaupa | 飛び込む | strengja heit | 誓う |
| renna | 走る | beiða | 求める | halda | 引き連れる | bjóða e-m út | 招集する |
| koma | 着く | skilja | 理解する | fara yfir e-t | 越える | vera yfir e-m | 支配する |
| fœra | 運ぶ | fara út | 遠征に出る | ganga til e-s | 受け継ぐ | njóta | 受け入れる |
| svelta | 飢えさせる | fá sár | 傷つく | hittast | 出会う | synja | 断る |
| þekkjast | 受ける | dveljast | 留まる | láta | 言う | láta | 止める |
| vápnast | 武装する | sá | 播く | gera upprás | 攻撃する | gera hervirki | 奪う |
| heimta | 取る | hertaka | 捕虜にする | telja til e-s | 祖先をたどる | halda | 守る |
| ríða upp | 遠征する | hverfa | 囲む | þróast | 育つ | hafa e-t úti | 出す |
| bera ofrliði | 負ける | fara inn | 入る | hlaupa | 飛び降りる | letja | 奪う |
| liggja | 置く | halda | 向かう | leggja upp | 進む | liggja úti | 外に出ている |
| heita | 名づける | fara á brot | 去る | gera fúsan at | 望む | kalla | 叫ぶ |
| leggjast | 横たわる | banna | 反対する | láta | する | heimta | 求める |
| játa | 同意する | ausa | 埋める | stinga | 貫く | taka e-t af e-m | 徴収する |

| ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| vera saman | 一緒にいる | etja | 扇動する | greinast | 分けられる | leiða til e-s | 受け取る |
| leita út | 逃げる | auka | 広げる | ráða | 操る | rjóða | 血で染める |
| koma til e-s | 受け継ぐ | sœkja | 来る | gera | する | hjala | 話す |
| talast við | 話す | ræna | 奪う | ráða bana | 殺す | vera | なる |
| gipta | 結婚する | hefja | 持ち上げる | róa í brot | 漕いで逃げる | kaupa at e-m | 支払う |
| senda eptir e-m | 人を送る | vera eptir | 残る | bera | 注ぐ | fastna | 婚約させる |
| fylla | 満たす | ganga fyrir e-t | 進み出る | ganga | 来る | selja | 渡す |
| setjast | 座る | hvetja | 扇動する | nefnast | 呼ばれる | deyða | 殺す |
| giptast | 結婚する | finnast | 好む | hverfa | 消える | renna upp | 登る |
| dylja | 否定する | fela | 埋める | verða | 助動詞 | senda | 送り出す |
| halda upp | 持ち上げる | sofna | 眠りにつく | snúa | 戻す | vera ór e-m | 来ている |
| skipa | 配置する | sættast | 和解する | gera skipti | 変える | ríða til e-s | 近づく |
| veiða | 捕まえる | hafa atsetu | 住む | biðja | 求める | hepta | 殺す |
| geta | 述べる | snúast at e-m | 変わる | blóta | 供儀を行う | hitta | 会う |
| farast | 進む | reiða | 吊るす | ríða | （馬に乗って）進む | gefa | いけにえを捧げる |
| draga umráð at e-m | 復讐する | verða fyrir e-m | 出くわす | fara á fund e-s | 会いに来る | veita e-m atgǫngu | 攻撃する |

| ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING | ENTRY (PHRASE) | MEANING |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| hǫggva e-t niðr | 切り落とす | ráða fyrir e-m | 指揮する | verðast at bǫnom | 殺し合う | hǫggva e-t banahǫgg | 切り殺す |
| eiga deilum við e-t | 争う | verða illa við | 不安になる | vera kærr at e-m | 好む | leggjast á flótta | 逃げる |
| hǫggva strandhǫgg | 首をはねる | hefja bónorðupp | 求婚する | taka sér náttstað | 泊まる | taka fótarverk | 足に怪我をする |
| vingast við e-t | 友達になる | leggja kostnaðá e-t | 力を使う | bera mál fyrir e-t | 知らせる | gjalda varúð við | 気をつける |
| hlaupa eptir e-m | 追いかける | brjóta e-t undir sik | 従わせる | ganga til sonarblóts | いけにえを捧げる | leggja til orrostu við e-t | 戦う |

個別分析で# をつけたデータ

以下のデータベースの表示については実際のデータベースの画面とは若干の相違がある.

◆ Word　単語（分析対象の動詞）　Entry　見出し語
Place　テキストでの出現場所　Combi　他の動詞との結びつき
Adverb　副詞
Phrase　セットフレーズ
Meaning　意味　M_Cat　意味のカテゴリー
Form　動詞の出現形　Tense　時制　Mood　法
Reflex　形態上再帰形　A/M　助動詞／本動詞　Enclitic　接辞
Meter　韻律
Subject　主語（意味上）　S_Grm　意味上の主語を取らない場合の文法上の主語
S_Real　主語の実体　S_Type　主語のタイプ
S_Cat　主語のカテゴリー　S_Person　主語の人称　S_Num　主語の数
Complement　補語
C_Real　補語の実体
C_Type　補語のタイプ　C_Cat　補語のカテゴリー
Object　目的語
O_Real　目的語の実体
O_Type　目的語のタイプ　O_Cat　目的語のカテゴリー　O_Person　目的語の人称
O_Num　目的語の数　O_Case　目的語の格

Text_2　当該の動詞が出現するテキスト（2行前）
Text_1　当該の動詞が出現するテキスト（1行前）
Text　当該の動詞が出現するテキスト
Text1　当該の動詞が出現するテキスト（1行後）
Text2　当該の動詞が出現するテキスト（2行後）

## オージン（神話詩）

### ENTRY

◆ Word　undaðr　Entry　unda
Place　HAV 138.4.VG　Combi　x
Adverb　x
Phrase　x
Meaning　傷つける　M_Cat　1
Form　past.pp　Tense　x　Mood　x
Reflex　x　A/M　m　Enclitic　x
Meter　x
Subject　x　S_Grm　x
S_Real　オージン　S_Type　c
S_Cat　gma　S_Person　1　S_Num　s
Complement　x
C_Real　x
C_Type　x　C_Cat　x
Object　geiri
O_Real　槍
O_Type　o　O_Cat　x　O_Person　3
O_Num　s　O_Case　do

Text_2　vindga meiði á
Text_1　nætr allar nío,
Text　geiri * undaðr
Text1　ok gefinn Óðni,
Text2　siálfr siálfom mér,

◆ Word　fyrirgerði　Entry　fyrirgera
Place　GRM A.PG　Combi　x
Adverb　eigi
Phrase　x
Meaning　惑わす　M_Cat　1
Form　conj2　Tense　f　Mood　conj.pret
Reflex　x　A/M　m　Enclitic　x
Meter　x
Subject　fiǫlkunnigr maðr　S_Grm　x
S_Real　オージン　S_Type　n
S_Cat　gma　S_Person　3　S_Num　s
Complement　x
C_Real　x
C_Type　x　C_Cat　x
Object　hánom
O_Real　ゲイロズ
O_Type　o　O_Cat　hm　O_Person　3
O_Num　s　O_Case　do

Text_2　þau veðia um þetta mál.
Text_1　Frigg sendi eskismey sína, Fullo, til Geirrøðar. Hón bað
Text　konung varaz at eigi * fyrirgerði hánom fiǫlkunnigr maðr,
Text1　sá er þar var kominn í land, ok sagði þat mark á, at engi
Text2　hundr var svá ólmr at á hann myndi hlaupa. En þat var

◆ Word　frævaz　Entry　frævast
Place　HAV 141.1.VG　Combi　x
Adverb　x
Phrase　x
Meaning　豊かになる　M_Cat　10
Form　inf　Tense　x　Mood　x
Reflex　refl　A/M　m　Enclitic　x
Meter　1
Subject　ek　S_Grm　x
S_Real　オージン　S_Type　n
S_Cat　gma　S_Person　1　S_Num　s
Complement　x
C_Real　x
C_Type　x　C_Cat　x
Object　x
O_Real　x
O_Type　x　O_Cat　x　O_Person　x
O_Num　x　O_Case　x

Text_2　ausinn Óðreri.
Text_1
Text　þá nam ek * frævaz
Text1　ok fróðr vera
Text2　ok vaxa ok vel hafaz;

◆ Word fiǫtraðr Entry fjǫtra
Place HAV 13.5.VG Combi vark
Adverb í garði Gunnlaðar
Phrase x
Meaning 縛る M_Cat 1
Form past.pp Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þess fugls fiǫðrom
O_Real 青サギの翼
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case di

Text_2 hann stelr geði guma;
Text_1 þess fugls fiǫðrom
Text ek * fiǫtraðr vark
Text1 í garði Gunnlaðar.
Text2

◆ Word Ferðu Entry ferja
Place HRBL 3.1.VG Combi x
Adverb um sundit
Phrase x
Meaning 船で渡す M_Cat 11
Form imp Tense x Mood imp
Reflex x A/M m Enclitic -ðu
Meter f
Subject -ðu S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mik
O_Real ソール
O_Type o O_Cat gma O_Person 1
O_Num s O_Case ag

Text_2
Text_1 <K { Þórr kvað:} >
Text * Ferðu mik um sundit,
Text1 fœði ek þik á morgon;
Text2 meis hefi ek á baki,

◆ Word feria Entry ferja
Place HRBL 55.2.VG Combi vill
Adverb allz, eigi, um váginn
Phrase x
Meaning 船で渡す M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mik
O_Real ソール
O_Type o O_Cat gma O_Person 1
O_Num s O_Case ag

Text_2 <K Þórr kvað:>
Text_1 Vísa þú mér nú leiðina,
Text allz þú vill mik eigi um váginn * feria!
Text1
Text2 <K Hárbarðr kvað:>

◆ Word þylia Entry þylja
Place HAV 111.1.VG Combi x
Adverb Urðar brunni at
Phrase þylja á e-m
Meaning 話す M_Cat 30
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject x S_Grm x
S_Real オージン S_Type c
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þular stóli
O_Real 賢者の椅子, オージンの椅子
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 ok grœtta Gunnlǫðo.
Text_1
Text Mál er at *þylia
Text1 þular stóli á,
Text2 Urðar brunni at;

## MEANING

◆ Word mæla Entry mæla
Place VM 4.6.VG Combi skalt
Adverb x
Phrase mæla e-n orðum
Meaning 論争する M_Cat 5
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object orðom/ iǫtun
O_Real 言葉/ 巨人
O_Type o/ o O_Cat x/ jm O_Person 3/ 3
O_Num p/ s O_Case do/ ag

Text_2 œði þér dugi,
Text_1 hvars þú skalt, Aldafǫðr,
Text orðom * mæla iǫtun.
Text1
Text2 Fór þá Óðinn

◆ Word bergia Entry bergja
Place LS 9.4.VG Combi mundo
Adverb eigi
Phrase x
Meaning 味わう M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject -tu S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ǫlvi
O_Real ビール
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 er vit í árdaga
Text_1 blendom blóði saman?
Text ǫlvi * bergia
Text1 létztu eigi mundo,
Text2 nema okr væri báðom borit.

◆ Word sí=ð=a Entry síða
Place LS 24.1.VG Combi x
Adverb Sámseyo í
Phrase x
Meaning 魔法を使う M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter 1
Subject þik S_Grm x
S_Real オージン S_Type o
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1 <K { Loki} kvað:>
Text En þik * sí=ð=a kóðo
Text1 Sámseyo í,
Text2 ok draptu á vétt sem vǫlor,

◆ Word Ráðomk Entry ráða
Place HAV 112.1.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 忠告する M_Cat 4
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -k
Meter 1
Subject -k S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þér
O_Real ロッドファーヴニ
O_Type o O_Cat s O_Person 2
O_Num s O_Case do

Text_2 heyrða ek segia svá:
Text_1
Text * Ráðomk þér, Loddfáfnir,
Text1 at þú ráðnemir,
Text2 nióta mundo ef þú nemr,

* Ráðomk þér, Loddfáfnir,
at/ en þú ráðnemir,
というセットフレーズで用いられているため他の例は省略.

◆ Word hætta Entry hætta
Place HAV 106.6.VG Combi x
Adverb svá
Phrase hætta e-m til
Meaning 危険にさらす M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter 1
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hǫfði
O_Real 頭
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 yfir ok undir
Text_1 stóðomk iǫtna vegir;
Text svá * hætta ek hǫfði til.
Text1
Text2 Vel keyptz litar

◆ Word hafaz Entry hafast
Place HAV 141.3.VG Combi x
Adverb vel
Phrase x
Meaning 栄える M_Cat 10
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x

Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þá nam ek frævaz
Text_1 ok fróðr vera
Text ok vaxa ok vel * hafaz;
Text1 orðmér af orði
Text2 orz leitaði,

◆ Word bœta Entry bœta
Place HAV 153.6.VG Combi má
Adverb brátt
Phrase x
Meaning もみ消す M_Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þat
O_Real 憎しみ
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 hvars hatr vex
Text_1 meðhildings sonom,
Text þat má ek * bœta brátt.
Text1
Text2 Þat kann ek it níunda,

◆ Word hekk Entry hanga
Place HAV 138.1.VG Combi x
Adverb vindga meiði á, nætr allar nío
Phrase x
Meaning ぶら下がる M_Cat 31
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 fold skal viðflóði taka.
Text_1
Text Veit ek at ek * hekk
Text1 vindga meiði á
Text2 nætr allar nío,

## ENTRY + MEANING

◆ Word háðak Entry heyja
Place HRBL 30.4.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 持つ M_Cat 22
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -ak
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object launþing
O_Real 密会
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 ok viðeinhveria dœmðak,
Text_1 lék ek viðena lí=n=hvíto
Text ok lau=n=þing * háðak,
Text1 gladdak ena gullbiǫrto,
Text2 gamni mær unði.

◆ Word glepia Entry glepja
Place HRBL 52.3.VG Combi mundo
Adverb x
Phrase x
Meaning 妨げる M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object féhirði/ Ása-þórs farar
O_Real ソール/ ソールの旅
O_Type o/ o O_Cat gma/ ong O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case do/ ag

Text_2 Ása-þórs
Text_1 hugða ek aldregi mundo
Text * glepia féhirði farar.
Text1
Text2 <K Þórr kvað:>

◆ Word fylgðag Entry fylgja
Place HRBL 24.2.VG Combi x
Adverb x
Phrase fylgja vígom
Meaning 戦う M_Cat 5
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -ag
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object vígom
O_Real 戦闘
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 <K Hárbarðr kvað:>
Text_1 Var ek á Vallandi
Text ok vígom * fylgðag,
Text1 atta ek iǫfrom,
Text2 en aldri sættak;

◆ Word draptu Entry drepa
Place LS 24.3.VG Combi x
Adverb sem vǫlor
Phrase drepa á e-t
Meaning 操る M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -tu
Meter x
Subject -tu S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object vétt
O_Real 魔法
O_Type o O_Cat s O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 En þik sí=ð=a kóðo
Text_1 Sámseyo í,
Text ok * draptu á vétt sem vǫlor,
Text1 vitka líki
Text2 fórtu verþióðyfir,

◆ Word stǫðvigak Entry stǫðva
Place HAV 150.5.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 止める M_Cat 12
Form conj1 Tense pres Mood conj.pres1
Reflex x A/M m Enclitic -gak
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real 矢
O_Type c O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 flein í fólki vaða,
Text_1 flýgra hann svá stint
Text at ek * stǫðvigak,
Text1 ef ek hann siónom of sék.
Text2

◆ Word leitaði Entry leita
Place HAV 141.5.VG Combi x
Adverb af orði
Phrase x
Meaning つくる M_Cat 3
Form conj2 Tense pres Mood conj.pret
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real オージン S_Type c
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object orz
O_Real 言葉
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 ok vaxa ok vel hafaz;
Text_1 orðmér af orði
Text orz * leitaði,
Text1 verk mér af verki
Text2 verks leitaði.

◆ Word leitaði Entry leita
Place HAV 141.7.VG Combi x
Adverb af verki
Phrase x
Meaning つくる M_Cat 3
Form conj2 Tense pres Mood conj.pret
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real オージン S_Type c
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object verks
O_Real 行為
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 orz leitaði,
Text_1 verk mér af verki
Text verks * leitaði.
Text1
Text2 Rúnar munt þú finna

## オージン（英雄詩）

### MEANING

◆ Word bar Entry bera
Place HH-II 34.8.VH Combi x
Adverb meðsifiungom
Phrase bera sakrúnar
Meaning 災いを引き起こす M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real オージン S_Type c
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sakrúnar
O_Real 災いのルーン
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 ǫllo bǫlvi,
Text_1 þvíat meðsifiungom
Text sakrúnar * bar.
Text1
Text2 þér býðr bróðir

## オージン（「ギュルヴィの惑わし」）

### ENTRY

◆ Word stiórnar Entry stjórna
Place GYLFG 3.11.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 支配する M_Cat 1
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ǫllu ríki sínu
O_Real 彼の全ての国
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 þá spyrr Gangleri: (Hvar er sá guðeða hvat má hann,
Text_1 eða hvat hefir hann unnit framaverka?)
Text Hár segir: (Lifir hann of [allar] aldir ok * stiórnar ǫllu
Text1 ríki sínu ok ræðr ǫllum =h=lutum, stórum ok smám.)
Text2 þá mælti Iafnhár: (Hann smíðaði himin ok iǫrðok

### MEANING

◆ Word lagði Entry leggja
Place GYLFG 15.18.P Combi x
Adverb x
Phrase leggja e-t at veði
Meaning 担保に入れる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object auga
O_Real 目
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 horninu Giallarhorni. Þar kom Allfǫðr ok beiddiz eins
Text_1 drykkiar af brunninum, en hann fekk eigi fyrr en hann
Text * lagði auga sitt at veði. Svá segir í Vǫluspá:
Text1 Alt veit ek, Óðin=n=,
Text2 hvar =þú= auga falt,

### ENTRY + MEANING

◆ Word [ski]par Entry skipa
Place GYLFG 20.20.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 連れて来る M_Cat 11
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þeim/ Valhǫll ok Vingólf
O_Real 戦場で倒れたもの/ ヴァルホル
O_Type o/ o O_Cat hm/ ong O_Person 3/ 3
O_Num p/ s O_Case do/ ag

Text_2 Óðinn heitir Allfǫðr, þvíat hann er faðir allra goða.
Text_1 Hann heitir ok Valfǫðr, þvíat hans óskasynir eru allir
Text þeir er í val falla, þeim * [ski]par hann Valhǫll ok Vingólf,
Text1 ok heita þeir þá Einheriar. Hann heitir ok Hangaguðok
Text2 H[a]ptaguð, Farmaguð, ok enn hefir hann nefnz á fleire

## オージン（「ユングリンガ・サガ」）

## ENTRY

◆ Word vitrask Entry vitrast
Place YS 9.7.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 現れる M_Cat 6
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real オージン S_Type o
S_Cat kga S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sér
O_Real オージン
O_Type o O_Cat kga O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 Nú hugðu Svíar, at hann væri kominn í inn forna Ásgarð
Text_1 ok myndi þar lifa at eilífu. Hófsk þá at nýiu átrúnaðr
Text viðÓðin ok áheit. Opt þótti Svíum hann * vitrask sér, áðr
Text1 stórar orrostur yrði; gaf hann þá sumum sigr, en sumum
Text2 bauðhann til sín; þótti hvárrtveggi kostr góðr. Óðinn var

◆ Word tígnaðr Entry tígna
Place YS 6.7.P Combi var
Adverb miǫk
Phrase x
Meaning 尊敬する M_Cat 2
Form past.pp Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat kga S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 námu þeir allar íþróttirnar, því at hann kunni fyrst allar
Text_1 ok þó flestar. En þat er at segia, fyrir hveria sǫk hann var
Text svá miǫk * tígnaðr, þá báru þessir hlutir til: hann var svá
Text1 fagr ok gǫfugligr álitum, þá er hann sat meðsínum vinum,
Text2 at ǫllum hló hugr við. En þá er hann var í her, þá sýndisk

◆ Word smurði Entry smyrja
Place YS 4.19.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 塗り込む M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Óðinn S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat kga S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object urtum þeim
O_Real 薬草
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case di

Text_2 falsat þá í mannaskiptinu. Þá tóku þeir Mími ok hálshiǫggu
Text_1 ok sendu hǫfuðit Ásum. Óðinn tók hǫfuðit ok
Text * smurði urtum þeim, er eigi mátti fúna, ok kvaðþar yfir
Text1 galdra ok magnaði svá, at þat mælti viðhann ok sagði
Text2 honum marga leynda hluti. Niǫrðok Frey setti Óðinn

◆ Word magnaði Entry magna
Place YS 4.20.P Combi x
Adverb svá
Phrase x
Meaning 魔法をかける M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Óðinn S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat kga S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x

C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real ミーミルの頭
O_ Type r O_ Cat onkga O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 ok sendu hǫfuðit Ásum. Óðinn tók hǫfuðit ok
Text_ 1 smurði urtum þeim, er eigi mátti fúna, ok kvaðþar yfir
Text galdra ok * magnaði svá, at þat mælti viðhann ok sagði
Text1 honum marga leynda hluti. Niǫrðok Frey setti Óðinn
Text2 blótgoða, ok váru þeir díar meðÁsum. Dóttir Niarðar

◆ Word sløkkva Entry sløkkva
Place YS 7.5.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 消す M_ Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_ Grm x
S_ Real オージン S_ Type c
S_ Cat kga S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object eld
O_ Real 炎
O_ Type o O_ Cat x O_ Person 3
O_ Num s O_ Case ag

Text_ 2 eða dýr, fiskr eða ormr, ok fór á einni svipstund á fiarlæg
Text_ 1 lǫnd at sínum erendum eða annarra manna. Þat kunni
Text hann enn at gera meðorðum einum at * sløkkva eld ok
Text1 kyrra siá ok snúa vindum, hvería leiðer hann vildi. Ok
Text2 hann átti skip þat er Skíðblaðnir hét, er hann fór á yfir

◆ Word eignaði Entry eigna
Place YS 9.3.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning ふさわしくする M_ Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_ Grm x
S_ Real オージン S_ Type n
S_ Cat kga S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object sér/ alla vápndauða menn
O_ Real オージン/ 全ての武器に倒れたもの
O_ Type o/ o O_ Cat kga/ x O_ Person 3/ 3
O_ Num s/ p O_ Case do/ ag

Text_ 2 Óðinn varðsóttdauðr í Svíþióð,
Text_ 1 ok er hann var at kominn dauða, lét hann marka sik
Text geirsoddi ok * eignaði sér alla vápndauða menn; sagði hann
Text1 sik mundu fara í Goðheim ok fagna þar vinum sínum.
Text2 Nú hugðu Svíar, at hann væri kominn í inn forna Ásgarð

## MEANING

◆ Word bauð Entry bjóða
Place YS 9.9.P Combi x
Adverb x
Phrase bjóða til e-s
Meaning 来させる M_ Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_ Grm x
S_ Real オージン S_ Type n
S_ Cat kga S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object sumum/ sín
O_ Real あるものには/ オージン
O_ Type o/ o O_ Cat m/ kga O_ Person 3/ 3
O_ Num p/ s O_ Case do/ g

Text_ 2 viðÓðin ok áheit. Opt þótti Svíum hann vitrask sér, áðr
Text_ 1 stórar orrostur yrði; gaf hann þá sumum sigr, en sumum
Text * bauðhann til sín; þótti hvárrtveggi kostr góðr. Óðinn var
Text1 brendr dauðr, ok var sú brenna gǫr allveglig. Þat var
Text2 trúa þeira, at því hæra sem reykinn lagði í loptit upp,

◆ Word marka Entry marka
Place YS 9.2.P Combi x
Adverb x
Phrase marka sik geirsoddi
Meaning 槍の跡をつける M_ Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_ Grm x

S_Real オージン S_Type c
S_Cat kga S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sik/ geirsoddi
O_Real オージン/ 槍の跡
O_Type o/ o O_Cat kga/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ p O_Case ag/ ag

Text_2 <K 9. Dauði Óðins.>
Text_1 Óðinn varðsóttdauðr í Svíþióð,
Text ok er hann var at kominn dauða, lét hann * marka sik
Text1 geirsoddi ok eignaði sér alla vápndauða menn; sagði hann
Text2 sik mundu fara í Goðheim ok fagna þar vinum sínum.

◆ Word kvað Entry kveða
Place YS 4.19.P Combi x
Adverb þar yfir
Phrase x
Meaning 唱える M_Cat 30
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Óðinn S_Grm x
S_Real オージン S_Type n
S_Cat kga S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object galdra
O_Real 魔法の歌
O_Type o O_Cat s O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 falsat þá í mannaskiptinu. Þá tóku þeir Mími ok hálshiǫggu
Text_1 ok sendu hǫfuðit Ásum. Óðinn tók hǫfuðit ok
Text smurði urtum þeim, er eigi mátti fúna, ok * kvaðþar yfir
Text1 galdra ok magnaði svá, at þat mælti viðhann ok sagði
Text2 honum marga leynda hluti. Niǫrðok Frey setti Óðinn

## ENTRY + MEANING

◆ Word gera Entry gera
Place YS 7.20.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning もたらす M_Cat 13
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real オージン S_Type c
S_Cat kga S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mǫnnum/ bana eða óhamingiu eða vanheilendi
O_Real 人/ 死, 不幸, 病気
O_Type o/ o O_Cat m/ x O_Person 3/ 3
O_Num p/ s O_Case do/ ag

Text_2 Óðinn kunni þá íþrótt, er mestr máttr fylgði, ok
Text_1 framði siálfr, er seiðr heitir, en af því mátti hann vita
Text ørlǫg manna ok óorðna hluti, svá ok at * gera mǫnnum bana
Text1 eða óhamingiu eða vanheilendi, svá ok at taka frá mǫnnum
Text2 vit eða afl ok gefa ǫðrum. En þessi fjǫlkyngi, er framit

## ソール（神話詩）

## ENTRY

◆ Word væta Entry væta
Place HRBL 13.3.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 濡らす M_Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject x S_Grm x
S_Real ソール S_Type c
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ǫgur minn
O_Real 荷物
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Harm liótan mér þikkir í því,
Text_1 at vaða um váginn til þín
Text ok * væta ǫgur minn;
Text1 skylda ek launa kǫgorsveini þínom
Text2 kanginyrði,

◆ Word sveif Entry svífa
Place HYM 18.6.VG Combi x
Adverb til skógar
Phrase x
Meaning 行く M_Cat 9
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f

Subject Sveinn sýsliga S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 auðfeng vera.)
Text_1 Sveinn sýsliga
Text * sveif til skógar,
Text1 þars er uxi stóð
Text2 alsvartr fyrir;

◆ Word skorðat Entry skorða
Place HRBL 39.4.VG Combi hafða
Adverb x
Phrase x
Meaning 支柱で支える M_Cat 1
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object er
O_Real ソールの船
O_Type r O_Cat ong O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 en varla konor,
Text_1 skeldo skip mitt,
Text er ek * skorðat hafðak,
Text1 ægðo mér iárnlurki,
Text2 en elto þiálfa.

◆ Word neytta Entry neyta
Place SnES18 2.1.VG Combi x
Adverb Eino, iǫtna gǫrðum í
Phrase x
Meaning 使う M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object allz megins
O_Real アースの力
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 þá kvaðþórr:
Text_1
Text Eino * neytta ek
Text1 allz megins
Text2 iǫtna gǫrðum í,

◆ Word hniósa Entry hniósa
Place HRBL 26.8.VG Combi þorðir
Adverb hvárki, fyr hræzlo þinni
Phrase x
Meaning くしゃみをする M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hvárki þú þá þorðir
Text_1 fyr hræzlo þinni
Text * hniósa né físa,
Text1 svá at Fialarr heyrði.
Text2

◆ Word físa Entry físa
Place HRBL 26.8.VG Combi þorðir
Adverb né
Phrase x
Meaning おならをする M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hvárki þú þá þorðir
Text_1 fyr hræzlo þinni
Text hniósa né * físa,
Text1 svá at Fialarr heyrði.
Text2

◆ Word hnúkðir Entry hnúka
Place LS 60.5.VG Combi x
Adverb í hanska þumlungi

Phrase x
Meaning しゃがみこむ M_Cat 8
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 segia seggiom frá,
Text_1 sízt í hanska þumlungi
Text * hnúkðir þú, einheri,
Text1 ok þóttiska þú þá Þórr vera.
Text2

◆ Word hœtir Entry hœta
Place LS 62.3.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 脅す M_Cat 2
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject x S_Grm x
S_Real ソール S_Type c
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hamri/ mér
O_Real ミョッルニル/ ロキ
O_Type o/ o O_Cat ong/ gjm O_Person 3/ 1
O_Num s/ s O_Case di/ do

Text_2 Lifa ætla ek mér
Text_1 langan aldr,
Text þóttu * hœtir hamri mér;
Text1 skarpar álar
Text2 þóttu þér Skrýmis vera,

◆ Word Egndi Entry egna
Place HYM 22.1.VG Combi x
Adverb á ǫngul
Phrase x
Meaning 餌を取りつける M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject sá S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object uxa hǫfði
O_Real 牛の頭
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 vaðgørði sér.
Text_1
Text * Egndi á ǫngul
Text1 sá er ǫldom bergr,
Text2 orms ei=n=bani,

◆ Word bindaz Entry bindast
Place TRK 17.5.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 着る M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object brúðar líni
O_Real 花嫁衣装
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 (Mik muno æsir
Text_1 argan kalla,
Text ef ek * bindaz læt
Text1 brúðar líni!)
Text2

◆ Word þreifaz Entry þreifast
Place TRK 1.8.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 探す M_Cat 2
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Iarðar burr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 skǫr nam at dýia,
Text_1 réðIarðar burr
Text um at *þreifaz.
Text1
Text2 Ok hann þat orða

◆ Word þrasir Entry þrasa
Place LS 58.3.VG Combi x
Adverb hví, svá
Phrase x
Meaning 怒る M_Cat 16
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Iarðar <burr>
Text_1 er hér nú inn kominn;
Text hví *þrasir þú svá, Þórr?
Text1 en þá þorir þú ekki
Text2 er þú skalt viðúlfinn vega,

## MEANING

◆ Word seilaz Entry
Place HRBL 27.3.VG Combi mætta
Adverb um sund
Phrase x
Meaning 手を伸ばす M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Hárbarðr inn ragi!
Text_1 ek mynda þik í hel drepa,
Text ef ek mætta * seilaz um sund.
Text1
Text2 <K Hárbarðr kvað:>

◆ Word seilaz Entry seilast
Place HRBL 28.1.VG Combi skyldir
Adverb Hvat, um sund
Phrase x
Meaning 手を伸ばす M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter l
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1 <K Hárbarðr kvað:>
Text Hvat skyldir þú um sund * seilaz.
Text1 er sakir ro allz øngar?
Text2 Hvat vanntu þá, Þórr?

◆ Word ræðr Entry ráða
Place LS 55.4.VG Combi x
Adverb x
Phrase ráða e-m ró
Meaning 黙らせる M_Cat 12
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ró/ þeim er
O_Real 沈黙/ ロキ
O_Type o/ r O_Cat x/ gjm O_Person 3/ x
O_Num s/ x O_Case ag/ x

Text_2 hygg ek á fǫr vera
Text_1 heiman Hlórriða;
Text hann * ræðr ró
Text1 þeim er rœgir hér
Text2 goðǫll ok guma.

◆ Word varp Entry verpa
Place HRBL 19.3.VG Combi x
Adverb á þann inn heiða himin
Phrase verpa e-t upp
Meaning 投げ上げる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x

S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object augom Allvalda sonar
O_Real シャッツィの目
O_Type o O_Cat onj O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 Ek drap þiaza,
Text_1 enn þrúðmóðga iǫtun,
Text upp ek * varp augom
Text1 Allvalda sonar
Text2 á þann inn heiða himin;

◆ Word vatt Entry vinda
Place HYM 27.3.VG Combi x
Adverb meðaustri, einn meðárom+
Phrase vinda e-m upp
Meaning 引っ張り上げる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hlórriði S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object lǫgfáki
O_Real 船
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 Gekk Hlórriði,
Text_1 greip á stafni,
Text * vatt meðaustri
Text1 upp lǫgfáki
Text2 einn meðárom

◆ Word troðit Entry troða
Place HRBL 26.4.VG Combi var
Adverb af hræzlo ok hugbleyði, í hanzka
Phrase x
Meaning 押し込める M_Cat 11
Form past.pp Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þér S_Grm x
S_Real ソール S_Type d
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 en ekki hiarta;
Text_1 af hræzlo ok hugbleyði
Text þér var í hanzka * troðit,
Text1 ok þóttiska þú þá Þórr vera;
Text2 hvárki þú þá þorðir

◆ Word drep Entry drepa
Place LS 57.5.VG Combi x
Adverb x
Phrase drepa e-t af e-m
Meaning 打ち落とす M_Cat 1
Form pres Tense f Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object herða klett/ hálsi
O_Real 頭/ 首
O_Type o/ o O_Cat x/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 Miǫllnir, mál fyrnema:
Text_1 herða klett
Text * drep ek þér hálsi af,
Text1 ok verðr þá þíno fiǫrvi um farit.
Text2

## ENTRY + MEANING

◆ Word koma Entry koma
Place LS 63.5.VG Combi mun
Adverb í hel, fyr nágrindr
Phrase koma e-m neðan
Meaning 落とす M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hrungnis bani S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þér
O_Real ロキ
O_Type o O_Cat gjm O_Person 2
O_Num s O_Case do

Text_2 Miǫllnir, mál fyrnema:
Text_1 Hrungnis bani
Text mun þér í hel * koma
Text1 fyr nágrindr neðan.
Text2

◆ Word kom Entry koma
Place TRK 32.9.VG Combi x

Adverb Svá, endr
Phrase koma at e-m
Meaning 取り戻す M_Cat 14
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Óðins sonr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hamri
O_Real ミョッルニル
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 en hǫgg hamars
Text_1 fyr hringa fiǫlð.
Text Svá * kom Óðins sonr
Text1 endr at hamri.
Text2

◆ Word færðiz Entry færast
Place HYM 31.3.VG Combi x
Adverb x
Phrase færast í e-t
Meaning 身につける M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hafra dróttinn S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object allra ásmegin
O_Real アースの力
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Harðr reis á kné
Text_1 hafra dróttinn,
Text * færðiz allra
Text1 í ásmegin;
Text2 heill var karli

## ソール（「ギュルヴィの惑わし」）

## ENTRY

◆ Word sparaz Entry sparast
Place GYLFG 46.83.P Combi Muntu
Adverb nú, eigi
Phrase sparast til e-s
Meaning 残す M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject -tu S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object eins drykkiar
O_Real 一口
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 fyrra sinni; er nú gott berandi borðá horninu.
Text_1 Þá mælti Útgarða-Loki: (Hvat er nú, Þórr? Muntu
Text nú eigi * sparaz til eins drykkiar meira en þér mun hagr á
Text1 vera? Svá lítz mér ef þú skalt nú drekka af horninu hinn
Text2 þriðia drykkinn, sem þessi mun mestr ætlaðr. En ekki

◆ Word sefaðiz Entry sefast
Place GYLFG 44.52.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 落ち着く M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 ákaflega, báðu sér friðar, buðu at firir kvæmi allt þat
Text_1 er þau áttu. En er hann sá hræzlu þeira, þá gekk af
Text honum móðrinn, ok * sefaðiz hann ok tók af þeim í sætt
Text1 bǫrn þeira, Þiálfa ok Rǫsku, ok gerðuz þau þá skyldir
Text2 þiónustumenn Þórs ok fylgia þau honum iafnan síðan.

◆ Word lypti Entry lypta
Place GYLFG 46.106.P Combi x
Adverb x
Phrase lypta upp
Meaning 持ち上げる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x

Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real ウートガルザ・ロキの猫
O_Type c O_Cat lj O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 en ek hugða.) Því næst hlióp fram kǫttr einn grár á hallargólfit
Text_1 ok helldr mikill, en Þórr gekk til ok tók hendi sinni
Text niðr undir miðian kviðin=n= ok * lypti upp, en kǫttrinn b=ey=gði
Text1 =ke=ngi=nn= svá sem Þórr rétti upp hǫndina. En er Þórr
Text2 se<i>ldiz svá langt upp sem hann mátti lengzt, þá létti

◆ Word lyptir Entry lypta
Place GYLFG 47.40.P Combi x
Adverb x
Phrase lypta upp
Meaning 持ち上げる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object kettinum
O_Real 猫
O_Type o O_Cat lj O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 mega hvern þurðþú hefir drukkit á sænum.) Þat eru nú
Text_1 fiǫrur kallaðar. Ok enn mælti hann: (Eigi þótti mér hitt
Text minna vera vert er þú * lyptir upp kettinum, ok þér satt
Text1 at segia, þá =h=rædduz allir þeir er sá er þú lyptir af iǫrðu
Text2 einum fœtinum; en sá kǫttr var eigi sem þér sýndiz, þat

◆ Word lyptir Entry lypta
Place GYLFG 47.41.P Combi x
Adverb af iǫrðu
Phrase x
Meaning 持ち上げる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object einum fœtinum
O_Real 猫の片足
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 fiǫrur kallaðar. Ok enn mælti hann: (Eigi þótti mér hitt
Text_1 minna vera vert er þú lyptir upp kettinum, ok þér satt
Text at segia, þá =h=rædduz allir þeir er sá er þú * lyptir af iǫrðu
Text1 einum fœtinum; en sá kǫttr var eigi sem þér sýndiz, þat
Text2 var Miðgarðzormr, er liggr um lǫnd ǫll, ok vannzt honum

◆ Word leiðrétti Entry leiðrétta
Place GYLFG 48.7.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 正す M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þessa ferðina
O_Real この旅
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 hefnt?)
Text_1 Hár svarar: (Eigi er þat úkunnigt þótt eigi sé frœðime=nn=
Text at Þórr * leiðrétti þessa ferðina er nú var <frá> sagt,
Text1 ok dvalðiz ekki lengi heima áðr hann bióz svá skyndiliga
Text2 til ferðarinnar at hann hafði eigi reiðok eigi hafrana ok

◆ Word hreyft Entry hreyfa
Place GYLFG 45.45.P Combi fekk
Adverb x
Phrase x
Meaning ゆるくする M_Cat 12
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x

Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object engi álarendann
O_Real どんなひものはしもない
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 ok skal leysa. En svá er at segia sem útrúligt
Text_1 mun þikkia, at engi knút fekk hann leyst ok engi álarendann
Text * hreyft svá at þá væri lausari en áðr. Ok er hann sér at
Text1 þetta verk má eigi nýtaz, þá varðhann reiðr, greip þá
Text2 hamarinn Miǫllni tveim hǫndum ok steig fram ǫðrum

◆ Word ginti Entry ginna
Place GYLFG 48.44.P Combi x
Adverb engu, <miðr>
Phrase x
Meaning からかう M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Miðgarðzorm
O_Real ミズガルズ蛇
O_Type o O_Cat onj O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 þar lét Þórr koma á ǫngulinn oxahǫf=uð=it ok kastaði firir
Text_1 borð, ok fór ǫngullinn til =g=runnz. Ok er þá svá satt at
Text segia at engu * ginti þá Þórr <miðr> Miðgarðzorm en
Text1 Útgarða-Loki hafði spottat Þór, þá er hann hóf orminn
Text2 upp á hendi sér.

◆ Word birta Entry birta
Place GYLFG 46.55.P Combi muni, vilia
Adverb firir þeim
Phrase x
Meaning 示す M_Cat 13
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object er
O_Real 技
O_Type r O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þá segia allir at reynt er um þenna leik.
Text_1 þá spyrr Útgarða-Loki Þór hvat þeira íþrótta mun vera
Text er hann muni vilia * birta firir þeim, svá miklar sǫgur sem
Text1 menn hafa gǫrt um stórvirki hans. Þá mælti Þórr at helzt
Text2 vill hann þat taka til at þreyta drykkio viðeinhvern mann.

◆ Word ætlaz Entry ætlast
Place GYLFG 47.58.P Combi x
Adverb x
Phrase ætlast fyrir
Meaning 考える M_Cat 29
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object at+
O_Real 節
O_Type g O_Cat y O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 ok bregðr á lopt, en er hann skal fram reiða, þá sér hann
Text_1 þar hvergi Útgarða-Loka. Ok þá snýz hann aptr til
Text borgarinnar ok *ætlaz þá firir at brióta borgina; þá sér
Text1 hann þar vǫllu víða ok fagra, en ønga borg. Snýz hann
Text2 þá aptr ok f[er]r leiðsína til þess er hann kom aptr í

## MEANING

◆ Word spyrndi Entry spyrna
Place GYLFG 48.50.P Combi x
Adverb fast
Phrase spyrna við
Meaning 踏ん張る M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x

Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 góminn orminum. En er ormrinn kenndi þess, brá hann
Text_1 viðsvá hart at báðir hnefar Þórs skullu út á borðinu. Þá
Text varðÞórr reiðr ok fœrðiz í ásmegin, * spyrndi við<svá>
Text1 fast at hann =h=lióp báðum fótum gǫgnum skipit ok spyrndi
Text2 viðgrunni; dró þá orminn upp at borði. En þat má segia

◆ Word spyrndi Entry spyrna
Place GYLFG 48.51.P Combi x
Adverb x
Phrase spyrna við
Meaning 踏ん張る M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object grunni
O_Real 海底
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 viðsvá hart at báðir hnefar Þórs skullu út á borðinu. Þá
Text_1 varðÞórr reiðr ok fœrðiz í ásmegin, spyrndi við<svá>
Text fast at hann =h=lióp báðum fótum gǫgnum skipit ok * spyrndi
Text1 viðgrunni; dró þá orminn upp at borði. En þat má segia
Text2 at engi hefir sá sét ógurligar siónir, er eigi mátti þat siá

◆ Word =h=lióp Entry hlaupa
Place GYLFG 48.51.P Combi x
Adverb gǫgnum skipit
Phrase x
Meaning 踏み抜く M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object báðum fótum
O_Real 両足
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case di

Text_2 viðsvá hart at báðir hnefar Þórs skullu út á borðinu. Þá
Text_1 varðÞórr reiðr ok fœrðiz í ásmegin, spyrndi við<svá>
Text fast at hann *=h=lióp báðum fótum gǫgnum skipit ok spyrndi
Text1 viðgrunni; dró þá orminn upp at borði. En þat má segia
Text2 at engi hefir sá sét ógurligar siónir, er eigi mátti þat siá

◆ Word skar Entry skera
Place GYLFG 44.29.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 屠殺する M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object báða
O_Real 2頭のヤギ
O_Type o O_Cat lg O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 sína ok reiðok meðhonum sá áss er Loki er kallaðr.
Text_1 Koma þeir at kveldi til eins búanda ok fá þ=a=r náttstað.
Text En um kveldit tók Þórr hafra sína ok * skar báða; eptir
Text1 þat vóro þeir flegnir og bornir til ketils, en er soðit var,
Text2 þá settiz Þórr til náttverðar ok þeir lagsmenn. Þórr bauð

◆ Word beria Entry berja
Place GYLFG 42.29.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 退治する M_Cat 1

Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real ソール S_Type c
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object trǫll
O_Real 巨人
O_Type o O_Cat j O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 at iǫtnum þótti ekki trygt at vera meðásum griðalaust
Text_1 ef Þórr kvæmi heim, en þá var hann farinn í austrveg
Text at * beria trǫll. En er á leiðvetrinn, þá sóttiz miǫk
Text1 borgargerðin, ok var hon svá há ok sterk at eigi mátti
Text2 á þat leita. En þá er .iii. dagar vóro til sumars, þá var

◆ Word reiða Entry reiða
Place GYLFG 47.56.P Combi skal
Adverb x
Phrase reiða fram
Meaning 振り上げる M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real ミョッルニル
O_Type c O_Cat ong O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 mér fá.)
Text_1 En er Þórr heyrði þessa tǫlu, greip hann til hamarsins
Text ok bregðr á lopt, en er hann skal fram * reiða, þá sér hann
Text1 þar hvergi Útgarða-Loka. Ok þá snýz hann aptr til
Text2 borgarinnar ok ætlaz þá firir at brióta borgina; þá sér

◆ Word reiddi Entry reiða
Place GYLFG 48.64.P Combi x
Adverb x
Phrase reiða e-t til
Meaning 振り上げる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hann lysti af honum hǫfuðit viðgrunninum, en ek hygg
Text_1 hitt vera þér satt at segia at Miðgarðzormr lifir enn ok
Text liggr í umsiá. En Þórr * reiddi til hnefann ok settr viðeyra
Text1 =H=ymi, svá at hann steyptiz fyrir borð, ok sér í iliar honum.
Text2 En Þórr óðtil landz.)

◆ Word se<i>ldiz Entry seilast
Place GYLFG 46.108.P Combi x
Adverb langt upp
Phrase x
Meaning 伸びる M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 niðr undir miðian kviðin=n= ok lypti upp, en kǫttrinn b=ey=gði
Text_1 =ke=ngi=nn= svá sem Þórr rétti upp hǫndina. En er Þórr
Text * se<i>ldiz svá langt upp sem hann mátti lengzt, þá létti
Text1 kǫttrinn einum fœti, ok fær Þórr eigi framit þenna leik.
Text2 Þá mælti Útgarða-Loki: (Svá fór þessi leikr sem mik

◆ Word seildiz Entry seilast
Place GYLFG 47.45.P Combi x
Adverb langt, upp
Phrase x
Meaning 伸びる M_Cat 10

Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 var Miðgarðzormr, er liggr um lǫnd ǫll, ok vannzt honum
Text_1 varlega lengðin til at iǫrðina tœki sporðr ok hǫfut, ok svá
Text langt * seildiz þú upp at skamt var þá til himins. En hitt
Text1 var ok mikit undr um fangit <er> <þú> <stótt> <svá> <lengi> <við>
Text2 <ok> <felt> <eigi> <meirr> <en> <á> <kné> <ǫðrum> <fœti> er þú fekz vi

◆ Word hvesti Entry hvessa
Place GYLFG 48.54.P Combi x
Adverb x
Phrase hvessa augu á e-t
Meaning 鋭く見る M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object augun/ orminn
O_Real 目/ ミズガルズ蛇
O_Type o/ o O_Cat x/ onj O_Person 3/ 3
O_Num p/ s O_Case ag/ ag

Text_2 viðgrunni; dró þá orminn upp at borði. En þat má segia
Text_1 at engi hefir sá sét ógurligar siónir, er eigi mátti þat siá
Text er Þórr * hvesti augun á orminn en ormrinn starði neðan
Text1 í mót ok blés eitrinu.
Text2 Þá er sagt at iǫtunninn Hymir gerðiz litverpr, fǫlnaði

◆ Word missa Entry missa
Place GYLFG 21.25.P Combi má
Adverb eigi, viðhamarsskaptit
Phrase x
Meaning 使わない M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þeira
O_Real 鉄の手袋
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num p O_Case g

Text_2 ok er hann spennir þeim um sik, þá vex honum ásmegin
Text_1 hálfu. En=n= .iii. =h=lut á hann, þann er mikill gripr er í, þat
Text eru iárnglófar; þeira má hann eigi * missa viðhamarsskaptit.
Text1 En engi er svá fróðr at telia kunni ǫll stórvirki hans. En
Text2 segia kann ek þér svá mǫrg tíðindi frá honum at dveliaz

◆ Word herði Entry herða
Place GYLFG 44.48.P Combi x
Adverb at hamarskaptinu
Phrase x
Meaning 押しつける M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hendrnar
O_Real 手
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 brýnnar ofan firir augun, en þat er sá augnanna, þá
Text_1 hugðiz hann falla myndu firir sióninni einni samt. Hann
Text * herði hendrnar at hamarskaptinu svá at hvítnuðu knúarnir.
Text1 En búandinn gerði sem vǫn var =ok= ǫll hiúnin, kǫlluðu
Text2 ákaflega, báðu sér friðar, buðu at firir kvæmi allt þat

◆ Word þreytir Entry þreyta
Place GYLFG 46.77.P Combi x
Adverb x
Phrase þreyta á drykkiuna

Meaning 一生懸命飲む M_Cat 1
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object drýkkiuna
O_Real 飲む事
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 vilia drekka af í qðrum drykk.) Þórr svarar øngu, setr
Text_1 hornit á munn sér ok hyggr nú at hann skal drekka meira
Text drykk ok *þreytir á drykkiuna sem honum vannz til ørindi,
Text1 ok sér enn at stikillinn hornsins vill ekki upp svá miǫk
Text2 sem honum líkar. Ok er hann tók hornit af munni sér ok

◆ Word leyst Entry leysa
Place GYLFG 45.44.P Combi fekk
Adverb x
Phrase x
Meaning ほどく M_Cat 12
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object engi knút
O_Real どんな結び目もない
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 næst sofnar Skrýmir ok hraut fast. En Þórr tók nestbaggan=n=
Text_1 ok skal leysa. En svá er at segia sem útrúligt
Text mun þikkia, at engi knút fekk hann * leyst ok engi álarendann
Text1 hreyft svá at þá væri lausari en áðr. Ok er hann sér at
Text2 þetta verk má eigi nýtaz, þá varðhann reiðr, greip þá

## ENTRY + MEANING

◆ Word reiðir Entry ríða
Place GYLFG 45.56.P Combi x
Adverb títt, hart
Phrase x
Meaning 振る M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hamarinn
O_Real ミョッルニル
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 En at miðri nótt þá heyrir Þórr at Skrýmir hrýtr ok
Text_1 sefr fast, svá at dunar í skóginum. Þá stendr hann upp
Text ok gengr til hans, * reiðir hamarinn títt ok hart ok lýstr
Text1 ofan í miðian hvirfil honum; hann kennir at hamarsmuðrinn
Text2 søkkr diúpt í hǫfuðit. En í því bili vaknar

◆ Word knúðiz Entry knýjast
Place GYLFG 46.124.P Combi x
Adverb því harðara, at fanginu
Phrase x
Meaning 一生懸命やる M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Útgarða-Loki at hon skal taka fang viðÁsaþór. Ekki er
Text_1 langt um at gera. Svá fór fang þat, at því harðara er Þórr
Text * knúðiz at fanginu, því fastara stóðhon. Þá tók kerli<n>g at
Text1 leita til bragða, ok varðÞórr þá lauss á fótum, ok vóro
Text2 þær sviptingar allharðar, ok eigi lengi áðr en Þórr fell á

◆ Word hefir Entry hafa
Place GYLFG 51.61.P Combi x
Adverb fullt

Phrase hafa fang
Meaning 関わる M_Cat 4
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object fang
O_Real つかむ事
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 fagra bryniu ok geir sinn er Gu<n>gnir heitir, stefnir
Text_1 hann móti Fenrisúlf, en þórr fram á aðra hliðhonum,
Text ok má hann ekki duga honum, þvíat hann * hefir fullt
Text1 fang at beriaz viðMiðgarðzorm. Freyr berst móti Surti,
Text2 ok verðr harðr samgangr áðr Freyr fellr; þat verðr

◆ Word færðiz Entry færast
Place GYLFG 48.50.P Combi x
Adverb x
Phrase færast í e-t
Meaning 使う M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ásmegin
O_Real アースの力
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 góminn orminum. En er ormrinn kenndi þess, brá hann
Text_1 viðsvá hart at báðir hnefar þórs skullu út á borðinu. þá
Text varðþórr reiðr ok * færðiz í ásmegin, spyrndi við<svá>
Text1 fast at hann =h=lióp báðum fótum gǫgnum skipit ok spyrndi
Text2 viðgrunni; dró þá orminn upp at borði. En þat má segia

◆ Word settr Entry setja
Place GYLFG 48.64.P Combi x
Adverb x
Phrase setja viðe-t
Meaning 打つ M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object eyra =H=ymi
O_Real ヒュミルの耳
O_Type o O_Cat onj O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 hann lysti af honum hǫfuðit viðgrunninum, en ek hygg
Text_1 hitt vera þér satt at segia at Miðgarðzormr lifir enn ok
Text liggr í umsiá. En þórr reiddi til hnefann ok * settr viðeyra
Text1 =H=ymi, svá at hann steyptiz fyrir borð, ok sér í iliar honum.
Text2 En þórr óðtil landz.)

◆ Word rétti Entry rétta
Place GYLFG 46.107.P Combi x
Adverb x
Phrase rétta e-t upp
Meaning 伸ばす M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hǫndina
O_Real 手
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 ok helldr mikill, en þórr gekk til ok tók hendi sinni
Text_1 niðr undir miðian kviðin=n= ok lypti upp, en kǫttrinn b=ey=gði
Text =ke=ngi=nn= svá sem þórr * rétti upp hǫndina. En er þórr
Text1 se<i>ldiz svá langt upp sem hann mátti lengzt, þá létti
Text2 kǫttrinn einum fœti, ok fær þórr eigi framit þenna leik.

◆ Word færði Entry færa
Place GYLFG 48.59.P Combi x

Adverb á lopt
Phrase x
Meaning 投げる M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Þórr S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real ミョッルニル
O_Type c O_Cat ong O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 ok =h=ræddiz er hann sá orminn ok þat er særinn fell út
Text_1 ok inn of nǫkkvan=n=. Ok í því bili er Þórr greip hamarinn
Text ok * færði á lopt, þá fálmaði iǫtunninn til agnsaxinu ok
Text1 hió vaðþórs af borði. En ormrinn søkðiz í sæinn. En
Text2 Þórr kastaði hamrinum eptir honum, ok segia menn at

◆ Word þrýtr Entry þrjóta
Place GYLFG 46.90.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 一生懸命やる M_Cat 1
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ソール S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 mér lítz sem um þenna mun vera.) Þá varðþórr reiðr,
Text_1 setr hornit á munn sér ok drekkr sem ákafligaz má hann
Text ok *þrýtr sem lengzt at drykknum. En er hann sá í hornit,
Text1 þá hafði nú hellzt nǫkkot munr á fengiz. Ok þá býðr
Text2 hann upp hornit ok vill eigi drekka meira.

## ロキ（神話詩）

### ENTRY

◆ Word rœgir Entry rœgja
Place LS 55.5.VG Combi x
Adverb hér
Phrase x
Meaning 悪口を言う M_Cat 4
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject er S_Grm x
S_Real ロキ S_Type r
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object goðǫll, guma
O_Real アース神, 人々
O_Type o O_Cat ga, m O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 heiman Hlórriða;
Text_1 hann ræðr ró
Text þeim er * rœgir hér
Text1 goðǫll ok guma.
Text2

◆ Word gremðu Entry gremja
Place LS 12.6.VG Combi x
Adverb eigi, at þér
Phrase x
Meaning 怒らせる M_Cat 12
Form imp Tense x Mood imp
Reflex x A/M m Enclitic -ðu
Meter l
Subject -ðu S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object goð
O_Real アース神
O_Type o O_Cat ga O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 síðr þú ásom
Text_1 ǫfund um gialdir;
Text * gremðu eigi goðat þér!
Text1
Text2 <K { Loki} kvað:>

◆ Word mólkandi Entry mólka
Place LS 23.6.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning ミルクを搾る M_Cat 1
Form pres.p Tense x Mood x

Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 átta vetr
Text_1 vartu fyr iǫrðneðan
Text kýr * mólkandi ok kona,
Text1 ok hefir þú þar <bǫrn> <of> borit,
Text2 ok hugða ek þat args aðal.

## MEANING

◆ Word eyss Entry ausa
Place LS 4.5.VG Combi x
Adverb x
Phrase ausa e-m á e-t
Meaning 浴びせる M_Cat 1
Form pres Tense f Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject þú S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hrópi ok rógi/ holl regin
O_Real 罵りの言葉/ 神々
O_Type o/ o O_Cat x/ ga O_Person 3/ 3
O_Num s/ p O_Case do/ ag

Text_2 á þat sumbl at siá,
Text_1 hrópi ok rógi
Text ef þú * eyss á holl regin:
Text1 á þér muno þau þerra þat.
Text2

◆ Word falz Entry felast
Place LS G.PG Combi x
Adverb í Fránangrs forsi, í lax líki
Phrase x
Meaning 身を隠す M_Cat 8
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Loki S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1
Text Frá Loka. En eptir þetta * falz Loki í Fránangrs forsi í
Text1 lax líki. Þar tóko æsir hann. Hann var bundinn með
Text2 þǫrmom sonor <síns> Nara. En Narfi sonr hans varðat

◆ Word leika Entry leika
Place LS 49.3.VG Combi munattu
Adverb lengi svá
Phrase leika lauss hala
Meaning 気ままに振る舞う M_Cat 24
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject -tu S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object lausom hala
O_Real 自由な尻尾
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 Létt er þér, Loki;
Text_1 munattu lengi svá
Text * leika lausom hala,
Text1 þvíat þik á hiǫrvi skolo
Text2 ins hrímkalda magar

## ENTRY + MEANING

◆ Word fann Entry finna
Place TRK 26.3.VG Combi x
Adverb viðiǫtuns máli
Phrase finna orð
Meaning 答える M_Cat 30
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject er S_Grm x
S_Real ロキ S_Type r
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object orð
O_Real 言葉
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Sat in alsnotra
Text_1 ambótt fyrir,
Text er orðum * fann
Text1 viðiǫtuns máli:
Text2 (Át vætr Freyia

◆ Word fann Entry finna
Place TRK 28.3.VG Combi x
Adverb viðiǫtuns máli
Phrase finna orð
Meaning 答える M_Cat 30
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject er S_Grm x
S_Real ロキ S_Type r
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object orð
O_Real 言葉
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Sat in alsnotra
Text_1 ambótt fyrir,
Text er orðum * fann
Text1 viðiǫtuns máli:
Text2 (Svaf vætr Freyia

◆ Word fær Entry fá
Place LS 21.3.VG Combi x
Adverb x
Phrase fá e-m e-t at gremi
Meaning 怒らせる M_Cat 12
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þér/ Gefion/ gremi
O_Real ロキ/ ゲヴュン/ 怒り
O_Type o/o/o O_Cat gjm/ gfa/ x O_Person 2/3/3
O_Num s/s/s O_Case do/ ag/ do

Text_2 Œrr ertu, Loki,
Text_1 ok ørviti,
Text er þú * fær þér Gefion at gremi,
Text1 þvíat aldar ørlǫg
Text2 hygg ek at hón ǫll um viti

◆ Word Hefir Entry hafa
Place TRK 10.1.V Combi x
Adverb sem erfiði
Phrase x
Meaning 果たす M_Cat 1
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object erendi
O_Real 使い
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 allz fyrst um kvað:
Text_1

Text (*Hefir þú erendi
Text1 sem erfiði?
Text2 Segðu á lopti

## ロキ（英雄詩）

## ENTRY

◆ Word afla Entry afla
Place RM A.PH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 得る M_Cat 14
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Loka S_Grm x
S_Real ロキ S_Type a
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object gullzins
O_Real 黄金
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 til Hreiðmars ok sýndo veiði sína. Þá tóko vér þá hǫndom
Text_1 ok lǫgðom þeim fiǫrlausn at fylla otrbelginn meðgulli ok
Text hylia útan meðrauðo gulli. Þá sendo þeir Loka at * afla
Text1 gullzins. Hann kom til Ránar ok fekk net hennar ok fór
Text2 þá til Andvarafors ok kastaði netino fyrir gedduna; en

# ロキ（「ギュルヴィの惑わし」）

## ENTRY

◆ Word kennaz Entry kennast
Place GYLFG 50.6.P Combi mun
Adverb lengi
Phrase x
Meaning 覚えている M_Cat 29
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þessa nakkvat hefnt?)
Text_1 Hár segir: (Goldit var honum þetta svá at hann mun
Text lengi * kennaz. Þá er guðin vóro orðin honum svá reið
Text1 sem vǫn var, hlióp hann á braut ok fal sik =á= fialli nǫkkvoru,
Text2 gerði þar hús ok .iiii. dyrr at hann mátti siá ór

## MEANING

◆ Word reið Entry ríða
Place GYLFG 50.13.P Combi x
Adverb x
Phrase ríða ræxna
Meaning 結び目を結ぶ M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ræxna
O_Real 結び目
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 hann fyrir sér hveria væl æsir myndu til finna at taka
Text_1 hann í forsinum. En er hann sat í húsinu, tók hann língarn
Text ok * reiðá ræxna, svá sem net er síðan <gert>, en eldr
Text1 brann firir honum. Þá sá hann at æsir áttu skamt til hans,
Text2 ok hafði Óðinn sét ór Hliðskiálfinni hvar hann var. Hann

◆ Word líkaði Entry líka
Place GYLFG 49.17.P Combi x
Adverb x
Phrase e-m líka illa
Meaning 気に入らない M_Cat 19
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject honum S_Grm x
S_Real ロキ S_Type d
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement illa
C_Real 嫌な
C_Type a C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 til, sumir beria grióti. En hvat sem at var gert, sakaði
Text_1 hann ekki, ok þótti þetta ǫllum mikill frami.
Text En er þetta sá Loki Laufeyiar son, þá * líkaði honum
Text1 illa er Baldr sakaði ekki. Hann gekk til Fensalar til
Text2 Friggiar ok brá sér í konu líki. Þá spyrr Frigg ef sú kona

◆ Word kom Entry koma
Place GYLFG 33.8.P Combi x
Adverb iafnan, í fullt vandræði
Phrase x
Meaning 陥れる M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ásum
O_Real アース神
O_Type o O_Cat ga O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 skaplyndi, miǫk fiǫlbreytinn at háttum. Hann hafði þá
Text_1 speki um fram aðra menn, er slœgðheitir, ok vælar til
Text allra =h=luta. Hann * kom ásum iafnan í fullt vandræði, ok
Text1 opt leysti hann þá meðvælræðum. Kona hans heitir S=i=g=y=n;
Text2 sonr þeira Na=r=i eða Narvi.

◆ Word sleit Entry slíta
Place GYLFG 49.28.P Combi x
Adverb x
Phrase slíta upp
Meaning 引き抜く M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Loki S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real やどりぎ
O_Type c O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 kallaðr; sá þótti mér ungr at krefia eiðsins.) Því
Text_1 næst hvarf konan á brut.
Text En Loki tók mistiltein ok * sleit upp ok gekk til þings.
Text1 En Hǫðr stóðútarlega í mannhringinum, þvíat hann
Text2 var blindr. Þá mælti Loki viðhann: (Hví skýtr þú ekki

◆ Word kippiz Entry kippast
Place GYLFG 50.53.P Combi x
Adverb hart
Phrase kippast við
Meaning のたうち回る M_Cat 31
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hiá honum ok heldr m=u=ndlaugu undir eitrdropa, en þá er
Text_1 full er munnlaugin, þá gengr hon ok slær út eitrinu.
Text En meðan drýpr eitrit í andlit honum; þá * kippiz hann svá
Text1 hart viðat iǫrðǫll skelfr. Þat kalliðþér landskiálpta.
Text2 Þar liggr hann í bǫndum til ragnarøkrs.)

◆ Word kom Entry koma
Place GYLFG 50.1.P Combi x
Adverb x
Phrase koma á leið
Meaning 達成する M_Cat 3
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Loki S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Allmiklu
O_Real すごい事
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 er flest hefir illt gert meðásum.)
Text_1
Text Þá mælti Gangleri: (Allmiklu * kom Loki á leið
Text1 er hann olli fyrst því er Baldr var veginn, ok svá því er
Text2 hann varðeigi leystr frá Heliu. Eða hvárt varðhonum

## ENTRY + MEANING

◆ Word kostaði Entry kosta
Place GYLFG 42.42.P Combi x
Adverb x
Phrase kosta til
Meaning 払う M_Cat 13
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hvat sem
O_Real 何でも
O_Type s O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 kaupinu, ok veittu Loka atgǫngu. En er hann varð
Text_1 hræddr, þá svarði hann eiða at hann skyldi svá til haga
Text at smiðrinn skyldi af kaupinu, hvat sem hann * kostaði til.
Text1 Ok it sama kveld er smiðrinn ók út eptir griótinu með
Text2 hestinn Svaðilfœra, þá =h=lióp ór skóginum nǫkkvorum

◆ Word hleypr Entry hlaupa
Place GYLFG 50.31.P Combi x
Adverb ifir þinulinn
Phrase hlaupa upp
Meaning 越える M_Cat 7
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ロキ S_Type n
S_Cat gjm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 binda viðsvá þungt at eigi skyli undir mega fara. Ferr
Text_1 þá Loki fyrir netinu, en er hann sér at skamt var til
Text sævar, þá * hleypr hann upp ifir þinulinn ok rennir upp í
Text1 forsinn. Nú sá æsirnir hvar hann fór; fara enn upp til
Text2 forsins ok skipta liðinu í tvá staði, en Þórr veðr þá eptir

## フレイ（神話詩）

## ENTRY

◆ Word fiásk Entry fiást
Place SKM 33.3.VG Combi skal
Adverb x
Phrase x
Meaning 憎む M_Cat 17
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject Freyr S_Grm x
S_Real フレイ S_Type n
S_Cat gmv S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þik
O_Real ゲルズ
O_Type o O_Cat jf O_Person 2
O_Num s O_Case ag

Text_2 Reiðr er þér Óðinn,
Text_1 reiðr er þér Ásabragr,
Text þik skal Freyr * fiásk,
Text1 en fyrinilla mær,
Text2 en þú fengit hefir

## MEANING

◆ Word seldir Entry selja
Place LS 42.3.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 売る M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject x S_Grm x
S_Real フレイ S_Type c
S_Cat gmv S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þitt sverð
O_Real 刀
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Gulli keypta
Text_1 léztu Gymis dóttur
Text ok * seldir þitt svá sverð;
Text1 en er Muspellz synir
Text2 ríða Myrkviðyfir,

## ENTRY + MEANING

◆ Word lifa Entry lifa
Place SKM 19.6.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning b e M_Cat 24
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Frey S_Grm x
S_Real フレイ S_Type o
S_Cat gmv S_Person 3 S_Num s
Complement óleiðastan
C_Real 最も好ましい
C_Type a C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 friðat kaupa,
Text_1 at þú þér Frey kveðir
Text óleiðastan * lifa.
Text1
Text2 <K { Gerðr kvað:} >

## フレイ（「ギュルヴィの惑わし」）

## MEANING

◆ Word missir Entry missa
Place GYLFG 37.48.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 持っていない M_Cat 22
Form pres Tense f Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real フレイ S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sverðzins
O_Real 刀
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 hittuz. Drepa mátti Freyr hann meðhendi sinni. Verða
Text_1 mun þat er Freyr mun þikkia verr viðkoma er hann
Text * missir sverðzins þá er Muspellz synir fara ok heria.)
Text1
Text2 Þá mælti Gangleri: (Þat segir þú at allir þeir

◆ Word missir Entry missa
Place GYLFG 51.64.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 持っていない M_Cat 22
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real フレイ S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þess hins góða sverðz
O_Real あの素晴らしい剣
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 fang at beriaz viðMiðgarðzorm. Freyr berst móti Surti,
Text_1 ok verðr harðr samgangr áðr Freyr fellr; þat verðr
Text hans bani er hann * missir þess hins góða sverðz er hann
Text1 gaf Skírni. Þá er ok lauss orðinn hundrinn Garmr er
Text2 bundinn er firir Gnipahelli; hann er it mesta forat;

## ENTRY + MEANING

◆ Word lét Entry láta
Place GYLFG 37.27.P Combi x
Adverb eigi
Phrase láta e-t til e-s
Meaning 耐える M_Cat 4
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Freyr S_Grm x
S_Real フレイ S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þat/ skorta
O_Real フレイの刀/ 欠けている
O_Type o/ o O_Cat ong/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ p O_Case ag/ g

Text_2 sagði svá at hann skal fara sendiferðen Freyr skal fá
Text_1 honum sverðsitt, þat var svá gott sverðat siálft vázk.
Text En Freyr * lét eigi þat til skorta ok gaf honum sverðit.
Text1 Þá fór Skírnir ok baðhonum konunnar ok fekk hei=t=
Text2 hennar, ok nío nóttum síðarr skilldi hon þar koma er

◆ Word berst Entry berast
Place GYLFG 51.62.P Combi x
Adverb x
Phrase berast móti e-m
Meaning 立ち向かう M_Cat 4
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Freyr S_Grm x
S_Real フレイ S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Surti
O_Real スルト

O_Type o O_Cat jm O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 hann móti Fenrisúlf, en Þórr fram á aðra hliðhonum,
Text_1 ok má hann ekki duga honum, þvíat hann hefir fullt
Text fang at beriaz viðMiðgarðzorm. Freyr * berst móti Surti,
Text1 ok verðr harðr samgangr áðr Freyr fellr; þat verðr
Text2 hans bani er hann missir þess hins góða sverðz er hann

## フレイ（「ユングリンガ・サガ」）

伝説上の王としてのフレイ

## ENTRY

◆ Word dýrkaðr Entry dýrka
Place YS 10.8.P Combi Var
Adverb meirr, en ǫnnur goðin
Phrase x
Meaning 誉め称える M_Cat 2
Form past.pp Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real フレイ S_Type n
S_Cat kgv S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Þá hófsk Uppsala auðr ok hefir haldizk æsíðan.
Text_1 Á hans dǫgum hófsk Fróða fríðr. Þá var ok ár um ǫll
Text lǫnd; kendu Svíar þat Frey. Var hann því meirr * dýrkaðr
Text1 en ǫnnur goðin, sem á hans dǫgum varðlandzfólkit
Text2 auðgara en fyrr, af friðinum ok ári. Gerðr Gymisdóttir

## MEANING

◆ Word tók Entry taka
Place YS 10.15.P Combi x
Adverb x
Phrase taka sótt
Meaning 病気になる M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Freyr S_Grm x
S_Real フレイ S_Type n
S_Cat kgv S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sótt
O_Real 病気
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 fyrir tígnarnafn, ok Ynglingar váru síðan kallaðir hans
Text_1 ættmenn.
Text Freyr * tók sótt, en er at honum leiðsóttin, leituðu menn
Text1 sér ráðs ok létu fá menn til hans koma, en biǫggu haug
Text2 mikinn ok létu dyrr á ok iii. glugga. En er Freyr var

## ENTRY + MEANING

## フレイヤ（神話詩）

## ENTRY

◆ Word frata Entry frata
Place LS 32.6.VG Combi myndir
Adverb x
Phrase x
Meaning おならをする M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject þú S_Grm x
S_Real フレイヤ S_Type n
S_Cat gfv S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 sítztu at brœðr þínom
Text_1 siðo blíðregin,
Text ok myndir þú þá, Freyia, * frata.
Text1
Text2 <K Niǫrðr { kvað:} >

◆ Word fnása=ð=i Entry fnása
Place TRK13.2.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 鼻を鳴らす M_Cat 31
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x

Meter f
Subject Freyia S_Grm x
S_Real フレイヤ S_Type n
S_Cat gfv S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1 Reiðvarðþá Freyia
Text ok * fnása=ð=i,
Text1 allr ása salr
Text2 undir bifðiz,

## MEANING

◆ Word þreyiandi Entry þreyja
Place HDL 47.2.VG Combi x
Adverb ey
Phrase x
Meaning 恋しく思う M_Cat 17
Form pres.p Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real フレイヤ S_Type c
S_Cat gfv S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Óði
O_Real オズ
O_Type o O_Cat gma O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2
Text_1 Rant at Óði
Text ey *þreyiandi,
Text1 skutuz þ=é=r fleiri
Text2 und fyrirskyrtu;

◆ Word liá Entry ljá
Place TRK 3.6.VG Combi Muntu
Adverb x
Phrase x
Meaning 貸す M_Cat 13
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject -tu S_Grm x
S_Real フレイヤ S_Type n
S_Cat gfv S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mér/ fiaðrhams
O_Real ソール/ 羽衣
O_Type o/ o O_Cat gma/ ong O_Person 1/ 3
O_Num s/ s O_Case do/ g

Text_2 allz fyrst um kvað:
Text_1 (Muntu mér, Freyia,
Text fiaðrhams * liá,
Text1 ef ek minn hamar
Text2 mættak hitta?)

## ニョルズ（「ユングリンガ・サガ」）

## MEANING

◆ Word marka Entry marka
Place YS 9.20.P Combi x
Adverb x
Phrase marka sik Óðni
Meaning オージンの特徴をつける M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real ニョルズ S_Type c
S_Cat kgv S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sik/ Óðni
O_Real ニョルズ/ オージンの特徴
O_Type o/ o O_Cat kgv/ onkga O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 Niǫrðr réði fyrir ári ok fyrir fésælu manna. Á hans dǫgum
Text_1 dó flestir díar, ok váru allir blótaðir ok brendir síðan.
Text Niǫrðr varðsóttdauðr; lét hann ok * marka sik Óðni, áðr
Text1 hann dó. Svíar brendu hann ok grétu allmiǫk yfir leiði
Text2 hans.

## バルドル（「ギュルヴィの惑わし」）

## ENTRY

◆ Word sakaði Entry saka
Place GYLFG 49.15.P Combi x
Adverb ekki
Phrase x
Meaning 傷つく M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real バルドル S_Type o

S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Baldrs ok ásanna at hann skyldi stand=a= upp á þingum,
Text_1 en allir aðrir skyldu sumir skióta á hann, sumir hǫggva
Text til, sumir beria grióti. En hvat sem at var gert, * sakaði
Text1 hann ekki, ok þótti þetta ǫllum mikill frami.
Text2 En er þetta sá Loki Laufeyiar son, þá líkaði honum

◆ Word sakaði Entry saka
Place GYLFG 49.18.P Combi x
Adverb ekki
Phrase x
Meaning 傷つく M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Baldr S_Grm x
S_Real バルドル S_Type o
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hann ekki, ok þótti þetta ǫllum mikill frami.
Text_1 En er þetta sá Loki Laufeyiar son, þá líkaði honum
Text illa er Baldr * sakaði ekki. Hann gekk til Fensalar til
Text1 Friggiar ok brá sér í konu líki. Þá spyrr Frigg ef sú kona
Text2 vissi hvat æsir hǫfðuz at á þinginu. Hon sagði at allir

◆ Word sakaði Entry saka
Place GYLFG 49.21.P Combi x
Adverb ekki
Phrase x
Meaning 傷つく M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real バルドル S_Type o
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Friggiar ok brá sér í konu líki. Þá spyrr Frigg ef sú kona
Text_1 vissi hvat æsir hǫfðuz at á þinginu. Hon sagði at allir
Text skutu at Baldri ok þat at hann * sakaði ekki. Þá mælti
Text1 Frigg: (Eigi munu vápn eða viðir granda Baldri, eiða
Text2 hefi ek þegit af ǫllum þeim.) Þá spyrr konan: (Hafa

## チュール（神話詩）

## MEANING

◆ Word bera Entry bera
Place LS 38.3.VG Combi kunnir
Adverb aldregi
Phrase bera tilt meðe-m
Meaning 仲を取り持つ M_Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real チュール S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object tilt/ tveim
O_Real 良いこと/ 二人
O_Type o/ o O_Cat x/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ p O_Case ag/ do

Text_2 Þegi þú, Týr,
Text_1 þú kunnir aldregi
Text * bera tilt meðtveim;
Text1 handar ennar hœgri
Text2 mun ek hinnar geta,

## ヘイムダッル（神話詩）

## MEANING

◆ Word vissi Entry vita
Place TRK15.3.VG Combi x
Adverb vel, sem vanir aðrir
Phrase vita fram
Meaning 未来のことを知る M_Cat 29
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f

Subject hann S_Grm x
S_Real ヘイムダッル S_Type n
S_Cat gma S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þá kvaðþat Heimdallr,
Text_1 hvítastr ása,
Text * vissi hann vel fram,
Text1 sem vanir aðrir:
Text2 (Bindo vér þór þá

## ENTRY + MEANING

◆ Word vaka Entry vaka
Place LS 48.6.VG Combi munt
Adverb æ, aurgo baki
Phrase x
Meaning 見張る M_Cat 2
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter 1
Subject þú S_Grm x
S_Real ヘイムダッル S_Type n
S_Cat gma S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 aurgo baki
Text_1 þú munt ævera
Text ok * vaka vǫrðr goða.
Text1
Text2 <K { Skaði kvað:} >

## シグルズ（英雄詩）

## ENTRY

◆ Word viko Entry vikja
Place RM I.PH Combi x
Adverb at lande
Phrase x
Meaning 寄せる M_Cat 8
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þeir S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1
Text þeir * viko at lande, ok gekk karl á skip, ok lægði þá
Text1 veðrit.
Text2

◆ Word skyniaði Entry skynja
Place FM E.PH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 調べる M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hvárt+
O_Real 節
O_Type g O_Cat y O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Sigurðr tók Fáfnis hiarta ok steikði á teini. <En> er
Text_1 hann hugði at fullsteikt væri, ok freyddi sveitinn ór
Text hiartano, þá tók hann á fingri sínom ok * skyniaði hvárt
Text1 fullsteikt væri. Hann brann ok brá fingrinom í munn sér.
Text2 En er hiartblóðFáfnis kom á tungo hánom, ok skilði

◆ Word neyðir Entry neyða
Place GRP 25.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase neyða e-t til e-s
Meaning 強制する M_Cat 12
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þengill S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mik/ þess
O_Real グリーピ/ それ

O_Type o/ o O_Cat hm/ x O_Person 1/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ g

Text_2 segia gerva,
Text_1 allz þengill mik
Text til þess * neyðir;
Text1 mundo víst vita
Text2 at vætki lýgr,

◆ Word nemaz Entry nemast
Place GRP 23.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 得る M_Cat 14
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject -tu S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þat
O_Real それ
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 lǫgðævi þér;
Text_1 láttu, inn ítri, þat,
Text ǫðlingr, * nemaz,
Text1 þvíat uppi mun,
Text2 meðan ǫld lifir,

◆ Word klyfiaði Entry klyfja
Place FM H.PH Combi x
Adverb þar
Phrase klyfja e-t meðe-m
Meaning 乗せる M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x/ Grana
O_Real 財宝/ グラニ
O_Type c/ o O_Cat x/ lh O_Person x/ 3
O_Num x/ s O_Case x/ do

Text_2 Sigurðr stórmikit gull ok fyldi þar tvær kistor. Þar tók
Text_1 hann œgishiálm ok gullbrynio ok sverðit Hrotta ok marga
Text dýrgripi ok * klyfiaði þar meðGrana. En hestrinn vildi eigi
Text1 fram ganga fyrr en Sigurðr steig =á= bak hánom.
Text2

◆ Word hrœðaz Entry hrœðast
Place HB 9.8.VH Combi kynni
Adverb hvergi lanz
Phrase x
Meaning 恐れる M_Cat 17
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter f
Subject er S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type r
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 svefni mínom
Text_1 er hvergi lanz
Text * hrœðaz kynni.
Text1
Text2 Lét um sal minn

◆ Word gista Entry gista
Place SD 26.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 立ち寄る M_Cat 8
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject x S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type c
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 vammafull á vegi,
Text_1 ganga er betra
Text en * gista sé,
Text1 þótt þik nótt um nemi.
Text2

◆ Word flœia Entry flœja

Place SD 21.1.VH Combi Munka
Adverb x
Phrase x
Meaning 逃げる M_Cat 6
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 ǫll ero mein of metin).
Text_1
Text (Munka ek * flœia,
Text1 þótt mik feigan vitir,
Text2 emka ek meðbleyði borinn;

◆ Word druknar Entry drukna
Place FM 11.4.VH Combi x
Adverb í vatni
Phrase x
Meaning 溺れる M_Cat 8
Form pres Tense f Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þú munt fyr nesiom hafa
Text_1 ok ósvinnz apa;
Text í vatni þú * druknar,
Text1 ef í vindi rœr;
Text2 alt er feigs forað).

◆ Word beniaðan Entry benja
Place FM 25.5.VH Combi hefir
Adverb x
Phrase x
Meaning 殺す M_Cat 1
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject þú S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object bróður minn
O_Real ファーヴニ
O_Type o O_Cat dm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 er þú þerrir Gram á grasi;
Text_1 bróður minn
Text hefir þú * beniaðan,
Text1 ok veld ek þó siálfr sumo).
Text2

## MEANING

◆ Word Beittu Entry beita
Place GH 19.1.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 馬具をつける M_Cat 1
Form imp Tense x Mood imp
Reflex x A/M m Enclitic -tu
Meter f
Subject -tu S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object enn blakka mar
O_Real 馬
O_Type o O_Cat lh O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 .....
Text_1
Text * Beittu, Sigurð<r>,
Text1 enn blakka mar,
Text2 hest inn hraðfœra

◆ Word vera Entry vera
Place FM 38.6.VH Combi mundu
Adverb x
Phrase vera einvaldi e-t
Meaning 独り占めする M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject -du S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement einvaldi
C_Real 独り占め
C_Type a C_Cat x
Object fiár
O_Real 黄金
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 þá mundu fiár
Text_1 þess er Fáfnir réð
Text einvaldi * vera).
Text1
Text2 <K { Sigurðr kvað:} >

◆ Word spenna Entry spenna
Place SD 9.5.VH Combi skal
Adverb x
Phrase x
Meaning 張りつめる M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type c
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object liðo
O_Real 太股
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 ok leysa kind frá konom;
Text_1 á lóf=a= þær skal rísta
Text ok of liðo * spenna
Text1 ok biðia þá dísir duga.
Text2

◆ Word Óx Entry vaxa
Place SF A.PH Combi x
Adverb þar, í barnœsko
Phrase vaxa upp
Meaning 成長する M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Sigurðr S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Hiǫrdísar, dóttur Eylima konungs. Þeira sonr var Sigurðr.
Text_1 Sigmundr konungr fell í orrosto fyr Hundings sonom,
Text en Hiǫrdís giptiz þá Álfi, syni Hiálpreks konungs. *Óx
Text1 Sigurðr þar upp í barnœsko.
Text2 Sigmundr ok allir synir hans vóro langt um fram alla

◆ Word brenna Entry brenna
Place SD 31.5.VH Combi x
Adverb inni auðstǫfum
Phrase x
Meaning 焼け死ぬ M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject x S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type c
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 viðhugfulla hali,
Text_1 beriaz er betra
Text en * brenna sé
Text1 inni auðstǫfum.
Text2

◆ Word brann Entry brenna
Place FM E.PH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 火傷をする M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hann hugði at fullsteikt væri, ok freyddi sveitinn ór
Text_1 hiartano, þá tók hann á fingri sínom ok skyniaði hvárt
Text fullsteikt væri. Hann * brann ok brá fingrinom í munn sér.
Text1 En er hiartblóðFáfnis kom á tungo hánom, ok skilði
Text2 hann fuglsrǫdd. Hann heyrði at igðor klǫkoðo á hrísinom.

◆ Word reið Entry ríða
Place SKS 3.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase ríða e-m í sinni
Meaning 一緒に旅をする M_Cat 2

Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Sigurðr Vǫlsungr ungi S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þeim
O_Real グンナル, ホグニ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 biðia fóro,
Text_1 svá at þeim Sigurðr
Text * reiði sinni,
Text1 Vǫlsungr ungi,
Text2 ok vega kunni;

◆ Word unnit Entry vinna
Place BSG 1.2.VH Combi <hefir>
Adverb x
Phrase vinna til saka
Meaning 違反する M_Cat 4
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject <Sigurðr> S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Hvat/ saka
O_Real 何/ 責任
O_Type s/ o O_Cat x/ x O_Person x/ 3
O_Num x/ s O_Case x/ g

Text_2
Text_1 (<Hvat> <hefir> <Sigurðr>
Text <til> saka * unnit,
Text1 er þú frœknan vill
Text2 fiǫrvi næma?)

◆ Word sparir Entry spara
Place FM 37.2.VH Combi x
Adverb enn
Phrase x
Meaning 生かす M_Cat 32
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object fiánda inn fólkská
O_Real レギン
O_Type o O_Cat dm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 <K { vi. kvað:} >
Text_1 (Miǫk er ósviðr,
Text ef hann enn * sparir
Text1 fiánda inn fólkská,
Text2 þar er Reginn liggr,

## ENTRY + MEANING

◆ Word var Entry vera
Place GK-II 2.1.VH Combi x
Adverb Svá
Phrase vera uf e-m
Meaning 優れている M_Cat 24
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Sigurðr S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement uf
C_Real 優れている
C_Type adv C_Cat x
Object sonom Giúka
O_Real グンナル, ホグニ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 gaf Sigurði.
Text_1
Text Svá * var Sigurðr
Text1 uf sonom Giúka
Text2 sem væri grœnn laukr

◆ Word verðr Entry verða
Place GRP 33.1.VH Combi x
Adverb x
Phrase verða fyr e-m
Meaning 会う M_Cat 4
Form pres Tense f Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object svikom annars
O_Real 他人の裏切り
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 unna þóttomk!)
Text_1
Text (þú * verðr, siklingr,
Text1 fyr svikom annars,
Text2 mundo Grímhildar

◆ Word tók Entry taka
Place SD A.PH Combi x
Adverb þá
Phrase taka e-t af e-m
Meaning 外す M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object brynio/ henne
O_Real 鎧/ ブリュンヒルド
O_Type o/ o O_Cat x/ v O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 væri holdgróin. þá reist hann meðGram frá
hǫfuðsmátt
Text_1 bryniona í gǫgnom niðr, ok svá út í gǫgnom
báðar ermar.
Text þá * tók hann brynio af henne, en hón
vaknaði, ok settiz
Text1 hón upp ok sá Sigurðok mælti:
Text2

◆ Word kná Entry knega
Place SD 19.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 理解する M_Cat 29
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type c
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement óviltar, óspilltar
C_Real 正しく
C_Type a C_Cat x
Object þær
O_Real ルーン
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 ok allar ǫlrúnar,
Text_1 ok mætar meginrúnar,
Text hveim er þær * kná óviltar
Text1 ok óspilltar
Text2 sér at heillom hafa;

◆ Word hefia Entry hefja
Place SKS 4.8.VH Combi x
Adverb né
Phrase hefja e-t sér at armi
Meaning 抱きしめる M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject húnskr konungr S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x/ sér/ armi
O_Real ブリュンヒルド/ シグルズ/ 腕
O_Type c/o/o O_Cat v/ hm/ x O_Person
x/3/3
O_Num x/s/s O_Case x/ do/ do

Text_2 kyssa gerði,
Text_1 né húnskr konungr
Text * hefia sér at armi;
Text1 mey frumunga
Text2 fal hann megi Giúka.

◆ Word fal Entry fela
Place SKS 4.10.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 渡す M_Cat 13
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject hann S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mey frumunga/ megi Giúka
O_Real ブリュンヒルド/ グンナル
O_Type o/ o O_Cat v/ hm O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ ag

Text_2 hefia sér at armi;
Text_1 mey frumunga
Text * fal hann megi Giúka.
Text1
Text2 Hón sér at lífi

◆ Word atta Entry eiga
Place FM 28.5.VH Combi x
Adverb viðorms megin
Phrase x
Meaning 使う M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l

Subject ek S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object afli míno
O_Real 力
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 minn inn hvassa hiǫr;
Text_1 afli míno
Text * atta ek viðorms megin,
Text1 meðan þú í lyngvi látt).
Text2

◆ Word biargir Entry bjarga
Place SD 33.2.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 埋める M_Cat 11
Form conj1 Tense f Mood conj.pres2
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object nám
O_Real 死体
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2
Text_1 Þat ræðek þér it níunda,
Text at þú nám * biargir,
Text1 hvars þú á foldum finnr,
Text2 hvárts eru sóttdauðir

◆ Word þyrm<ð>ir Entry þyrma
Place GRP 47.4.VH Combi x
Adverb eigi, vel
Phrase x
Meaning 守る M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object eiðom
O_Real 誓い
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 gǫrva segia,
Text_1 at þú eigi vel
Text eiðom *þyrm<ð>ir,
Text1 þá er ítr konungr
Text2 af ǫllom hug,

◆ Word þyrmða Entry þyrma
Place SKS 28.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 守る M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -a
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sifiom, svǫrnom eiðom
O_Real 姻戚関係, 誓い
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 en viðGunnar
Text_1 grand ekki vank;
Text *þyrmða ek sifiom,
Text1 svǫrnom eiðom,
Text2 síðr værak heitinn

◆ Word vank Entry vinna
Place SKS 28.4.VH Combi x
Adverb ekki
Phrase vinna grand viðe-t
Meaning だます M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -k
Meter f
Subject -k S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object grand/ Gunnar
O_Real 害/ グンナル
O_Type o/ o O_Cat x/ hm O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ ag

Text_2 fyr mann hvern,
Text_1 en viðGunnar
Text grand ekki * vank;
Text1 þyrmða ek sifiom,
Text2 svǫrnom eiðom,

◆ Word varp Entry verpa
Place SKS 22.3.VH Combi x

Adverb x
Phrase verpa eptir e-m
Meaning 襲う M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hergiarn S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object óbilgiǫrnom
O_Real グットホルム
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 Réðtil hefnda
Text_1 hergiarn í sal
Text ok eptir * varp
Text1 óbilgiǫrnom;
Text2 fló til Guðthorms

◆ Word Réð Entry ráða
Place SKS 22.1.VH Combi x
Adverb í sal
Phrase ráða til hefnda
Meaning 復讐する M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hergiarn S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hefnda
O_Real 復讐
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 hiǫrr Sigurði.
Text_1
Text * Réðtil hefnda
Text1 hergiarn í sal
Text2 ok eptir varp

◆ Word munar Entry muna
Place RM 15.6.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 望む M_Cat 29
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject tiggia S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type a
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object at+
O_Real 節
O_Type g O_Cat y O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 aldrs synioðo,
Text_1 ef meirr tiggia
Text * munar at sœkia
Text1 hringa rauða
Text2 en hefnd fǫður).

◆ Word logna Entry ljúga
Place BSG 2.4.VH Combi hefir
Adverb x
Phrase x
Meaning 破る M_Cat 12
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Sigurðr S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object alla
O_Real 誓い
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 selda eiða,
Text_1 eiða selda
Text alla * logna;
Text1 þá vélt<i> hann mik
Text2 er hann vera skyldi

◆ Word gørva Entry gera
Place GRP 34.2.VH Combi Mun
Adverb viðGunnar, þá
Phrase gera hleyti
Meaning 結婚する M_Cat 5
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real シグルズ S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hleyti
O_Real 婚姻関係
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_ 2
Text_ 1 (Mun ek viðþá Gunnar
Text * gørva hleyti
Text1 ok Guðrúno
Text2 ganga at eiga?

## ヘルギ（英雄詩）

ヘルギH (Helgi Hjǫrvarðssonr HHV)
ヘルギS (Helgi Sigmundssonr HH-I, HH-II)

## ENTRY

◆ Word niósnaði Entry njósna
Place HH-II A.PH Combi x
Adverb á laun
Phrase njósna til e-s
Meaning 偵察する M_ Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Helgi S_ Grm x
S_ Real ヘルギ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object hirðar Hundings konungs
O_ Real フンディング王の家来
O_ Type o O_ Cat hm O_ Person 3
O_ Num p O_ Case g

Text_ 2 annarra frændr. Sigmundr konungr ok hans ættmenn héto
Text_ 1 Vǫlsungar ok Ylfingar.
Text Helgi fór ok * niósnaði til hirðar Hundings konungs á
Text1 laun. Hemingr sonr Hundings konungs var heima. En
Text2 er Helgi fór í brot, þá hitti hann hiarðar<svein> ok kvað:

◆ Word dvala Entry dvala
Place HH-I 50.12.VH Combi muna
Adverb nú
Phrase x
Meaning 遅らせる M_ Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Helgi S_ Grm x
S_ Real ヘルギ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object hiǫrþing
O_ Real 戦い
O_ Type o O_ Cat x O_ Person 3
O_ Num s O_ Case ag

Text_ 2 mengi þeira;
Text_ 1 muna nú Helgi
Text hiǫrþing * dvala.)
Text1
Text2 (Renni raukn bitluð

## MEANING

◆ Word grunaði Entry gruna
Place HHV G.PH Combi x
Adverb x
Phrase gruna um e-t
Meaning 予感がする M_ Cat 29
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_ Grm x
S_ Real ヘルギ S_ Type a
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object feigðsína, þat at+
O_ Real 死, 節
O_ Type o, g O_ Cat x, y O_ Person 3, x
O_ Num s, x O_ Case ag, x

Text_ 2
Text_ 1
Text Þat kvaðHelgi, þvíat hann * grunaði um feigðsína ok
Text1 þat at fylgior hans hǫfðo vitiat Heðins, þá er hann sá
Text2 konona ríða varginom.

◆ Word fœrir Entry fœra
Place HH-I 32.6.VH Combi x
Adverb x
Phrase fœra e-t at landi
Meaning 上陸させる M_ Cat 11
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject hann S_ Grm x
S_ Real ヘルギ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object feiknalið/ lande
O_ Real 戦士たち/ 陸地
O_ Type o/ o O_ Cat hm/ x O_ Person 3/ 3
O_ Num p/ s O_ Case ag/ do

Text_ 2 sá er liði stýrir
Text_ 1 ok hann feiknalið
Text * fœrir at lande?)
Text1
Text2 Sinfiǫtli kvað,

◆ Word fœrir Entry fœra
Place HH-II F.4.VH Combi x
Adverb at landi
Phrase x
Meaning 上陸させる M_Cat 11
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject er S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type r
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object feiknalið
O_Real 恐ろしい軍隊
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 sá er flota stýrir
Text_1 ok feiknalið
Text * fœrir at landi?)
Text1
Text2

◆ Word lostna Entry ljósta
Place HHV 29.2.VH Combi hefr
Adverb x
Phrase ljósta e-t helstǫfum
Meaning 死期を決める M_Cat 12
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject Helgi S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þik/ helstǫfom
O_Real フリームゲルズ/ 死のルーン
O_Type o/ o O_Cat jf/ s O_Person 2/ 3
O_Num s/ p O_Case ag/ do

Text_2
Text_1 (Austr líttu nú, Hrímgerðr,
Text ef þik * lostna hefr
Text1 Helgi helstǫfom;
Text2 á landi ok á vatni

◆ Word hvessir Entry hvessa
Place HH-I 6.5.VH Combi x
Adverb sem hildingar
Phrase x
Meaning 鋭くする M_Cat 12
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject x S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type c
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object augo
O_Real 目
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 dœgrs eins gamall,
Text_1 nú er dagr kominn!
Text * hvessir augo
Text1 sem hildingar,
Text2 sá er varga vinr,

## ENTRY + MEANING

◆ Word vísir Entry vísa
Place HH-I 19.3.VH Combi x
Adverb x
Phrase vísa e-m til e-s
Meaning そそのかす M_Cat 15
Form conj1 Tense f Mood conj.pres3
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hánom/ valstefno
O_Real ホズブロッド/ 戦い
O_Type o/ o O_Cat hm/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case do/ g

Text_2 þá kømr fylkir
Text_1 fára nátta,
Text nema þú hánom * vísir
Text1 valstefno til
Text2 eða mey nemir

◆ Word stóð Entry standa
Place HH-II 30.10.VH Combi x
Adverb x
Phrase standa á hálsi e-m
Meaning 支配する M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject er S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type r
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hálsi hildingom
O_Real 王
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 beztr í heimi
Text_1 ok hildingom
Text á hálsi * stóð).
Text1
Text2 (þik skyli allir

◆ Word Létat Entry láta
Place HH-I 12.1.VH Combi x
Adverb x
Phrase láta uppi
Meaning 払う M_Cat 13
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -at
Meter x
Subject buðlungr S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object bótir
O_Real 償い
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 ok fǫður dauða.
Text_1
Text * Létat buðlungr
Text1 bótir uppi,
Text2 né niðia in heldr

◆ Word lætr Entry láta
Place HH-II 19.3.VH Combi x
Adverb fyrir stafni
Phrase x
Meaning 上げる M_Cat 11
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject er S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type r
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object gunnfana gullinn
O_Real 黄金の旗印
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 (Hverr er skiǫldungr
Text_1 sá er skipom stýrir?
Text * lætr gunnfana
Text1 gullinn fyrir stafni;
Text2 þikkia mér frið<r>

◆ Word biðia Entry biðja
Place HH-I 21.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 集める M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real ヘルギ S_Type c
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object leiðar
O_Real 軍隊
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 allvaldr þaðan
Text_1 of lopt ok um lǫg,
Text leiðar at * biðia,
Text1 iðgnógan
Text2 ógnar lióma

## グンナル（英雄詩）

### ENTRY

◆ Word fullvegit Entry fullvega
Place SKS 33.2.VH Combi hefir
Adverb x
Phrase x
Meaning 戦う M_Cat 5
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1 (Frýra maðr þér engi, Gunnarr,
Text hefir þú * fullvegit,
Text1 lítt sézk Atli
Text2 ófo þína;

### MEANING

◆ Word heita Entry heita
Place SKS 14.8.VH Combi x
Adverb x
Phrase heita sér e-m at rúnom
Meaning 内密の話に呼ぶ M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x

Meter f
Subject hann S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sér/ Hǫgna/ rúnom
O_Real グンナル/ ホグニ/ 内密の話
O_Type o/o/o O_Cat hm/ hm/ x O_Person 3/3/3
O_Num s/s/p O_Case do/ do/ do

Text_2 kvánir gengi;
Text_1 nam hann sér Hǫgna
Text * heita at rúnom,
Text1 þar átti hann
Text2 allz fulltrúa:

◆ Word sveip Entry sveipa
Place SKS 13.3.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 思い悩む M_Cat 29
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject Gunnarr S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sínom hug
O_Real 心
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 Reiðr varðGunnarr
Text_1 ok hnipnaði,
Text * sveip sínom hug,
Text1 sat um allan dag;
Text2 hann vissi þat

◆ Word hrœrði Entry hrœra
Place AM 66.2.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 演奏する M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject Gunnarr S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x/ ilkvistom
O_Real ハープ/ 足の指
O_Type c/ o O_Cat x/ x O_Person x/ 3
O_Num x/ p O_Case x/ di

Text_2
Text_1 Hǫrpo tók Gunnarr,
Text * hrœrði ilkvistom,
Text1 slá hann svá kunni
Text2 at snótir gréto;

◆ Word slá Entry slá
Place AM 66.3.VH Combi kunni
Adverb svá
Phrase x
Meaning 演奏する M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hann S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real ハープ
O_Type c O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Hǫrpo tók Gunnarr,
Text_1 hrœrði ilkvistom,
Text * slá hann svá kunni
Text1 at snótir gréto;
Text2 klukko þeir karlar

◆ Word sveigia Entry sveigja
Place OD 29.6.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning かき鳴らす M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject horskr konungr S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hǫrpo
O_Real ハープ
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 gørva drykkio;
Text_1 nam horskr konungr
Text hǫrpo * sveigia,
Text1 þvíat hann hugði mik
Text2 til hiálpar sér,

## ENTRY + MEANING

◆ Word missir Entry missa
Place AK 11.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 死ぬ M_Cat 31
Form pres Tense f Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Gunnars S_Grm x
S_Real グンナル S_Type g
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 arfi Niflunga,
Text_1 gamlir, gránvarðir,
Text ef Gunnars * missir,
Text1 birnir blakkfialler
Text2 bíta þreftǫnnom,

◆ Word láttu Entry láta
Place SKS 65.5.VH Combi x
Adverb á velli
Phrase x
Meaning 変える M_Cat 12
Form imp Tense x Mood imp
Reflex x A/M m Enclitic -tu
Meter x
Subject -tu S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object svá breiǫrg
O_Real 広い館
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 sú mun í heimi
Text_1 hinzt bœn vera:
Text * láttu svá breiða
Text1 borg á velli
Text2 at undir oss ǫllom

◆ Word haldit Entry halda
Place BSG 18.7.VH Combi hafði
Adverb x
Phrase halda eiðom viðe-t
Meaning 誓う M_Cat 12
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hergǫtuðr S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object eiðom/ inn unga gram
O_Real 誓い/ シグルズ
O_Type o/ o O_Cat x/ hm O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case do/ ag

Text_2 hvé hergǫtuðr
Text_1 hafði fyrri
Text eiðom * haldit
Text1 viðinn unga gram.
Text2

◆ Word næma Entry næma
Place BSG 1.4.VH Combi vill
Adverb x
Phrase næma e-t fiǫrvi
Meaning 殺す M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real グンナル S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object frœknan/ fiǫrvi
O_Real シグルズ/ 命
O_Type o/ o O_Cat hm/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 <til> saka unnit,
Text_1 er þú frœknan vill
Text fiǫrvi * næma?)
Text1
Text2 (Mér hefir Sigurðr

## ホグニ（英雄詩）

## ENTRY

◆ Word veriaz Entry verjast
Place AK 19.6.VH Combi skal
Adverb svá
Phrase x
Meaning 戦う M_Cat 5
Form inf Tense x Mood x
Reflex rec A/M m Enclitic x
Meter x
Subject frœkn S_Grm x
S_Real ホグニ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x

Object fiándom
O_Real アトリの戦士
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 hratt hann í eld heitan;
Text_1 svá skal frœkn
Text fiándom * veriaz;
Text1 Hǫgni varði
Text2 hendr Gunnars.

## MEANING

◆ Word hratt Entry hrinda
Place AK 19.4.VH Combi x
Adverb í eld heitan
Phrase x
Meaning 投げ込む M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hann S_Grm x
S_Real ホグニ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object enom átta
O_Real 8人目の戦士
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 sverði hvǫsso,
Text_1 en enom átta
Text * hratt hann í eld heitan;
Text1 svá skal frœkn
Text2 fiándom veriaz;

# グズルーン（英雄詩）

## ENTRY

◆ Word snýtt Entry snýta
Place AM 85.5.VH Combi hefir
Adverb x
Phrase x
Meaning 殺す M_Cat 1
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject þú S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object siflungom
O_Real アトリの一族
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 barna þinna blóði
Text_1 at blanda mér drykkio;
Text * snýtt hefir þú sifiungom
Text1 sem þú sízt skyldir,
Text2 mér lætr þú ok siálfom

◆ Word lyfia Entry lyfja
Place AM 78.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase lyfja e-m elli
Meaning 殺す M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement elli
C_Real 年齢
C_Type n C_Cat x
Object ykr
O_Real アトリとグズルーンの息子
O_Type o O_Cat hm O_Person 2
O_Num p O_Case do

Text_2 spilla ætla ek báðom,
Text_1 lyst várumk þess lengi
Text at * lyfia ykr elli.)
Text1 (Blótt sem vilt bǫrnom,
Text2 bannar þat manngi,

◆ Word lækna Entry lækna
Place GK-II 39.7.VH Combi mun
Adverb x
Phrase x
Meaning 治す M_Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þik
O_Real アトリ
O_Type o O_Cat hm O_Person 2
O_Num s O_Case ag

Text_2 mun ek þik viðbǫlvi
Text_1 brenna ganga,
Text líkna ok * lækna,
Text1 þótt mér leiðr sér.)
Text2

◆ Word líkna Entry líkna
Place GK-II 39.7.VH Combi mun
Adverb x

Phrase x
Meaning 世話をする M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þik
O_Real アトリ
O_Type o O_Cat hm O_Person 2
O_Num s O_Case ag

Text_2 mun ek þik viðbǫlvi
Text_1 brenna ganga,
Text * líkna ok lækna,
Text1 þótt mér leiðr sér.)
Text2

◆ Word kveina Entry kveina
Place GK-I 1.7.VH Combi x
Adverb né
Phrase x
Meaning 嘆く M_Cat 17
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject hón S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 gerðit hón hiúfra
Text_1 né hǫndom slá
Text né * kveina um
Text1 sem konor aðrar.
Text2

◆ Word kveina Entry kveina
Place GK-II 11.7.VH Combi x
Adverb né, um
Phrase x
Meaning 嘆く M_Cat 17
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 gerðiga ek hiúfra
Text_1 né hǫndom slá
Text né * kveina um
Text1 sem konor aðrar,
Text2 þá er sat soltin

◆ Word hrauðzk Entry hrjóðast
Place AM 49.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase hrjóðast ór e-m
Meaning 脱ぐ M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter m
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object skikkio
O_Real 上着
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 at þeir sárt léko,
Text_1 hugði á harðræði
Text ok * hrauðzk ór skikkio;
Text1 nøkðan tók hón mæki
Text2 ok niðia fiǫr varði,

◆ Word hræfða Entry hræfa
Place AM 71.7.VH Combi x
Adverb x
Phrase hræfa um e-t
Meaning 耐える M_Cat 4
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ho<t>vetna
O_Real 何でも
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 afkár ek áðr þóttak,
Text_1 á mun nú gœða,
Text * hræfða ek um ho<t>vetna,
Text1 meðan Hǫgni lifði.
Text2

◆ Word hnóf Entry hnafa
Place GH 12.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase hnafa e-t af e-m
Meaning 切り落とす M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hǫfuð/ <H>niflungom
O_Real 頭/ アトリとグズルーンの息子
O_Type o/ o O_Cat x/ hm O_Person 3/ 3
O_Num s/ p O_Case ag/ do

Text_2 máttigak bǫlva
Text_1 bœtr um vinna,
Text áðr ek * hnóf hǫfuð
Text1 af <H>niflungom.
Text2

◆ Word hiúfra Entry hjúfra
Place GK-I 1.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 泣く M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject hón S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 er hón sat sorgfull
Text_1 yfir Sigurði;
Text gerðit hón * hiúfra
Text1 né hǫndom slá
Text2 né kveina um

◆ Word hiúfra Entry hjúfra
Place GK-II 11.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 泣く M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 á viðlesa
Text_1 varga leifar;
Text gerðiga ek * hiúfra
Text1 né hǫndom slá
Text2 né kveina um

◆ Word hœlomk Entry hœlast
Place AM 84.4.VH Combi x
Adverb þó, ekki
Phrase x
Meaning 自慢する M_Cat 2
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic -k
Meter m
Subject -k S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 – biðr sér fár verra –
Text_1 hlut veld ek mínom,
Text * hœlomk þó ekki.)
Text1
Text2 (Grimm vartu, Guðrún,

◆ Word hálsaðir Entry hálsa
Place GK-I 13.7.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 抱く M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object heilan stilli
O_Real シグルズ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 (Líttu á liúfan,
Text_1 leggðu munn viðgrǫn,
Text sem þú * hálsaðir
Text1 heilan stilli.)
Text2

◆ Word hálsaða Entry hálsa
Place GK-3 4.1.VH Combi x
Adverb *eino sinni*
Phrase x
Meaning 抱く M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -a
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object heria stilli, iǫfur óneisinn
O_Real ショーズレク
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 vinna knátti,
Text_1
Text nema ek * hálsaða
Text1 heria stilli,
Text2 iǫfur óneisinn,

◆ Word grýmir Entry grýma
Place SKS 60.8.VH Combi x
Adverb á beð, af sárom hug
Phrase x
Meaning 悪意をいだく M_Cat 4
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject Guðrún S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hánom/ snǫrpom eggiom
O_Real アトリ/ 刃先
O_Type o/ o O_Cat hm/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ p O_Case do/ di

Text_2 ok sofa lífi,
Text_1 þvíat hánom Guðrún
Text * grýmir á beð
Text1 snǫrpom eggiom
Text2 af sárom hug.

◆ Word gleymðu Entry gleyma
Place GK-II 24.1.VH Combi x
Adverb þá
Phrase x
Meaning 忘れる M_Cat 29
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -ðu
Meter f
Subject -ðu S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object er+
O_Real 節
O_Type r O_Cat y O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þvíat hón sakar deyfði.
Text_1
Text En þá * gleymðu
Text1 er getit hǫfðo
Text2 ǫllo iǫfurs

◆ Word fullhugðak Entry fullhyggja
Place GH 15.4.VH Combi x
Adverb bazt, minna barna
Phrase x
Meaning 一番愛している M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -k
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real スヴァンヒルド
O_Type c O_Cat hf O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 sáto þýiar,
Text_1 en ek minna barna
Text bazt * fullhugðak;
Text1 svá var Svanhildr
Text2 í sal mínom

◆ Word vexa Entry vexa
Place AM 103.3.VH Combi mun
Adverb vel
Phrase x
Meaning ワックスをかける M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x

C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object blæio
O_Real 経帷子
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 (Knǫrr mun ek kaupa
Text_1 ok kisto steinda,
Text * vexa vel blæio
Text1 at veria þitt líki,
Text2 hyggia á þǫrf hveria

## MEANING

◆ Word lék Entry leika
Place AM 74.8.VH Combi x
Adverb x
Phrase leika tveim skiǫldom
Meaning 欺瞞に満ちている M_Cat 24
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hón S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object tveim skiǫldom
O_Real 敵, 味方両方の楯
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 kunni um hug mæla,
Text_1 létt hón sér gerði,
Text * lék hón tveim skiǫldom.
Text1
Text2 Œxti hón ǫldrykkior

◆ Word hrinda Entry hrinda
Place GH 13.3.VH Combi vilda
Adverb x
Phrase x
Meaning 押しのける M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object stríðgriðþeira
O_Real ノルンの囲い
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Gekk ek til strandar,
Text_1 grǫm vark nornom,
Text vilda ek * hrinda
Text1 stríðgriðþeira;
Text2 hófo mik, ne drekðo,

◆ Word festi Entry festa
Place AM 49.8.VH Combi x
Adverb hvars
Phrase festa hendr
Meaning 手を掛ける M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hón S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hendr
O_Real 手
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 ok niðia fiǫr varði,
Text_1 hœg varat hialdri
Text hvars hón hendr * festi.
Text1
Text2 Dóttir lét Giúka

◆ Word komt Entry koma
Place AM 56.6.VH Combi x
Adverb sítz
Phrase koma í hendr e-s
Meaning 手に落ちる M_Cat 8
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ossar
O_Real アトリたち
O_Type o O_Cat hm O_Person 1
O_Num p O_Case g

Text_2 knáka ek þess nióta;
Text_1 hliótt áttom sialdan,
Text sítz * komt í hendr ossar,
Text1 firðan mik frændom,
Text2 fé opt svikinn,

◆ Word hvarfað<ak> Entry hvarfa
Place GK-II 6.1.VH Combi x
Adverb Lengi

Phrase x
Meaning ためらう M_Cat 29
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -<ak>
Meter f
Subject -<ak> S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 eigendr ne lifðut.
Text_1
Text Lengi * hvarfað<ak>,
Text1 lengi hugir deildoz,
Text2 áðr ek of frægak

◆ Word varnaði Entry varna
Place AK 30.7.VH Combi x
Adverb x
Phrase varna viðe-m
Meaning こらえる M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject Guðrún S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object árom
O_Real 涙
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 .....
Text_1 Guðrún sigtíva
Text * varnaði viðtárom,
Text1 vaðin í þýshǫllo.
Text2

◆ Word hné Entry hníga
Place GK-I 15.1.VH Combi x
Adverb þá, hǫll
Phrase hníga viðe-m
Meaning 身体を屈める M_Cat 8
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject Guðrún S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object bólstri
O_Real 枕
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 hiǫrvi skorna.
Text_1
Text þá * hné Guðrún
Text1 hǫll viðbólstri,
Text2 haddr losnaði,

◆ Word Sakna Entry sakna
Place GK-I 20.1.VH Combi x
Adverb í sessi, í sæingo
Phrase x
Meaning 寂しく思う M_Cat 2
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object míns málvinar
O_Real シグルズ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case g

Text_2 at iǫfur dauðan.
Text_1
Text * Sakna ek í sessi
Text1 ok í sæingo
Text2 míns málvinar,

◆ Word erfa Entry erfa
Place AM 75.2.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 偲ぶ M_Cat 2
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object brœðr sína
O_Real グンナル, ホグニ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_ 2
Text_ 1 Œxti hón ǫldrykkior
Text at * erfa brœðr sína,
Text1 samr lézk ok Atli
Text2 at sína gørva.

◆ Word Skævaði Entry skæva
Place AK 37.1.VH Combi x
Adverb þá
Phrase x
Meaning 軽やかに歩く M_ Cat 7
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject in skírleita S_ Grm x
S_ Real グズルーン S_ Type n
S_ Cat hf S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 gengo inn hvárir.
Text_ 1
Text * Skævaði þá in skírleita
Text1 veigar þeim at bera,
Text2 afkár dís, iǫfrom,

## ENTRY + MEANING

◆ Word lét Entry láta
Place AK 43.8.VH Combi x
Adverb x
Phrase láta e-t giǫld e-s
Meaning 復讐する M_ Cat 4
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hón S_ Grm x
S_ Real グズルーン S_ Type n
S_ Cat hf S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object þau/ giǫld brœðra
O_ Real アトリたち/ グンナル, ホグニの賠償
O_ Type o/ o O_ Cat hm/ onh O_ Person 3/ 3
O_ Num p/ p O_ Case ag/ ag

Text_ 2 ok húskarla vakði
Text_ 1 brandi brúðr heitom,
Text þau * lét hón giǫld brœðra.
Text1
Text2 Eldi gaf hón þá alla

◆ Word gœða Entry gœða
Place AM 71.6.VH Combi mun
Adverb nú
Phrase gœða á
Meaning 悪くなる M_ Cat 10
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_ Grm x
S_ Real グズルーン S_ Type c
S_ Cat hf S_ Person 1 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 er vóro sakar minni;
Text_ 1 afkár ek áðr þóttak,
Text á mun nú * gœða,
Text1 hræfða ek um ho<t>vetna,
Text2 meðan Hǫgni lifði.

◆ Word vegin Entry vega
Place GH 10.4.VH Combi var
Adverb at húsi
Phrase x
Meaning 運ぶ M_ Cat 11
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_ Grm x
S_ Real グズルーン S_ Type n
S_ Cat hf S_ Person 1 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object þrimr verom
O_ Real シグルズ, グンナル, ホグニ
O_ Type o O_ Cat hm O_ Person 3
O_ Num p O_ Case do

Text_ 2 þriá vissa ek arna,
Text_ 1 var ek þrimr verom
Text * vegin at húsi;
Text1 einn var mér Sigurðr
Text2 ǫllom betri,

◆ Word stríddi Entry stríða
Place AM 76.6.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 戦う M_ Cat 5
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hón S_ Grm x

S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ætt Buðla
O_Real アトリたち
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 viðsvǫrfon ofmikla;
Text_1 strǫng var stórhuguð,
Text * stríddi hón ætt Buðla,
Text1 vildi hón ver sínom
Text2 <vinna> ofrhefndir.

◆ Word skiptit Entry skipta
Place AM 79.3.VH Combi x
Adverb skapliga
Phrase x
Meaning 手配する M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Brá þá barnæsko
Text_1 brœðra in kappsvinna,
Text * skiptit skapliga,
Text1 skar hón á háls báða.
Text2 Enn frétti Atli

◆ Word reifa Entry reifa
Place AK 35.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 運ぶ M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object giǫld Rǫgnis
O_Real 貢ぎ物
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 Atla í gǫgn
Text_1 meðgylltom kálki
Text at * reifa giǫld Rǫgnis:
Text1 (þiggia knáttu, þengill,
Text2 í þinni hǫllo

◆ Word lesa Entry lesa
Place GK-II 11.3.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 集める M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject x S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type c
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object varga leifar
O_Real シグルズの死体
O_Type o O_Cat onh O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Hvarf ek ein þaðan
Text_1 annspilli frá
Text á við * lesa
Text1 varga leifar;
Text2 gerðiga ek hiúfra

◆ Word leiða Entry leiða
Place SKS 41.4.VH Combi skal
Adverb þeygi
Phrase leiða e-t aldri
Meaning 一緒に暮らす M_Cat 8
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þunngeðkona S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object annarrar ver/ aldri
O_Real シグルズ/ 人生
O_Type o/ o O_Cat hm/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 þunngeðkona
Text_1 annarrar ver
Text aldri * leiða;
Text1 þá mun á hefndom
Text2 harma minna.)

◆ Word leggðu Entry leggja
Place GK-I 13.6.VH Combi x

Adverb x
Phrase leggja munn viðe-t
Meaning キスする M_Cat 4
Form imp Tense x Mood imp
Reflex x A/M m Enclitic -ðu
Meter f
Subject -ðu S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object munn/ grǫn
O_Real 口/ 口髭
O_Type o/ o O_Cat x/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ ag

Text_2 fyr vífs kniám:
Text_1 (Líttu á liúfan,
Text * leggðu munn viðgrǫn,
Text1 sem þú hálsaðir
Text2 heilan stilli.)

◆ Word hreytti Entry hreyta
Place AM 46.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 投げる M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hón S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þeim gervǫllom
O_Real 首輪
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 er hón ekka heyrði,
Text_1 hlaðin hálsmeniom,
Text * hreytti hón þeim gervǫllom,
Text1 sløngði svá silfri
Text2 at í sundr hruto baugar.

◆ Word hafði Entry hafa
Place AM 51.3.VH Combi x
Adverb x
Phrase hafa e-t í helio
Meaning 殺す M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hón S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þann/ helio
O_Real 戦士/ 地獄
O_Type o/ o O_Cat hm/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 Annan réðhón hǫggva,
Text_1 svá at sá upp reisat,
Text í helio hón þann * hafði,
Text1 þeygi henne hendr skulfo.
Text2

◆ Word hafa Entry hafa
Place GK-II 34.4.VH Combi mun
Adverb þó, nauðig
Phrase x
Meaning 結婚する M_Cat 5
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þann
O_Real アトリ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 af konungom
Text_1 ok þó af niðiom
Text nauðig * hafa;
Text1 verðr eigi mér
Text2 verr at ynði,

◆ Word ganga Entry ganga
Place GK-II 27.2.VH Combi Vilk
Adverb eigi
Phrase ganga meðe-m
Meaning 結婚する M_Cat 5
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object veri
O_Real シグルズ以外の戦士
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2
Text_1 (Vilk eigi ek
Text meðveri * ganga
Text1 né Brynhildar
Text2 bróður eiga;

◆ Word festi Entry festa
Place AM 49.8.VH Combi x
Adverb hvars
Phrase festa hendr
Meaning 手を掛ける M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hón S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hendr
O_Real 手
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 ok niðia fiǫr varði,
Text_1 hœg varat hialdri
Text hvars hón hendr * festi.
Text1
Text2 Dóttir lét Giúka

◆ Word efndi Entry efna
Place AM 104.3.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 守る M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject ítrborin S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object alt þatz
O_Real 約束
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 Nár varðþá Atli,
Text_1 niðiom stríðœxti,
Text * efndi ítrborin
Text1 alt þatz réðheita;
Text2 fróðvildi Guðrún

◆ Word bella Entry bella
Place GK-II 29.2.VH Combi Máka
Adverb x
Phrase bella glaumi
Meaning 喜ぶ M_Cat 17
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real グズルーン S_Type n
S_Cat hf S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object glaumi
O_Real 喜び
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2
Text_1 (Máka ek, Grím<h>ildr,
Text glaumi * bella
Text1 né vígrisins
Text2 vánir telia,

## ブリュンヒルド（英雄詩）

## ENTRY

◆ Word sveltaz Entry sveltast
Place OD 19.7.VH Combi x
Adverb at Sigurði
Phrase x
Meaning 死ぬ M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter f
Subject hón S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þat mun á hǫlða
Text_1 hvert landa fara,
Text er hón lét * sveltaz
Text1 at Sigurði.
Text2

◆ Word miðlaði Entry miðla
Place SKS 47.7.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 引き裂く M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject x S_Grm x

S_Real ブリュンヒルド S_Type c
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sik/ mækis eggiom
O_Real ブリュンヒルド/ 刀の刃先
O_Type o/ o O_Cat v/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ p O_Case ag/ di

Text_2 gullbrynio smó,
Text_1 vara gott í hug,
Text áðr sik * miðlaði
Text1 mækis eggiom.
Text2

◆ Word glatat Entry glata
Place HB 4.6.VH Combi hefir
Adverb x
Phrase x
Meaning 殺す M_Cat 1
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Giúka bǫrnom
O_Real グンナル, ホグニ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2 í heim borin;
Text_1 þú hefir Giúka
Text um * glatat bǫrnom
Text1 ok búi þeira
Text2 brugðit góðo.)

◆ Word gefaz Entry gefast
Place SKS 37.6.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 結婚する M_Cat 5
Form inf Tense x Mood x
Reflex rec A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hǫfn um deila,
Text_1 gull né iarðir,
Text nema ek * gefaz létak,
Text1 ok engi <h>lut
Text2 auðins fiár,

◆ Word gœla Entry gœla
Place SKS 9.3.VH Combi verð
Adverb af grimom hug
Phrase x
Meaning 喜ばせる M_Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mik
O_Real ブリュンヒルド
O_Type o O_Cat v O_Person 1
O_Num s O_Case ag

Text_2 (Vǫn geng ek vilia,
Text_1 vers ok beggia,
Text verðek mik * gœla
Text1 af grimom hug.)
Text2

## MEANING

◆ Word Sefr Entry sofa
Place GRP 15.1.VH Combi x
Adverb á fialli, eptir bana Helga
Phrase x
Meaning 眠っている M_Cat 31
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject fylkis dóttir biǫrt í brynio S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 ævi minnar?)
Text_1
Text (* Sefr á fialli
Text1 fylkis dóttir
Text2 biǫrt í brynio,

◆ Word sofnoð Entry sofa
Place SD 2.2.VH Combi var

Adverb lengi
Phrase x
Meaning 眠っている M_Cat 31
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M a Enclitic x
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1 (Lengi ek svaf,
Text lengi ek * sofnoðvar,
Text1 lǫng ero lýða læ;
Text2 Óðinn því veldr

◆ Word fnœsti Entry fnœsa
Place GK-I 27.6.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 吹き出す M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type c
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object eitri
O_Real 毒
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 Buðla dóttur
Text_1 eldr ór augom,
Text eitri * fnœsti,
Text1 er hón sár um leit
Text2 á Sigurði.

◆ Word geta Entry geta
Place OD 16.2.VH Combi x
Adverb x
Phrase geta hiálm
Meaning ヴァルキュリャになる M_Cat 10
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Brynhildi S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type o
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hiálm
O_Real 兜
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2
Text_1 En hann Brynhildi
Text baðhiálm * geta,
Text1 hana kvaðhann óskmey
Text2 verða skyldo.

◆ Word skipa Entry skipa
Place GRP 49.4.VH Combi Mun
Adverb fyr reiði, né, af oftrega, allvel
Phrase skipa viðe-t
Meaning あしらう M_Cat 2
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject rík brúðr S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þik
O_Real シグルズ
O_Type o O_Cat hm O_Person 2
O_Num s O_Case ag

Text_2 rík brúðr viðþik
Text_1 né af oftrega
Text allvel * skipa;
Text1 viðr þú góðri
Text2 grand aldregi,

## ENTRY + MEANING

◆ Word vega Entry vega
Place SD C.PH Combi skyldo
Adverb aldri, síðan, í orrosto
Phrase x
Meaning 与える M_Cat 13
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hana S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type o
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sigr
O_Real 勝利
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 er vætr engi vildi þiggia. Sigrdrífa feldi Hiálm-Gunnar
Text_1 í orrostonni. En Óðinn stakk hana svefnþorni í hefnd
Text þess ok kvaðhana aldri skyldo síðan sigr * vega í orrosto
Text1 ok kvaðhana giptaz skyldo. (En ek sagðak hánom, at ek
Text2 strengðak heit þar í mót at giptaz øngom þeim manne

◆ Word rekia Entry rekja
Place HB 1.6.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 織る M_Cat 3
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þér S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type d
S_Cat v S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object borða
O_Real 布
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 garða mína;
Text_1 betr semði þér
Text borða at * rekia
Text1 heldr en vitia
Text2 vers annarrar.

◆ Word rakði Entry rekja
Place OD 17.2.VH Combi x
Adverb í búri
Phrase rekja borða
Meaning 織る M_Cat 3
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Brynhildr S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object borða
O_Real 織物
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2
Text_1 Brynhildr í búri
Text borða * rakði,
Text1 hafði hón lýði
Text2 ok lǫnd um sik;

◆ Word strengði Entry strengja
Place GK-I 27.2.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 強くなる M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject hón S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object elvi
O_Real 力
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2
Text_1 Stoðhón und stóð,
Text * strengði hón elvi;
Text1 brann Brynhildi
Text2 Buðla dóttur

◆ Word ræð Entry ráða
Place SD 22.1.VH Combi x
Adverb it fyrsta
Phrase x
Meaning 与える M_Cat 13
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þat at+/ þér
O_Real 飾/ シグルズ
O_Type g/ o O_Cat y/ hm O_Person x/ 3
O_Num x/ s O_Case x/ do

Text_2 svá lengi sem ek lifi).
Text_1
Text (þat * ræðek þér it fyrsta,
Text1 at þú viðfrændr þína
Text2 vammalaust verir;

þat ræðek þér it .... のパターンになっているため他の例は省略.
◆ Word lék Entry leika

Place SKS 39.3.VH Combi x
Adverb meirr
Phrase leika e-m í mun
Meaning 望む M_Cat 29
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject mér S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type d
S_Cat v S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mun/ þiggia+
O_Real 考え/ 節
O_Type o/ g O_Cat x/ y O_Person 3/ x
O_Num s/ x O_Case do/ x

Text_2 Létom síga
Text_1 sáttmál okkor,
Text * lék mér meirr í mun
Text1 meiðmar þiggia,
Text2 bauga rauða

◆ Word Hafa Entry hafa
Place SKS 6.5.VH Combi skal
Adverb x
Phrase hafa e-t sér á armi
Meaning 抱きしめる M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real ブリュンヒルド S_Type n
S_Cat v S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Sigurðmǫg frumungan/ mér/ armi
O_Real シグルズ/ ブリュンヒルド/ 腕
O_Type o/o/o O_Cat hm/ v/ x O_Person 3/1/3
O_Num s/s/s O_Case ag/ do/ do

Text_2 nam hón svá bert
Text_1 um at mælaz:
Text (* Hafa skal ek Sigurð
Text1 eða þó svelti,
Text2 mǫg frumungan

## シグルーン（英雄詩）

## MEANING

◆ Word kiósa Entry kjósa
Place HH-II 29.4.VH Combi mynda
Adverb nú
Phrase x
Meaning 魔法で呼び戻す M_Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_Grm x
S_Real シグルーン S_Type n
S_Cat v S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Lifna
O_Real 生きている人
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 Hildr hefr þú oss verit;
Text_1 vinnat skiǫldungar skǫpom).
Text (Lifna mynda ek nú * kiósa,
Text1 er liðnir ero,
Text2 ok knætta ek þér þó í faðmi felaz).

◆ Word svefia Entry svefja
Place HH-II 42.10.VH Combi skyldir
Adverb x
Phrase x
Meaning 和らげる M_Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject þú S_Grm x
S_Real シグルーン S_Type n
S_Cat v S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sárdropa
O_Real 血
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 dǫglingr baðþik
Text_1 at þú sárdropa
Text * svefia skyldir).
Text1
Text2

## ENTRY + MEANING

◆ Word vanntattu Entry vinna
Place HH-II 28.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 止める M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -attu
Meter f
Subject -tu S_Grm x
S_Real シグルーン S_Type n
S_Cat v S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x

Object vígi
O_Real 戦い
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 niðiar þínir,
Text_1 at nám orðnir;
Text * vanntattu vígi,
Text1 var þér þat skapat,
Text2 at þú at rógi

## アトリ（英雄詩）

## ENTRY

◆ Word rakðiz Entry rekjast
Place AM 90.2.VH Combi x
Adverb x
Phrase rekjast ór svefni
Meaning 目覚める M_Cat 31
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter m
Subject x S_Grm x
S_Real アトリ S_Type c
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object svefni
O_Real 眠り
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2
Text_1 Rǫskr tók at rœða,
Text * rakðiz ór svefni,
Text1 kendi brátt benia,
Text2 bandz kvaðhann þǫrf ønga:

◆ Word nýta Entry nýta
Place GK-II 42.8.VH Combi skyldak
Adverb n<a>uðigr
Phrase x
Meaning 食べる M_Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject ek S_Grm x
S_Real アトリ S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object ná<i>
O_Real 狼の死体
O_Type o O_Cat lj O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 at hræom orðit,
Text_1 n<a>uðigr ná<i>
Text * nýta ek skyldak.)
Text1
Text2 (þar muno seggir

◆ Word melta Entry melta
Place AK 38.5.VH Combi knátto
Adverb x
Phrase x
Meaning 消化する M_Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject -to S_Grm x
S_Real アトリ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object manna valbráðir
O_Real 死肉
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 hiǫrto hrædreyrog
Text_1 viðhunang of tuggin;
Text * melta knátto, móðugr,
Text1 manna valbráðir,
Text2 eta at ǫlkrásom

◆ Word hrinkto Entry hrinkja
Place GK-3 5.5.VH Combi x
Adverb at brœðrom, at brynioðom
Phrase x
Meaning 奪う M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -to
Meter x
Subject -to S_Grm x
S_Real アトリ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mik
O_Real グズルーン
O_Type o O_Cat hf O_Person 1
O_Num s O_Case ag

Text_2 lifa þeir ne einir
Text_1 þriggia tega manna;
Text * hrinkto mik at brœðrom
Text1 ok at brynioðom,
Text2 hrinkto mik at ǫllom

◆ Word hrinkto Entry hrinkja
Place GK-3 5.7.VH Combi x
Adverb at ǫllom hǫfuðniðiom

Phrase x
Meaning 奪う M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -to
Meter f
Subject -to S_Grm x
S_Real アトリ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mik
O_Real グズルーン
O_Type o O_Cat hf O_Person 1
O_Num s O_Case ag

Text_2 hrinkto mik at brœðrom
Text_1 ok at brynioðom,
Text * hrinkto mik at ǫllom
Text1 hǫfuðniðiom.
Text2

◆ Word greipt Entry greipa
Place AM 86.11.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 行う M_Cat 1
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject x S_Grm x
S_Real アトリ S_Type c
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object glœp stóran
O_Real ひどいこと
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 nú hefir þú enn aukit
Text_1 þat er nú áðan frágom,
Text * greipt glœp stóran,
Text1 gert hefir þú þitt erfi.)
Text2

## MEANING

◆ Word hóftu Entry hefja
Place AM 97.4.VH Combi x
Adverb þó, stórum
Phrase hefja stórum
Meaning 尊大である M_Cat 26
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -tu
Meter m
Subject -tu S_Grm x
S_Real アトリ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þótt ek þat lítt rekia;
Text_1 heldr var ek hœg sialdan,
Text * hóftu þó stórom;
Text1 bǫrðuz ér brœðr ungir,
Text2 báruz róg milli;

◆ Word varnaðit Entry varna
Place AK 42.4.VH Combi x
Adverb x
Phrase varna viðe-m
Meaning 警戒する M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -t
Meter m
Subject hann S_Grm x
S_Real アトリ S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Guðrúno
O_Real グズルーン
O_Type o O_Cat hf O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 móðan hafði hann sik drukkit,
Text_1 vápn hafði hann ekki,
Text * varnaðit hann viðGuðrúno;
Text1 opt var sá leikr betri
Text2 þá er þau lint skyldo

## ENTRY + MEANING

◆ Word áttir Entry eiga
Place AK 31.2.VH Combi svarða, nefnda
Adverb x
Phrase x
Meaning 完了 M_Cat 40
Form pres Tense pres.p Mood ind
Reflex x A/M a Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real アトリ S_Type n
S_Cat hm S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_ 2
Text_ 1 (Svá gangi þér, Atli,
Text sem þú viðGunnar *áttir
Text1 eiða opt um svarða
Text2 ok ár of nefnda,

◆ Word bera Entry bera
Place SKS 33.7.VH Combi mun
Adverb æ
Phrase x
Meaning b e M_ Cat 25
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement ykkar ǫnd síðari afl it meira
C_ Real 一番強い
C_ Type a C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 hann mun ykkar
Text_ 1 ǫnd síðari
Text ok æ* bera
Text1 afl it meira.
Text2

◆ Word mátt Entry mega
Place AM 60.9.VH Combi valda
Adverb x
Phrase x
Meaning 助動詞 M_ Cat 80
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M a Enclitic x
Meter x
Subject þú S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 2 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 meðan heilir várom,
Text_ 1 nú erom svá sárir
Text at þú * mátt siálfr valda.)
Text1
Text2 Beiti þat mælti

◆ Word talði Entry telja
Place SKS 37.12.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 支払う M_ Cat 13
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type c
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object mér/ a<u>ra
O_ Real ブリュンヒルド/ 財産
O_ Type o/ o O_ Cat v/ x O_ Person 1/ 3
O_ Num s/ s O_ Case do/ ag

Text_ 2 eigo seldi
Text_ 1 ok mér ióðungri
Text a<u>ra * talði.
Text1
Text2 þá var á hvǫrfon

◆ Word stríða Entry stríða
Place HM 8.1.VH Combi x
Adverb x
Phrase stríða at e-m
Meaning 引き起こす M_ Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Atla S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type o
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object Erps morði, Eitils aldrlagi
O_ Real エルプとエイトリの死
O_ Type o O_ Cat onh O_ Person 3
O_ Num s O_ Case do

Text_ 2 Gunnarr þér svá vildi.
Text_ 1
Text Atla þóttiz þú * stríða
Text1 at Erps morði
Text2 ok at Eitils aldrlagi,

◆ Word sté Entry stíga
Place AM 68.2.VH Combi x
Adverb þá
Phrase stíga um e-t
Meaning 殺す M_ Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hann S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x

C_ Type x C_ Cat x
Object báða
O_ Real グンナル, ホグニ
O_ Type o O_ Cat hm O_ Person 3
O_ Num p O_ Case ag

Text_ 2
Text_ 1 Stórr þóttiz Atli,
Text * sté hann um þá báða,
Text1 ho<r>skri harm sagði
Text2 ok réðheldr at bregða:

◆ Word sofa Entry sofa
Place SKS 60.6.VH Combi mun
Adverb x
Phrase sofa lífi
Meaning 死ぬ M_ Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject Atli S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object lífi
O_ Real 命
O_ Type o O_ Cat x O_ Person 3
O_ Num s O_ Case do

Text_ 2 ǫndo týna,
Text_ 1 sælo sinni
Text ok * sofa lífi,
Text1 þvíat hánom Guðrún
Text2 grýmir á beð

◆ Word reifa Entry reifa
Place AM 13.6.VH Combi mun
Adverb x
Phrase x
Meaning 喜ばせる M_ Cat 12
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject gramr S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x/ gulli glóðrauðo
O_ Real グンナル, ホグニ/ 黄金
O_ Type c/ o O_ Cat hm/ x O_ Person x/ 3
O_ Num x/ s O_ Case x/ di

Text_ 2 nema launa eigim;
Text_ 1 okr mun gramr gulli
Text * reifa glóðrauðo,
Text1 óumk ek aldregi,
Text2 þótt vér ógn fregnim.)

◆ Word leifa Entry leifa
Place AM 83.6.VH Combi x
Adverb ekki
Phrase x
Meaning 残す M_ Cat 11
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject -tu S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 2 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 sagðag at kálfs væri;
Text_ 1 einn þú því ollir,
Text ekki réttu * leifa,
Text1 tǫgtu tíðliga,
Text2 trúðir vel iǫxlom.

◆ Word bœta Entry bœta
Place AM 72.8.VH Combi mundo
Adverb aldregi
Phrase bœta bana e-s
Meaning 殺す M_ Cat 1
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject -do S_ Grm x
S_ Real アトリ S_ Type n
S_ Cat hm S_ Person 2 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object bana/ mér brœðra
O_ Real 死/ グンナル, ホグニ
O_ Type o/ o O_ Cat x/ hm O_ Person 3/ 3
O_ Num s/ p O_ Case ag/ g

Text_ 2 gulli ok hálsmeniom;
Text_ 1 bana mundo mér brœðra
Text * bœta aldregi,
Text1 né vinna þess ekki
Text2 at mér vel þikki.

# ヴォルンド（英雄詩）

## MEANING

◆ Word herðak Entry herða
Place VKV 18.5.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 鍛える M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic -k
Meter m
Subject ek S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object er
O_Real 刀
O_Type r O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þat er ek hvesta
Text_1 sem ek hagazt kunna,
Text ok ek * herðak
Text1 sem mér hœgst þótti;
Text2 sá er mér fránn mækir

◆ Word verða Entry verða
Place VKV 29.2.VH Combi x
Adverb Vel
Phrase verða á e-m
Meaning 回復する M_Cat 10
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject ek S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object fitiom
O_Real 足
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case do

Text_2
Text_1 (Vel ek), kvaðVǫlundr,
Text (* verða ek á fitiom,
Text1 þeim er mik Níðaðar
Text2 námo rekkar!)

◆ Word hvesta Entry hvessa
Place VKV 18.3.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 研ぐ M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject ek S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object er
O_Real 刀
O_Type r O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 (Skínn Níðaði
Text_1 sverðá linda,
Text þat er ek * hvesta
Text1 sem ek hagazt kunna,
Text2 ok ek herðak

◆ Word sló Entry slá
Place VKV 5.3.VH Combi x
Adverb viðgimfástan
Phrase x
Meaning はめ込む M_Cat 11
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object gull rautt
O_Real 黄金
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 en einn Vǫlundr
Text_1 sat í Úlfdǫlom.
Text Hann * sló gull rautt
Text1 viðgimfástan,
Text2 lukði hann alla

◆ Word bœti Entry bœta
Place VKV 27.1.VH Combi x
Adverb svá
Phrase x
Meaning なおす M_Cat 12
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject ek S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object brest á gull

O_Real 割れ目
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2
Text_1 <K Vǫlundr kvað:>
Text (Ek * bœti svá
Text1 brest á gulli,
Text2 at feðr þínom

## ENTRY + MEANING

◆ Word sló Entry slá
Place VKV 25.7.VH Combi x
Adverb ór tǫnnom tveggia þeira
Phrase x
Meaning つくる M_Cat 3
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject hann S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object brióstkringlor
O_Real 首飾り
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 en ór tǫnnom
Text_1 tveggia þeira
Text * sló hann brióstkringlor,
Text1 sendi Bǫðvildi.
Text2

◆ Word hófz Entry hefjast
Place VKV 29.6.VH Combi x
Adverb at lopti
Phrase x
Meaning 飛び上がる M_Cat 6
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject Vǫlundr S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 námo rekkar!)
Text_1 Hlæiandi Vǫlundr
Text * hófz at lopti;
Text1 grátandi Bǫðvildr
Text2 gekk ór eyio,

◆ Word hófz Entry hefjast
Place VKV 38.2.VH Combi x
Adverb at lopti
Phrase x
Meaning 飛び上がる M_Cat 6
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter m
Subject Vǫlundr S_Grm x
S_Real ヴォルンド S_Type n
S_Cat hm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2
Text_1 Hlæiandi Vǫlundr
Text * hófz at lopti,
Text1 en ókátr Níðuðr
Text2 sat þá eptir.

# スヴァーヴァ（英雄詩）

## ENTRY + MEANING

◆ Word vísaði Entry vísa
Place HHV E.PH Combi x
Adverb x
Phrase vísa e-m e-t til
Meaning 送る M_Cat 13
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Sváva S_Grm x
S_Real スヴァーヴァ S_Type n
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hánom/ er
O_Real ヘルギ/ 刀
O_Type o/ r O_Cat hm/ x O_Person 3/ x
O_Num s/ x O_Case do/ x

Text_2 Hiǫrvarðr svaraði at hann myndi fá liðHelga,
ef hann
Text_1 vill hefna móðurfǫður síns. Þá sótti Helgi
sverðit er Sváva
Text * vísaði hánom til. Þá fór h=an=n ok Atli
ok feldo Hróðmar
Text1 ok unno mǫrg þrekvirki. Hann drap Hata
iǫtun er hann
Text2 sat á bergi nøkkoro. Helgi ok Atli lágo
skipom í Hatafirði.

◆ Word festi Entry festa
Place HHV 26.7.VH Combi x
Adverb svá
Phrase x
Meaning 守る M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter f
Subject hón S_Grm x
S_Real スヴァーヴァ S_Type n
S_Cat v S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object yðarn flota
O_Real 船
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num p O_Case ag

Text_2 mér þótti afli bera;
Text_1 hér sté hón land af legi
Text ok * festi svá yðarn flota;
Text1 hón ein því veldr,
Text2 er ek eigi mák

## ギュルヴィ王（「ギュルヴィの惑わし」）

## MEANING

◆ Word brá Entry bregða
Place GYLFG 2.6.P Combi x
Adverb x
Phrase bregða á sik líki e-s
Meaning 変装する M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real ギュルヴィ王 S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object gamals mannz líki
O_Real 老人の姿
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 vera af eðli siálfra þeira, eða myndi því valda goðmǫgn
Text_1 þau er þeir blótuðu. Hann byriaði ferðsína til Ásgarðz
Text ok fór meðlaun ok * brá á sik gamals mannz líki ok dulðiz
Text1 svá. En æsir vóro því vísare at þeir hǫfðu spádóm, ok sá
Text2 þeir ferðhans fyrr en hann kom, ok gerðu í móti honum

◆ Word dulðiz Entry dyljast
Place GYLFG 2.6.P Combi x
Adverb svá
Phrase x
Meaning 変装する M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real ギュルヴィ王 S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 vera af eðli siálfra þeira, eða myndi því valda goðmǫgn
Text_1 þau er þeir blótuðu. Hann byriaði ferðsína til Ásgarðz
Text ok fór meðlaun ok brá á sik gamals mannz líki ok * dulðiz
Text1 svá. En æsir vóro því vísare at þeir hǫfðu spádóm, ok sá
Text2 þeir ferðhans fyrr en hann kom, ok gerðu í móti honum

◆ Word siá Entry sjá
Place GYLFG 2.10.P Combi mátti
Adverb varla
Phrase sjá yfir
Meaning 上を見る M_Cat 2
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ギュルヴィ王 S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hana
O_Real 高い館
O_Type o O_Cat ong O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 þeir ferðhans fyrr en hann kom, ok gerðu í móti honum
Text_1 siónhverfingar. En er hann kom inn í borgina, þá sá hann
Text þar hófa hǫll, svá at varla mátti hann * siá ifir hana. Þak
Text1 hennar var lagt gyltum skiǫldum svá sem spánþak. Svá
Text2 segir Þióðólfr enn hvinnverski at Valhǫll var skiǫldum

## ENTRY + MEANING

◆ Word marka Entry marka
Place GYLFG 22.7.P Combi mátþú
Adverb þar eptir
Phrase x
Meaning 理解する M_Cat 29
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject -þú S_Grm x
S_Real ギュルヴィ王 S_Type n
S_Cat k S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hans [fagrð], bæði <á> hár ok á líki
O_Real バルドルの髪と体の美しさ
O_Type x O_Cat ong O_Person 3

O_Num s O_Case ag Text_2 Hann er svá fagr álitum ok biartr svá at lýsir af honum,
Text_1 ok eitt gras er svá hvítt at iafnat er til Balldrs brár, þat
Text er allra grasa hvítaz. Ok þar eptir mátþú * marka hans
Text1 [fegrð], bæði <á> hár ok á líki. Hann er vitraztr ásanna
Text2 ok fegrz=t= tal=a=ðr ok líknsamaztr. En sú náttúra fylgir

## インギャルド（「ユングリンガ・サガ」）

## MEANING

◆ Word brendi Entry brenna
Place YS 39.5.P Combi x
Adverb meðǫllu liði sínu
Phrase brenna inni
Meaning 焼き殺す M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Ingialdr konungr S_Grm x
S_Real インギャルド S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real グランマルとヒョールヴァルズ
O_Type c O_Cat k O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 hans, at taka veizlu í ey þeiri, er Sili heitir, at búum sínum.
Text_1 Ok þá er þeir váru at veizlunni, kømr þar Ingialdr konungr
Text meðher sinn á einni nótt ok tók hús á þeim ok * brendi
Text1 þá inni meðǫllu liði sínu. Eptir þat lagði hann undir sik
Text2 ríki þat allt, er átt hǫfðu konungar, ok setti yfir hǫfðingia.

## エギル（「ユングリンガ・サガ」）

## ENTRY

◆ Word hleypði Entry hleypa
Place YS 26.45.P Combi x
Adverb í skóginn, frá ǫllum mǫnnum
Phrase hleypa eptir
Meaning 追いかける M_Cat 7
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real エギル S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 um daga optliga á markir dýr at veiða. Þat var eitt sinn,
Text_1 at hann var riðinn á veiðar meðmenn sína. Hann hafði
Text elt dýr eitt lengi ok * hleypði eptir í skóginn frá ǫllum
Text1 mǫnnum. Þá verðr hann varr viðgriðunginn ok reiðtil
Text2 ok vill drepa hann. Griðungr snýr í móti, ok kom konungr

## MEANING

◆ Word snerisk Entry snúast
Place YS 26.17.P Combi x
Adverb x
Phrase snúast til e-s
Meaning 転じる M_Cat 4
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real エギル S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x

C_Type x C_Cat x
Object viðtǫku
O_Real 反撃
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 kom þar Tunni meðliði sínu ok hlióp á þá óvara ok
Text_1 drápu liðmikit af konungi. En er Egill konungr varð
Text varr viðófrið, þá * snerisk hann til viðtǫku, setti upp merki
Text1 sitt, en liðflýði mart frá honum. Þeir Tunni sóttu at
Text2 diarfliga. Sá þá Egill konungr engan annan sinn kost en

◆ Word riðinn Entry ríða
Place YS 26.44.P Combi var
Adverb á veiðar, meðmenn sína
Phrase x
Meaning 乗り入れる M_Cat 8
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real エギル S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 viðmenn. Egill konungr var veiðimaðr mikill; hann reið
Text_1 um daga optliga á markir dýr at veiða. Þat var eitt sinn,
Text at hann var * riðinn á veiðar meðmenn sína. Hann hafði
Text1 elt dýr eitt lengi ok hleypði eptir í skóginn frá ǫllum
Text2 mǫnnum. Þá verðr hann varr viðgriðunginn ok reiðtil

## ENTRY + MEANING

◆ Word kom Entry koma
Place YS 26.47.P Combi x
Adverb x
Phrase koma e-m á e-t
Meaning 投げる M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject konungr S_Grm x
S_Real エギル S_Type n
S_Cat k S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object lagi/ hann
O_Real 槍/ 牛
O_Type o/ o O_Cat x/ lk O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case do/ ag

Text_2 elt dýr eitt lengi ok hleypði eptir í skóginn frá ǫllum
Text_1 mǫnnum. Þá verðr hann varr viðgriðunginn ok reiðtil
Text ok vill drepa hann. Griðungr snýr í móti, ok * kom konungr
Text1 lagi á hann, ok skar ór spiótit. Griðungr stakk hornunum
Text2 á síðu hestinum, svá at hann fell þegar flatr ok svá konungr.

## 巫女 （神話詩）

## ENTRY

◆ Word snivin Entry snjóa
Place BDR 5.5.VG Combi var
Adverb x
Phrase x
Meaning つもる M_Cat 12
Form past.pp Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real 巫女 S_Type n
S_Cat s S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object snióvi
O_Real 雪
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case di

Text_2 er mér hefir aukit
Text_1 erfit<t> sinni?
Text var ek * snivin snióvi
Text1 ok slegin regni
Text2 ok drifin dǫggu;

## スキールニル（神話詩）

## ENTRY

◆ Word fyrirbýð Entry fyrirbjóða
Place SKM 34.5.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 禁じる M_Cat 15
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x

Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real スキールニル S_Type n
S_Cat tg S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object manna glaum/ mani
O_Real 男の歓び/ ゲルズ
O_Type o/ o O_Cat x/ jf O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 synir Suttunga,
Text_1 siálfir ásliðar,
Text hvé ek * fyrirbýð,
Text1 hvé ek fyrirbanna
Text2 manna glaum mani,

◆ Word fyrirbanna Entry fyrirbanna
Place SKM 34.6.VG Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 妨げる M_Cat 1
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject ek S_Grm x
S_Real スキールニル S_Type n
S_Cat tg S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object manna nyt/ mani
O_Real 男の喜び/ ゲルズ
O_Type o/ o O_Cat x/ jf O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case ag/ do

Text_2 siálfir ásliðar,
Text_1 hvé ek fyrirbýð,
Text hvé ek * fyrirbanna
Text1 manna glaum mani,
Text2 manna nyt mani!

## MEANING

◆ Word er Entry vera
Place SKM 2.2.VG Combi x
Adverb x
Phrase e-m er e-s ón at e-m
Meaning 覚悟する M_Cat 29
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject mér S_Grm x
S_Real スキールニル S_Type d
S_Cat tg S_Person 1 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Illra orða/ ón/ ykrom syni
O_Real 叱る言葉/ 期待/ フレイ
O_Type o/o/o O_Cat x/ x/ gmv O_Person 3/3/3
O_Num p/s/s O_Case g/ ag/ do

Text_2 <K Skírnir kvað:>
Text_1 Illra orða
Text * er mér ón at ykrom syni,
Text1 ef ek geng at mæla viðmǫg
Text2 ok þess at fregna,

## ENTRY + MEANING

◆ Word verpir Entry verpa
Place SKM 40.2.VG Combi x
Adverb x
Phrase verpa e-m af e-t
Meaning 外す M_Cat 12
Form conj1 Tense f Mood conj.pres3
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject þú S_Grm x
S_Real スキールニル S_Type n
S_Cat tg S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sǫðli/ mar
O_Real 鞍/ 馬
O_Type o/ o O_Cat x/ lg O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case do/ ag

Text_2
Text_1 Segðu mér þat, Skírnir,
Text áðr þú * verpir sǫðli af mar
Text1 ok þú stígir feti framarr,
Text2 hvat þú árnaðir

# ロッドファーヴニ（神話詩）

## ENTRY

◆ Word hrækir Entry hrekja
Place HAV 135.6.VG Combi x
Adverb á grind
Phrase x
Meaning 追い払う M_Cat 11
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real ロッドファーヴニ S_Type c
S_Cat s S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real 客
O_Type c O_Cat mm O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 þér muno góðef þú getr:
Text_1 gest þú ne geyia
Text né á grind * hrækir,
Text1 get þú váloðom vel.
Text2

## MEANING

◆ Word nióta Entry njóta
Place HAV 112.3.VG Combi mundo
Adverb x
Phrase x
Meaning 得をする M_Cat 14
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject -do S_Grm x
S_Real ロッドファーヴニ S_Type n
S_Cat s S_Person 2 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real 助言
O_Type c O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 *Ráðomk þér, Loddfáfnir,*
Text_1 at þú ráðnemir,
Text * nióta mundo ef þú nemr,
Text1 þér muno góðef þú getr:
Text2 nótt þú rísat,

他の例は省略.

# レギン（英雄詩）

## ENTRY

◆ Word elskaði Entry elska
Place RM A.PH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 愛する M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Reginn S_Grm x
S_Real レギン S_Type n
S_Cat dm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hann
O_Real シグルズ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 til Hiálpreks, sonr Hreiðmars; hann var hveriom manne
Text_1 hagari ok dvergr of vǫxt; hann var vitr, grimmr ok fiǫlkunnigr.
Text Reginn veitti Sigurði fóstr ok kenzlo ok * elskaði
Text1 hann miǫk. Hann sagði Sigurði frá forellri síno ok þeim
Text2 atburðom, at Óðinn ok Hœnir ok Loki hǫfðo komit til

## MEANING

◆ Word réð Entry ráða
Place FM 22.1.VH Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 裏切る M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject Reginn S_Grm x
S_Real レギン S_Type n
S_Cat dm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object mik
O_Real ファーヴニ
O_Type o O_Cat dm O_Person 1
O_Num s O_Case ag

Text_2
Text_1 <K { Fáfnir kvað:} >
Text (Reginn mik * réð,
Text1 hann þik ráða mun,
Text2 hann mun okr verða báðom at bana;

◆ Word ráða Entry ráða
Place FM 22.2.VH Combi mun
Adverb x
Phrase x
Meaning 裏切る M_Cat 2
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject hann S_Grm x
S_Real レギン S_Type n
S_Cat dm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object þik
O_Real シグルズ
O_Type o O_Cat hm O_Person 2
O_Num s O_Case ag

Text_2 <K { Fáfnir kvað:} >
Text_1 (Reginn mik réð,
Text hann þik * ráða mun,
Text1 hann mun okr verða báðom at bana;
Text2 fiǫr sitt láta

FM 37.5.VH
◆ Word ráðinn Entry ráða
Place FM 37.5.VH Combi hefr
Adverb x
Phrase x
Meaning 裏切る M_Cat 2
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter l
Subject er S_Grm x
S_Real レギン S_Type r
S_Cat dm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object hann
O_Real シグルズ
O_Type o O_Cat hm O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 fiánda inn fólkská,
Text_1 þar er Reginn liggr,
Text er hann * ráðinn hefr;
Text1 kannat hann viðslíko at siá).
Text2

## ENTRY + MEANING

◆ Word veitti Entry veita
Place RM A.PH Combi x
Adverb x
Phrase veita e-m fóstr
Meaning 育てる M_Cat 12
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Reginn S_Grm x
S_Real レギン S_Type n
S_Cat dm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Sigurði/ fóstra, kenzlo
O_Real シグルズ/ 養育, 知識
O_Type o/ o O_Cat hm/ x O_Person 3/ 3
O_Num s/ s O_Case do/ ag

Text_2 til Hiálpreks, sonr Hreiðmars; hann var hveriom manne
Text_1 hagari ok dvergr of vǫxt; hann var vitr, grimmr ok fiǫlkunnigr.
Text Reginn * veitti Sigurði fóstr ok kenzlo ok elskaði
Text1 hann miǫk. Hann sagði Sigurði frá forellri síno ok þeim
Text2 atburðom, at Óðinn ok Hœnir ok Loki hǫfðo komit til

## ウートガルザ・ロキ（「ギュルヴィの惑わし」）

## ENTRY

◆ Word spottat Entry spotta
Place GYLFG 48.45.P Combi hafði
Adverb x
Phrase x
Meaning 馬鹿にする M_Cat 2
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Útgarða-Loki S_Grm x
S_Real ウートガルザ・ロキ S_Type n
S_Cat jm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object Þór
O_Real ソール
O_Type o O_Cat gma O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 borð, ok fór ǫngullinn til =g=runnz. Ok er þá svá satt at
Text_1 segia at engu ginti þá Þórr <miðr> Miðgarðzorm en
Text Útgarða-Loki hafði * spottat Þór, þá er hann hóf orminn
Text1 upp á hendi sér.
Text2 Miðgarðzormr gein ifir oxahǫfuðit, en ǫngullinn vá í

◆ Word glotti Entry glotta
Place GYLFG 46.11.P Combi x
Adverb =við= tǫnn
Phrase x
Meaning にやにや笑う M_Cat 31
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real ウートガルザ・ロキ S_Type n
S_Cat jm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x

C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 marga menn á tvá bekki ok flesta œrit stóra. Því næst
Text_ 1 koma þeir firir konunginn Útgarða-Loka ok kvǫddu hann.
Text En hann leit seint til þeira ok * glotti =við= tǫnn ok mælti:
Text1 (Seint er um langan veg at spyria tíðinda. Eða er annan
Text2 veg en ek hygg at þessi sveinstauli sé @Okoþórr? en meiri

## ENTRY + MEANING

◆ Word ferr Entry fara
Place GYLFG 48.2.P Combi x
Adverb miǫk
Phrase fara meðe-m
Meaning 操る M_ Cat 1
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_ Grm x
S_ Real ウートガルザ・ロキ S_ Type n
S_ Cat jm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object vælum ok fiǫlkyngi
O_ Real 魔法
O_ Type o O_ Cat x O_ Person 3
O_ Num s O_ Case do

Text_ 2
Text_ 1 þá mælti Gangleri: (Allmikill er firir sér Útgarða-Loki,
Text en meðvælum ok fiǫlkyngi * ferr hann miǫk. En þat
Text1 má siá at hann er mikill firir sér at hann átti hirðmenn
Text2 þá er mikinn mátt hafa. Eða hvárt hefir Þórr ekki þessa

◆ Word setia Entry setja
Place GYLFG 47.3.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 用意する M_ Cat 3
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_ Grm x
S_ Real ウートガルザ・ロキ S_ Type c
S_ Cat jm S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object þeim/ borð
O_ Real ソールたち/ 食事
O_ Type o/ o O_ Cat gma,gjm,tg/ x O_ Person 3/ 3
O_ Num p/ s O_ Case do/ ag

Text_ 2 En at morne þegar dagaðe, stendr Þórr upp ok
Text_ 1 þeir félagar, klæða sik ok eru búnir braut at ganga. Þá
Text kom þar Útgarða-Loki ok lét * setia þeim borð, skorti þá
Text1 eigi góðan fagnat, mat ok drykk. En er þeir hafa mataz,
Text2 þá snúaz þeir til ferðar. Útgarða-Loki fyl[g]ir þeim út,

◆ Word gert Entry gera
Place GYLFG 47.18.P Combi hefi
Adverb x
Phrase x
Meaning かける M_ Cat 1
Form past.ps Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject ek S_ Grm x
S_ Real ウートガルザ・ロキ S_ Type n
S_ Cat jm S_ Person 1 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object siónhverfingar/ þér
O_ Real 目くらまし/ ソール
O_ Type o/ o O_ Cat x/ gma O_ Person 3/ 2
O_ Num p/ s O_ Case ag/ do

Text_ 2 mín at aldri hefðir þú í hana komit, ef ek hefða vitat áðr
Text_ 1 at þú hefðir svá mikinn krapt meðþér, ok þú hafðir svá
Text nær haft oss mikilli úfœru. En siónhverfingar hefi ek * gert
Text1 þér, svá at fyrsta sinn er ek fann þik á skóginum, kom
Text2 ek til fundar viðyðr. Ok þá er þú skyldir leysa nestbaggann,

◆ Word endaz Entry endast
Place GYLFG 47.24.P Combi myndi
Adverb x
Phrase e-m endast til bana
Meaning 死ぬ M_ Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject mér S_ Grm x

S_ Real ウートガルザ・ロキ S_ Type d
S_ Cat jm S_ Person 1 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object bana
O_ Real 死
O_ Type o O_ Cat x O_ Person 3
O_ Num s O_ Case g

Text_ 2 <eigi> hvar upp skyldi lúka. En því næst laustþú mik
Text_ 1 meðhamrinum .iii. hǫgg, ok var it fyrsta minnzt, ok var
Text þó svá mikit at mér myndi * endaz til bana ef á hefði komit.
Text1 En þar er þú sátt hiá hǫll minni setberg ok þar sáttu
Text2 ofan í þriá dali ferskeytta ok einn diúpaztan, þar vóro

## フェンリル狼（神話詩）

## MEANING

◆ Word renna Entry renna
Place VSP 44.4.VG Combi mun
Adverb x
Phrase x
Meaning 走り去る M_ Cat 6
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject freki S_ Grm x
S_ Real フェンリル狼 S_ Type n
S_ Cat lj S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 fyr Gnipahelli,
Text_ 1 festr mun slitna,
Text en freki * renna.
Text1 Fiǫlðveit hón frœða,
Text2 fram sé ek lengra

◆ Word renna Entry renna
Place VSP 49.4.VG Combi mun
Adverb x
Phrase x
Meaning 走り去る M_ Cat 6
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject freki S_ Grm x
S_ Real フェンリル狼 S_ Type n
S_ Cat lj S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 fyr Gnipahelli,
Text_ 1 festr mun slitna,
Text en freki * renna.
Text1 Fiǫlðveit hón frœða,
Text2 fram sé ek lengra

◆ Word renna Entry renna
Place VSP 58.4.VG Combi mun
Adverb x
Phrase x
Meaning 走り去る M_ Cat 6
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject freki S_ Grm x
S_ Real フェンリル狼 S_ Type n
S_ Cat lj S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object x
O_ Real x
O_ Type x O_ Cat x O_ Person x
O_ Num x O_ Case x

Text_ 2 fyr Gnipahelli,
Text_ 1 festr mun slitna,
Text en freki * renna.
Text1 Fiǫlðveit hón frœða,
Text2 fram sé ek lengra

◆ Word sleit Entry slita
Place LS A.PG Combi x
Adverb af hánom
Phrase x
Meaning 噛み切る M_ Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Fenrisúlfr S_ Grm x
S_ Real フェンリル狼 S_ Type n
S_ Cat lj S_ Person 3 S_ Num s
Complement x
C_ Real x
C_ Type x C_ Cat x
Object hǫnd
O_ Real 手
O_ Type o O_ Cat x O_ Person 3
O_ Num s O_ Case ag

Text_2 kom eigi, þvíat hann var í austrvegi. Sif var þar, kona
Text_1 Þórs, Bragi ok Iðunn kona hans. Týr var þar, hann var
Text einhendr, Fenrisúlfr * sleit hǫnd af hánom þá er hann var
Text1 bundinn. Þar var Niǫrðr og kona hans Skaði, Freyr ok
Text2 Freyia. Víðarr son Óðins; Loki var þar ok þiónustomenn

## フェンリル狼（「ギュルヴィの惑わし」）

### ENTRY

◆ Word leystiz Entry leysast
Place GYLFG 34.31.P Combi x
Adverb Svá, ór L=œ=ðingi
Phrase x
Meaning 抜け出す M_Cat 6
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 sitt viðfiǫturinn. En úlfinum þótti sér þat ekki ofrefli,
Text_1 ok lét þá fara meðsem þeir vildu. It fyrsta sinn er
Text úlfrinn spyrndi við, brotnaði sá fiǫturr. Svá * leystiz hann
Text1 ór L=œ=ðingi.
Text2 því næst gerðu æsirnir annan fiǫtur hálfu sterkara er

◆ Word greniar Entry grenja
Place GYLFG 34.98.P Combi x
Adverb illiliga
Phrase x
Meaning 吠える M_Cat 31
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Hann S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 fekz um miǫk ok vildi bíta þá. Þeir skutu í munn honum
Text_1 sverði nǫkkvoro; nema hiǫltin viðneðra góme en efra
Text góme blóðrefill; þat er gómsparre hans. Hann * greniar
Text1 illiliga ok slefa renn ór munni hans, þat er á sú er Vón
Text2 heitir. Þa<r> liggr hann til ragnarøkrs.)

◆ Word brautz Entry brjótast
Place GYLFG 34.88.P Combi x
Adverb x
Phrase brjótast um
Meaning 転げ回る M_Cat 7
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 fyrr en Týr lét fram hǫnd sína hœgri ok leggr í munn
Text_1 úlfinum. En er úlfrinn spyrnir, þá harðnaði bandit, ok
Text því harðara er hann * brautz um, því skarpara var bandit.
Text1 þá hlógo allir nema Týr; hann lét hǫnd sína.
Text2 Þá er æsirnir sá at úlfrinn var bundinn at fullu, þá

### MEANING

◆ Word hristi Entry hrista
Place GYLFG 34.41.P Combi x
Adverb x
Phrase hrista sik
Meaning 体を揺する M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject úlfrinn S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object sik

O_Real フェンリル狼
O_Type o O_Cat lj O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 hann myndi verða at leggia sik í hættu ef hann skyldi
Text_1 frægr verða, ok lét leggia á sik fiǫturinn. Ok er æsir
Text tǫlðuz búnir, þá * hristi úlfrinn sik ok laust fiǫtrinum á
Text1 iǫrðina, <ok> <knúðiz> <fast> <at>, <spyrndi> <við>, <braut> <fiǫturinn
Text2 svá at f=ia=rri flugu brotin. Svá drap hann sik ór Dróma.

◆ Word laust Entry ljósta
Place GYLFG 34.41.P Combi x
Adverb á iǫrðina
Phrase x
Meaning 叩きつける M_Cat 1
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject úlfrinn S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object fiǫtrinum
O_Real 鎖
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case do

Text_2 hann myndi verða at leggia sik í hættu ef hann skyldi
Text_1 frægr verða, ok lét leggia á sik fiǫturinn. Ok er æsir
Text tǫlðuz búnir, þá hristi úlfrinn sik ok * laust fiǫtrinum á
Text1 iǫrðina, <ok> <knúðiz> <fast> <at>, <spyrndi> <við>, <braut> <fiǫturinn
Text2 svá at f=ia=rri flugu brotin. Svá drap hann sik ór Dróma.

◆ Word <knúðiz> Entry knýjast
Place GYLFG 34.42.P Combi x
Adverb <fast> <at>
Phrase x
Meaning ピンと体を伸ばす M_Cat 10
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject úlfrinn S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 frægr verða, ok lét leggia á sik fiǫturinn. Ok er æsir
Text_1 tǫlðuz búnir, þá hristi úlfrinn sik ok laust fiǫtrinum á
Text iǫrðina, <ok> *<knúðiz> <fast> <at>, <spyrndi> <við>, <braut> <fiǫturinn
Text1 svá at f=ia=rri flugu brotin. Svá drap hann sik ór Dróma.
Text2 Þat er síðan haft fyrir orðtak at (leysi ór L=œ=ðingi) eða

◆ Word spyrnir Entry spyrna
Place GYLFG 34.87.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 伸びをする M_Cat 10
Form pres Tense pres Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject úlfrinn S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 vera tvau vandræði, ok vildi engi sína hǫnd fram selia,
Text_1 fyrr en Týr lét fram hǫnd sína hœgri ok leggr í munn
Text úlfinum. En er úlfrinn * spyrnir, þá harðnaði bandit, ok
Text1 því harðara er hann brautz um, því skarpara var bandit.
Text2 Þá hlógo allir nema Týr; hann lét hǫnd sína.

◆ Word fekz Entry fást
Place GYLFG 34.96.P Combi x
Adverb miǫk
Phrase fást um
Meaning もがく M_Cat 31
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex refl A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Úlfrinn S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x

Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 ok skutu enn lengra í iǫrðina, sá heitir þviti, ok hǫfðu
Text_1 þann stein fyrir festarhælinn. Úlfrinn gapði ákaflega ok
Text * fekz um miǫk ok vildi bíta þá. Þeir skutu í munn honum
Text1 sverði nǫkkvoro; nema hiǫltin viðneðra góme en efra
Text2 góme blóðrefill; þat er gómsparre hans. Hann greniar

## ENTRY + MEANING

◆ Word gapði Entry gapa
Place GYLFG 34.95.P Combi x
Adverb ákaflega
Phrase x
Meaning 大きく口を開ける M_Cat 31
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject Úlfrinn S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 festu helluna langt í iǫrðniðr. Þá tóku þeir mikinn stein
Text_1 ok skutu enn lengra í iǫrðina, sá heitir þviti, ok hǫfðu
Text þann stein fyrir festarhælinn. Úlfrinn * gapði ákaflega ok
Text1 fekz um miǫk ok vildi bíta þá. Þeir skutu í munn honum
Text2 sverði nǫkkvoro; nema hiǫltin viðneðra góme en efra

◆ Word gapanda Entry gapa
Place GYLFG 51.35.P Combi x
Adverb x
Phrase x
Meaning 大きく口を開ける M_Cat 31
Form pres.p Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject x S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type c
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object munn
O_Real □
O_Type o O_Cat x O_Person 3
O_Num s O_Case ag

Text_2 er goðin ok menn vildi seint at gert yrði. En í þessum
Text_1 sæfargang flýtr Naglfar. Hrymr heitir iǫtunn er stýrir
Text Naglfar=i=. En Fenrisú=lf=r ferr með * gapanda munn, ok er
Text1 hinn efri kiǫptr viðhimni en hinn neðri viðiǫrðu;
Text2 gapa myndi hann meira ef rúm væri til. Eldar brenna

◆ Word gapa Entry gapa
Place GYLFG 51.37.P Combi myndi
Adverb x
Phrase x
Meaning 大きく口を開ける M_Cat 31
Form inf Tense x Mood x
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real フェンリル狼 S_Type n
S_Cat lj S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Naglfar=i=. En Fenrisú=lf=r ferr meðgapanda munn, ok er
Text_1 hinn efri kiǫptr viðhimni en hinn neðri viðiǫrðu;
Text * gapa myndi hann meira ef rúm væri til. Eldar brenna
Text1 ór augum hans ok nǫsum. Miðgarðzormr blæss svá eitrinu
Text2 at hann dreifir lopt ǫll ok lǫg, ok er hann allógurligr, ok

# スリュム（神話詩）

## MEANING

◆ Word Laut Entry lúta
Place TRK 27.1.VG Combi x
Adverb und líno
Phrase x
Meaning のぞき込む M_Cat 2
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x

Meter f
Subject x S_Grm x
S_Real スリュム S_Type c
S_Cat jm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 í iǫtunheima.)
Text_1
Text * Laut und líno,
Text1 lysti at kyssa,
Text2 en hann útan stǫkk

◆ Word stǫkk Entry støkkva
Place TRK 27.3.VG Combi x
Adverb útan endlangan sal

Phrase x
Meaning 飛び退く M_Cat 6
Form pret Tense pret Mood ind
Reflex x A/M m Enclitic x
Meter x
Subject hann S_Grm x
S_Real スリュム S_Type n
S_Cat jm S_Person 3 S_Num s
Complement x
C_Real x
C_Type x C_Cat x
Object x
O_Real x
O_Type x O_Cat x O_Person x
O_Num x O_Case x

Text_2 Laut und líno,
Text_1 lysti at kyssa,
Text en hann útan * stǫkk
Text1 endlangan sal:
Text2 (Hví ero ǫndótt